

茨城県教育財団文化財調査報告第23集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 7

二本松古墳
石神外宿 A 遺跡
石神外宿 B 遺跡

昭和 58 年 8 月

財団法人 茨城県教育財団

常磐自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 正誤表

ページ	誤	正																								
252	<p data-bbox="285 488 569 517">第103図 出土土器統計表</p> <table border="1" data-bbox="282 539 657 726"> <tr> <td>蓋</td> <td>長頸壺</td> <td>坏</td> <td>甕</td> <td>器台</td> <td>提瓶</td> </tr> </table> <p data-bbox="282 832 463 861">須恵器器種別割合</p> <table border="1" data-bbox="277 909 653 1097"> <tr> <td>朱</td> <td>その他</td> </tr> </table> <p data-bbox="323 1107 367 1126">内黒</p> <p data-bbox="277 1209 639 1238">土師器，坏形土器朱塗，内黒の割合</p>	蓋	長頸壺	坏	甕	器台	提瓶	朱	その他	<p data-bbox="724 488 1008 517">第103図 出土土器統計表</p> <table border="1" data-bbox="721 539 1096 726"> <tr> <td>蓋</td> <td>長頸壺</td> <td>坏</td> <td>甕</td> <td>器台</td> <td>提瓶</td> </tr> <tr> <td>40%</td> <td>20%</td> <td>10%</td> <td>10%</td> <td>10%</td> <td>10%</td> </tr> </table> <p data-bbox="721 832 902 861">須恵器器種別割合</p> <table border="1" data-bbox="716 909 1092 1097"> <tr> <td>朱</td> <td>その他</td> </tr> <tr> <td>13%</td> <td>85%</td> </tr> </table> <p data-bbox="762 1107 842 1126">内黒 2%</p> <p data-bbox="716 1209 1078 1238">土師器，坏形土器朱塗，内黒の割合</p>	蓋	長頸壺	坏	甕	器台	提瓶	40%	20%	10%	10%	10%	10%	朱	その他	13%	85%
蓋	長頸壺	坏	甕	器台	提瓶																					
朱	その他																									
蓋	長頸壺	坏	甕	器台	提瓶																					
40%	20%	10%	10%	10%	10%																					
朱	その他																									
13%	85%																									

茨城県教育財団文化財調査報告第23集

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書7

に ほん まつ 古墳
二本松古墳
いしがみ とじゆく A遺跡
石神外宿A遺跡
いしがみ とじゆく B遺跡
石神外宿B遺跡

昭和58年8月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県を縦断する常磐自動車道の建設工事が、日本道路公団によって進められております。この工事に伴い、茨城県教育財団は、日本道路公団との委託契約に基づき、常磐自動車道用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

現在までに発掘調査を終了した遺跡は、常磐自動車道建設に伴う関連開発用地内に所在したものを含めて26か所を数え、調査結果の一部についてはすでに報告書にまとめて刊行いたしております。

昭和56・57年度には、那珂郡東海村の常磐自動車道建設用地内に所在した埋蔵文化財の発掘調査を実施し、終了後整理を進めてまいりましたが、このたびその結果の一部を報告書として刊行する運びとなりました。この古代遺跡の調査が本県の古代の姿を解明するに資するところは非常に大きいものがあると考えます。つきましては、本書がより多くの方々に御活用いただければ幸いに存じます。

最後に、調査・整理を進めるにあたり、委託者である日本道路公団からいただいた多大の御協力に対し、心から感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、東海村教育委員会をはじめ、関係各機関、関係各位より御指導・御協力をいただいたことに、衷心より謝意を表します。



昭和58年 8 月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 大 金 新 一

例 言

1. 本書は、日本道路公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和57年1月～昭和57年9月にわたって調査を実施した東海村の二本松古墳・石神外宿A・石神外宿B遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、当教育財団調査課が実施したもので、昭和56年度は企画管理班、昭和57年度は調査第3班が担当した。3遺跡の調査に関する組織は次のとおりである。

理 事 長	大 金 新 一		
副 理 事 長	古 橋 靖		
常 務 理 事	川野辺 四 郎 綿 引 一 夫	～昭和57年3月 昭和57年4月～	
事 務 局 長	小 林 義 久		
調 査 課 長	寺 内 寛		
企 画 管 理 班	班 長	环 秀 雄	～昭和57年5月
	班 長	今 村 信 夫	昭和57年6月～
	主任調査員	加 藤 雅 美	昭和56年度 二本松古墳・石神外宿A遺跡調査
	調 査 員	根 本 康 弘	昭和56年度 二本松古墳・石神外宿A遺跡調査
	調 査 員		昭和57年度 二本松古墳整理・執筆
主 事 主 事	主 事	鈴 木 三 郎	昭和57年4月～
	主 事	海老沢 一 夫	
	主 事	綿 引 良 人	
調 査 第 三 班	班 長	青 木 義 夫	昭和57年度 石神外宿A・石神外宿B遺跡調査
	主任調査員	渡 辺 俊 夫	昭和57年度 石神外宿A・石神外宿B遺跡調査・整理・執筆
	調 査 員	高 村 勇	昭和57年度 石神外宿A・石神外宿B遺跡調査

3. 須恵器の胎土分析については、奈良教育大学教授三辻利一氏に依頼した。
4. 本書は、発掘担当者の協力を得て、二本松古墳を根本康弘、石神外宿A遺跡・石神外宿B遺跡を渡辺俊夫が執筆・編集を担当した。
5. 土層解説および土器の色調については、「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色標監修）を用い、記号化して表した。
6. 本報告書で使用した記号は、次のとおりである。S I—住居跡，S K—土壇，S D—溝
7. 土器実測図の朱塗り，内黒については，次のように表し，須恵器の断面は黒色で表示した。
 内黒  朱塗り 
8. 遺物解説表の法量は，次のように表した。
 A—口径，B—器高・現存高，C—底径・裾径，D—高台径
9. 発掘調査および出土遺物の整理等に際して御指導・御協力を賜った諸機関に対し，感謝の意を表したい。

目 次

序

例言

目次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	位置と環境	3
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	3
第3章	二本松古墳	9
第1節	調査経過	9
第2節	遺構	10
第3節	遺物	27
第4節	まとめ	53
第4章	石神外宿A遺跡	55
第1節	調査経過	111
第2節	遺構と遺物	121
第3節	まとめ	121
第5章	石神外宿B遺跡	124
第1節	調査経過	124
第2節	遺構と遺物	131
1	弥生時代	246
2	古墳時代	263
第3節	まとめ	287

第1章 調査に至る経過

常磐自動車道関連開発用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査は、昭和53年度に実施した筑波郡谷和原村東橋戸古墳の調査に始まり、年を追ってルート沿いに北上し、今日に至っている。現在までに発掘調査を終了した遺跡は、26ヵ所を数える。

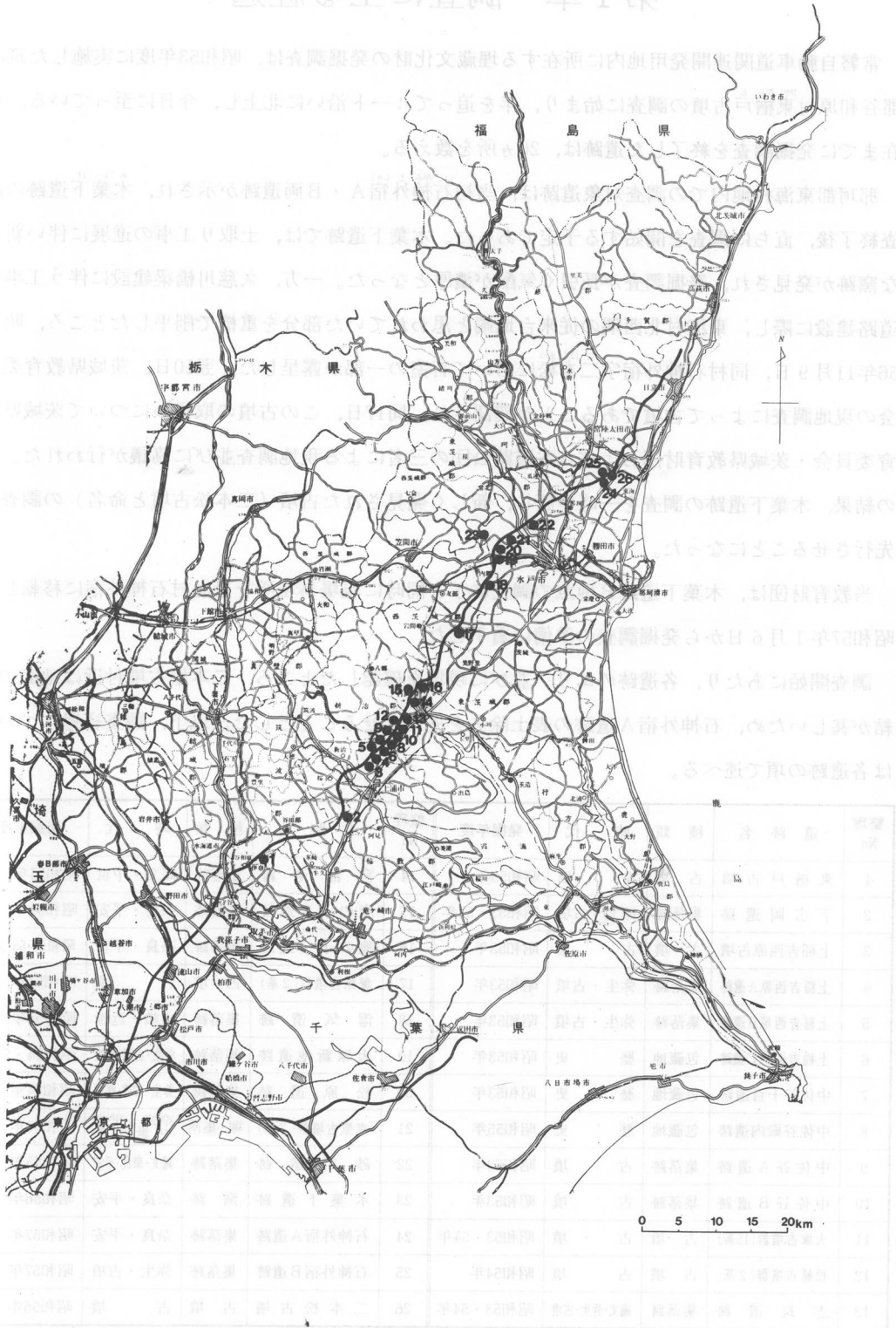
那珂郡東海村地内での調査対象遺跡は、当初石神外宿A・B両遺跡が示され、木葉下遺跡の調査終了後、直ちに調査を開始する予定であった。木葉下遺跡では、土取り工事の進展に伴い新たな窯跡が発見され、発掘調査が長引く気配が濃厚となった。一方、久慈川橋梁建設に伴う工事用道路建設に際し、東海村北西隅の従来台地端と思われていた部分を重機で削平したところ、昭和56年11月9日、同村石神外宿二本松において石室の一部が露呈した。翌10日、茨城県教育委員会の現地調査によって古墳であることが確認され、同17日、この古墳の取扱いについて茨城県教育委員会・茨城県教育財団および日本道路公団の三者による現地調査並びに協議が行われた。この結果、木葉下遺跡の調査を一時中断し、新しく発見された古墳（二本松古墳と命名）の調査を先行させることになった。

当教育財団は、木葉下遺跡B地点の調査終了と同時に現場事務所を東海村石神外宿に移転し、昭和57年1月6日から発掘調査の準備に着手した。

調査開始にあたり、各遺跡のエリア並びに現況を確認したところ、二本松古墳付近は地表の凍結が甚しいため、石神外宿A遺跡の表土除去を先行させることとした。以下、調査経過については各遺跡の項で述べる。

整理No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度	整理No.	遺跡名	種類	時代	発掘年度
1	東橋戸古墳	古墳	古墳	昭和53年	14	宮部遺跡	集落跡	縄文・中世	昭和54年
2	下広岡遺跡	集落跡	縄文・古墳	昭和53・54年	15	鹿の子A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54年
3	上稲吉西原古墳	古墳	古墳	昭和53年	16	鹿の子C遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和54・55・56年
4	上稲吉西原A遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	17	塚原古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年
5	上稲吉西原B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和53年	18	湿気遺跡	集落跡	古墳・近世	昭和54年
6	上稲吉西原C遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	19	大塚新地遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54・55年
7	中佐谷十百遺跡	包蔵地	歴史	昭和53年	20	松原遺跡	集落跡	弥生・古墳・歴史	昭和54年
8	中佐谷殿内遺跡	包蔵地	歴史	昭和55年	21	南原古墳群(2基)	塚・集落	奈良・平安 中世以降	昭和54年
9	中佐谷A遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	22	砂川遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	昭和55年
10	中佐谷B遺跡	集落跡	古墳	昭和53年	23	木葉下遺跡	窯跡	奈良・平安	昭和56年
11	大塚古墳群(15基)	古墳	古墳	昭和53・54年	24	石神外宿A遺跡	集落跡	奈良・平安	昭和57年
12	松延古墳群(2基)	古墳	古墳	昭和54年	25	石神外宿B遺跡	集落跡	弥生・古墳	昭和57年
13	志筑遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	昭和53・54年	26	二本松古墳	古墳	古墳	昭和56年

第一章 調査に至る経緯



第1図 常磐自動車道関連用地内遺跡分布図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

茨城県那珂郡東海村は、県の中央よりもやや北東に寄っており、久慈川と那珂川に挟まれた那珂台地の一角を占めている。東は太平洋に面し、北は久慈川を隔てて日立市、西は那珂郡那珂町、南は勝田市に接している。東西約6.5km、南北約7.5km、面積約35.44km²あり、人口は昭和58年1月1日現在で30,121人を数えている。

村の大部分は台地である。台地北端には久慈川南岸に沿って額田段丘が形成され、標高は15m内外である。東部には、太平洋に面して砂丘が形成されており、松の砂防林が発達している。他は、標高20～30mのやや起伏を有する台地である。台地面は、畑・平地林が多い。この台地を開析して樹枝状の谷が形成されている。谷底は沖積地であり、水田として利用されている。村の西端、那珂町との境界を久慈川から分かれた支谷が南へ延び、その東岸に二本松古墳・石神外宿A遺跡・同B遺跡が所在している。

村の西部を国道6号線が、中央を国鉄常磐線が、東部を県道豊岡・佐和停車場線と国道245号線がそれぞれ南北に貫き、村内の主要幹線となっている。さらに、幹線道路間・駅と幹線道路間を支道がはしご状に結んでいる。

東部海岸の村松山虚空蔵堂は「十三詣り」で知られ、特に春には参拝客が多い。その南側には、海岸と松林の清浄な空気を得て、国立療養所「晴嵐荘」が設けられている。虚空蔵堂の北には、昭和32年に日本原子力研究所東海研究所が建設され、その後、近くに日本原子力発電株式会社東海発電所・動力炉核燃料開発事業団東海事業所等が建設された。これに伴う職員住宅の建設等により、人口も毎年増加の傾向を見ている。

第2節 歴史的環境

久慈川下流域は古くから人々が居住し、多くの遺跡が知られている。また、万葉集にもその名が見られるなど、古代から水上交通のルートとして利用された。

東海村は久慈川南岸に位置し、縄文時代からの遺跡が数多く所在している。縄文時代早期では、志んげ遺跡⁽¹⁾があり、同前期には石神内宿遺跡⁽²⁾がある。後者は、昭和43年3月にごぼう畑から関山式土器片⁽³⁾が出土したことが報告されている。中期には堀込遺跡⁽⁴⁾があり、中期から後期におよぶ平原貝塚⁽⁵⁾も知られている。いずれも、東北地方の影響を受けた土器が見られる。

弥生時代の遺跡としては、二本松古墳・石神外宿A遺跡・同B遺跡が所在する台地と支谷を隔



第2図 東海村関係遺跡位置図

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	志んげ遺跡	11	真砂山遺跡
2	石神内宿遺跡	12	船場古墳群
3	堀米遺跡	13	真崎古墳群
4	平原貝塚	14	須和間遺跡・須和間古墳群
5	海後遺跡	15	石神外宿古墳群
6	部原遺跡	16	石神外宿西古墳群
7	小沢野遺跡	17	二本松古墳(当遺跡)
8	塚越遺跡	18	石神外宿A遺跡(当遺跡)
9	御所内遺跡	19	石神外宿B遺跡(当遺跡)
10	御極印遺跡		

てた那珂郡那珂町の台地上に、人面付壺の出土で著名な海後遺跡がある。東海村内では、部原遺跡から入口の施設を有する住居跡等が発見されている。また、須和間遺跡の調査では、方形周溝墓・円形周溝墓や弥生時代の住居跡が検出されている。

古墳時代以降の集落跡としては、小沢野遺跡・塚越遺跡等がある。小沢野遺跡は4世紀から7世紀に至る集落跡で、国分期の住居跡も数軒検出されている。遺物は各時期とも土師器が主で、須恵器や金属製品等も見られる。塚越遺跡は石神外宿B遺跡に隣接するもので、過去に調査された例は無いが、縄文時代から古墳時代以降までの遺物が豊富に出土することで知られている。このほかでは、御所内遺跡・御極印遺跡・真砂山遺跡等がある。

古墳群としては、船場古墳群(前方後円墳2・円墳2)・真崎古墳群(前方後円墳1・円墳11)・須和間古墳群(前方後円墳1・円墳7)・石神外宿古墳群(円墳5)・石神外宿西古墳群(円墳2)等があり、10ヵ所が確認されている。真崎10号墳は横穴式石室を有する円墳で、直刀・鉄鎌馬具・霰玉等が出土した。石神外宿西古墳群は、二本松古墳と西中宿古墳によって構成されている。いずれも、新発見のものである。

古代には、石神外宿は和名抄に見える「神前」郷に属したとされ、郷の中心は今回調査した3遺跡と支谷を隔てた那珂郡那珂町本米崎に比定されている。元来は久慈郡に属したが、近世以降那珂郡に編入された。

註

- (1) 万葉集 卷20 (4368)
- (2) 「茨城県遺跡地名表」茨城県教育委員会 1974
- (3) 早川章次・井上義安 「茨城県東海村石神内宿遺跡」 「茨城考古学」2 茨城考古学会 昭和44年
- (4) 「茨城県史料 考古資料編 一先土器・縄文時代一」 茨城県 昭和54年
- (5) (4)に同じ
- (6) 「日本原始美術大系」2 講談社 1978
- (7) 「常陸部原遺跡」 東海村教育委員会 1982
- (8) 「茨城県那珂郡東海村須和間埋蔵文化財緊急調査報告書」 茨城県教育委員会 昭和43年
茂木雅博 「常陸須和間遺跡」 雄山閣 1972
- (9) 「小澤野」 茨城県東海村教育委員会・東海村小澤野遺跡調査会 昭和53年
- (10) 安島志郎 「那珂郡東海村石神外宿塚越の土師器」 「茨城県の土師器集成」2 茨城考古学会 昭和43年
- (11) 「茨城県埋蔵文化財調査報告書」 茨城県教育委員会 昭和44年

- (12) 井上義安 「那珂郡東海村村松御極印の土師器」 「茨城県の土師器集成」 1 茨城考古学会 昭和42年
- (13) 井上義安 「那珂郡東海村村松真砂山の土師器」 (12)と同書
- (14) (2)に同じ
- (15) 「常陸国村松村の古代遺跡」 村松村教育委員会 昭和30年
「茨城県史料 考古資料編 一古墳時代一」 茨城県 昭和49年
- (16) (8)に同じ
- (17) (2)に同じ
- (18) 二本松・西中宿両墳のほか、現在の水道局用地には大規模な円墳があったと伝えられる。
- (19) 「日本地理志料」の常陸国久慈郡神前に、「神前廢今那賀郡有米崎石神ニ村米崎盖神崎之轉石神有舊祠祀石爲神其祠臨久慈川前者崎也神埼之名因起巨石神内宿石神外宿舟石川堤横堀杉額田向山米崎本米崎十邑其故區也」と見える。「水府志料」の石神内宿村に「倭名類聚鈔に見へたる石上郷、今石神何々と稱る村々是なるべし。」とあるが、倭名抄では石上郷は那賀郡に含まれており、「水府志料」の見解は疑問とせざるを得ない。
- (20) 「日本地理志料」の(19)と同所に、「文祿中入那珂郡」と見える。また、「新編常陸國誌」の久慈郡神前郷にも、「文祿ノ檢地久慈川以南ノ地、悉ク那珂郡に屬スルヲ以テ、コノ地モ亦那珂ニ屬ス、今ニ其制ヲ更メズ」とある。

二本松古墳

第3章 二本松古墳

第1節 調査経過

昭和57年1月当初、事務所および周辺の片付けを行い、各遺跡のエリアを確認した。調査は二本松古墳から始める予定だったので、12日には現地にテントを設営し、発掘用器材を運び込んだ。14日には、東海村教育委員会・日本道路公団・梅林建設株式会社の参加を得て、歛入れ式を挙行了した。

式後直ちに調査に入ったが、古墳が台地北端の段丘面に築造されており、北西の季節風が強く吹きつけること、および東から南にかけて杉木立があるため正午頃まで日があたらないことの二つの理由により、古墳表土の甚しい凍結が見られた。このため、二本松古墳の調査を一時中断して、石神外宿A遺跡の表土除去作業を実施することとし、発掘用器材を引き揚げた。

石神外宿A遺跡の表土除去作業が1月29日をもって終了したので、2月1日から二本松古墳の調査を再開した。重機による削平面は、墳丘を完全に切断して旧表土にまで達しており、また道路用地と民有地との境界が墳頂部に位置していたこと、削平範囲が道路用地内にかかる墳丘の3分の2を占めたことなどから、墳丘の形をは握することさえ困難であった。そのため、墳丘の規模・形状をは握するため、削平面の北西側に残る墳丘に3本のトレンチを設定した。つづいて、2号トレンチと切断面に沿った4号トレンチによって地区割を行い、それぞれの地区名称を次のように呼称した。

- ・ 2号トレンチ北側……北墳丘
- ・ 2号トレンチ南側……西墳丘
- ・ 5号トレンチ北側……東墳丘
- ・ 5号トレンチ南側……南墳丘

2月2日から、主体部の規模を確認するため、南墳丘のエリア内の部分を掘り込んだ。その結果、表土下から多量の拳大の川原石が検出され、各トレンチからも表土下に多量の川原石が確認されたことから、この古墳が川原石による葺石を施されたものであることが判明した。そこで、トレンチの掘り込みを表土下までとし、あわせて墳丘全体の表土を除去して葺石の状態をは握することとした。

10日から、東墳丘の切断面を1mほど削り込み、セクション実測を行った。この切断面には周溝が見られ、他のトレンチで確認した地山の落ち込みの具合から、この古墳は円墳であることが考えられた。一方、主体部切断面を清掃したところ、主体部の床に拳大の敷石が見られ、その上を20～30cmの厚さの粘土層が覆っていることが確認された。また、切断面に露呈していた主体部

側壁から9mほど離れた所にも側壁と同質の石が積まれているのが確認され、主体部は横穴式石室であることが明らかになった。

15日から、主体部を露呈させるために掘り込みを開始した。この掘り込みは、途中で露呈した直径30cm内外の石を実測し、除去しながら進めた。23日には右側壁上面まで掘り進め、右側壁が石を横積みにして構築されていることが明らかになった。

3月初めには粘土層まで掘り込んでいたが、9日には鉄片が出土し、敷石と粘土層に挟まれた状態で遺物が出土することが考えられた。また、微小な遺物を検出するため、排土はすべて篩にかけることとした。10日には、前室から飾金具が多数出土した。翌11日には後室から人骨が発見され、以後23日まで毎日金属製品の実測・取り上げが続けられた。この間、17日には東海村教育委員会・日本道路公団並に土地所有者の御好意により、民有地側の墳丘にトレンチを入れることができた。この部分の墳丘は全く無傷であることから、葺石もより良好な状態で観察できた。また、18日から5号トレンチの追跡調査を行い、墳丘下に遺構が存在することを確認した。

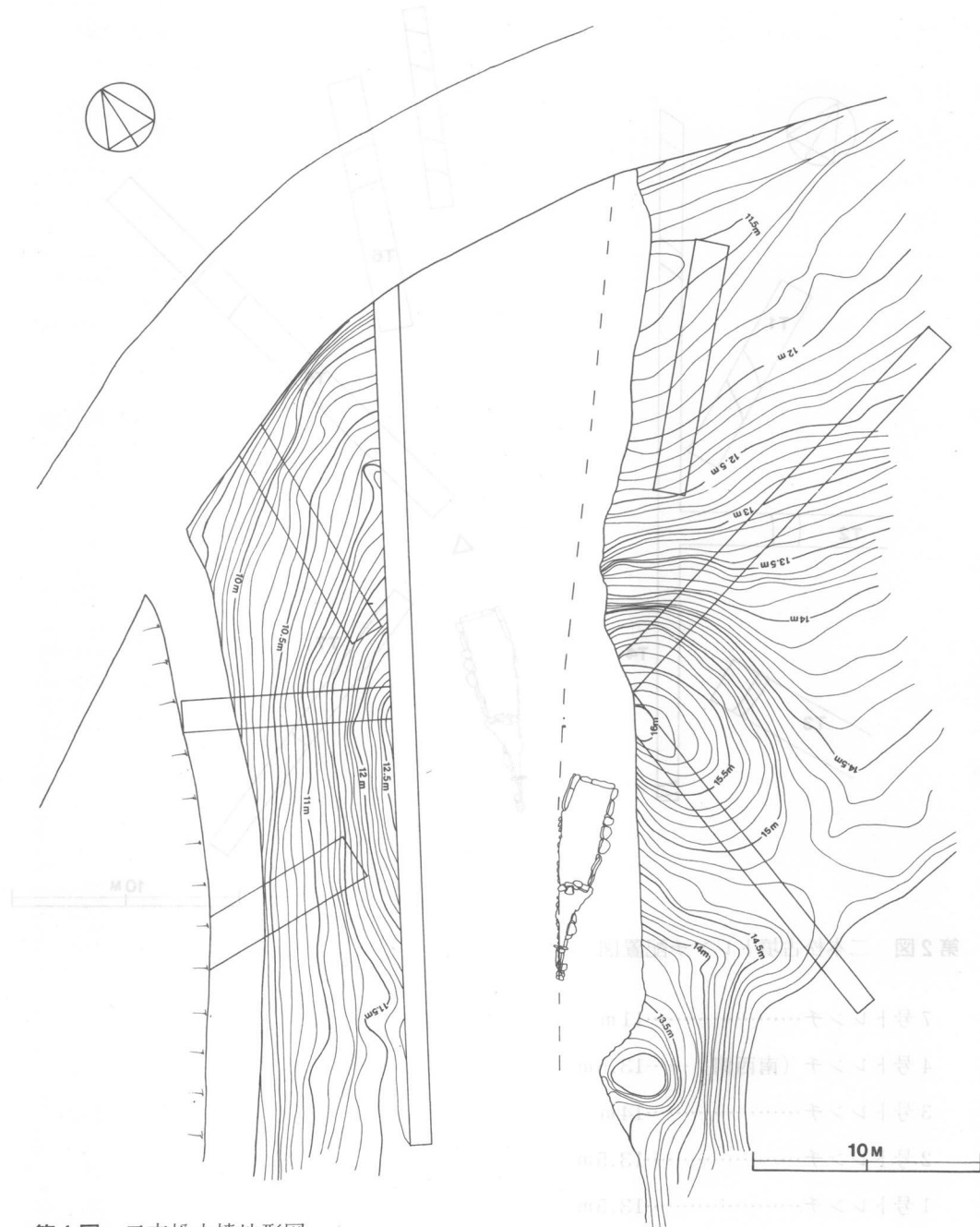
3月24・25の両日にわたって石室を撤去し、26日には右側壁外方の掘方を確認するため小トレンチを入れた。また、これと並行して5号トレンチを拡張し、墳丘下の遺構の調査を行った。この調査をもって、現地での二本松古墳に関するすべての調査を終了した。

第2節 遺 構

1. 墳丘と周溝

本墳は、那珂郡東海村石神外宿字二本松1890-7ほかに所在している。先述のように、道路建設工事に際して、常磐自動車道用地にかかる部分の3分の2が削平されたため、墳丘の範囲・形状を明らかにすることは困難であると思われたが、各トレンチの調査により周溝（またはそれに相当する部分）を確認することができた。

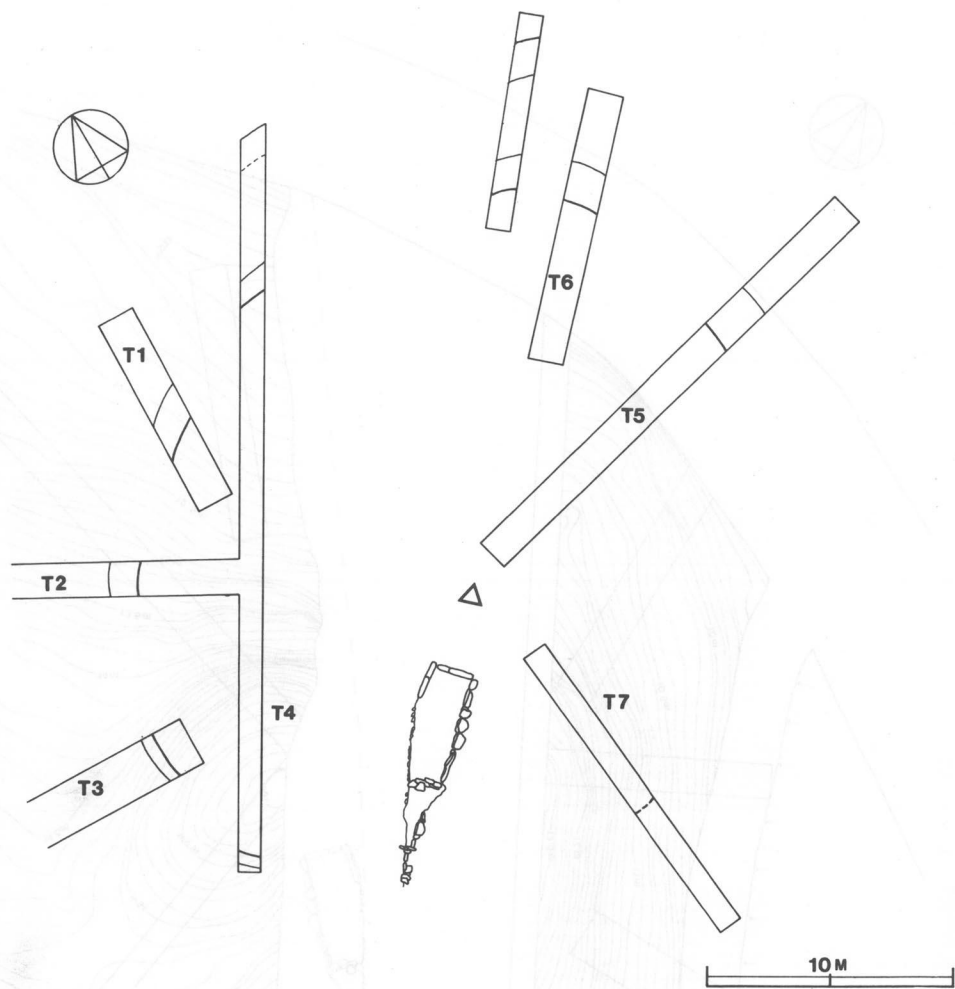
東・南両墳丘の切断面に近い部分の表土は重機で削平されていたため、残存部の最高点を墳頂とすることは困難であった。そこで、墳丘の状況から本来の墳頂を地形図に見られる場所よりも1.5mほど北西にあったものと推定し、これを墳頂として調査を進めた。なお、トレンチは残存する墳丘の形状に応じて設定したものであり、必ずしも墳頂の位置を考慮したものではない。第2図は、各トレンチとそこで確認できた周溝を示したもので、墳頂（△印・推定）と石室を図示して、墳丘の平面形状のゆがみが見られるようにしてある。各トレンチに示した周溝の上場は、セクション図で見られる旧表土の落ち込みでとらえてある。しかし、3号トレンチと4号トレンチ（南西側）では、旧表土が不明瞭なので推定で示した。また、7号トレンチの場合には、台地



第1図 二本松古墳地形図

表土との境界（傾斜変換点）を示した。墳頂からの水平距離を、切断面（図の1番上にトレンチとして示した）から順に右回りに計測すると次のようになる。

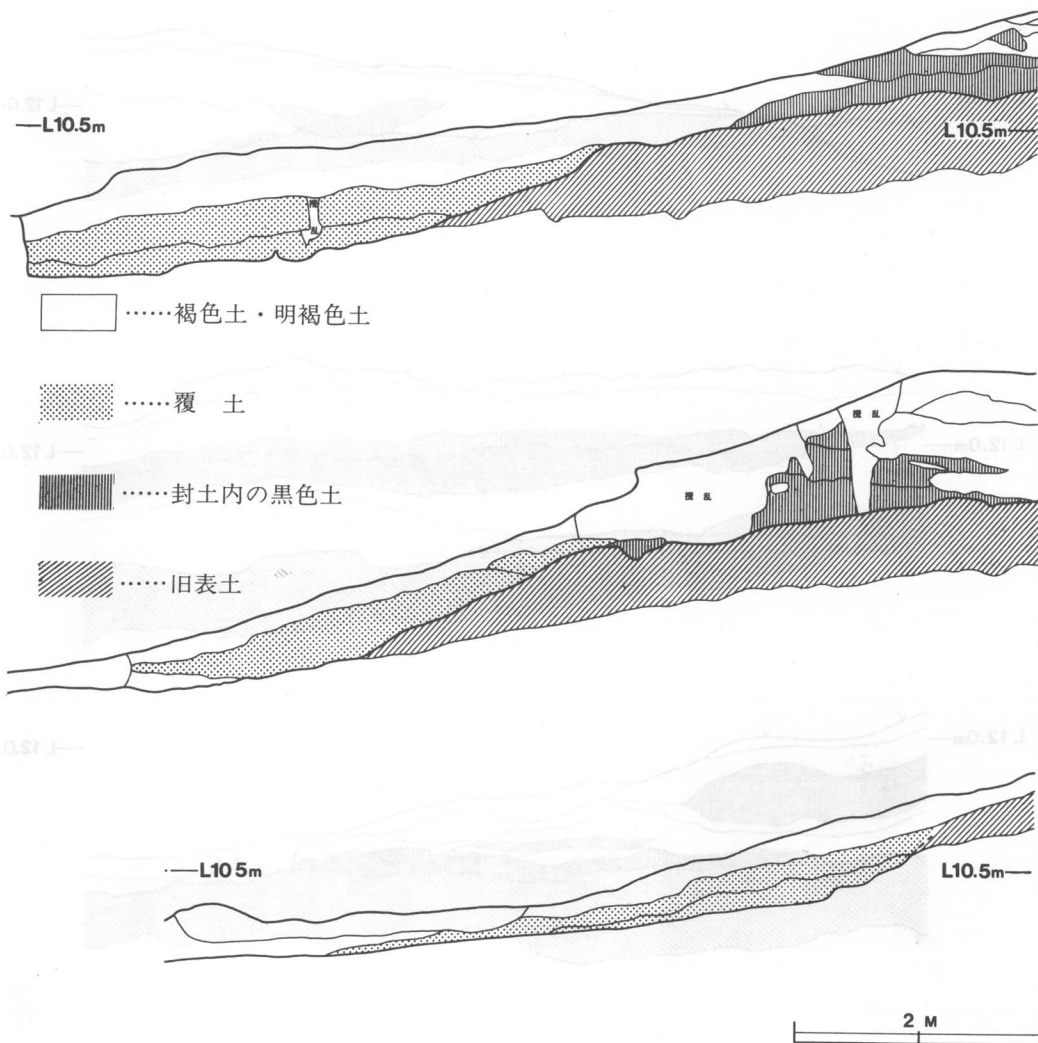
- 切断面……………16.5m
- 6号トレンチ……………16.5m
- 5号トレンチ……………14m



第2図 二本松古墳トレンチ配置図

- 7号トレンチ……………11m
- 4号トレンチ（南西側）……13.5m
- 3号トレンチ……………14m
- 2号トレンチ……………13.5m
- 1号トレンチ……………13.5m
- 4号トレンチ（北東側）……15m

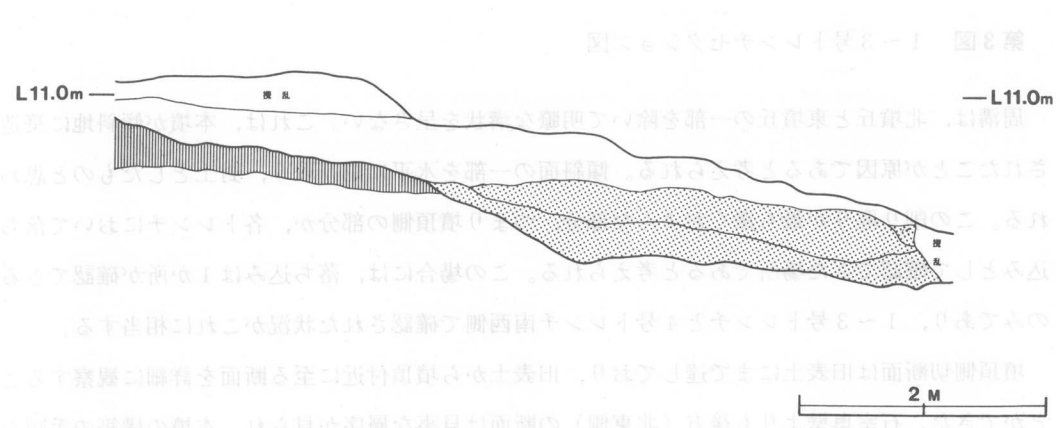
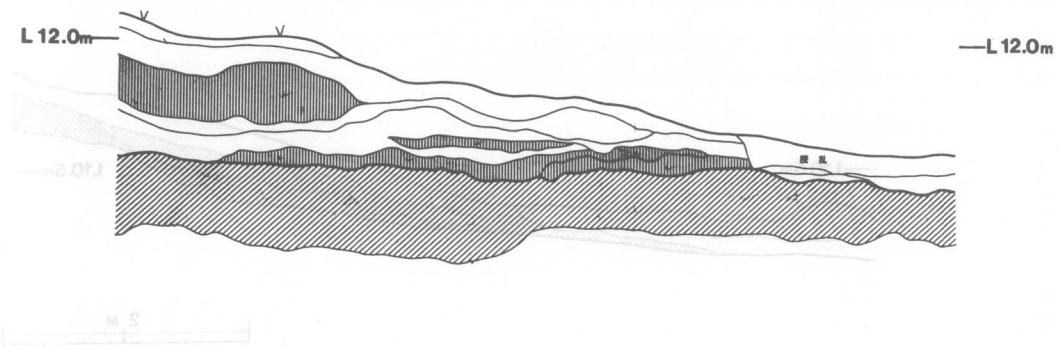
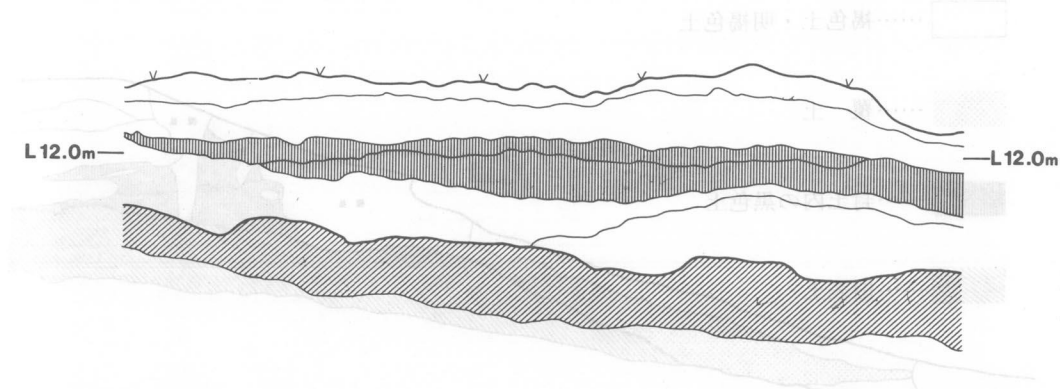
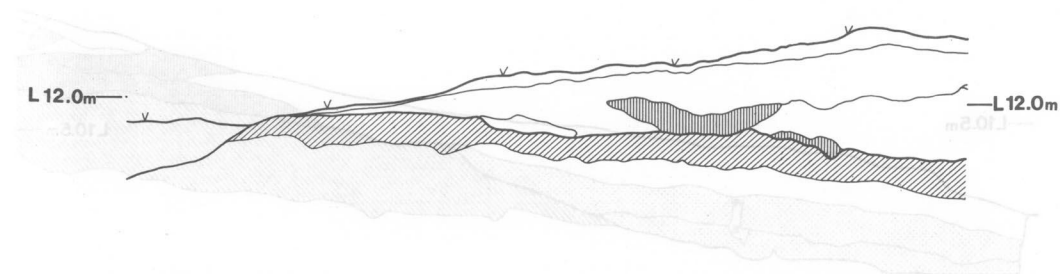
以上から明らかなように、本墳は北東側の裾が長く伸びた円墳である。平面形状にゆがみを生じた原因としては、本墳がやや傾斜する段丘面に築造されたことおよび墳丘の一部が台地面から段丘面に下がる段丘崖にかかったことの二点を挙げることができる。これは、表土面における墳端部の標高が、台地との境界付近で14.8m、1号トレンチ付近で10.5mを測り、4.3mの差を有するという事実にはっきり表れている。



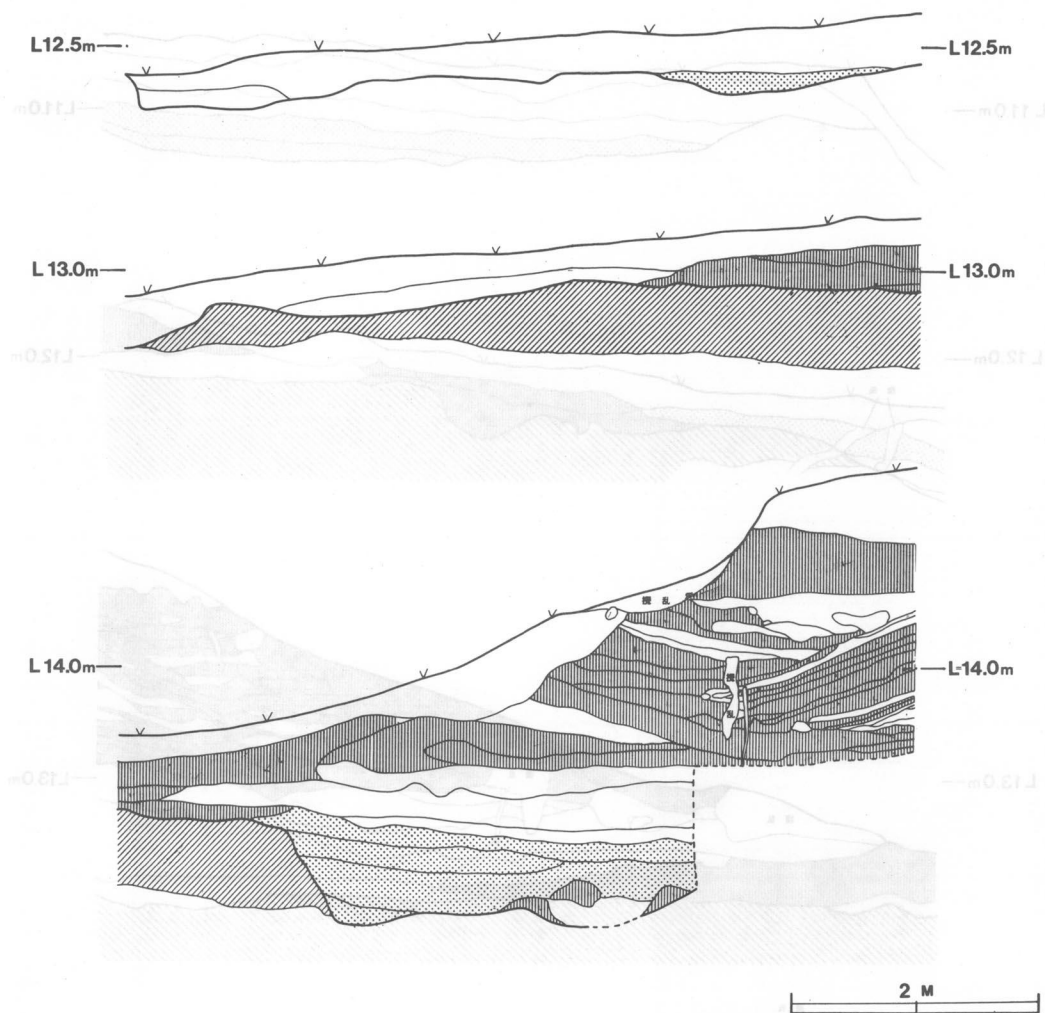
第3図 1～3号トレンチセクション図

周溝は、北墳丘と東墳丘の一部を除いて明瞭な溝状を呈さない。これは、本墳が傾斜地に築造されたことが原因であると考えられる。傾斜面の一部を水平に削り取り、封土としたものと思われる。この削り取りが最も深くおよんだ部分、つまり墳頂側の部分が、各トレンチにおいて落ち込みとして確認できた場所であると考えられる。この場合には、落ち込みは1か所が確認できるのみであり、1～3号トレンチと4号トレンチ南西側で確認された状況がこれに相当する。

墳頂側切断面は旧表土にまで達しており、旧表土から墳頂付近に至る断面を詳細に観察することができた。石室奥壁よりも後方（北東側）の断面は見事な層序が見られ、本墳の構築の手順を復元することができた。これに対し、石室内部および上面では全く層を成さず、攪乱層と言っても過言ではない。この部分が攪乱層と同様の状況を呈するに至った原因については、石室の項で



第4図 4号トレンチセクション図

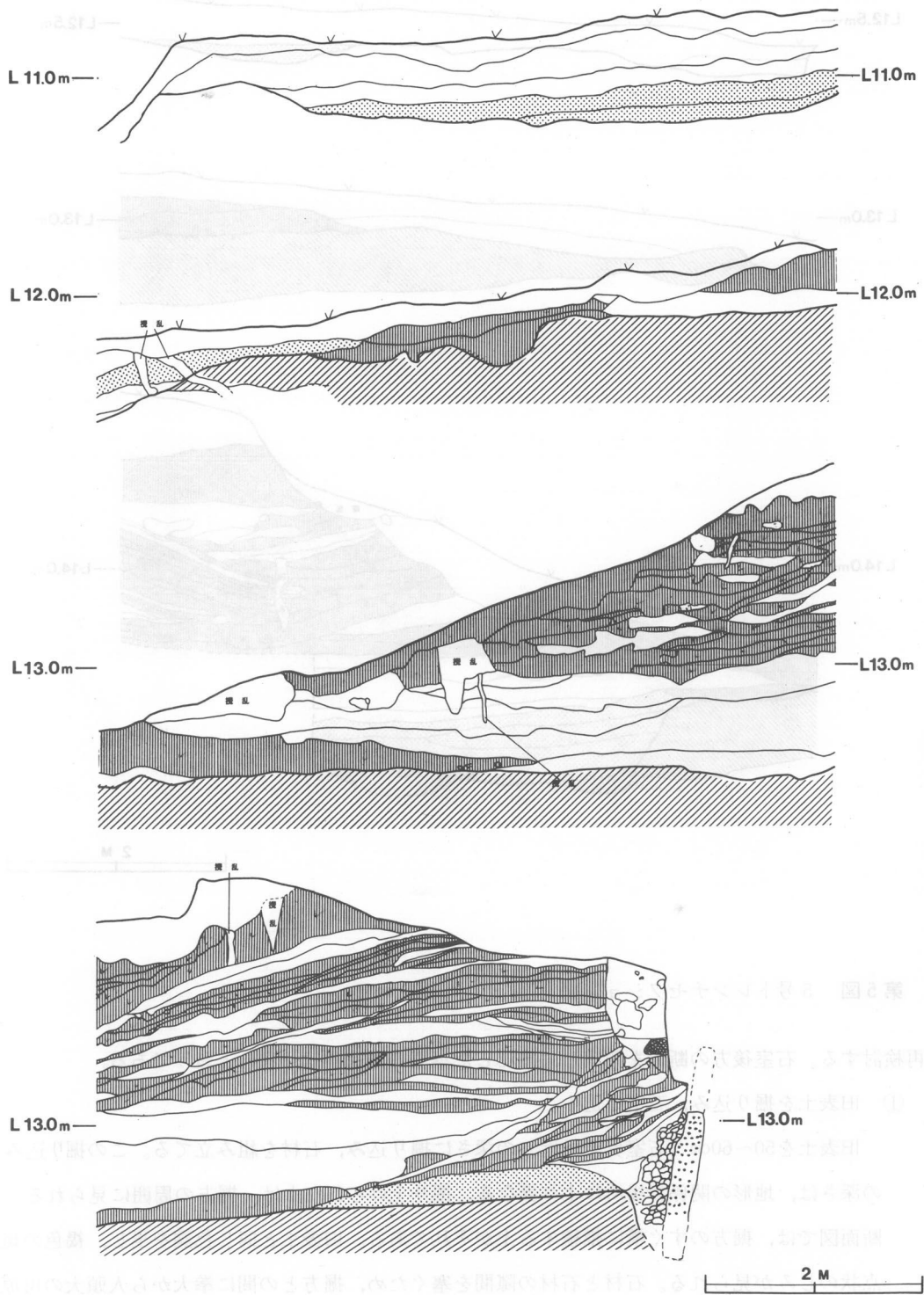


第5図 5号トレンチセクション図

再検討する。石室後方の断面を観察して確認した本墳の築造順は、次のとおりである。

① 旧表土を掘り込み、石室を造る。

旧表土を50～60cm（石室奥壁付近）の深さに掘り込み、石材を組み立てる。この掘り込みの深さは、地形の関係で場所により異なる。掘り上げられた土は、掘方の周囲に見られる。断面図では、掘方のすぐ横に推積する土がそれである。旧表土と同じ色調を呈し、褐色の斑点状のしみが見られる。石材と石材の隙間を塞ぐため、掘方との間に拳大から人頭大の川原石と粘土を充填している。これは石材上端まで施されており、石室内に土が流れ込まないように留意したものと思われる。



第6図 南東側切断面セクション図

② 石室を土で覆う。

黒色土と明褐色土を互層にして、石室が完全に隠れるまで土をかぶせる。かぶせた土の末端は、石室を造る際に掘り出された土をほぼ覆っている。

③ 石室を覆った土の上にさらに土を盛り、墳丘を形成する。

石室後方に多量の明褐色土を盛って墳丘の基礎を造り、さらに黒色土と明褐色土を互層にして土を盛っている。

残存する石室の先端付近が、羨門であると思われる。4号トレンチ南西側の落ち込みと7号トレンチの台地と墳丘との境界から推定して、この付近に本墳の南西側墳端が求められることは明らかである。断面図から判断すると、墳頂は石室奥壁上部付近である。これが後方へずれている理由は、石室内部および上面の攪乱層の成因と関係があると思われる。石室付近の旧表土面の標高が高いことは、石室奥壁上部に墳丘の最高点を置いた場合に、標高が低い北西側の裾が長く伸びることと密接な関係にある。この点は、平面形状にゆがみを生じた理由として、すでに検討したとおりである。

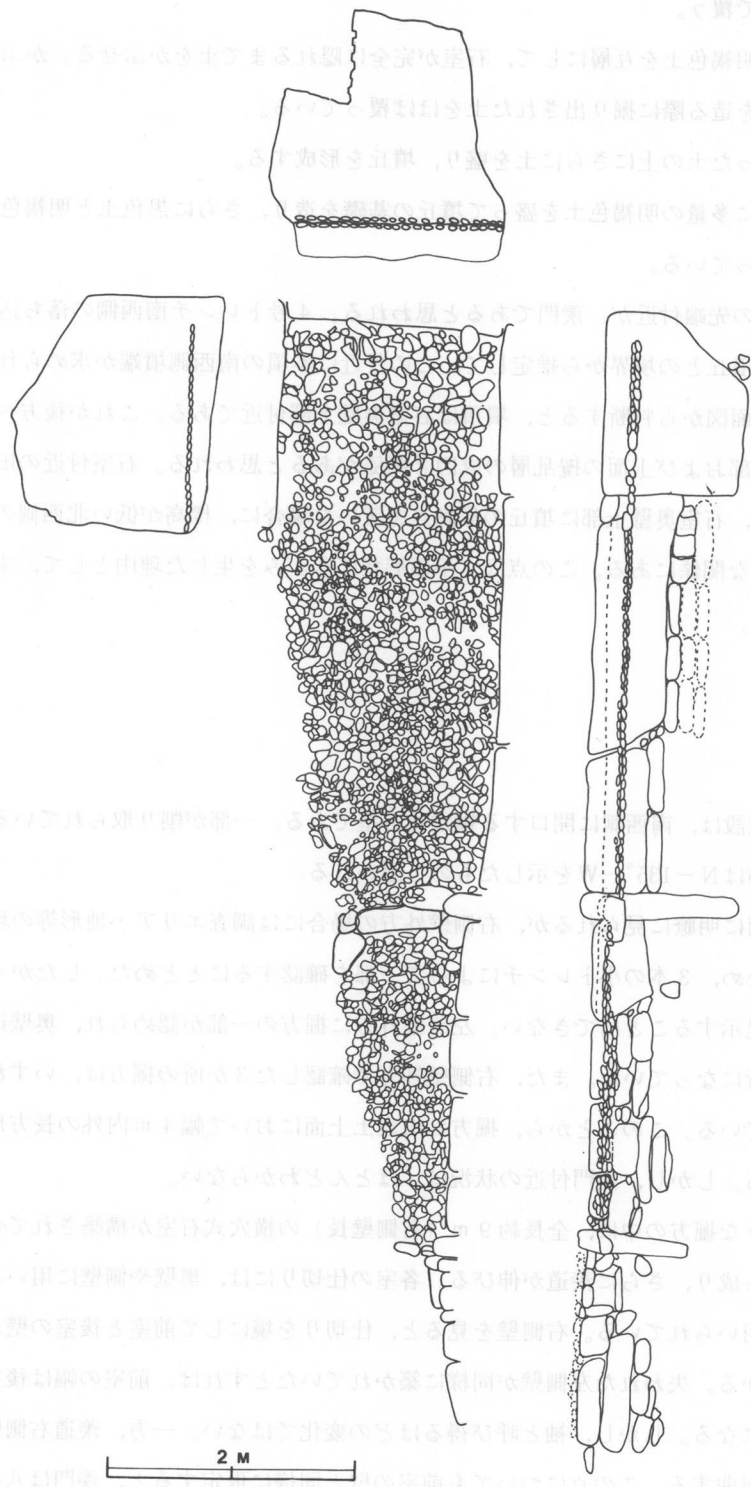
2. 主体部

本墳の埋葬施設は、南西側に開口する横穴式石室である。一部が削り取られているため不明瞭であるが、主軸はN-135°-Wを示したと思われる。

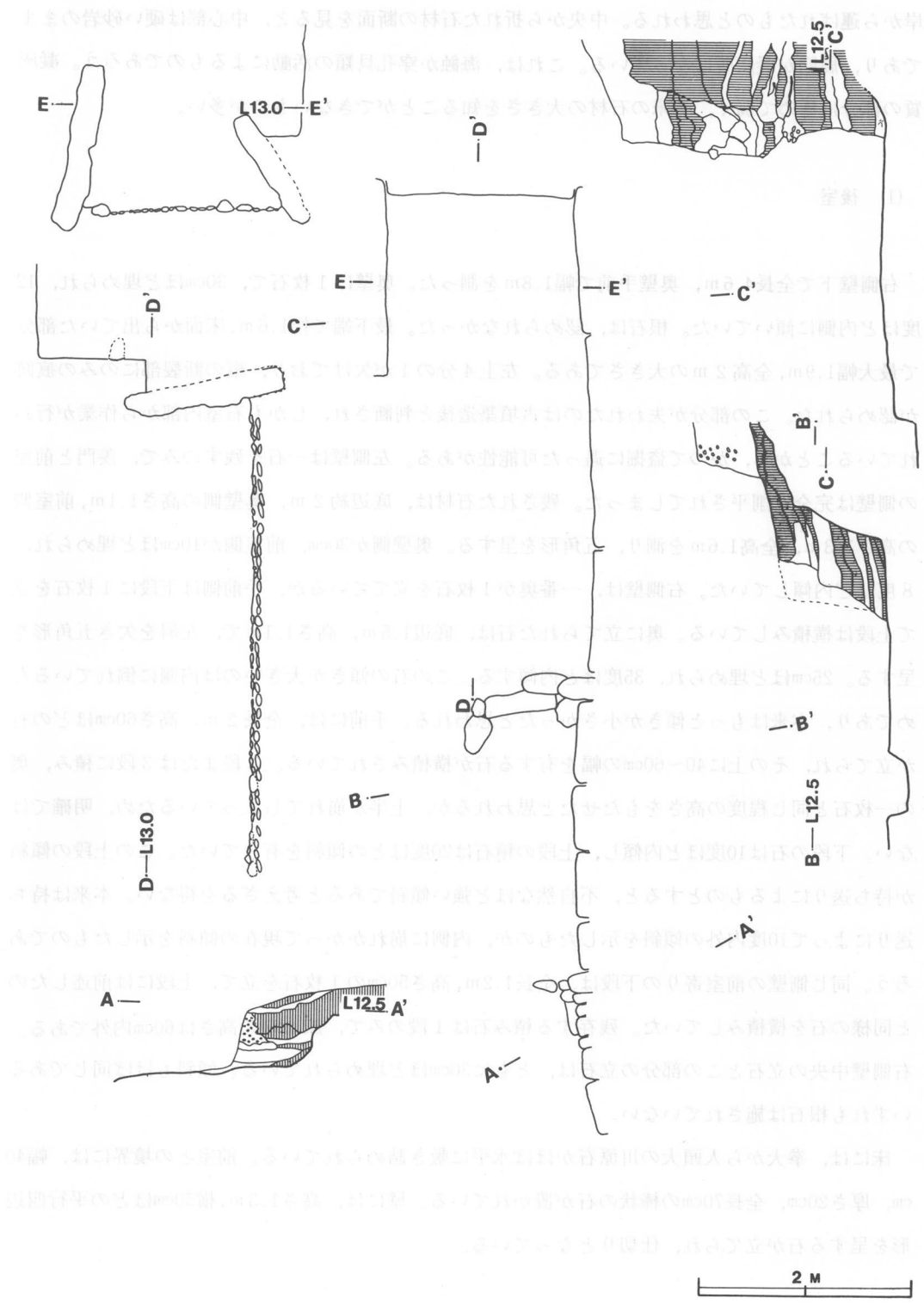
掘方は切断面に明瞭に見られるが、右側壁外方の場合には調査エリア・地形等の理由で調査が困難であったため、3本の小トレンチによって一部を確認するにとどめた。したがって、掘方の全容をここに提示することはできない。左側壁外方に掘方の一部が認められ、奥壁近くを除いて側壁とほぼ平行になっていた。また、右側壁外方で確認した3か所の掘方は、いずれも側壁に沿う状態で並んでいる。このことから、掘方は旧表土上面において幅4 m内外の長方形を呈したものと推定できる。しかし、羨門付近の状況は、ほとんどわからない。

上述したような掘方の中に、全長約9 m（右側壁長）の横穴式石室が構築されていた。玄室は前室と後室から成り、さらに羨道が伸びる。各室の仕切りには、奥壁や側壁に用いられたものと同質の石材が用いられている。右側壁を見ると、仕切りを境にして前室と後室の壁がややずれていることがわかる。失われた左側壁が同様に築かれていたとすれば、前室の幅は後室よりもやや狭かったことになる。しかし、袖と呼び得るほどの変化ではない。一方、羨道右側壁は、中心線に対して南へ屈曲する。この点についても前室の壁と同様に仮定すると、羨門は八の字状に開いていたことになる。

石材の材質は、多孔性凝灰質砂岩である。表面の孔中には、穿孔貝類が見られることから、海



第7図 主体部展開図



第8図 主体部エレベーション・右側壁外方セクション図

岸から運ばれたものと思われる。中央から折れた石材の断面を見ると、中心部は硬い砂岩のままであり、周囲が凝灰質になっている。これは、海蝕か穿孔貝類の活動によるものであろう。凝灰質の部分は極めて弱く、本来の石材の大きさを知ることができないものが多い。

(1) 後室

右側壁下で全長4.6m、奥壁手前で幅1.8mを測った。奥壁は1枚石で、30cmほど埋められ、12度ほど内側に傾いていた。根石は、認められなかった。最下端で幅1.6m、床面から出ていた部分で最大幅1.9m、全高2mの大きさである。左上4分の1が欠けており、縦の断裂部にのみの痕跡が認められた。この部分が失われたのは古墳築造後と判断され、しかも石室内部から作業が行われていることから、かつて盗掘に遇った可能性がある。左側壁は一石を残すのみで、羨門と前室の側壁は完全に削平されてしまった。残された石材は、底辺約2m、奥壁側の高さ1.1m、前室側の高さ1.3m、全高1.6mを測り、五角形を呈する。奥壁側が30cm、前室側が10cmほど埋められ、8度ほど内傾していた。右側壁は、一番奥が1枚石を立てているが、手前側は下段に1枚石を立て上段は横積みしている。奥に立てられた石は、底辺1.5m、高さ1.1mで、左肩を欠き五角形を呈する。25cmほど埋められ、35度ほど内傾する。この石の傾きが大きいのは内側に倒れているためであり、本来はもっと傾きが小さかったと思われる。手前には、全長2m、高さ60cmほどの石が立てられ、その上に40～60cmの幅を有する石が横積みされている。2段または3段に積み、奥の一枚石と同じ程度の高さをもたせたとと思われるが、上半が崩れてしまっているため、明確ではない。下段の石は10度ほど内傾し、上段の積石は20度ほどの傾斜を有していた。この上段の傾斜が持ち送りによるものとする、不自然なほど強い傾斜であると考えざるを得ない。本来は持ち送りによって10度内外の傾斜を示したものが、内側に崩れかかって現在の傾斜を示したものであろう。同じ側壁の前室寄りの下段は、全長1.2m、高さ50cmの1枚石を立て、上段には前述したのと同様の石を横積みしていた。残存する積み石は1段のみで、床からの高さは60cm内外である。右側壁中央の立石とこの部分の立石は、ともに30cmほど埋められている。傾斜もほぼ同じである。いずれも根石は施されていない。

床には、拳大から人頭大の川原石がほぼ水平に敷き詰められている。前室との境界には、幅40cm、厚さ20cm、全長70cmの棒状の石が置かれている。壁には、高さ1.3m、横50cmほどの平行四辺形を呈する石が立てられ、仕切りとなっている。

(2) 前室

左側壁が削平されているため、幅は不明である。右側壁下で、2.5mの長さを有した。右側壁の構築法は、後室手前側の右側壁と同一手法が用いられている。奥から、それぞれ80cm・60cm・60cm・30cmの長さを有する石を立て、その上段に同じ程度の大きさを有する石を横積みしている。ここでも上段は崩れてしまっており、本来の高さは不明である。後室と同様に、10度ほど傾斜していた。

床には、拳大の川原石が敷き詰められている。後室よりも小さ目の石が多い。玄門右側壁には、高さ90cm、幅が下端で40cm、上端で20cmの台形を呈する石が立てられている。床には、幅20cmの棒状の石が置かれているが、重機により折られているため、現状で40cmを測るものの、全長は不明である。

(3) 羨道

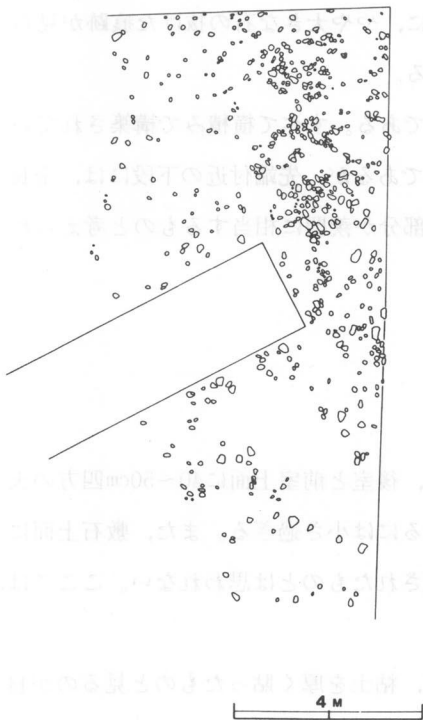
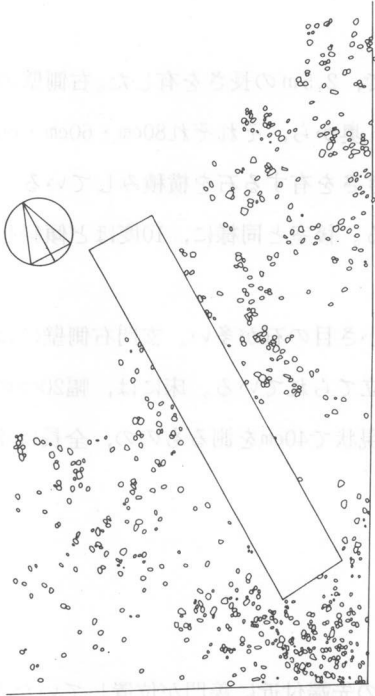
右側壁が残存するのみで、形状は不明である。この右側壁の先端付近に羨門が位置していたと考えられることは、前述したとおりであり、右側壁の長さが、ほぼ羨道の長さに一致していたと考えられる。しかし、先端に見られた横長の小さな石の下に、やや大きな石の抜けた痕跡が見られたことから、本来は現状よりもやや長かった可能性がある。

右側壁は、先端の小さな石まで全長で1.8m、高さは60cmである。すべて横積みで構築されている。玄門寄りの部分は崩れている。石材の大きさは様々であるが、先端付近の下段には、全長が70cm・1mの2個の石材が積まれていたことから、この部分が羨門に相当するものと考えられる。

(4) 天井

天井石は、見られなかった。石室上面を掘り込んだ際に、後室と前室上面に40~50cm四方の大きさを有する石材が多数見られたが、これを天井石と考えるには小さ過ぎる。また、敷石上面に20~30cmの厚さに堆積する粘土層は、埋葬後に意図的に施されたものとは思われない。ここでは、木材を用いて天井を架構したと考えるのが妥当であろう。

板あるいは丸太を並べて天井とし、その隙間を石で塞ぎ、粘土を厚く貼ったものとするのが自然である。木材の腐朽後、粘土層が落下して敷石上に堆積したと考えられる。粘土層中に見られた石材は、この時に粘土とともに落下したものであろう。しかし、上面に残った石材については、



第9図 北・西墳丘葺石

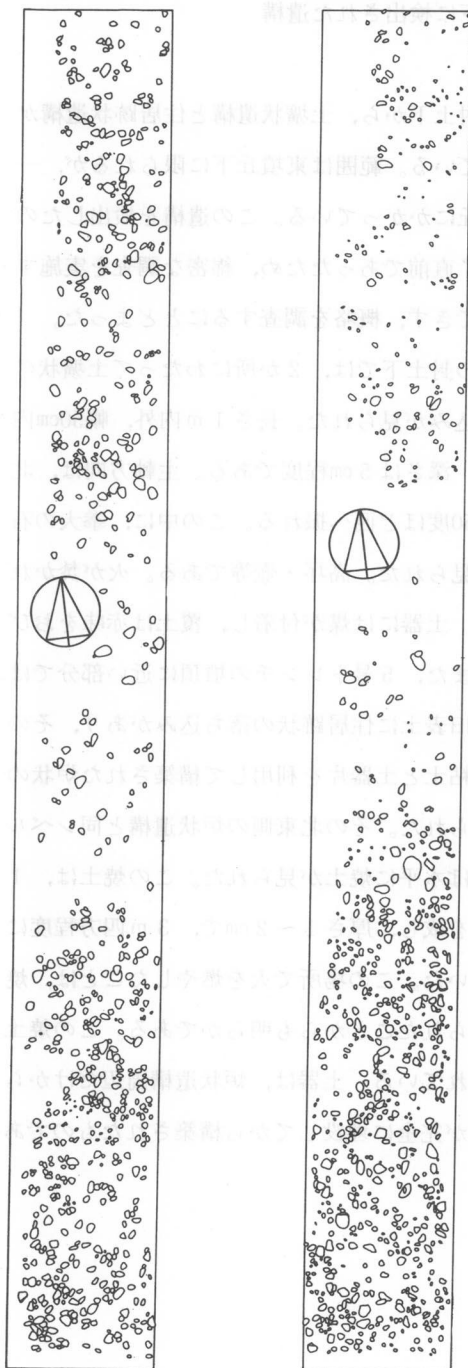
この部分の木材の腐朽が遅れ、他の部分から流れ込んだ土が石室内に堆積していたために上位にとどまり、より上面で検出されたと見る以外には適当な判断理由がなく、結論を出すには至らなかった。

石室内および石室上面の土層が攪乱層と同様の状況を呈していた理由については、天井を形成した木材の腐朽に伴う上面封土の落盤を挙げることができよう。その後、周囲から崩れたり流れ込んだ土によって、上面にはある程度の層序が見られることになる。しかし、表土付近はすでに削平されており、不明である。

3. 葺石

本墳には、川原石による葺石が施されている。重機による削平のため、調査エリア内に残るのはその一部だけである。ここでは、7号トレンチで確認した葺石の状況を中心に述べる。

第10図は、7号トレンチで確認した葺石の状況である。一見して明らかなように、墳頂付近と裾部に集中し、裾部の方が圧倒的に多い。また、墳頂付近は表土下数センチメートルで葺石が現れたのに対し、裾部では表土が厚く、25~30cmほど掘り下げなければならない。また、墳頂付近では葺石層が薄いのに対し、裾部ではかなりの厚味を有する。このことは、鉢巻状に葺石を施したことよりも、墳丘全体に葺石が施され、中腹の傾斜の強い部分から裾部へ石が転落して堆積した可能性の方が大きいことを示している。つまり、本来の葺石の上面に上から転落した石が堆積したために、石が裾部に特に集中していると考えられるわけである。第10図は、上方が墳頂である。左側の図が表土除去時のものであり、右側の図はさらに掘り込んだ時の様子を示している。両図の下方に見られるように、深い位置まで多量の石が見られることが、こ



2 M

第10図 7号トレンチ 葺石

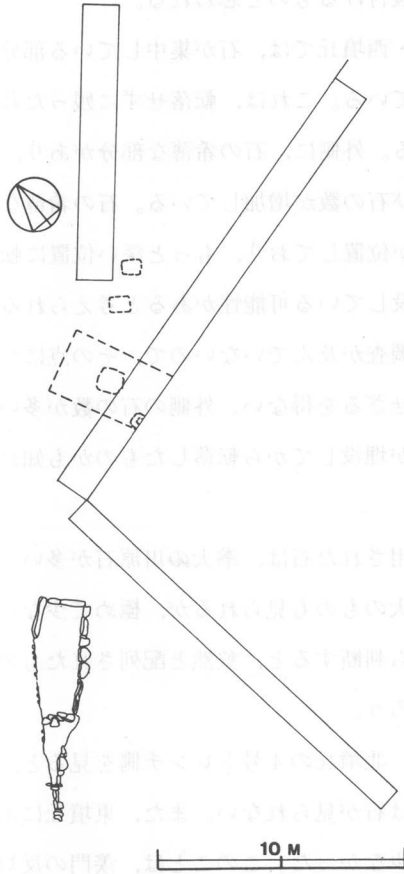
の可能性を裏付けるものと思われる。

一方、北・西墳丘では、石が集中している部分が弧状を呈している。これは、転落せずに残った葺石と考えられる。外側に、石の希薄な部分があり、その外側で再び石の数が増加している。石の希薄な部分には周溝が位置しており、もっと深い位置に転落した石が埋没している可能性があると考えられるが、周溝全体に調査が及んでいないので、その点については不明とせざるを得ない。外側の石の数が多き部分は、周溝が埋没してから転落したものかも知れない。

葺石に使用された石は、拳大の川原石が多い。なかには人頭大のものも見られるが、極めて少ない。出土状態から判断すると、整然と配列されたものではないであろう。

ところで、北墳丘の4号トレンチ側を見ると、墳端部付近には石が見られない。また、東墳丘にあっては、石が少なかった。このことは、羨門の反対側の墳丘には葺石が部分的にしか施されなかった可能性を示すものである。重機による削平部がその境界に位置しており、この問題を解決できなかったのは極めて残念である。

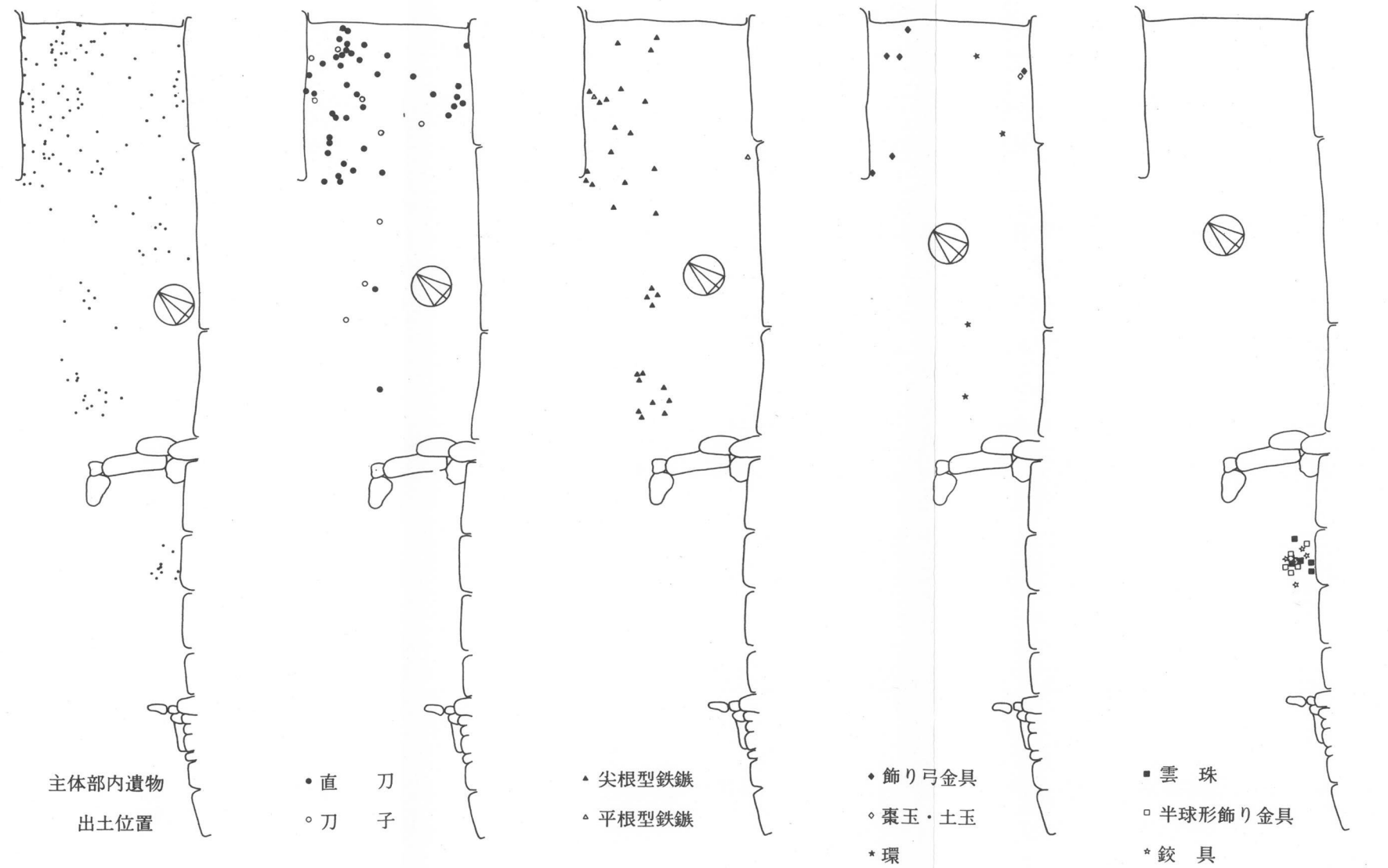
4. 墳丘下に検出された遺構



第11図 墳丘下の遺構

本墳の封土下から、土壇状遺構と住居跡状遺構が検出されている。範囲は東墳丘下に限られるが、一部は南墳丘にかかっている。この遺構を検出したのは調査終了直前であったため、綿密な調査を実施することができず、概略を調査するにとどまった。

東墳丘の封土下では、2か所にわたって土壇状の浅い掘り込みが見られた。長さ1 m内外、幅50 cm内外を測り、深さは5 cm程度である。主軸方向は、北から40~50度ほど西へ振れる。この中に、拳大の石と土器が見られた。高坏・壺等である。火が焚かれたらしく、土器には煤が付着し、覆土は赤味をおびていた。また、5号トレンチの墳頂に近い部分では、封土下の旧表土に住居跡状の落ち込みがあり、その床付近に粘土と土器片を利用して構築された炉状の遺構が見られた。その北東側の炉状遺構と同レベル面に、ほぼ水平に焼土が見られた。この焼土は、1枚の層状を成し、厚さ1~2 cmで、3 m四方程度に広がっていた。この場所で火を燃やしたことは、焼土上に長さ2 m内外、直径5 cm内外の炭化材が数本見られたことから明らかである。この焼土上(落ち込みの覆土)から、石製模造品2点が発見されている。土器は、炉状遺構周辺だけから集中して出土した。二本松古墳は、この住居跡状遺構が完全に埋没してから構築されたものである。



第12図 主体部内遺物出土状況図

第3節 遺物

1. 主体部内出土遺物

(1) 人骨・歯

人骨は、後室だけから検出され、すべて破片であった。歯は、かなり散乱して検出された。

右側壁下から、大腿骨が4本検出された。これらは、いずれも石室の主軸に沿って並んでいた。形状から判断して成人骨であり、頭位が南西にあったことは明らかである。関節部を欠損しており、身長等を推定することは不可能である。この4本の大腿骨は、この位置に2体が埋葬されていたことを示している。

左側壁下からは、2本の上腕骨が検出された。いずれも成人骨である。この骨も、石室の主軸に沿って並んでいた。この場合の頭位は、奥壁に向けられたものと思われる。また、奥壁付近からは、鎖骨と思われる骨片1点が検出された。これは非常に小さいもので、被葬者の中に小児が存在したことをうかがわせる。

前室寄りの切断面に近い場所から、頭蓋骨の破片が検出された。成人骨である。

歯は、かなり散乱していた。いずれも永久歯であるが、被葬者の数を推定するには至らなかった。

以上のことから、本墳に埋葬されたのは3体以上であると考えたい。

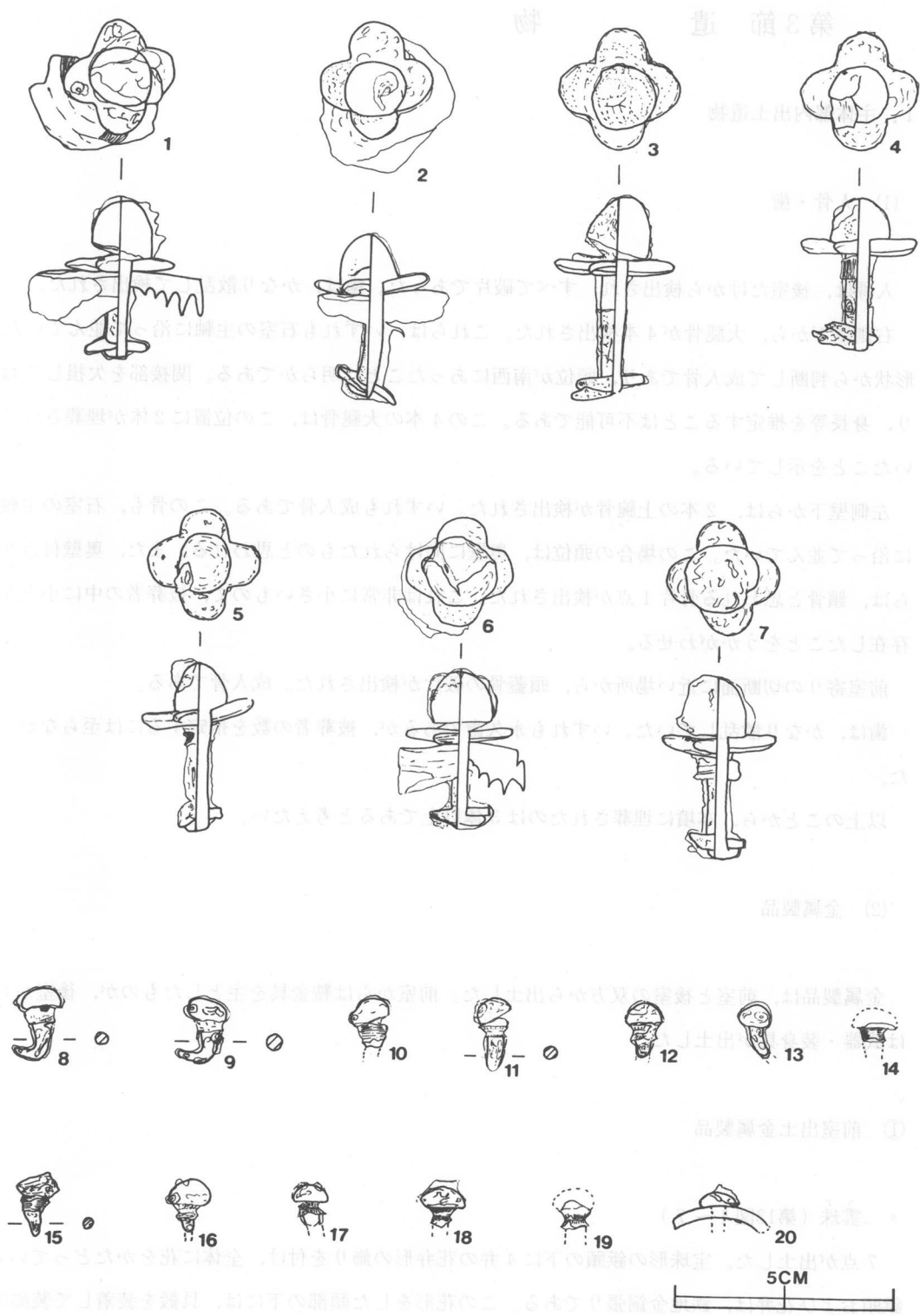
(2) 金属製品

金属製品は、前室と後室の双方から出土した。前室からは鞍金具を主としたものが、後室からは武器・装身具が出土した。

① 前室出土金属製品

。雲珠（第13図1～7）

7点が出土した。宝珠形の鋌頭の下に4弁の花弁形の飾りを付け、全体に花をかたどっている。鋌頭および花弁は、鉄地金銅張りである。この花形をした頭部の下には、貝殻を装着して装飾的効果を持たせている。鋌の先端には、座金のはめ込まれている。



第13図 前室出土遺物(1)

。 鋌（第13図8～20）

13点が出土した。いずれも鋌頭は丸い。一部は鋌頭を欠くが、同様の形状のものであろう。鋌頭下に貝殻を装着したものが1点見られ、他もその痕跡が認められる。

前室出土遺物解説表（第13図）

番号	名称	高さ(cm)	幅(径)(cm)	重量(g)	備考	番号	名称	高さ(cm)	幅(径)(g)	重量(g)	備考
1	雲珠	3.7	2.6	18.0	鉄地金銅張	11	鋌	1.7	1.0	1.0	
2	〃	3.9	2.6	15.0	〃	12	〃	1.2	0.9	—	
3	〃	4.8	2.8	15.5	〃	13	〃	1.2	0.8	—	
4	〃	3.55	2.7	13.0	〃	14	〃	0.4	—	—	
5	〃	4.0	2.15	11.0	〃	15	〃	1.5	0.8	1.0	
6	〃	3.6	2.5	15.0	〃	16	〃	1.2	0.9	—	
7	〃	4.2	2.6	16.0	〃	17	〃	1.0	0.8	—	
8	鋌	1.7	1.1	1.5		18	〃	1.1	1.0	—	
9	〃	1.6	1.1	1.5		19	〃	0.7	—	—	
10	〃	1.2	1.0	—		20	〃	—	0.85	—	

。 半球形飾り金具（第14図）

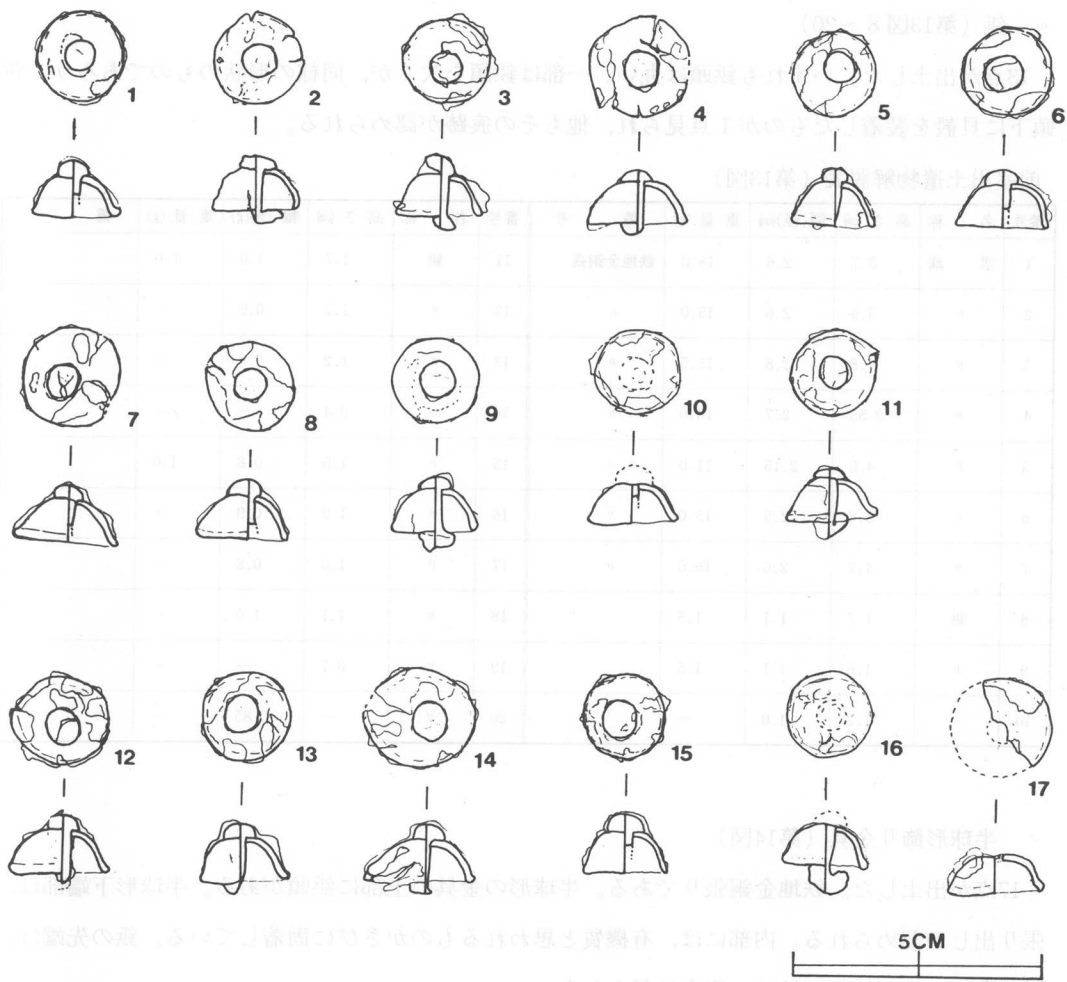
17点が出土した。鉄地金銅張りである。半球形の金具の上部に鋌頭がある。半球形下端部は、張り出しが認められる。内部には、有機質と思われるものがさびに固着している。鋌の先端は、単に曲げられているだけで、座金は見られない。

。 飾り金具（第15図1・2）

2点が出土した。一方が丸味を有するこはぜ状のものである。中心線上に、2個の鋌が見られる。鋌頭は丸く、先端は曲がっている。

。 鈇具（第15図3～5）

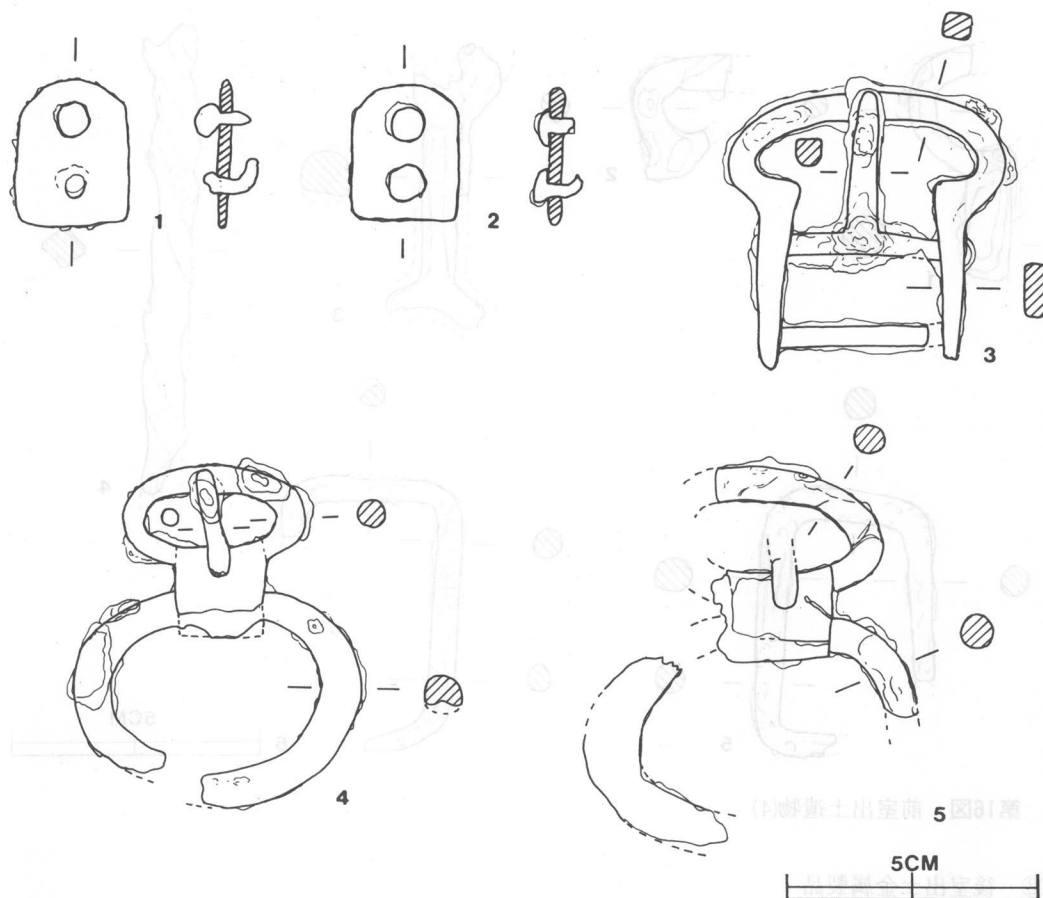
3点が出土した。1点は、形態を異にしている。鞍を馬体に固定するための帯に使用されていたものであろう。



第14図 前室出土遺物(2)

前室出土遺物解説表 (第14図)

番号	名称	高さ(cm)	径(cm)	重量(g)	備考	番号	名称	高さ(cm)	径(cm)	重量(g)	備考
1	半球形金具	1.2	1.8	3.5	鉄地金銅張	10	半球形金具	—	1.7	3.0	鉄地金銅張
2	〃	1.4	1.85	3.5	〃	11	〃	1.4	1.7	3.0	〃
3	〃	1.6	1.7	4.0	〃	12	〃	1.4	1.8	4.5	〃
4	〃	1.3	2.05	3.5	〃	13	〃	1.5	1.85	4.0	〃
5	〃	1.3	1.7	3.5	〃	14	〃	1.5	2.05	4.5	〃
6	〃	1.2	1.75	4.0	〃	15	〃	1.25	1.75	3.0	〃
7	〃	1.15	1.95	4.0	〃	16	〃	—	1.8	3.5	〃
8	〃	1.2	1.75	3.0	〃	17	〃	—	0.85	1.5	〃
9	〃	1.5	1.75	3.5	〃						



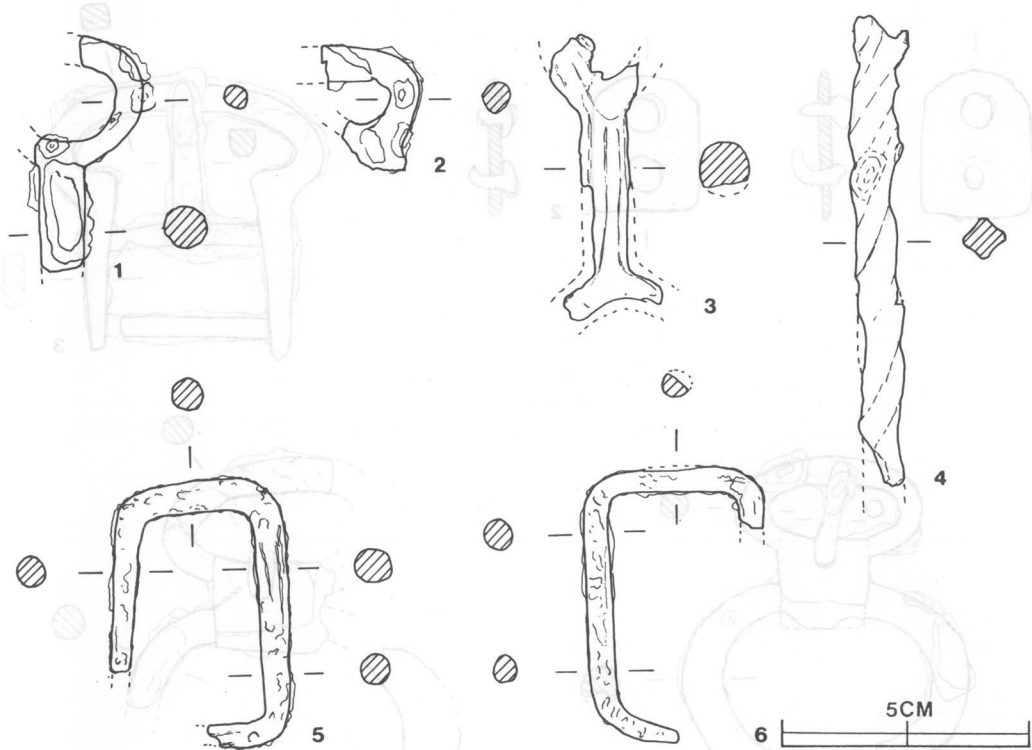
第15図 前室出土遺物(3)

前室出土遺物解説表 (第15図)

番号	名称	全長(高)(cm)	幅(径)(cm)	重量(g)	備考	番号	全長(高)(cm)	全長(高)(cm)	幅(径)(cm)	重量(g)	備考
1	飾金具	3.0	2.3	5.0		4	鉸具	6.9	5.8	25.0	
2	"	2.6	2.2	6.0		5	"	-	-	22.0	
3	鉸具	5.7	5.8	34.5							

。 不明鉄製品 (第16図)

小鉄片を含めて、本来の形状が不明であるものが多かった。ここでは、比較的形状を判断し得るものを掲げた。1～4は、馬具の破片と思われる。4は、全体にらせん状を呈している。両端を欠いており、何に使用されたものか不明である。5・6は、帯金具の一種と思われる。



第16図 前室出土遺物(4)

② 後室出土金属製品

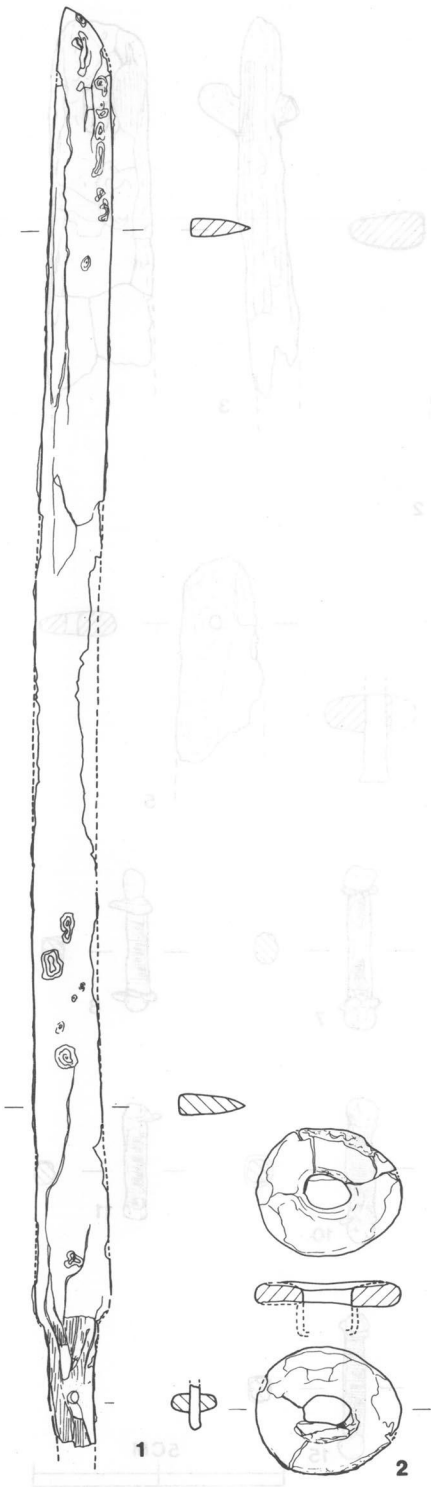
後室から出土した金属製品は、武器と装身具に大別される。この中で、装身具については、土玉・棗玉とともに一項を立ててあるので、ここでは武器だけを取り上げる。

・ 直刀 (第17図)

数振が副葬されたと思われるが、多くは薄片化している。ここでは、比較的完形に近いもの1点を示した。やや内反りのものである。茎部分には、柄に用いられたと見られる木質が付着している。目釘が残っているが、一端が欠けている。鐔は鉄製で、柄側には縁金が付いている。

後室出土遺物解説表 (第17図)

番号	名称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量(g)	備 考	番号	名称	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	備 考
1	直 刀	76.35	3.8	-	茎部一部欠損	2	鐔	7.7	6.7	113.5	一部木質付着



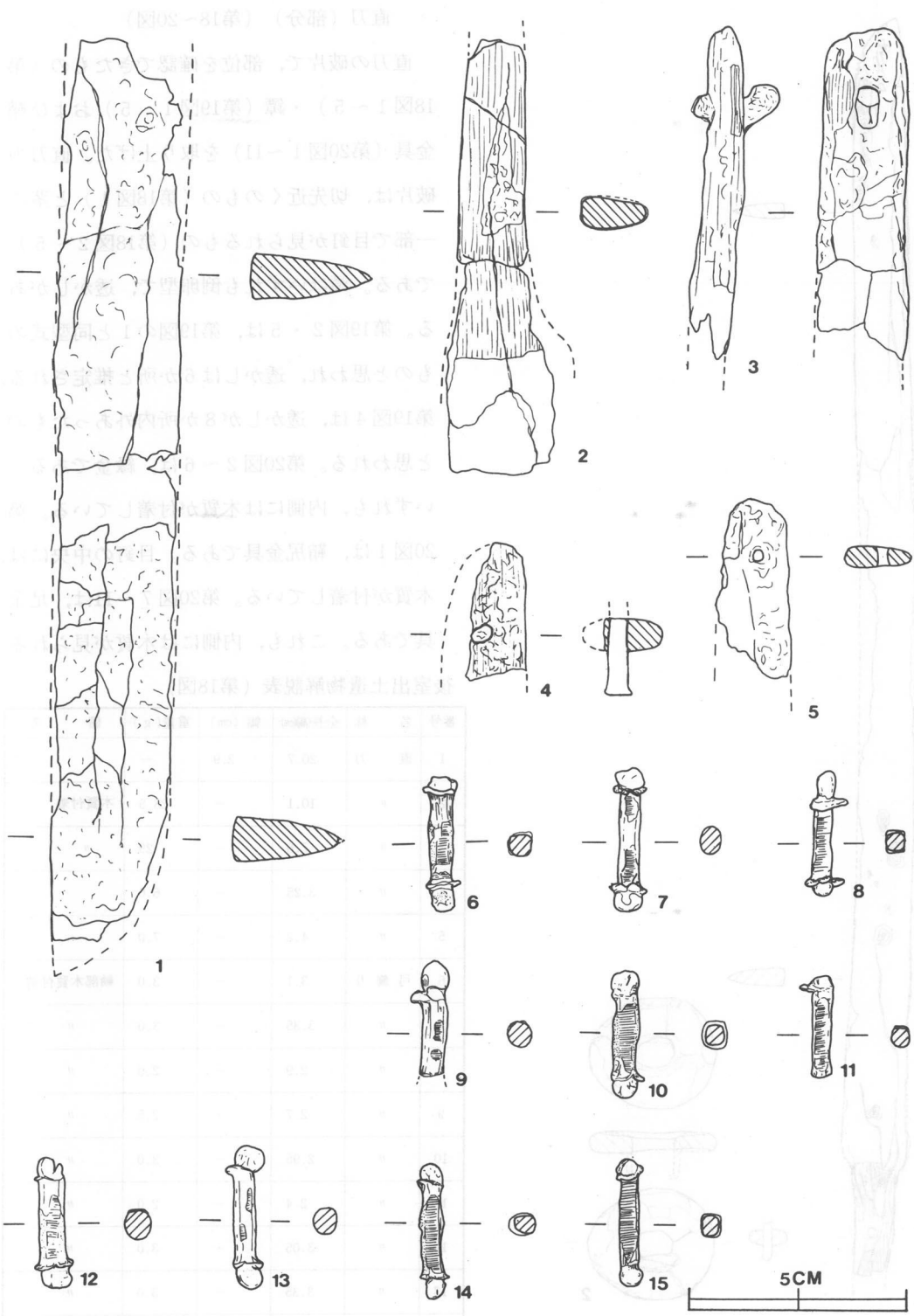
第17図 後室出土遺物(1)

。 直刀（部分）（第18～20図）

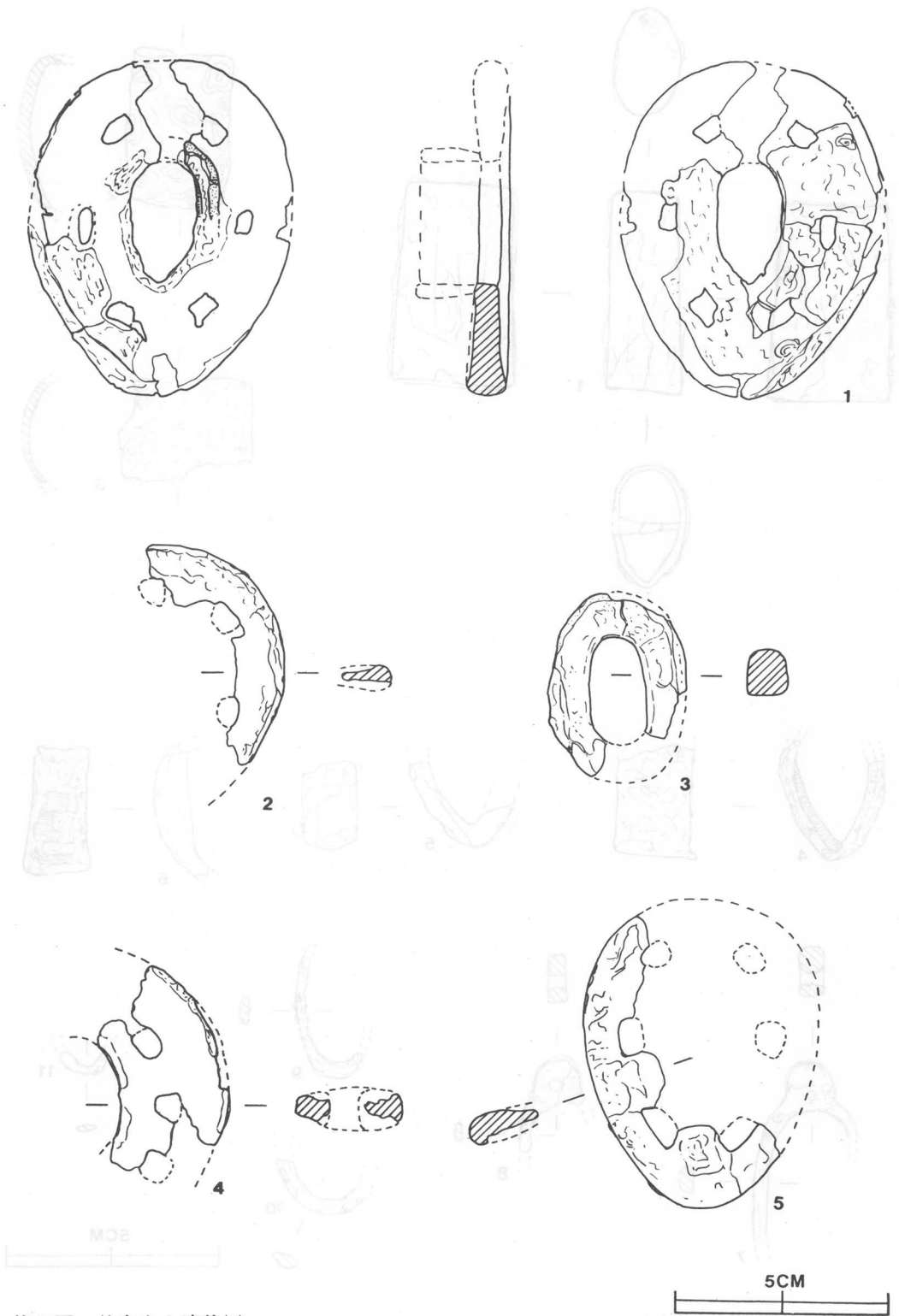
直刀の破片で、部位を確認できたもの（第18図1～5）・鐺（第19図1～5）および鞘金具（第20図1～11）を取り上げた。直刀の破片は、切先近くのもの（第18図1）と茎の一部で目釘が見られるもの（第18図2～5）である。鐺はいずれも倒卵型で、透かしがある。第19図2・5は、第19図の1と同型式のものと思われ、透かしは6か所と推定される。第19図4は、透かしが8か所内外あったものと思われる。第20図2～6は、縁金である。いずれも、内側には木質が付着している。第20図1は、鞘尻金具である。目釘の中央には、木質が付着している。第20図7～11は、足金具である。これも、内側には木質が見られる。

後室出土遺物解説表（第18図）

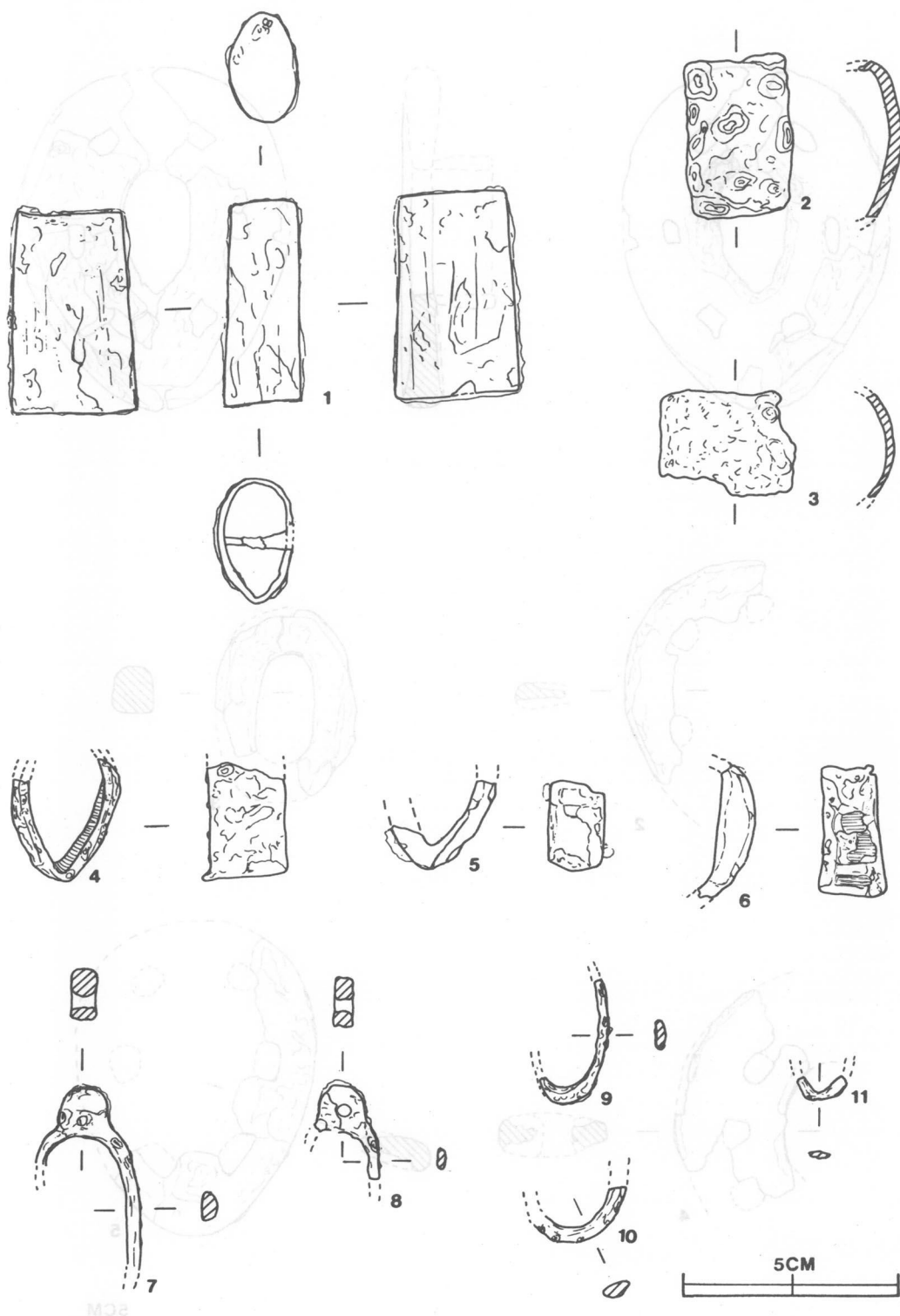
番号	名称	全長(㎝)	幅 (cm)	重量(g)	備考
1	直 刀	20.7	2.9	—	
2	"	10.1	—	28.5	木質付着
3	"	7.6	—	29	"
4	"	3.25	—	6.0	
5	"	4.2	—	7.0	
6	弓 飾 り	3.1	—	3.0	軸部木質付着
7	"	3.35	—	3.0	"
8	"	2.9	—	2.0	"
9	"	2.7	—	2.5	"
10	"	2.95	—	3.0	"
11	"	2.4	—	2.0	"
12	"	3.05	—	3.0	"
13	"	3.35	—	3.0	"
14	"	3.15	—	2.0	"
15	"	2.95	—	2.0	"



第18図 後室出土遺物(2)



第19図 後室出土遺物(3)



第20圖 後室出土遺物(4)

（左）新石器時代 圖說

後室出土遺物解説表（第19図）

番号	名 称	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	備 考	番号	名 称	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	備 考
1	鐔	7.9	6.3	50.5	透し6ヵ所	4	鐔	—	—	9.5	
2	〃	—	—	5.0		5	〃	—	—	10.5	透し6ヵ所
3	〃	4.5	3.2	12.5	内面木質付着						

後室出土遺物解説表（第20図）

番号	名 称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備 考	番号	名 称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備 考
1	鞆尻金具	4.7	2.9	24	目釘木質付着	7	足金具	4.5	—	4.5	
2	縁 金	3.8	2.45	14.0	内面木質付着	8	〃	2.2	—	1.5	
3	〃	2.5	3.1	4.5	〃	9	〃	2.9	—	2.0	内側木質付着
4	〃	2.7	1.8	9.0	〃	10	〃	1.5	—	2.0	
5	〃	2.05	1.3	10.5	〃	11	〃	0.6	—	1.0	
6	〃	3.05	1.6	6.5	〃						

◦ 飾り弓金具（第18図6～15）

10点が出土した。両端は丸く、鋏頭として造り出されたものである。欠損しているものもある。この端部内側には、ひさし状の小突出がある。中央部は、鉄芯に直交した状態に木質が付着しており、鉄芯の断面は方形または円形を呈している。

◦ 刀子（第21図）

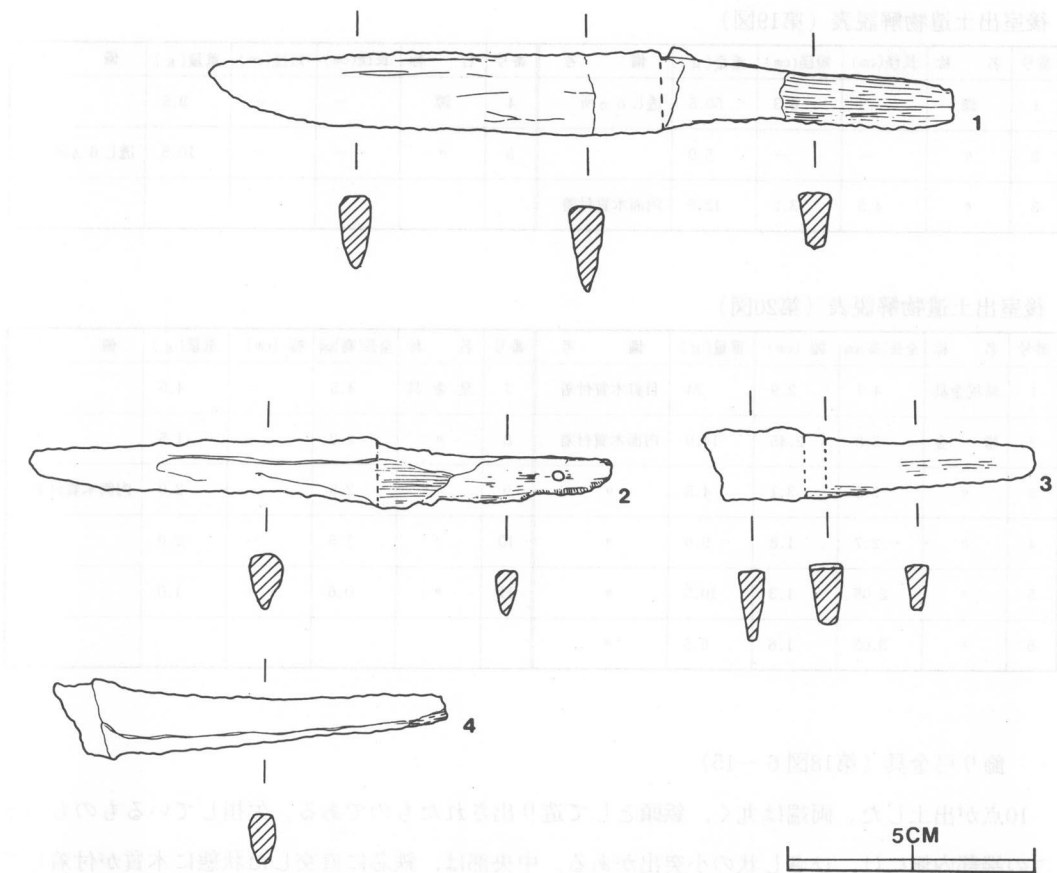
4点が出土した。1・2は完形品であるが、3・4は刀身を欠いている。茎部分には、いずれも木質が付着し、2には目釘孔が見られる。

◦ 鉄鋏（第22・23図）

第22図1～4と第23図1～6は、尖根型式であり、第22図5～8は平根型式である。前者には、片刃のもの（第23図6）が見られ、後者には、有茎のもの（第22図6・7）と無茎のもの（第22図5・8）が見られる。平根型式の場合には、すべて透かし孔がある。尖根型式の鋏は、破片を含めて20本分前後がある。

◦ 鐙子状鉄製品（第23図7）

ほぼ、完形品であると思われる。基部には、糸または紐状のものが巻かれた痕跡がある。



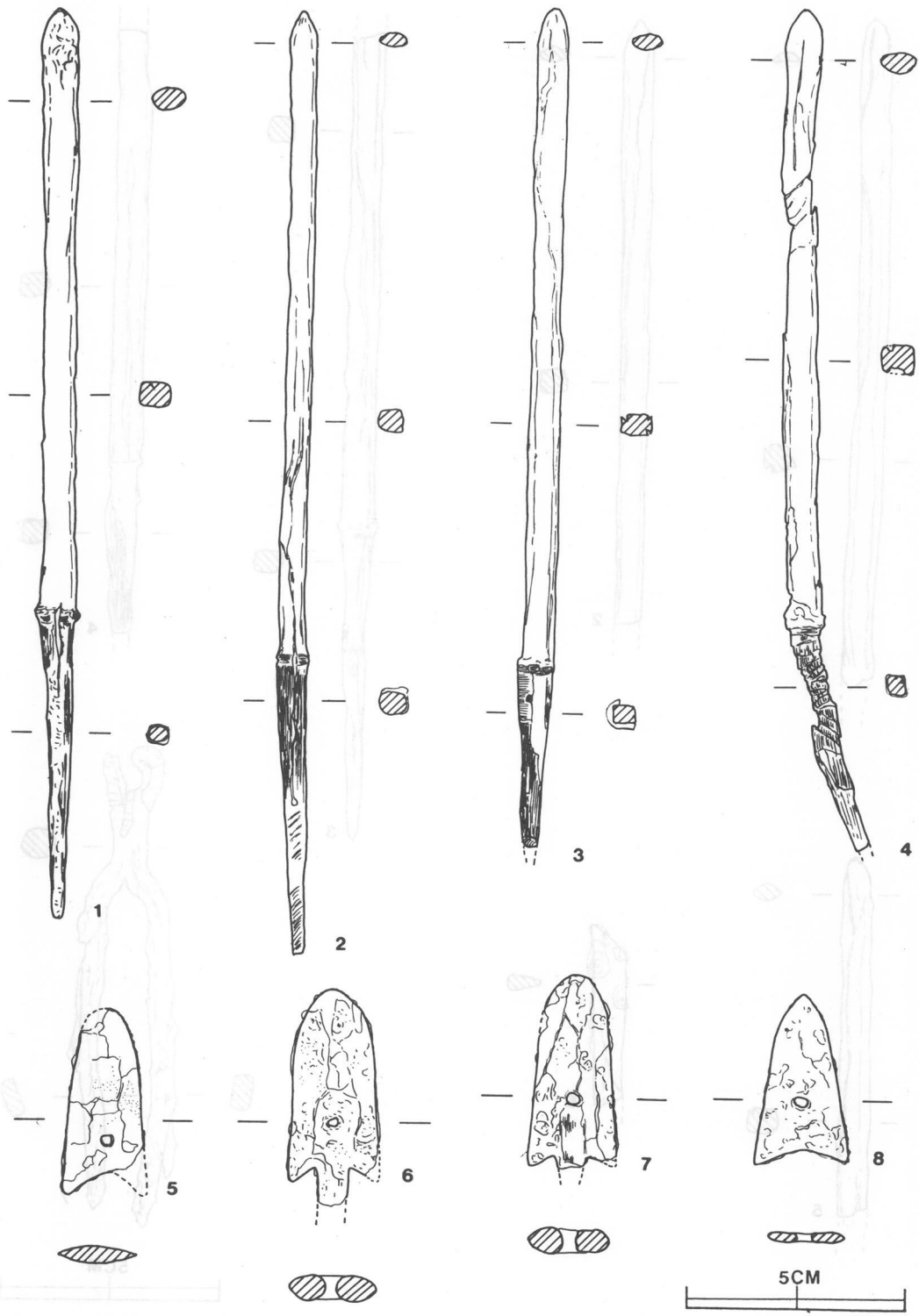
第21図 後室出土遺物(5)

後室出土遺物解説表 (第21図)

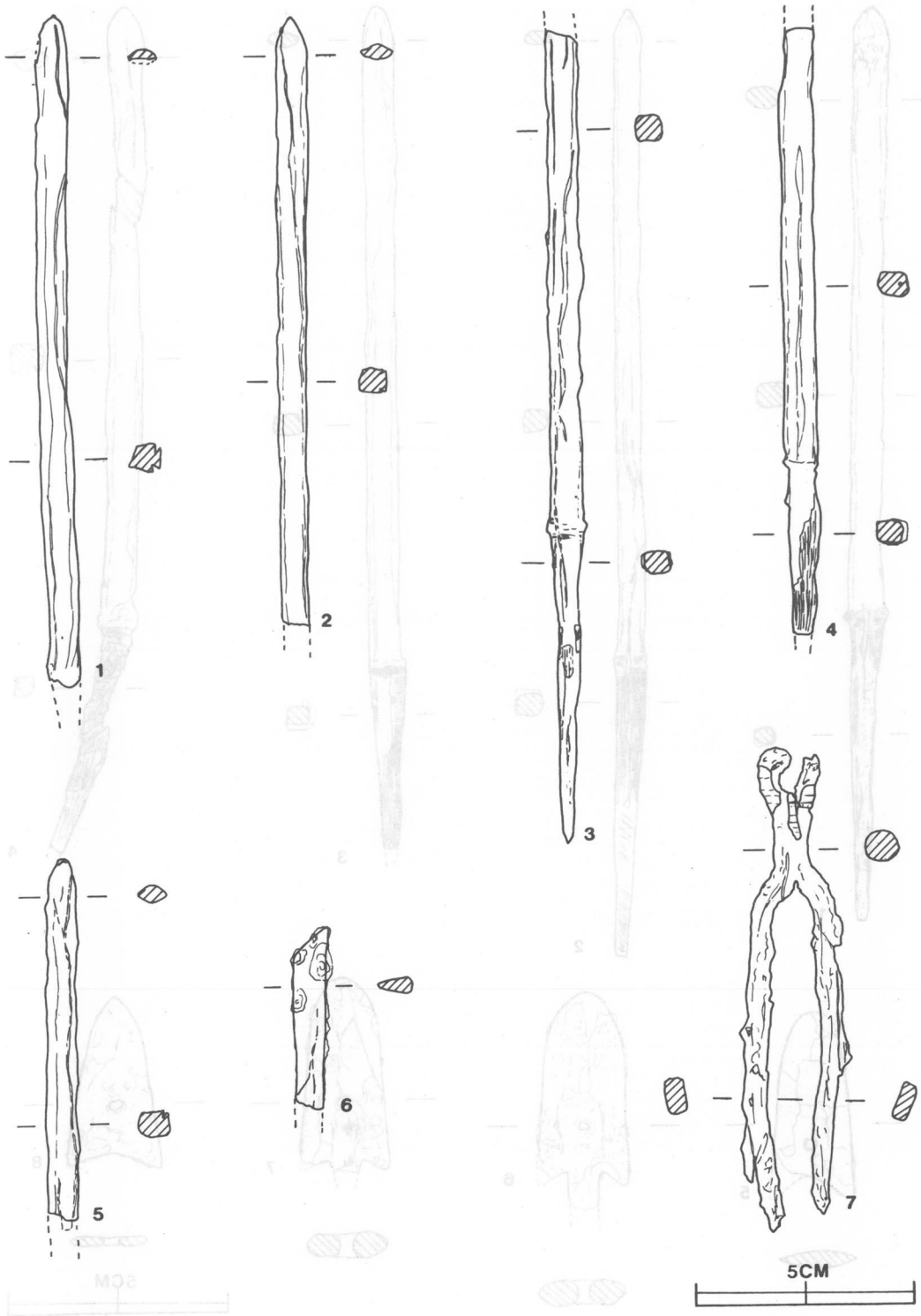
番号	名称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考	番号	名称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考
1	刀子	14.9	-	33.5	基部木質付着	3	刀子	6.6	-	9.0	基部木質付着
2	"	11.7	-	14.5	"	4	"	7.9	-	10.5	"

後室出土遺物解説表 (第22図)

番号	名称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考	番号	名称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量 (g)	備考
1	鉄 鎌	20.8	-	22.5	木質付着	5	鉄 鎌	4.35	1.95	5.0	
2	"	21.5	-	16.5	"	6	"	5.0	2.1	11.5	
3	"	19.2	-	18.5	"	7	"	4.5	2.05	10.0	
4	"	19.3	-	20.5	"	8	"	4.0	2.2	4.5	



第22図 後室出土遺物(6)



第23図 後室出土遺物(7)

(6) 前室出土遺物 図23(7)

後室出土遺物解説表（第23図）

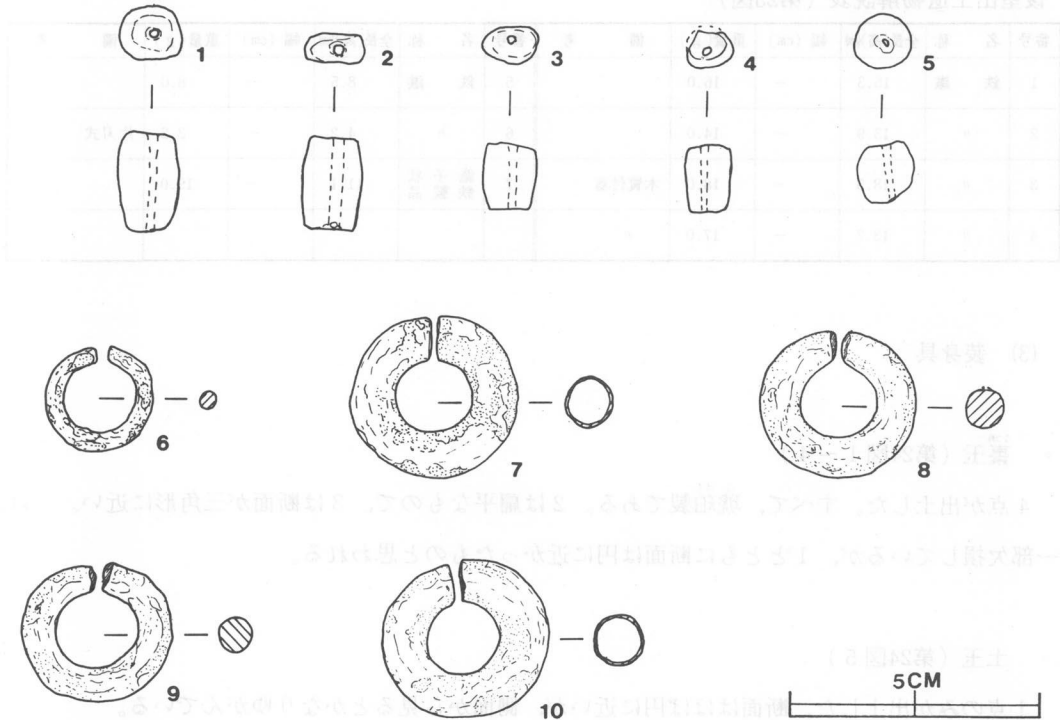
番号	名 称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量(g)	備 考	番号	名 称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量(g)	備 考
1	鉄 鍔	15.3	—	16.0		5	鉄 鍔	8.5	—	8.0	
2	"	13.9	—	14.0		6	"	4.2	—	3.2	片刃式
3	"	18.5	—	18.0	木質付着	7	鐻鉄子状品	11.1	—	19.0	
4	"	13.7	—	17.0	"						

(3) 装身具

- 囊玉（第24図1～4）
4点が出土した。すべて、琥珀製である。2は扁平なもので、3は断面が三角形に近い。4は、一部欠損しているが、1とともに断面は円に近かったものと思われる。
- 土玉（第24図5）
1点のみが出土した。断面はほぼ円に近いが、側面から見るとかなりゆがんでいる。
- 環（第24図6～10）
3種類5点が出土した。6は、小さなもので、銅芯金銅張りと思われる。7・10は中空である。8・9は鉄芯金銅張りである。7・10と8・9は、それぞれが対になっていたものであろう。

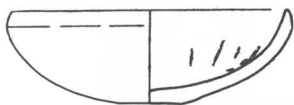
後室出土遺物解説表（第24図）

番号	名 称	全長(高)(cm)	幅 (cm)	重量(g)	備 考	番号	名 称	長 径	短 径	重量(g)	備 考
1	囊 玉	2.05	1.25	2.0		6	環	2.2	2.1	5.5	銅芯金張
2	"	1.9	1.2	1.5		7	"	3.4	3.2	8.5	金銅(中空)
3	"	1.3	1.1	1.0		8	"	3.15	2.95	24	鉄芯金銅張
4	"	1.3	0.95	1.0		9	"	3.1	2.8	21	"
5	土 玉	1.2	1.1	1.5		10	"	3.4	3.2	8.5	金銅(中空)



第24図 後室出土遺物(8)

2. 周溝内出土遺物(第25図)



周溝内から出土した遺物は、坏1点のみである。これは、東墳丘切断面の周溝底において発見されたもので、時期的には、鬼高II期に位置付けられる。本墳の時期を決定する意味で、重要な資料である。

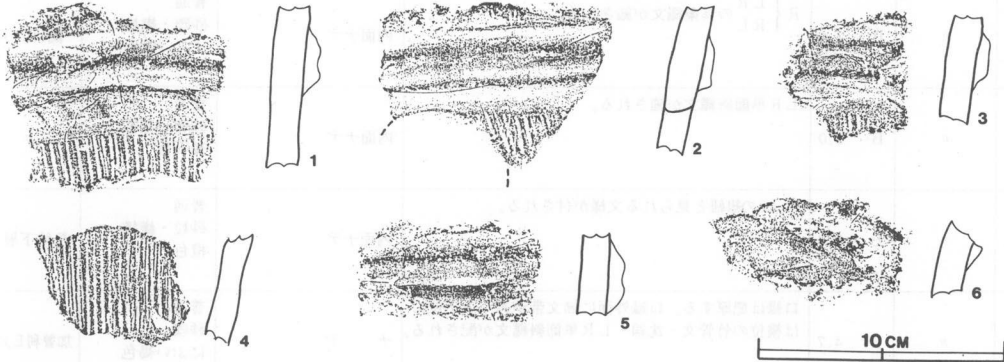
第25図 周溝出土坏

周溝内出土遺物解説表(第25図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 土師器	A 14.7 B 5.0 C 3.5	体部はゆるく内反しながら立ち上がる。口縁と体部の境界は弱い稜を成す。底部は小さい。	底部へラ削り 体部内外面ナデ	普通 砂礫・石英 赤色	鬼高II

3. 埴輪 (第26図)

墳丘の表土下から、埴輪の破片6点が検出されている。すべて、円筒埴輪の破片であると思われる。接合・復元できるものは無い。2は、透かし窓の一部がかかっている。



第26図 埴輪拓影図

4. 墳丘下出土遺物

(1) 縄文土器・弥生土器 (第27図)

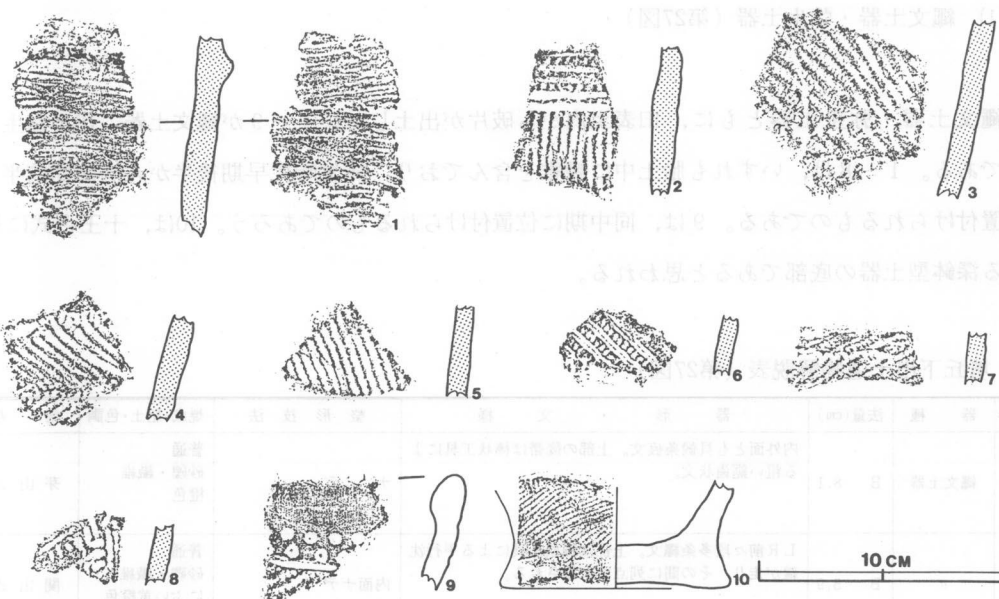
縄文土器・弥生土器ともに、旧表土内から破片が出土した。1～9が縄文土器、10が弥生土器である。1～8は、いずれも胎土中に繊維を含んでおり、縄文時代早期後半から同前期前半に位置付けられるものである。9は、同中期に位置付けられるものであろう。10は、十王台式に属する深鉢型土器の底部であると思われる。

墳丘下出土遺物解説表 (第27図)

番号	器種	法量(cm)	器形・文様	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	縄文土器	B 8.1	内外面とも貝殻条痕文。上部の隆帯は棒状工具による粗い鋸歯状文。	ナ デ	普通 砂礫・繊維 橙色	芽山式
2	〃	B 5.9	L R 前々段多条縄文。上位は棒状工具による平行沈線が走り、その間に列点文が施される。	内面ナデ	普通 砂礫・繊維 にふい黄橙色	関山式
3	〃	B 7.2	R L 前々段多条縄文が施され、下位は繩の閉端を曲げて回転させる。	内面ナデ	普通 砂礫・繊維 にふい橙色	〃
4	〃	B 4.2	単節羽状縄文(結束第1種)が施される。	内面ナデ	普通 砂礫・繊維 にふい橙色	〃

墳丘下出土遺物解説表（第27図）

番号	器種	法量(cm)	器形・文様	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	縄文土器	B 3.7	LR前々段多条縄文が施される。	内面ナデ	普通 砂礫・繊維 橙色	
6	〃	B 2.4	R $\left\{ \begin{array}{l} LR \\ RL \end{array} \right.$ の異条縄文が施される。	内面ナデ	普通 砂礫・繊維 にふい橙色	関山式
7	〃	B 2.0	LR単節斜縄文が施される。	内面ナデ	普通 砂礫・繊維 褐灰色	〃
8	〃	B 2.3	RI・LRの組紐と見られる文様が付される。	内面ナデ	普通 砂粒・繊維 橙色	花積下層式
9	〃	B 4.7	口縁は肥厚する。口縁外面に無文帯があり、下位には横位の竹管文・沈線・LR単節斜縄文が配される。	ナデ	普通 砂礫 にふい褐色	加曾利E式末
10	弥生土器	B 4.3 C 9.4	胴部下端には、LR単節斜縄文。底部は「く」の字状に突き出す。	底部ナデ 内面ヘラナデ	普通 砂粒 にふい橙色	



第27図 墳丘下出土遺物(1)

(2) 土師器・石製模造品 (第28・29図)

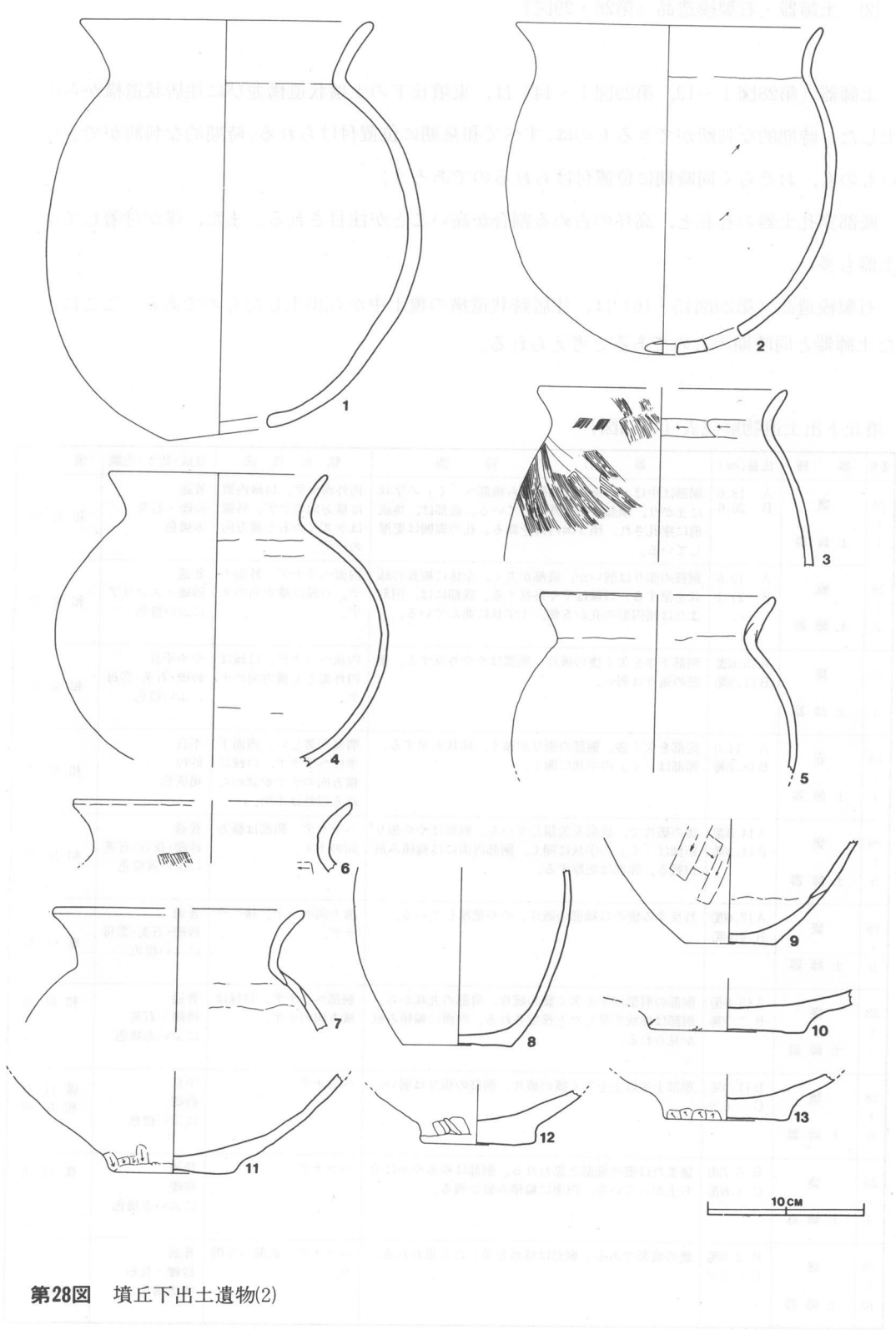
土師器 (第28図1~13, 第29図1~14) は, 東墳丘下の土壙状遺構並びに住居状遺構から出土した。時期的な判断ができるものは, すべて和泉期に位置付けられる。時期的な判断ができないものも, おそらく同時期に位置付けられるのであろう。

底部穿孔土器の存在と, 高坏の占める割合が高いことが注目される。また, 煤が付着している土器も多い。

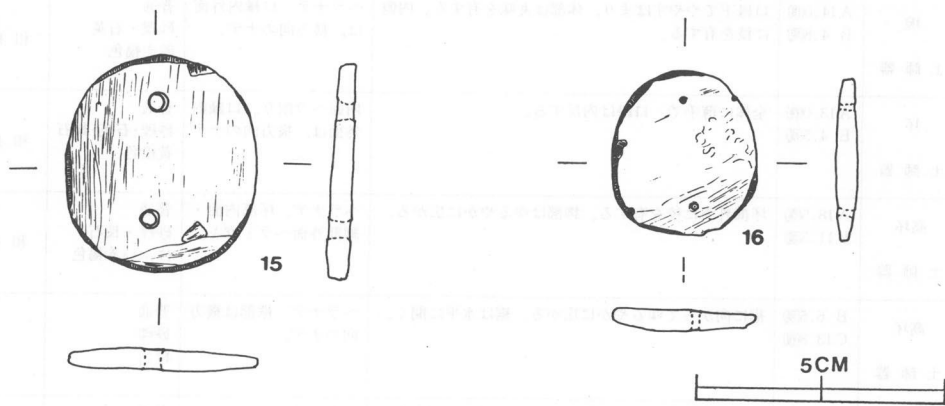
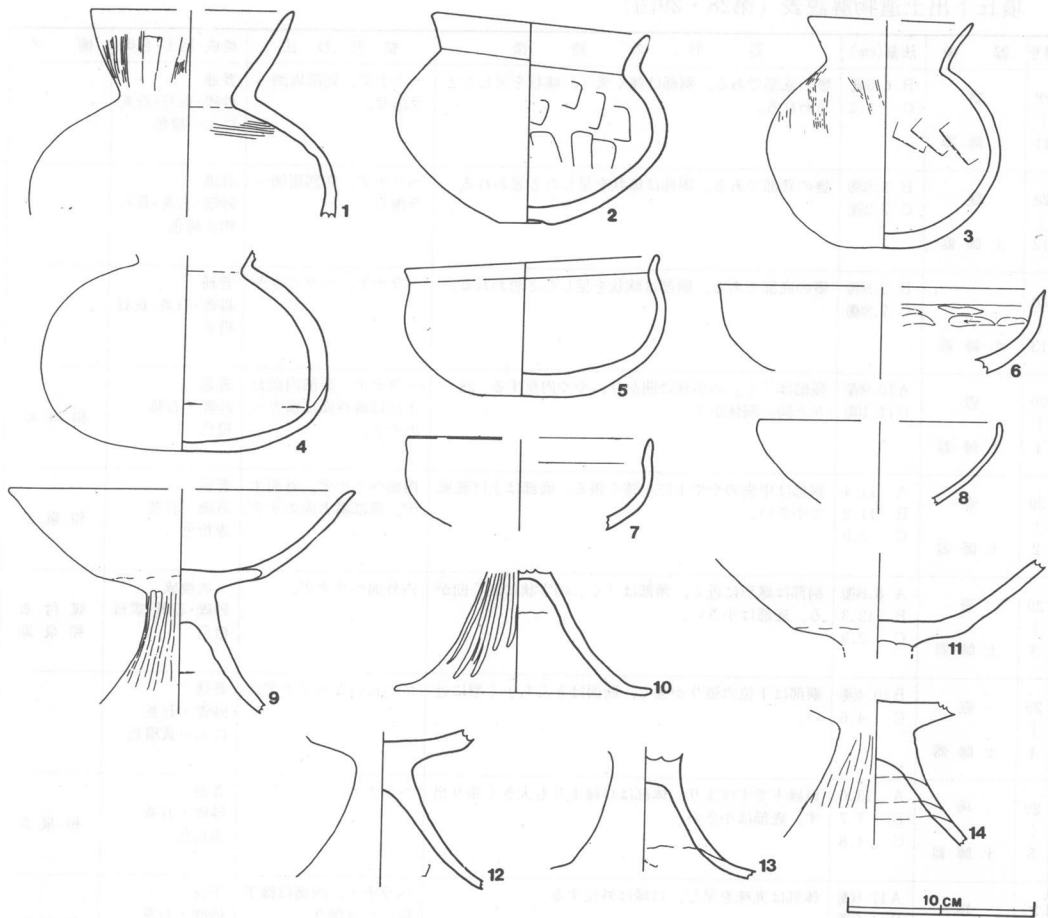
石製模造品 (第29図15・16) は, 住居跡状遺構の覆土中から出土したものである。ここに示した土師器と同時期のものと考えられる。

墳丘下出土遺物解説表 (第28図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
28 ┆ 1	甕 土師器	A 18.6 B 26.6	胴部は中ほどが張る。胴部から頸部へ「く」の字状にまがり, 頸部はやや外反している。底部は, 焼成前に穿孔され, 径5cm内外を測る。孔の周囲は肥厚している。	内外面ナデ。口縁内側は横方向のナデ。外側はケズリのあと横方向のナデ。	普通 砂礫・石英 赤褐色	和泉期
28 ┆ 2	甗 土師器	A 19.6 B 21.1	胴部の張りは弱い, 底部が丸く, 全体に縦長の球状を呈する。口縁はやや外反する。底部には, 円形または楕円形の孔が5個, 十字状に並んでいる。	内面ヘラナデ。外面ナデ。口縁は横方向のナデ。	普通 砂礫・スコリア にぶい橙色	和泉期
28 ┆ 3	甕 土師器	A 15.6(復) B 11.3(復)	胴部下半を欠く甕の破片。頸部はやや外反する。胴部の張りは弱い。	内面ヘラナデ。口縁は内外面とも横方向のナデ。	やや不良 砂礫・石英・雲母 にぶい橙色	和泉期
28 ┆ 4	壺 土師器	A 14.0 B 18.7(復)	底部を欠く壺。胴部の張りが強く, 球状を呈する。頸部は「く」の字状に開く。	磨減が著しい。内面下半にヘラナデ, 口縁に横方向のナデが認められる以外は不明。	不良 砂粒 褐灰色	和泉期
28 ┆ 5	甕 土師器	A 14.8(復) B 11.3(復)	甕の破片で, 底部を欠損している。胴部はやや張り頸部は「く」の字状に開く。胴部内面には輪積み痕が残る。頸部は肥厚する。	ヘラナデ。頸部は横方向のナデ。	普通 砂礫・長石・石英 にぶい黄褐色	和泉期
28 ┆ 6	甕 土師器	A 17.6(復) B 4.4(復)	外反する甕の口縁部の破片。やや肥厚している。	横方向のナデ。後ヘラナデ。	普通 砂礫・石英・雲母 にぶい橙色	煤付着
28 ┆ 7	甕 土師器	A 15.8(復) B 7.7(復)	胴部の肩部以下を欠く甕の破片。肩部の丸味から, 胴部は球状を呈したと推定される。内面に輪積み痕が見られる。	胴部ヘラナデ。口縁は横方向のナデ。	普通 砂礫・石英 にぶい赤褐色	和泉期
28 ┆ 8	甕 土師器	B 11.3(復) C 6.9	胴部上半以上を欠く甕の破片。胴部の張りは弱い。	ヘラナデ	不良 砂礫 にぶい橙色	煤付着 和泉期
28 ┆ 9	甕 土師器	B 6.7(復) C 5.8(復)	甕または壺の底部と思われる。胴部はゆるやかに立ち上がっている。内面に輪積み痕が残る。	ヘラナデ	普通 砂礫 にぶい赤褐色	煤付着
28 ┆ 10	甕 土師器	B 2.8(復) C 9.7	甕の底部である。胴部は球状を呈したと思われる。	ヘラナデ。底部ヘラ削り。	普通 砂礫・長石 明赤褐色	



第28図 墳丘下出土遺物(2)



第29図 墳丘下出土遺物(3)

墳丘下出土遺物解説表（第28・29図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
28 11	甕 土師器	B 6.5(匁) C 8.2	甕の底部である。胴部は強く張り、球状を呈したと思われる。	ヘラナデ。底部周囲ヘラ削り。	普通 砂礫・長石・石英 にふい橙色	
28 12	甕 土師器	B 3.6(匁) C 7.2(匁)	甕の底部である。胴部は球状を呈したと思われる。	ヘラナデ。底部周囲ヘラ削り。	普通 砂礫・石英・長石 明赤褐色	
28 13	土師器	B 2.9(匁) C 7.8(匁)	甕の底部である。胴部は球状を呈したと思われる。	ヘラナデ。ヘラミガキ	普通 砂礫・石英・長石 橙色	
29 1	壺 土師器	A 10.9(匁) B 11.1(匁)	頸部は「く」の字状に曲がり、やや内反する。28-9と同一個体か？	ヘラナデ。頸部内面および口縁外面は横方へのナデ。	普通 砂礫・石英 橙色	和泉期
29 2	壺 土師器	A 11.4 B 11.2 C 3.0	胴部は中央のやや上位が強く張る。底部は上げ底風で小さい。	内面ヘラナデ。外面ナデ。頸部横方向のナデ	普通 砂礫・石英 赤褐色	和泉期
29 3	壺 土師器	A 8.8(匁) B 12.3 C 2.9	胴部は球形に近く、頸部は「く」の字状に鋭く曲がる。底部は小さい。	内外面ヘラナデ。	二次焼成 砂礫・石英・雲母 橙色	煤付着 和泉期
29 4	壺 土師器	B 10.4(匁) C 4.6	胴部は下位の張りが強く、断面はきんちゃく型に近い。	ていねいなヘラナデ。	普通 砂礫・石英 にふい黄橙色	
29 5	埴 土師器	A 13.6 B 7.7 C 4.8	口縁下ですばまり、体部は口縁よりも大きく張り出す。底部は小さい。	ヘラナデ。	普通 砂礫・石英 赤褐色	和泉期
29 6	坏 土師器	A 17.6(匁) B 4.6(匁)	体部は丸味を呈し、口縁は外反する。	ヘラナデ。内面口縁下位にヘラ削り。	不良 砂礫・石英 橙色	和泉期
29 7	埴 土師器	A 14.0(匁) B 4.8(匁)	口縁下でややすばまり、体部は丸味を有する。内側に稜を有する。	ヘラナデ。口縁内外面は、横方向のナデ。	普通 砂礫・石英 明赤褐色	和泉期
29 8	坏 土師器	A 13.0(匁) B 4.5(匁)	全体に薄手で、口縁は内反する。	内面ヘラ削り。口縁内外面は、横方向のナデ	普通 砂礫・石英・長石 黄橙色	和泉期
29 9	高坏 土師器	A 18.5(匁) B 11.5(匁)	坏部外面に稜を有する。脚部はゆるやかに広がる。	ヘラナデ。坏部内面・脚部外面ヘラミガキ。	普通 砂礫・長石 にふい赤褐色	和泉期
29 10	高坏 土師器	B 6.5(匁) C 13.8(匁)	裾に向かってゆるやかに広がる。裾は水平に開く。	ヘラナデ。裾部は横方向のナデ。	普通 砂礫 橙色	
29 11	高坏 土師器	B 4.6 (匁)	高坏の坏部で、口縁と脚部を欠く。外面に稜が見られる。	ヘラナデ。	普通 砂礫・石英 橙色	和泉期
29 12	高坏 土師器	B 8.5(匁)	脚部は裾に向かって大きく開く。	ヘラナデ。	普通 砂礫 明赤褐色	

墳丘下出土遺物解説表（第29図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
29 13	高坏 土師器	B 6.5	脚部はゆるやかに開き、裾にいたって水平になる。	ヘラナデ。	普通 砂礫・石英 にぶい橙色	
29 14	高坏 土師器	B 7.7	脚部は直線的に広がる。	ヘラナデ	普通 砂礫・石英・長 石・雲母 明赤褐色	

墳丘下出土遺物解説表（第29図）

番号	名称	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	材質	番号	名称	長径(cm)	短径(cm)	重量(g)	材質
29-15	双孔円板	4.4	3.85	12.5	滑石	29-16	双孔円板	3.3	2.9	7.0	滑石

第4節 ま と め

二本松古墳は、平面形状にゆがみが認められるものの、円墳として差しつかえない。推定であるが、長径はほぼ南東側切断面に位置しており、29m内外を測るものと思われる。同様に、短径は24m内外を測るものと推定される。

葺石は、多量の川原石を並べただけであり、特に南西側に多かったらしい。7号トレンチで不十分ながら確認できた以外は、明瞭な状態で検出することはできなかった。それは、工事による墳丘の破壊が広範囲に及んだためである。また、7号トレンチによって調査した場所が民有地であったことから、この部分の調査に制約を受け、不徹底なものにしてしまった。いずれにせよ、本墳の葺石はその存在を確認したことのみにとどまったわけであり、本県における墳丘に施された葺石の調査がほとんど例を見ないことを思えば、極めて遺憾なことと言わざるを得ない。

主体部は、横穴式石室である。玄室は前室・後室の2室から成り、玄門および前室と後室の境は、それぞれ床に境石が施され、両側壁には門柱状の立石が設けられる。右側壁は、羨道部でやや開くものの、奥壁との接合部から玄門までほぼ直線的に延びている。左側壁は奥壁寄りの立石を除き、工事により失われているため、不明である。つまり、本墳の主体部を成す横穴式石室は、袖無式または片袖式であったということになる。

後室奥壁と左右側壁の最奥は、大きな1枚石を立てて使用している。後室右側壁手前側と前室右側壁は、最下段には1枚石を立て、上段では石を横積みしている。天井石が見られないのは、先述したように木材を使用したためによるものと推定される。

主体部内から出土した遺物は、後室から出土した少数の装身具を除けば、馬具・武器のみである。さらに、出土位置についても明瞭に分かれており、馬具は前室から、武器は後室からそれぞれ

出土し、例外は認められない。この事実は、副葬品を埋納する場所に意識的な使い分けが存在したことを意味している。一方、馬具・武器を中心とする副葬品のセットは、本墳が後期に編年されるものであることを示している。半球形飾金具は、千葉県市川市法皇塚古墳等に例が見られるもので、^{おもがひ}面繫の飾金具であろう。法皇塚古墳の遺物は、6世紀中葉以降と報告されており、本墳にあっても同様の判断を下すことが可能である。

本墳の周溝底から出土した坏と墳丘下の遺構から出土した土師器によって、本墳が構築された時期の上限と下限を考えたい。上限は、墳丘下の遺構から出土した土師器から、和泉期の末頃と考えられる。一方、下限は周溝底から出土した坏から、鬼高Ⅱ期に求められる。この場合、墳丘の下にあった住居跡状遺構が完全に埋ってから本墳が構築されたと考えられること、および下限を求めた坏が周溝の底から出土していることの二つの理由により、本墳が構築されたのは上限(和泉期)よりも下限(鬼高Ⅱ期)に近いと考えた方が自然であろう。つまり、本墳が構築された時期は、6世紀半ばからやや下った時期と考えられるわけである。

6世紀中葉前後に位置付けられる日立市西中野1号墳が、本県北部地域に対する横穴式石室の流入直前または初期のものとされており、その観点から考えれば、本墳は横穴式石室流入直後のものとすることができよう。

墳丘下から検出された土壙状遺構および住居跡状遺構は、実用的なものとは考え難い。この遺構が所在する段丘は、背後には古墳時代に大規模な集落が営まれた台地をひかえ、眼前には久慈川・里川の合流点にあたる東西6km・南北4kmにおよぶ低湿地が広がり、さらに遠方には阿武隈・久慈両山地を望見することができる。また、出土遺物には石製模造品・底部穿孔土器や多数の高坏を含み、煤が付着したり二次焼成を受けたもの等が見られる。以上のような地形的要素や遺物の種類と様子から判断して、これらの遺構を祭祀関係のものと考えたい。

石神外宿 A 遺跡

第4章 石神外宿A遺跡

第1節 調査経過

石神外宿A遺跡の発掘調査は昭和57年1月8日から6月7日まで実施し、調査対象面積は3,750㎡である。

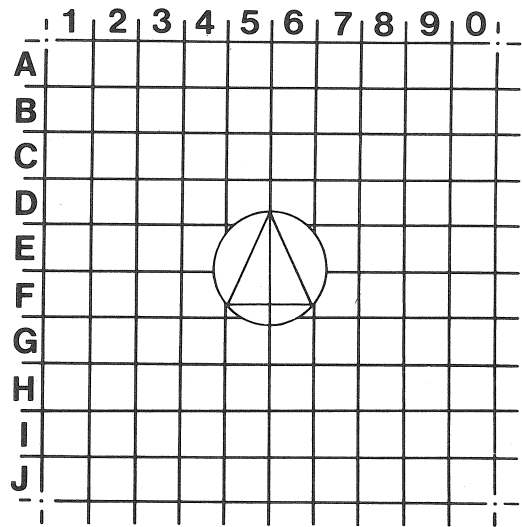
調査区決定基準杭を平面直角座標、第IX区系X軸(南北)64.7km・Y軸53.7kmの交点を起点(B4 a₁)として定め、南北線上にX軸、東西にY軸の40m四方の大調査区を設定し、さらにその大調査区を4m四方の小調査区に分割した。すなわち40m四方の大調査区に100個の小調査区が設定されるわけである。調査対象遺跡内の調査区設定は、全てこのように定めた。また、調査区名称は、大調査区において北から南へアルファベット大文字で「A」・「B」・「C」……、西から東へ数字で「1」・「2」・「3」……と記号を付し、小調査区においても北から南へアルファベット小文字で「a」・「b」・「c」……「i」・「j」、西から東へ「1」・「2」・「3」……「9」・「0」と記号を付し、小調査区の固有名称を「A1 a₁」・「B1 a₁」・「C1 a₁」のように表した。

以下、調査経過を記していきたい。

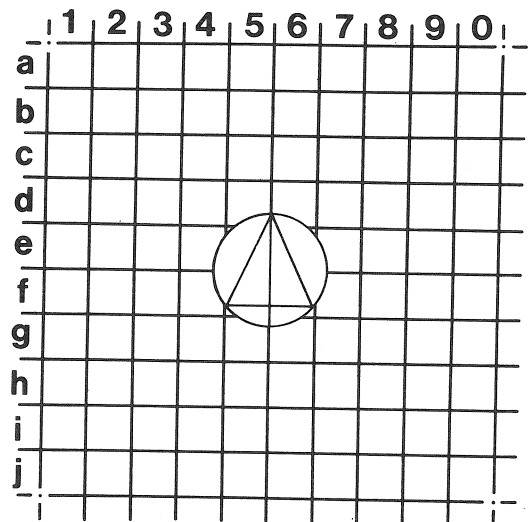
昭和57年1月8日～1月29日

1月8日に石神外宿A遺跡の調査に必要な事務所及び倉庫の建設並びに、発掘

器材等の整備を完了する。11日から作業員による遺跡内の清掃を開始したが、本遺跡の現況は70%が山林、30%が畑であり、特に山林部分は松の大木が倒れたままの状態であったため、作業が



第1図 大調査区名称図



第2図 小調査区名称図

非常に困難をきわめた。大木等は、エリア外に撤去すると同時に焼却を実施しながら片付けを行った。なお、清掃後、本遺跡を調査するに当たり、トレンチ法による遺物包含層および遺構確認面までの深さの測定、遺構の密度の状態などを調査した上で、表土除去の方法を判断することにした。調査を実施した結果、遺物包含層および遺構確認面までの深さは40～50cmの深さで、しかも遺物の包含も少ないことから、重機による表土除去作業を実施することになった。

1月26日から重機による表土除去作業を開始し、29日をもって全調査区の表土排除作業を終了する。2月から二本松古墳の調査を実施するため、本遺跡の調査を一時中断する。

3月5日～3月19日

5日から本遺跡の調査を二本松古墳と同時並行して再開する。作業は重機によって表土排除をした後、遺構確認調査を実施し、奈良時代後半から平安時代初期の住居跡および土壇4基、溝2条を確認した。住居跡の大多数は遺跡の西B1・B2・C1区に集中し、1軒のみが単独で遺跡の東B4区から検出された。また、遺物は土師器、須恵器などが出土し、昭和56年度の本遺跡の調査は、遺構確認まで終了した。

昭和57年4月12日～4月30日

12日から昭和57年度の調査を開始する。遺構の精査は、遺構の分布が多い遺跡の西B1・B2・C1区に確認されている第1～8号住居跡・第1～4号土壇から実施し、その結果、第3～7号住居跡の規模が3～4mのやや小型の住居跡であることと、第1・2・8号住居跡は1辺が約7mを測る大型の住居跡であることが判明した。また、遺物の出土状況を見ると、第2号住居跡を除いては非常に少なかった。なお、第6号住居跡の北東部から銅製の帯金具2個、第8号住居跡からは帯金具（裏金具）1個がそれぞれ出土した。上記の精査終了後、実測図作成および写真撮影を行う。

5月4日～6月7日

遺跡の西B1・B2・C1区に残された第9～16号住居跡までの精査を行う。同時に、第13～16号住居跡が確認されているB1区の北側、B4区の南側のグリット拡張を実施する。第9・11～15号住居跡は1辺が3～4mの小型であるが、第10号住居跡は第2号住居跡と重複する大型の住居跡である。一方、東側から単独で検出された第16号住居跡は、前記した住居跡より古い鬼高期の住居跡であることが判明した。

5月14日から各住居跡に付設されている竈および第1・2号溝の調査を開始する。竈は、各住居跡とも北または北北西壁中央部に付設され、第16号住居跡の竈焼成部から壺形土器の完形品が出土したが、その他の竈からの遺物の出土は少ない。実測図作成および写真撮影は、遺構精査後に実施した。

6月7日をもって、本遺跡の発掘調査を終了した。

第2節 遺構と遺物

本遺跡は舌状台地に張り出した標高24mの平坦地に立地し、検出された遺構は竪穴住居跡16軒、土壇4基、溝2条である。竪穴住居跡は遺跡の西側に15軒が集中し、他の1軒は遺跡の東側から検出され、構築された時期は古墳時代後半（鬼高）から平安時代初期（国分）のものである。

なお、石神外宿A・B両遺跡における遺構内覆土土層は次のような基準のもとに行った。

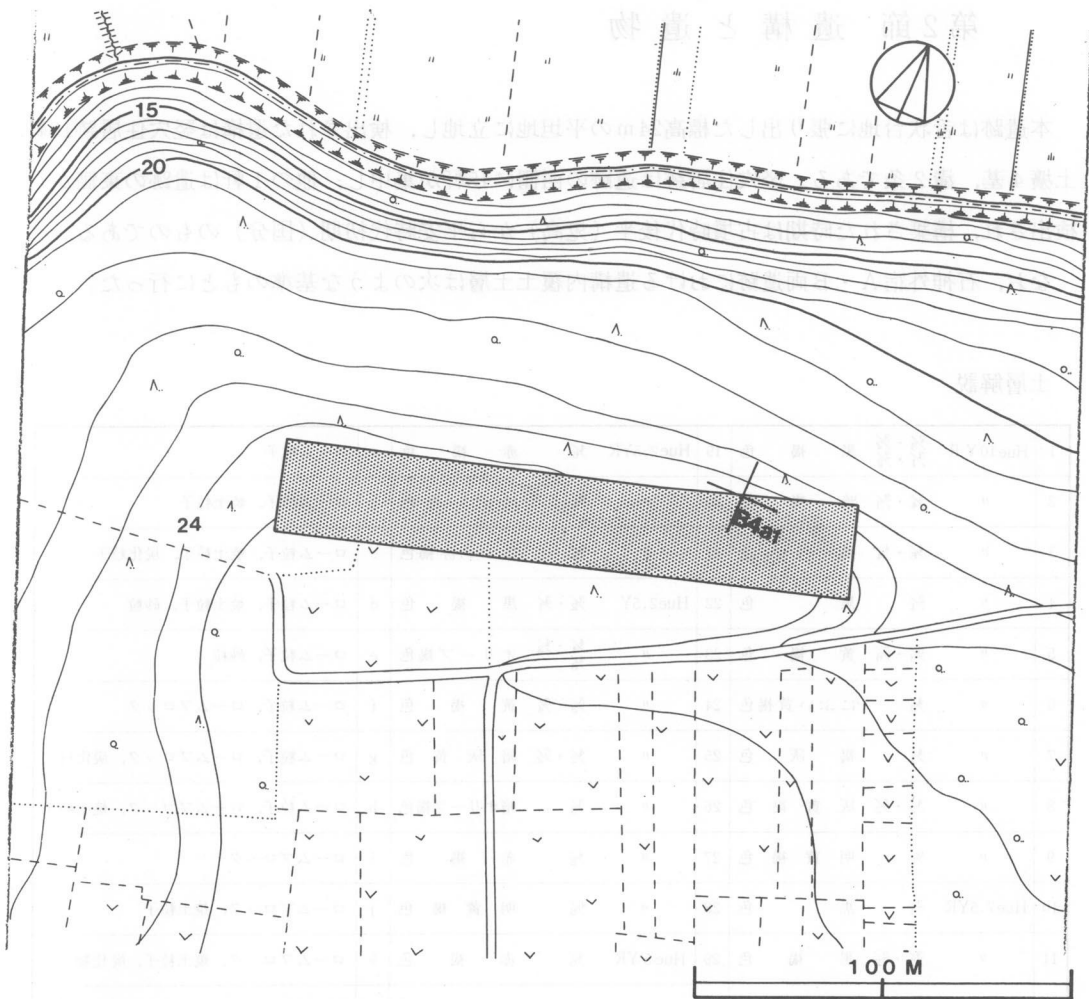
土層解説

1	Hue10YR	$\frac{2}{3}$ ・ $\frac{3}{1}$ ・ $\frac{3}{2}$	黒褐色	19	Hue2.5YR	$\frac{5}{6}$	赤褐色	a	ローム粒子
2	"	$\frac{3}{4}$ ・ $\frac{3}{2}$	暗褐色	20	"	$\frac{5}{4}$	にぶい橙色	b	ローム粒子、焼土粒子
3	"	$\frac{5}{6}$ ・ $\frac{3}{4}$	褐色	21	"	$\frac{5}{6}$	にぶい赤褐色	c	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子
4	"	$\frac{2}{1}$	黒色	22	Hue2.5Y	$\frac{3}{2}$ ・ $\frac{3}{1}$	黒褐色	d	ローム粒子、焼土粒子、砂粒
5	"	$\frac{5}{6}$ ・ $\frac{5}{6}$	黄褐色	23	"	$\frac{4}{4}$ ・ $\frac{3}{6}$	オリーブ褐色	e	ローム粒子、砂粒
6	"	$\frac{5}{6}$	にぶい黄褐色	24	"	$\frac{5}{6}$ ・ $\frac{5}{4}$	黄褐色	f	ローム粒子、ロームブロック
7	"	$\frac{3}{1}$	褐灰色	25	"	$\frac{3}{2}$ ・ $\frac{5}{2}$	暗灰黄色	g	ローム粒子、ロームブロック、炭化材
8	"	$\frac{3}{2}$ ・ $\frac{5}{2}$	灰黄褐色	26	"	$\frac{3}{6}$	暗オリーブ褐色	h	ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子
9	"	$\frac{5}{6}$	明黄褐色	27	"	$\frac{5}{6}$	赤褐色	i	ロームブロック
10	Hue7.5YR	$\frac{3}{1}$	黒色	28	"	$\frac{5}{6}$	明黄褐色	j	ロームブロック、焼土粒子
11	"	$\frac{3}{2}$ ・ $\frac{3}{2}$	黒褐色	29	Hue5YR	$\frac{5}{6}$	赤褐色	k	ロームブロック、焼土粒子、炭化物
12	"	$\frac{3}{6}$ ・ $\frac{3}{4}$	暗褐色	30	"	$\frac{3}{4}$ ・ $\frac{3}{6}$	暗赤褐色	l	焼土粒子
13	"	$\frac{5}{6}$	極暗褐色	31	"	$\frac{5}{4}$	オリーブ色	m	焼土粒子、炭化物
14	"	$\frac{5}{6}$	褐色	32	"	$\frac{5}{2}$	灰褐色	n	焼土粒子、砂粒
15	"	$\frac{3}{1}$	灰色	33	Hue5Y	$\frac{3}{1}$	灰色	o	焼土ブロック
16	Hue2.5YR	$\frac{3}{2}$ ・ $\frac{5}{2}$	灰赤色	34	"	$\frac{5}{4}$	オリーブ黄色	p	炭化粒子
17	"	$\frac{3}{2}$ ・ $\frac{3}{6}$	暗赤褐色	35	"	$\frac{5}{6}$	灰オリーブ色	q	砂粒
18	"	$\frac{3}{1}$	赤灰色						

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡（第4図）

本跡はB1j₀・B2j₁を中心に確認され、第6号住居跡の東4m、第11号住居跡の南東2mに位

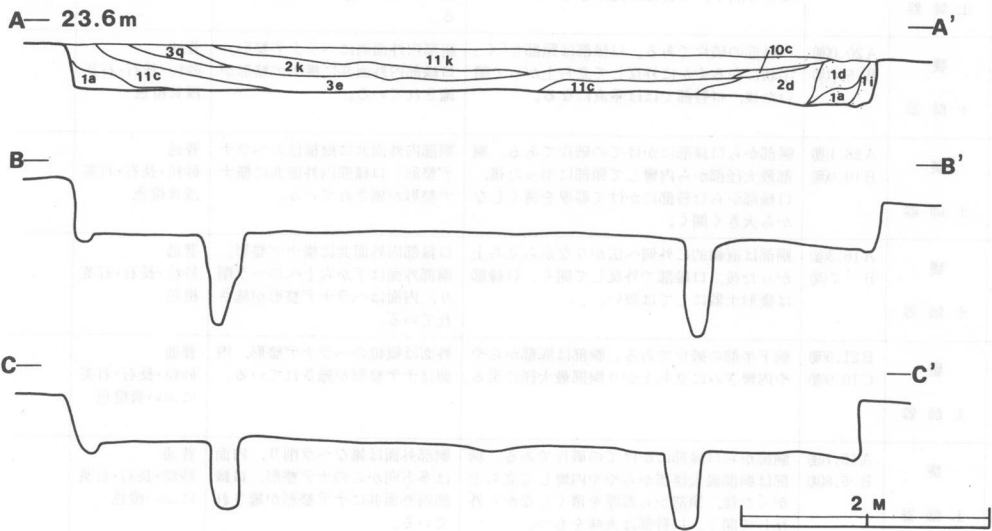
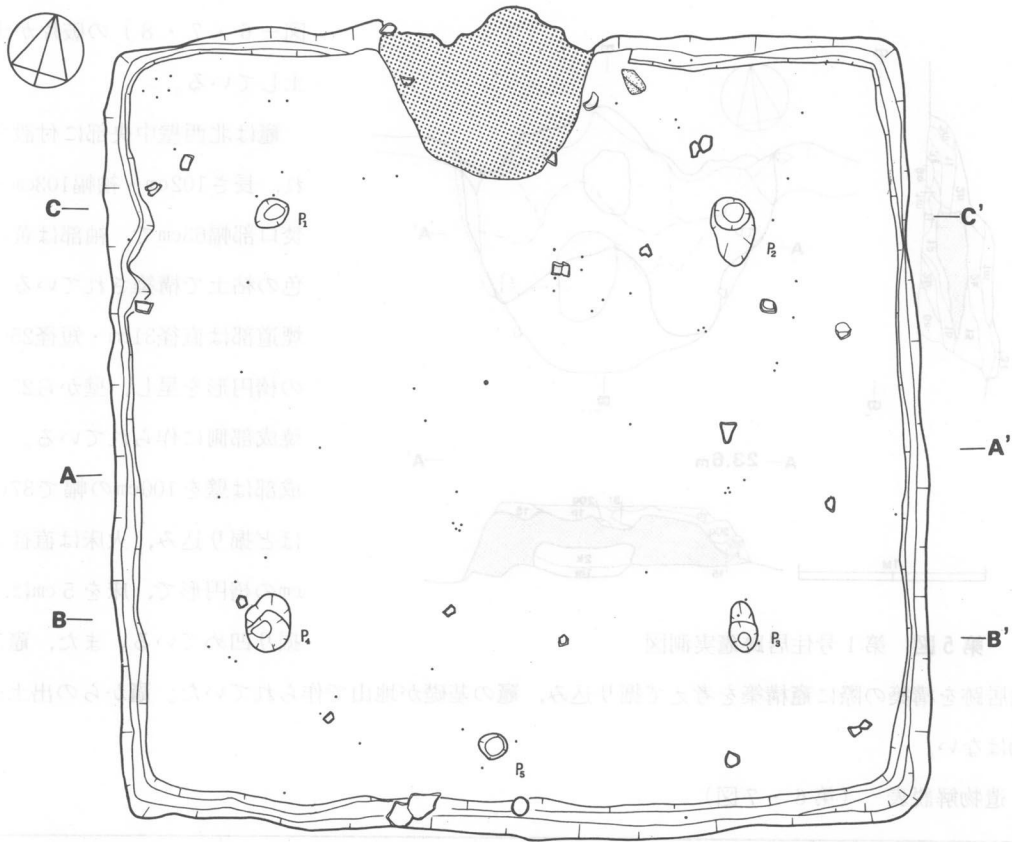


第3図 石神外宿A遺跡地形図

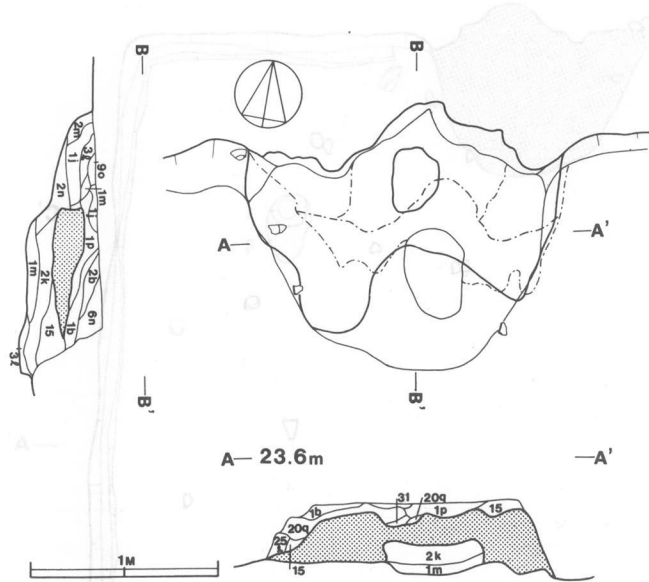
置している。規模は長軸6.42m・短軸6.35mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-16.5°-Wである。確認面から床面までの深さは東側で40cm、その他は55cmの深さを有し、垂直に立ち上がっている。壁下には幅15cm、深さ7~10cmほどの溝が全体に周回している。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは5個検出され、P1~P4の深さは60~87cmの深い穴で支柱穴と思われる。また、P5はP3とP4の中間点のやや壁側から検出され、深さ37cmのピットで、入口の施設に使用された柱穴と考えられる。

覆土は上層が黒褐色、中層が暗褐色、下層が褐色を呈し、全体にロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含んでおり、レンズ状の自然堆積を示している。

遺物は覆土中から土師器、須恵器の破片が竈東側からやや多く出土し、南壁下から土師器の甕形土器（第6図-5）、須恵器の坏形土器（第7図-2）が出土している。また、覆土中から鉄製



第4図 第1号住居跡実測図



第5図 第1号住居跡竈実測図

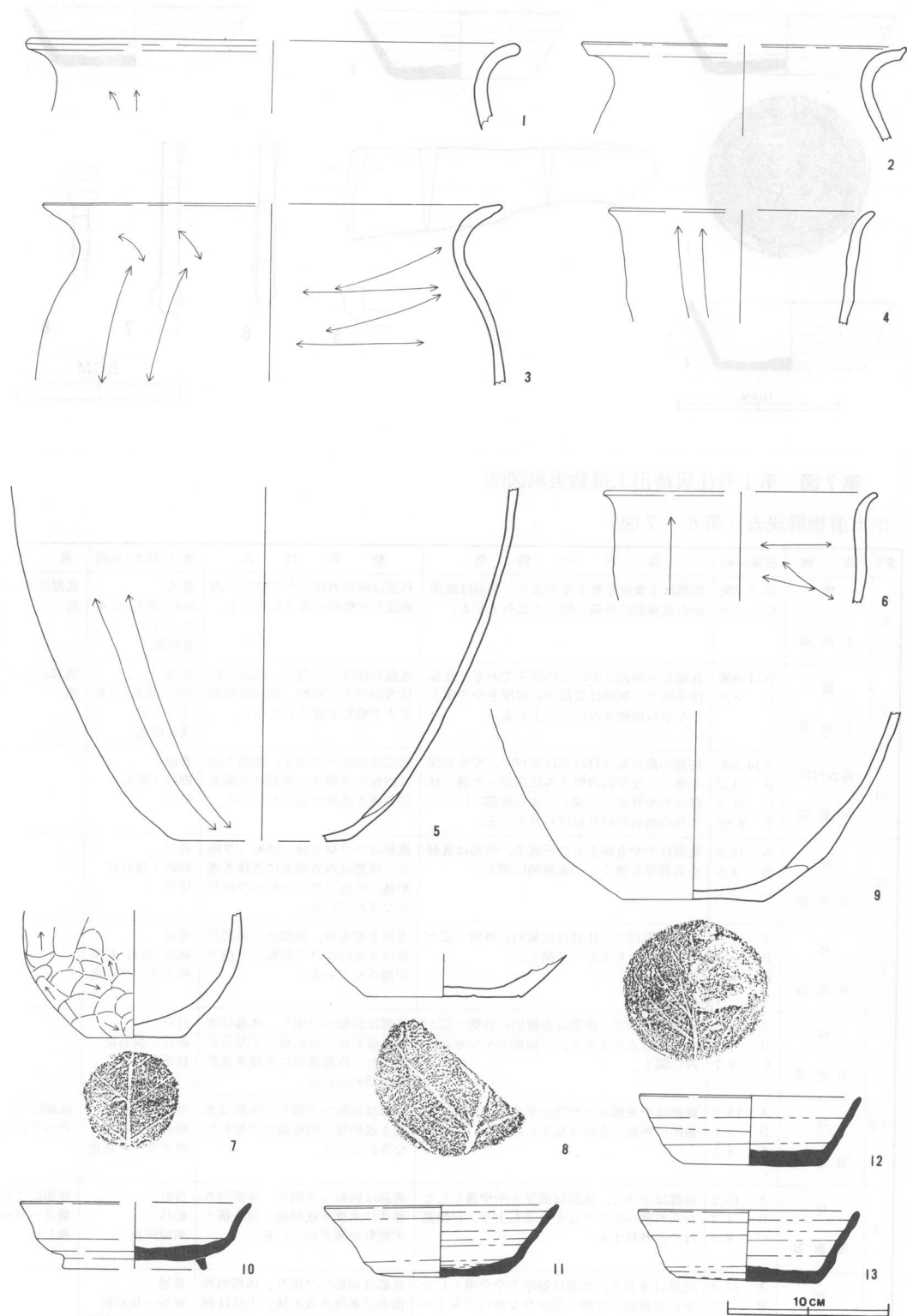
住居跡を構築の際に竈構築を考えて掘り込み、竈の基礎が地山で作られていた。竈からの出土遺物はない。

遺物解説表 (第6・7図)

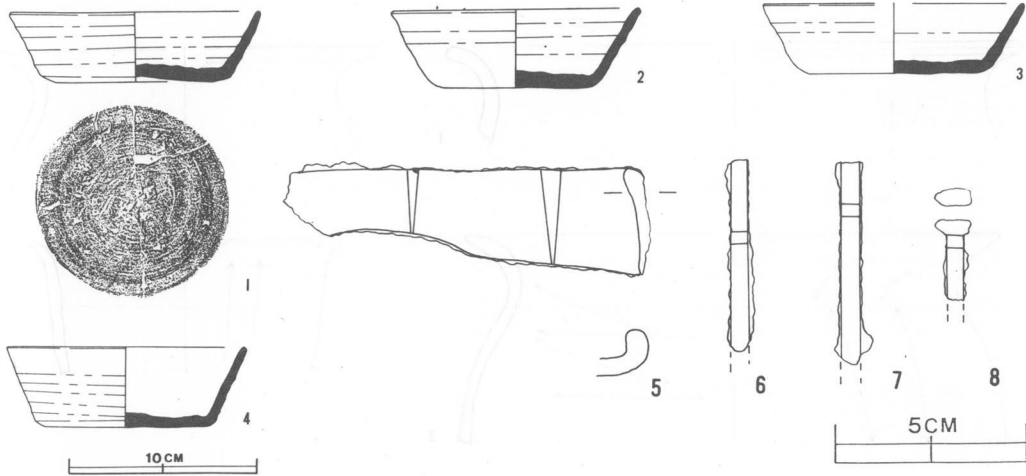
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 29.9(復) B 4.5(現)	口縁部の破片である。口縁部は胴部上部で内傾して立ち上がった後、頸部で大きく外反して開く。口唇部は丸味をもつ。	胴部外面は縦位のへら削り、内面はへらナデ整形。口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	
2	甕 土師器	A 20.0(復) B 5.7(現)	口縁部の破片である。口縁部は頸部で「く」字状にゆるやかに外反して立ち上がって開いた後、口唇部ではほぼ垂直になる。	胴部内外面共にへらナデ整形。口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	
3	甕 土師器	A 28.1(復) B 10.0(現)	胴部から口縁部にかけての破片である。胴部最大径部から内彎して頸部に至った後、口縁部から口唇部にかけて器厚を薄くしながら大きく開く。	胴部内外面共に縦横位のへらナデ整形。口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	
4	甕 土師器	A 16.3(復) B 7(現)	胴部は直線的に外側へ広がりながら立ち上がった後、口縁部で外反して開く。口縁部は甕形土器にしては短い。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面は下から上へのへら削り、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
5	甕 土師器	B 21.9(現) C 10.9(復)	胴下半部の破片である。胴部は底部からやや内彎ぎみに立ち上がり胴部最大径に至る。	外面は縦位のへらナデ整形、内面はナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色	
6	甕 土師器	A 16.7(復) B 6.8(現)	胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は胴部最大径部からやや内彎して立ち上がった後、頸部から器厚を薄くしながら外反して開く。口唇部は丸味をもつ。	胴部外面は雑なへら削り、内面は多方向からのナデ整形。口縁部内外面共にナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
7	小型甕 土師器	B 7.8(現) C 6.0	底部は平底である。胴部は器厚をやや薄くしながら内彎ぎみに胴部最大径に至る。	胴部外面はへら削り、内面はへらナデ整形。底部内面は指ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア にぶい橙色	底部に木葉痕

の鎌(第7図-5),釘(第7図-6・7・8)の破片が出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ102cm・袖幅103cm・焚口部幅63cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築されている。煙道部は直径31cm・短径25cmの楕円形を呈し、壁から25cm焼成部側に作られている。焼成部は壁を100cmの幅で37cmほど掘り込み、火床は直径48cmの楕円形で、床を5cmほど掘り凹めている。また、竈は



第6图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表(第6・7図)

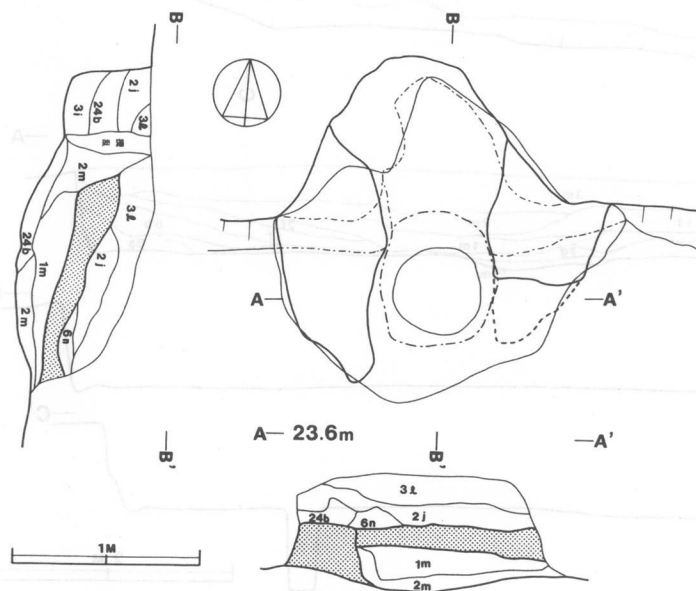
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	甕 土師器	B 2.7(現) C 9.6	底部は木葉痕を有する平底で、胴部は底部から直線的に外側へ開いて立ち上がる。	外面は斜位方向のナデ整形、内面はナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 黄橙色	底部に木葉痕
9	甕 土師器	B 11.8(現) C 8.8	底部から胴部にかけての破片である。底部は平底で、胴部は底部から器厚をやや薄くしながら内彎ぎみに立ち上がる。	底部外面はヘラ削り、内面は斜位方向のナデ整形、胴部内外面共ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 浅黄橙色	底部に木葉痕
10	高台付坏 須恵器	A 14.3(復) B 4.2 C 11.3 D 8.65	底部の高台貼り付け部は平坦で、やや器厚を薄くしながら内彎ぎみに広がった後、体部はやや外反して開く。また底部には「ハ」字状の高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ切り、底部上位は回転ヘラ削り。体部内外面共に水挽き成形が施されている。	普通 細砂・長石 灰色	
11	坏 須恵器	A 14.2 B 4.6 C 8.0	底部はやや丸味をもつ平底で、体部は底部から器厚を薄くして直線的に開く。	底部はヘラ切り後、回転ヘラ削り。体部は内外面共に水挽き成形後、外面下位に回転ヘラ削りがなされている。	良好 細砂・長石粒 灰色	
12	坏 須恵器	A 13.5 B 4.4 C 8.7	底部は平坦で、体部は直線的に外側へ広がりながら立ち上がって開く。	水挽き整形後、底部から体部外面は下位にかけて回転ヘラ削りが施されている。	普通 細砂・長石・石英 明オリープ灰色	
13	坏 須恵器	A 13.5 B 4.6 C 8.7	底部は平坦で、体部は直線的に外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部でやや垂直ぎみに開く。	底部は回転ヘラ削り、体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施され、内部底面に水挽き成形痕が認められる。	良好 細砂・長石粒 緑灰色	
7図 1	坏 須恵器	A 13.2 B 3.7 C 8.3	底部は中央部がやや窪む平底で、体部は直線的に外側へ広がりながら開く。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石粒 明オリープ灰色	底部に「ナ」のヘラ記号
2	坏 須恵器	A 13.2 B 4.3 C 8.2	底部は平坦で、体部は器厚をやや薄くしながら外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部は回転ヘラ削り。体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂 明緑灰色	使用による磨りへりが激しい
3	坏 須恵器	A 13.9 B 3.7 C 9.0	底部は平坦で、体部は器厚をやや薄くしながら直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り。体部内外面共に水挽き成形後、上位は回転横ナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石粒 明オリープ灰色	

出土遺物解説表（第7図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
4	環 須恵器	A 12.5 B 4.3 C 8.6	底部は平坦で、体部は器厚を同じくして外側へ広がりがりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り、体部は水挽き成形後、体部上位と内面に横ナデ整形が施されている。	不良 細砂・長石粒 灰白色	
5	鎌 鉄製品	長さ 9.6(現)	取り付け部は、おり返しが付く、刀の部分はときべりが認められる。			
6	釘 鉄製品	長さ 5.1(現)	厚さ3mmを測る長方体の釘である。			
7	釘 鉄製品	長さ 5.4(現)	厚さ4mmを測る長方体の釘である。			
8	釘 鉄製品	長さ 2.1(現)	厚さ4mmを測る長方体の釘で、頭の部分である。			

第2号住居跡（第9図）

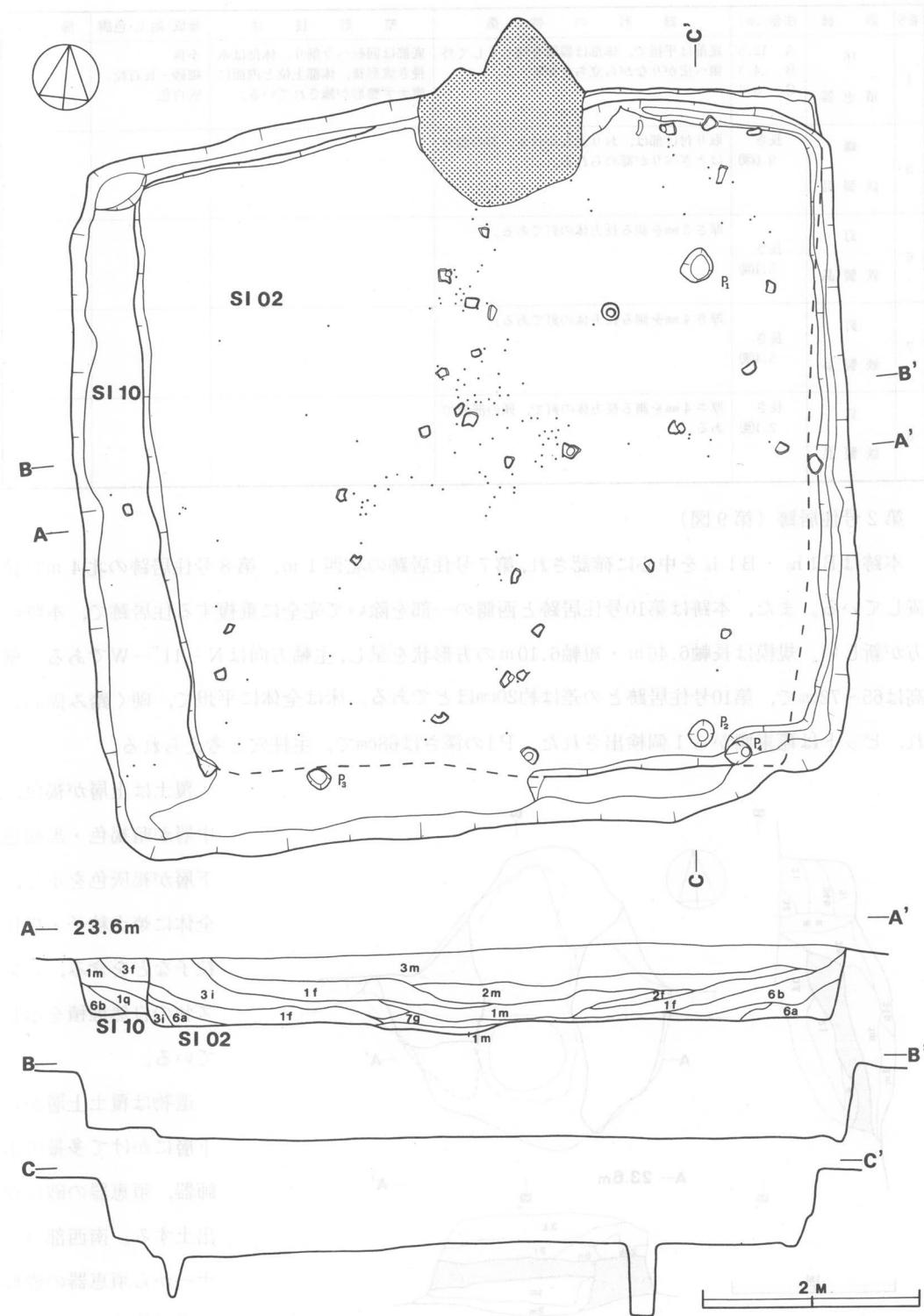
本跡はB1h₆・B1i₆を中心に確認され、第7号住居跡の北西1m、第8号住居跡の北4mに位置している。また、本跡は第10号住居跡と西側の一部を除いて完全に重複する住居跡で、本跡の方が新しい。規模は長軸6.46m・短軸6.10mの方形状を呈し、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は65~72cmで、第10号住居跡との差は約20cmほどである。床は全体に平坦で、硬く踏み固められ、ピットは竈東側から1個検出された。P1の深さは68cmで、主柱穴と考えられる。



覆土は上層が褐色、
中層が暗褐色・黒褐色、
下層が褐灰色を示し、
全体に焼土粒子・炭化
粒子などを含み、レン
ズ状の自然堆積を示し
ている。

遺物は覆土上層から
下層にかけて多量の土
師器、須恵器の破片が
出土する。南西部コー
ナーから須恵器の壺形
土器（第11図-5）が
倒立した状態で出土し、

第8図 第2号住居跡竈実測図



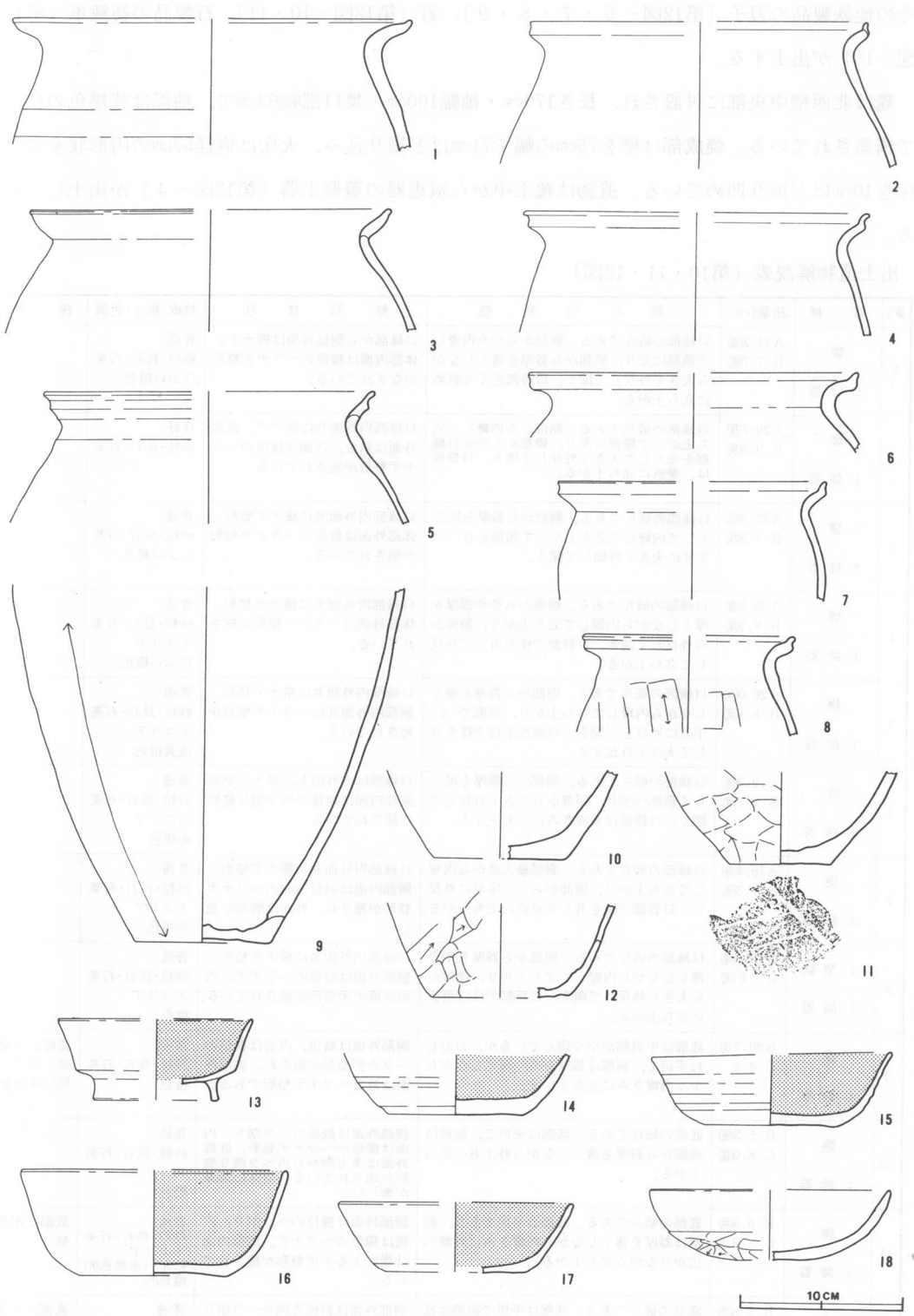
第9図 第2・10号住居跡実測図

その他鉄製品の刀子（第12図－6・7・8・9）、釘（第12図－10・11）、石製品の紡錘車（第12図－13）が出土する。

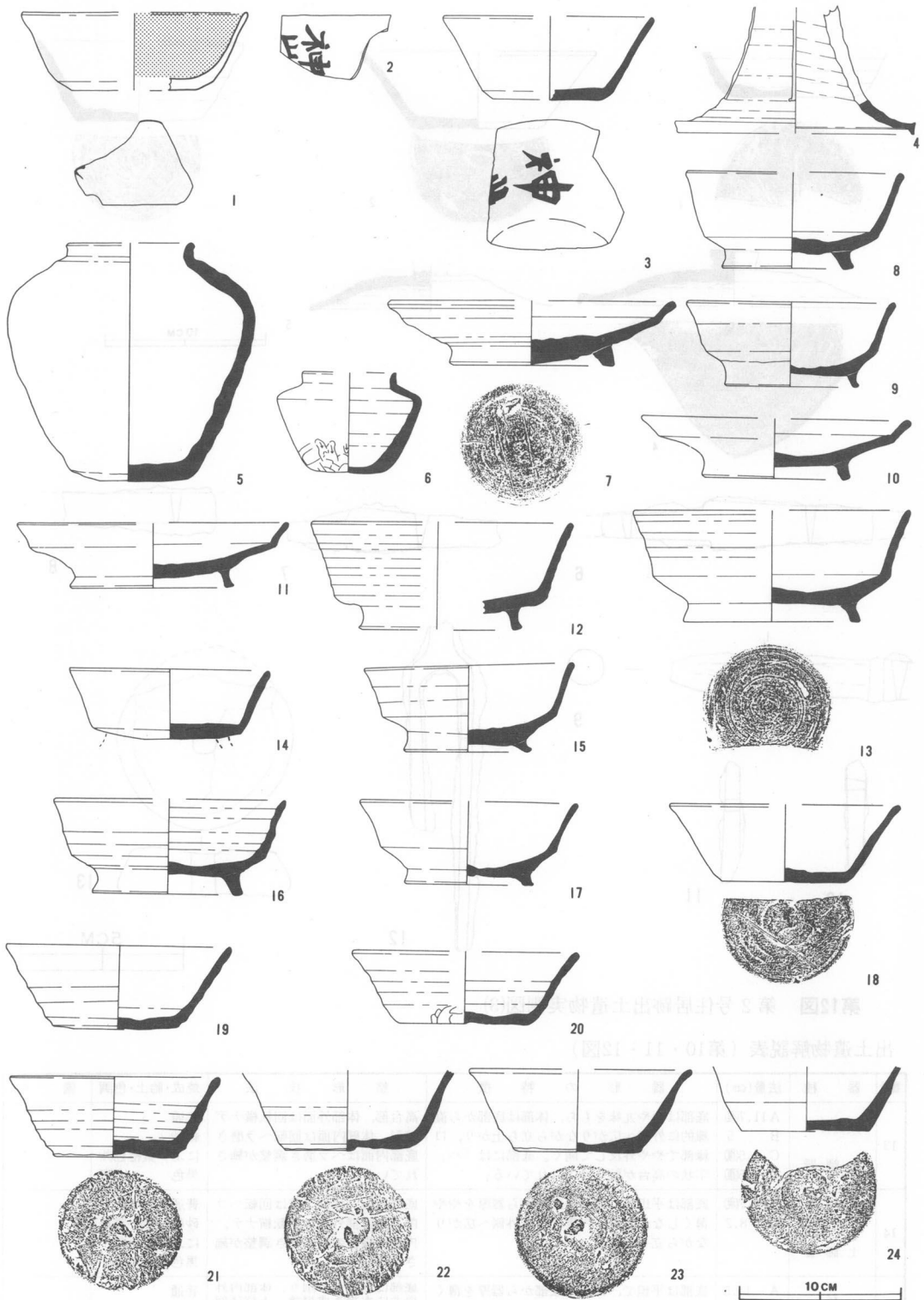
竈は北西壁中央部に付設され、長さ170cm・袖幅160cm・焚口部幅63cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を75cmの幅で74cmほど掘り込み、火床は直径57cmの円形状を呈し、床を10cmほど掘り凹めている。遺物は覆土中から須恵器の蓋形土器（第12図－4）が出土している。

出土遺物解説表（第10・11・12図）

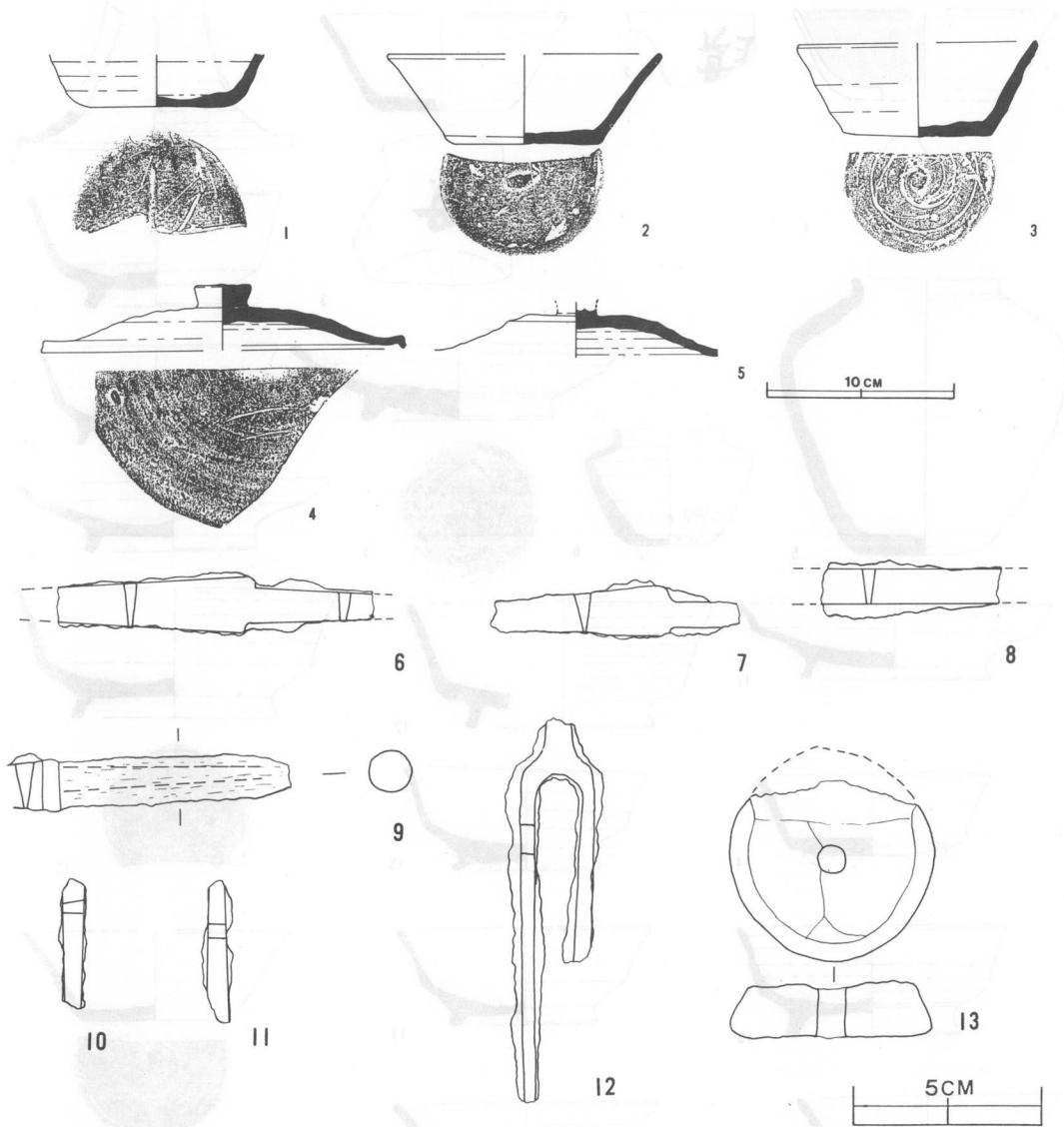
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 24.2(復) B 7.7(現)	口縁部の破片である。胴部からやや内彎して頸部に至り、頸部から器厚を薄くしながら大きく外反して開く。口唇部近くで斜めに立ち上がる。	口縁部から胴部外面は横ナデ。体部内面は横位のヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英にぶい橙色	
2	甕 土師器	A 20.7(復) B 9.8(現)	口縁部の破片である。胴部から内彎して立ち上がって頸部に至り、頸部からやや口縁部を短くして大きく外反して開き、口唇部は、垂直に立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。体部外面は斜位、内面は横位のヘラナデ整形が施されている。	良好 砂粒・長石・石英	
3	甕 土師器	A 21.9(復) B 7.5(現)	口縁部の破片である。胴部から器厚を同じくして内彎して立ち上がって頸部から「く」字状に大きく外傾して開く。	口縁部内外面共に横ナデ整形。体部外面は縦位のヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英にぶい褐色	
4	甕 土師器	A 20.9(復) B 7.5(現)	口縁部の破片である。胴部からやや器厚を厚くしながら内傾して立ち上がり、頸部から外反して開き、口唇部で稜を有して外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。体部外面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英スコリアにぶい橙色	
5	甕 土師器	A 20.0(復) B 8.1(現)	口縁部の破片である。胴部から器厚を薄くしながら内彎して立ち上がり、頸部で「く」字状に外反して開き、口縁部上位で稜を有して大きく外反する。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英スコリア浅黄褐色	
6	甕 土師器	A 19.9(復) B 4.1(現)	口縁部の破片である。胴部から器厚を厚くして頸部へ至り、頸部から大きく外反して開く。口唇部は垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部は内外面共に横ナデ整形。胴部内面は縦位のヘラ削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英スコリア赤褐色	
7	甕 土師器	A 16.4(復) B 7.3(現)	口縁部の破片である。胴部最大径から内彎して立ち上がり、頸部から「く」字状に外反し、口唇部で稜を有して垂直に立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部内面は斜位方向のヘラナデ整形が施され、外面は磨減が激しい。	普通 砂粒・長石・石英スコリア赤褐色	
8	小型甕 土師器	A 12.9(復) B 6(現)	口縁部の破片である。胴部から器厚をやや薄くしながら内彎して立ち上がり、頸部から大きく外反して開き、口唇部でほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面は縦位のヘラナデ、内面は横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英スコリア橙色	
9	甕 土師器	B 20.3(現) C 8.2	底部は中央部がやや窪んでいるが、おおむね平坦で、胴部は器厚をやや薄くしながら少々内彎ぎみに立ち上がる。	胴部外面は縦位、内面は横位のヘラナデ整形が施され、底部内面は雑なヘラナデ整形である。	良好 砂粒・長石・石英橙色	底部に木葉痕、胴部下位に媒附着
10	甕 土師器	B 5.3(現) C 8.0(復)	底部の破片である。底部は平坦で、胴部は底部から器厚を薄くしながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面は縦位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデ整形。底部外面は多方向からのヘラ削り整形が施されている。全体に磨減が激しい。	普通 砂粒・長石・石英スコリア橙色	
11	甕 土師器	B 6.3(現) C 5.7	底部の破片である。底部は平坦であり、胴部は器厚を薄くしながら内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。	胴部外面は横位のヘラ削り、内面は横位のヘラナデ。底部内面は指によるナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英スコリアにぶい赤褐色(外)橙色(内)	底部に木葉痕
12	甕 土師器	B 5.8(現) C 8.4	底部の破片である。底部は平坦で胴部は底部から器厚を薄くして、外傾して立ち上がる。	胴部外面は斜位方向のヘラ削り内面は横位のヘラナデ整形が施され、底部内面は指によるナデがなされている。	普通 砂粒・長石・石英にぶい褐色	底部に木葉痕



第10図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第11图 第2号住居跡出土遺物実測図(2)



第12図 第2号住居跡出土遺物実測図(3)

出土遺物解説表(第10・11・12図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
13	高台付環 土師器	A 11.7(匳) B 5 C 9.5(匳) D 7.5(匳)	底部はやや丸味をもち、体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。底部には「ハ」字状の高台が貼り付けられている。	高台部、体部外面は回転横ナデ整形。体部内面は回転へら磨き。底部内面はへら磨き調整が施されている。	普通 細砂 にぶい黄橙色(外) 黒色(内)	
14	環 土師器	B 3.7(匳) C 8.2	底部は平坦で、体部は底部から器厚をやや薄くしながらやや内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。	底部外面、体部下位は回転へら削り。体部外面は回転横ナデ、内面は横位のへら磨き調整が施されている	普通 砂粒・石英・雲母 にぶい橙色(外) 黒色(内)	
15	環 土師器	A 14.5 B 4.6 C 8.2	底部は平坦で、体部は底部から器厚を薄くしながら外側へ広がって立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。	底部は回転へら削り。体部内外面共に水挽き成形後、上位は回転横ナデ調整。体部内面は横位のへら磨き。底部内面は多方向からのへら磨き調整がなされている。	普通 細砂 にぶい橙色(外) 黒色(内)	

出土遺物解説表 (第10・11・12図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
16	埴土師器	A 16(匳) B 6.5 C 9	底部はやや上げ底状を呈し、体部は底部からゆるやかに器厚を同じにして外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色(外) 黒色 (内)	
17	埴土師器	A 17(匳) B 4.3 C 8.4(匳)	底部は平坦で、体部は外側へ広がりながら立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。	底部および体部下位は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄橙色(外) 黒色 (内)	
18	埴土師器	A 14.5(匳) B 4.3	底部は丸味状を呈し、体部は底部からゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がる。	底部外面は多方向からの削り、体部外面は横ナデ整形がなされ内面全体は丁寧なヘラ磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 浅黄橙色	
11図	埴土師器	A 13.8(匳) B 5.8 C 7.7(匳)	底部は平坦で、体部は底部から器厚を薄くして外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り。体部内外面共に水挽き成形後、丁寧な横位のヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂 にふい黄橙色(外) 黒色 (内)	体部下位側面に解読不明の墨書
2	埴土師器		口縁部の破片である。	体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整が施されている	普通 細砂 にふい褐色(外) 黒色 (内)	体部側面に「神山」の墨書
3	埴土師器	A 12.7(匳) B 5.2 C 6.5(匳)	底部は平坦で、体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がったのち、上位でやや外反する。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、内外面共同回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・スコリア オリープ灰色	底部に「 」のヘラ記号 体部側面に「神山」の墨書
4	高埴土師器	B 8.9(匳)	脚部の破片である。脚部は受部から直線的に外側へ広がって下がった後、大きく開く。口唇部は垂直に立つ。脚部には4個の透し窓を有している。	水挽き成形後、外面は回転横ナデ整形がなされ、内面には水挽き痕が認められる。	良好 細砂 灰色	
5	壺土師器	B 14.7 C 7.7	底部は平坦で、胴部は底部から直線的に外側へ広がって立ち上がった後、胴部最大径部から内側へ狭まりながら立ち上がり、頸部からやや外反して開く。	口縁部外面および胴部内面共に回転横ナデ整形がなされている。胴部外面は磨減、剥落が激しく、整形不明である。	不良 砂・長石・石英 灰白色	
6	短頸小型壺土師器	A 5.1 B 6.2 C 4.9	底部はおおむね平坦で、胴部は器厚を薄くしながら直線的に外側へ広がりながら立ち上がった後、胴部最大径部から内側へ短く再び立ち上がって頸部に至る。口縁部は短く垂直に立ち上がる。	底部は雑なヘラ削り。胴部下位は手持ちヘラ削り。全体に水挽き成形後、外面は回転横ナデ整形。胴部内側に水挽き痕が認められる。	良好 細砂・長石粒 鉄分 灰黄色	
7	盤土師器	A 17.1(匳) B 4.0 C 10.4	底部は丸味を呈し、体部は底部から器厚を薄くしながら大きく内彎ぎみに外側へ広がりがりながら立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。底部に厚みのある高台が「ハ」字状に貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り。体部外面は水挽き成形、内面は水挽き成形後、回転横ナデ整形。高台部も回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・鉄分 オリープ灰色	底部に「//」のヘラ記号
8	高台付埴土師器	A 13.0(匳) B 5.9 C 11.4 D 8.1	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。底部には「ハ」字状の高台が1cmの高さに貼り付けられている	底部は回転ヘラ削り。全体は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石 オリープ灰色	
9	高台付埴土師器	A 12.6 B 5.2 C 10.6 D 8.3	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から外反きみに外側へ広がりながら立ち上がる。底部には「ハ」字状の高台が0.8cmの高さに貼られている。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、内外面共に回転横ナデ整形がなされている。高台部は横ナデ整形。	良好 細砂 灰色	
10	盤土師器	A 16.3(匳) B 3.7 C 9.3	底部は平坦で、体部は底部から連続して外側へ大きく広がった後、やや外反して開く。また底部には1cmの高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り。体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石・石英 オリープ灰色	
11	盤土師器	A 16.3(匳) B 4.0 C 10.1	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から連続的に大きく開いた後、口縁部で外反して開く。また、底部には1.1cmの高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形。高台部は回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂 オリープ灰色	
12	高台付埴土師器	A 15.8(匳) B 6.7 C 12.5 D 10.0	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部からやや外反きみに外側へ広がりながら立ち上がる。また、底部に高さ1.3cmの高台が貼り付けられている。	体部は水挽き成形後、内面と口縁部外面に回転横ナデ整形がなされている。高台部は回転横ナデ整形。	普通 細砂・長石・鉄分 灰黄色	

遺物解説表 (第11・12図)

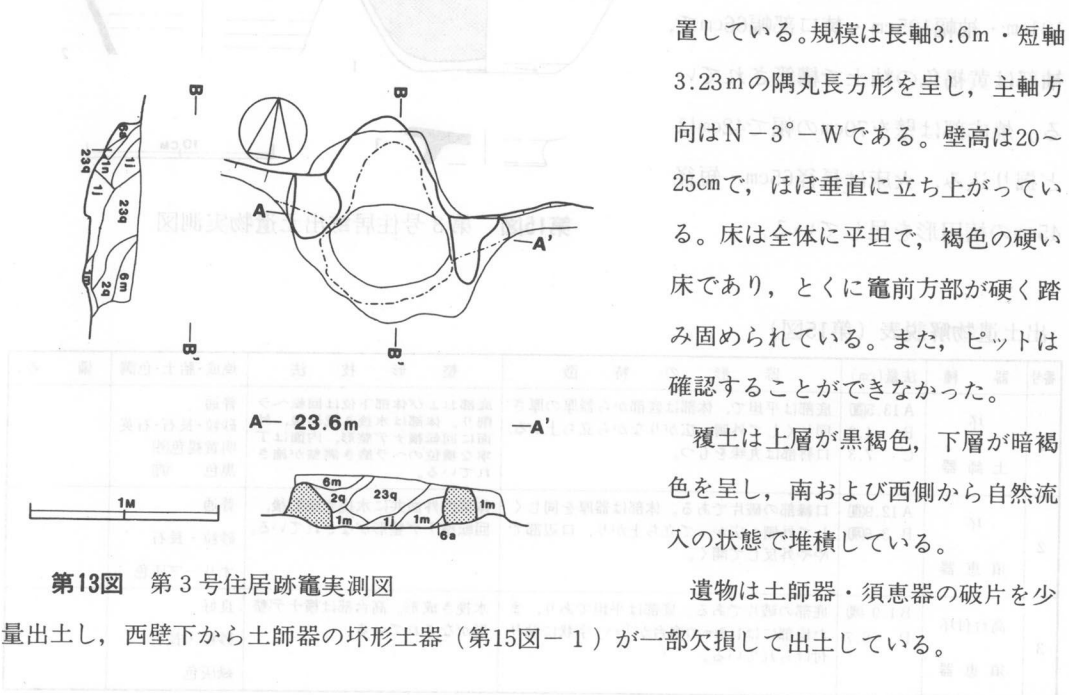
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
13	高台付坏 須恵器	A 16.7(匳) B 6.9 C 15.0 D 10.9	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から器厚をやや薄くしながら外反して立ち上がる。また底部には高さ0.9cmの高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形。高台部は回転横ナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石 灰オリーブ色	底部に小さな「×」のヘラ記号
14	高台付坏 須恵器	A 12.0 B 4.5 D 9.2	底部はやや丸味をもち、体部は底部からやや外側へ広がりながらやや外反して開く。底部に高台貼り付痕がある。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂 褐灰色	
15	高台付坏 須恵器	A 12.7 B 5.6 C 10.7 D 7.8	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から外側へ広がりながら外反して立ち上がる。また底部には「ハ」字状の高台が0.5cmの高さに貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされ、高台部も回転横ナデ整形。	良好 細砂・長石 灰色	
16	高台付坏 須恵器	A 14.0(匳) B 5.9 C 11.8 D 9.1	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から器厚をやや薄くしながら外側へ広がりながら立ち上がる。また、底部には1.1cmの高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施され、高台部も横ナデ整形である。	良好 細砂・長石 オリーブ灰色	
17	高台付坏 須恵器	A 13.0(匳) B 5.1 C 10.8 D 7.8	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から外側へ大きく外反きみに立ち上がる。また、底部には「ハ」字状の高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ切り後、ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石 オリーブ灰色	
18	坏 須恵器	A 14.2 B 4.8 C 7.6	底部は平坦で、体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。	底部は回転ヘラ切り後、ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石・石英 緑灰色	底部に「/」のヘラ記号
19	坏 須恵器	A 13.5 B 5.1 C 7.8	底部にはヘラ切り痕が残り、やや凸凹である。体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、雑なヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石 緑灰色	
20	坏 須恵器	A 13.7(匳) B 4.5 C 8.0	底部にはヘラ切り痕が残り、やや凸凹である。体部は底部から器厚を同じくして、外反きみに広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、雑なヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石 灰オリーブ色	底部に「 」のヘラ記号
21	坏 須恵器	A 12.7 B 5.0 C 7.3	底部にはヘラ切り痕が残り、中央部がやや窪む。体部は底部から器厚をやや厚くして外側へ広がった後、口縁部で薄くして立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラナデ整形がなされ、体部は水挽き成形後、口縁部に回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石 青灰色	底部に「#」のヘラ記号
22	坏 須恵器	B 5.0 C 7.7	底部にはヘラ切り痕が残り、やや凸凹である。体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がった後、やや外反して開く。	底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラナデ整形がなされ、体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 オリーブ灰色	底部に「#」のヘラ記号
23	坏 須恵器	A 13.5(匳) B 5.2 C 7.9	底部にはヘラ切り痕が残るが、おおむね平坦である。体部は底部から器厚を薄くし、外側へ広がりながら立ち上がった後、口縁部で外反して開く。	底部は回転ヘラ切り後、外周に軽いヘラナデ。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石・石英 緑灰色	底部に「#」のヘラ記号
24	坏 須恵器	B 4.0(匳) C 8.0	底部は平坦で、体部は器厚を薄くしながら外側へ広がりながら立ち上がる。口縁部欠損。	底部は回転ヘラ切り後、外周ナデ整形。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石 緑灰色	底部に「×」のヘラ記号
12図 1	坏 須恵器	B 4.0(匳) C 8.0	底部は平坦で、体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、雑なヘラ削りがなされ、体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 オリーブ灰色	底部に「/」のヘラ記号
2	坏 須恵器	A 14.5(匳) B 4.9(匳) C 7.7	底部にはヘラ切り痕が残るが、おおむね平坦である。体部は底部から外側へ広がった後、やや外反きみに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラナデ整形。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が丁寧に施されている。	普通 細砂・長石 緑灰色	底部に「 」のヘラ記号
3	坏 須恵器	A 12.6(匳) B 5.1 C 8	底部にはヘラ切り痕が残るが、おおむね平坦である。体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石・鉄分 緑灰色	底部に「V」のヘラ記号

出土遺物解説表 (第12図)

番号	器種	量 (cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
4	蓋 須恵器	B 3.6 C 19.5	宝珠状のつまみを有し、頂部は滑らかに開いた後、口辺部でややね上がって開く。口唇部は垂直ぎみに立つ。	内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石・石英・鉄分 灰黄褐色	内部に「//」のへら記号
5	蓋 須恵器	B 2.5	宝珠状のつまみを有し、頂部は平坦で、中途より大きく下方へ開く。	かた部は回転へら削り。その他内外面共に水挽き成形後、回転へらナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石・石英 緑灰色	内部に「×」のへら記号
6 7 8	刀子 鉄製品	6長さ 8.5(現) 7長さ 6.7(現) 8長さ 4.7(現)	基部および刀の先端部を欠損する刀子である。			
9	刀子 鉄製品	長さ 7.5(現)	柄の中に入った状態で出土した刀子の基部である。			
10 11	釘 鉄製品	10長さ 3.8(現) 11長さ 3.5(現)	いずれも釘の破損品である。			
12	釘 鉄製品	長さ 10.3(現)	漁具か狩猟に使用した道具と思われる。			
13	紡錘車 石製品		原石は粘板岩である。			

第3号住居跡 (第14図)

本跡は B2h₈・B2h₉ を中心に確認され、第11号住居跡の北3m、第2号住居跡の東5mに位置している。

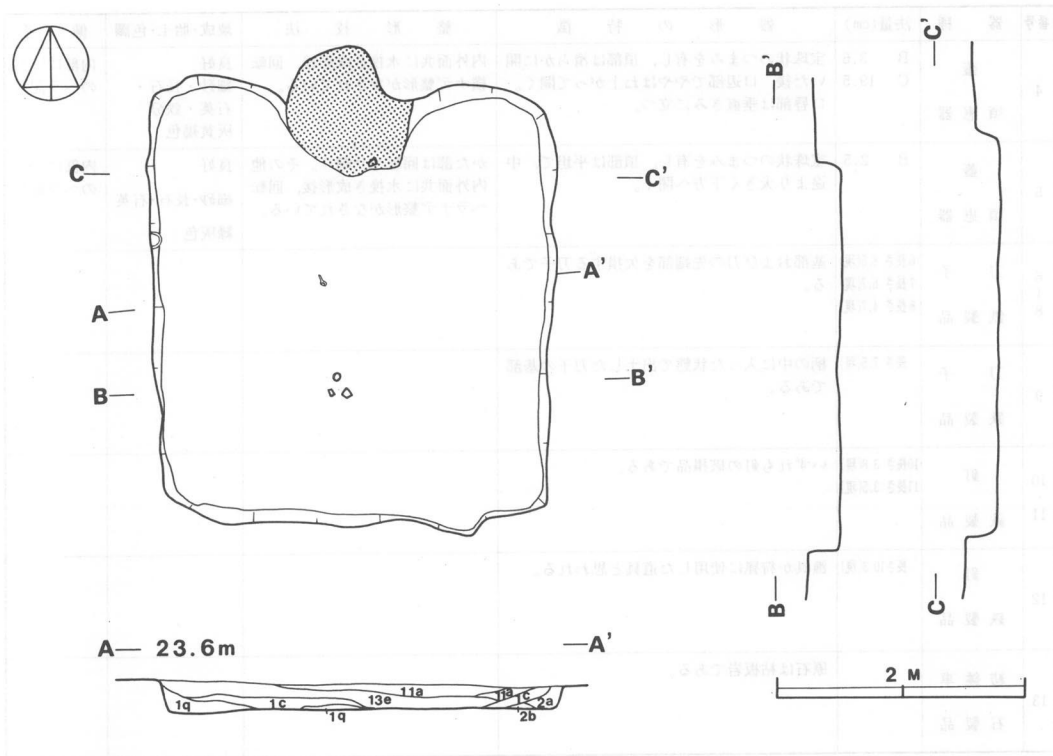


第13図 第3号住居跡竈実測図

規模は長軸3.6m・短軸3.23mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は20~25cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で、褐色の硬い床であり、とくに竈前方部が硬く踏み固められている。また、ピットは確認することができなかった。

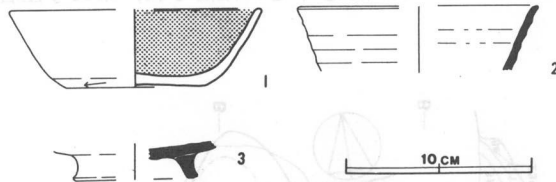
覆土は上層が黒褐色、下層が暗褐色を呈し、南および西側から自然流入の状態に堆積している。

遺物は土師器・須恵器の破片を少量出土し、西壁下から土師器の坏形土器(第15図-1)が一部欠損して出土している。



第14図 第3号住居跡実測図

竈は北壁中央部に付設され、長さ101cm・袖幅105cm・焚口幅66cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を70cmの幅で42cmほど掘り込み、火床は長径65cm・短径45cmの楕円形を呈している。



第15図 第3号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第15図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 土師器	A 13.5(匳) B 4.2 C 7.3	底部は平坦で、体部は底部から器厚の厚さ同じくして外側へ広がりながら立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。	底部および体部下位は回転ヘラ削り。体部是水挽き成形後、外面に回転横ナデ整形、内面は丁寧な横位のヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 黄褐色(外) 黒色(内)	
2	坏 須恵器	A 12.9(匳) B 3.6(現)	口縁部の破片である。体部は器厚を同じくして外側へ広がって立ち上がり、口辺部でやや外反して開く。	体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石 オリーブ灰色	
3	高台付坏 須恵器	B 1.9(匳) D 6.7	底部の破片である。底部は平坦であり、また底部には1.3cmの高台が「ハ」字状に貼り付けられている。	水挽き成形。高台部は横ナデ整形がなされている。	良好 砂粒・長石 緑灰色	

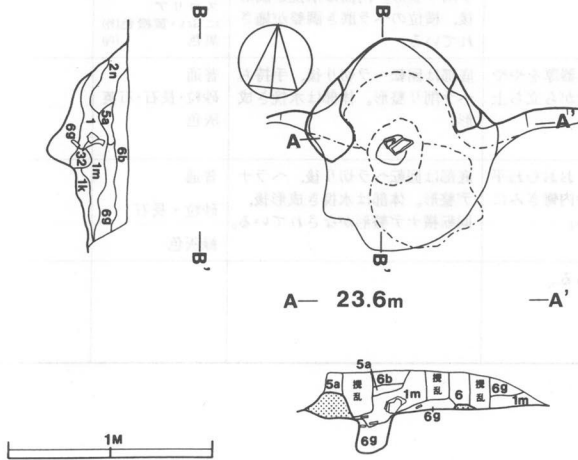
第4号住居跡（第17図）

本跡はB2 g₂・B2 g₃を中心に確認され、第5号住居跡の南2.8m、第1号住居跡の北東6mに位置している。規模は長軸3.12m・短軸2.92mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-15.3°-Wである。壁高は西側がやや浅く20cm、その他は30cmで、やや外側へ広がりながら立ち上がっている。床はやや起伏がみられ、全体に褐色の柔らかい床である。ピットは確認することができなかった。覆土は上層が黒褐色、下層が暗褐色を示し、ローム粒子・ロームブロックを含む柔らかい覆土

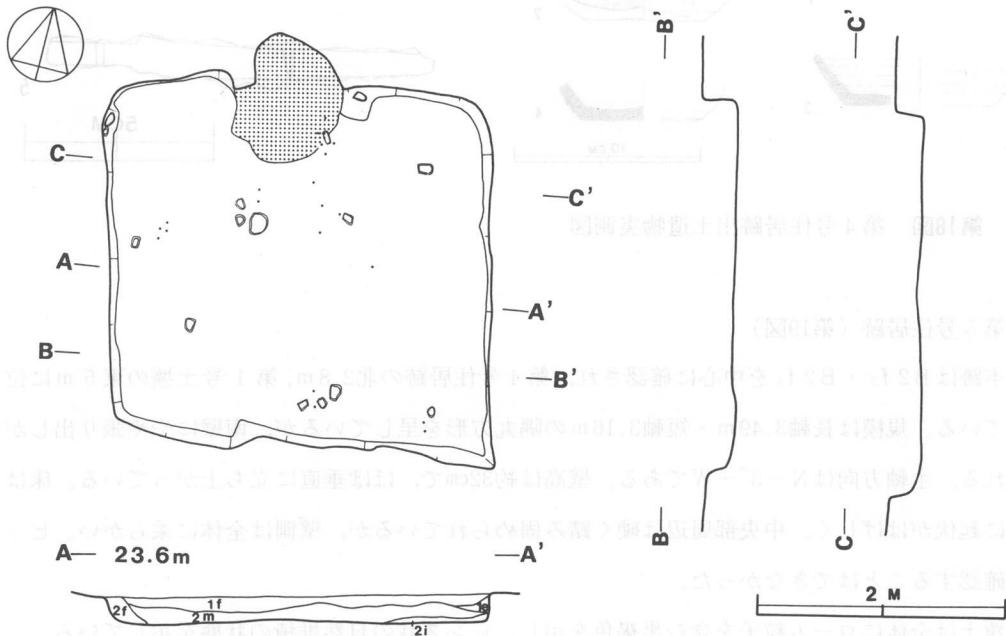
で、自然堆積の状態を示している。

遺物は土師器、須恵器の破片を少量竈前方部から出土し、また南東部覆土中から刀子（第18図-5）の完形品を出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ60cm・袖幅53cm・焚口部幅（49）cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を91cmの幅で39cmほど掘り込み、火床は長径33cm短径26cmの楕円形を呈している。本



第16図 第4号住居跡竈実測図

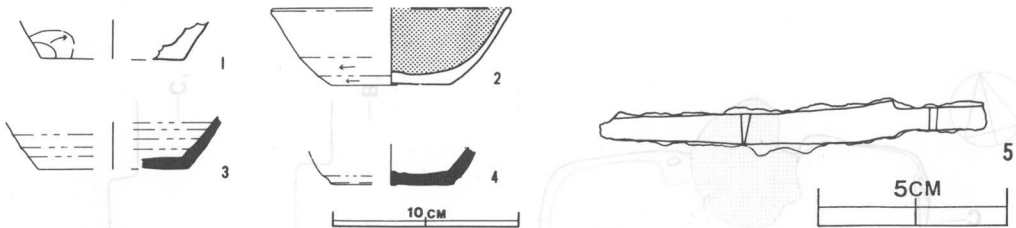


第17図 第4号住居跡実測図

跡の竈は他の住居跡の竈の袖と異なり、袖部を壁外から構築している。遺物は焼成部から甕形土器の胴部片が出土している。

出土遺物解説表 (第18図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形図法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	B 2.9(匁) C 7.7(匁)	底部の破片である。底部は平坦で、胴部は底部から外側へ広がりながら立ち上がる。	底部から胴部下位の外面はヘラ削り整形。内面は指ナデ整形がなされている。	不良 砂粒・長石・石英にふい橙色	
2	坏 土師器	A 2.9 B 4.1 C 6.5	底部は平坦で、体部は底部から内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。口唇部は丸味をもつ	底部から体部下位外面は回転ヘラ削り整形。内面は水挽き成形後、横位のヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英スコリアにふい黄橙色(外) 黒色(内)	
3	坏 須恵器	B 2.5(匁) C 8.0(匁)	底部は平坦で、体部は底部から器厚をやや薄くしながら、外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、手持ちヘラ削り整形。体部は水挽き成形。	普通 砂粒・長石・石英灰色	
4	坏 須恵器	B 2.0(匁) C 6.7(匁)	底部にはヘラ切り痕が残るが、おおむね平坦である。体部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、ヘラナデ整形。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石緑灰色	
5	刀子 鉄製品	長さ10.3	完形の状態出土した刀子である。			



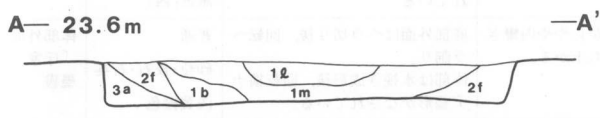
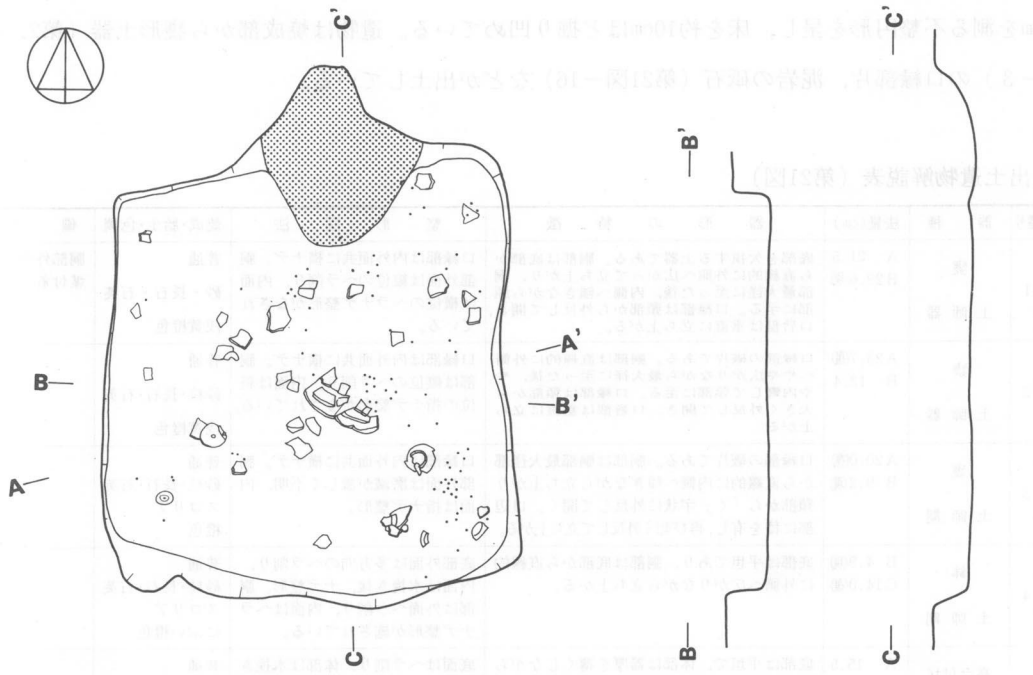
第18図 第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡 (第19図)

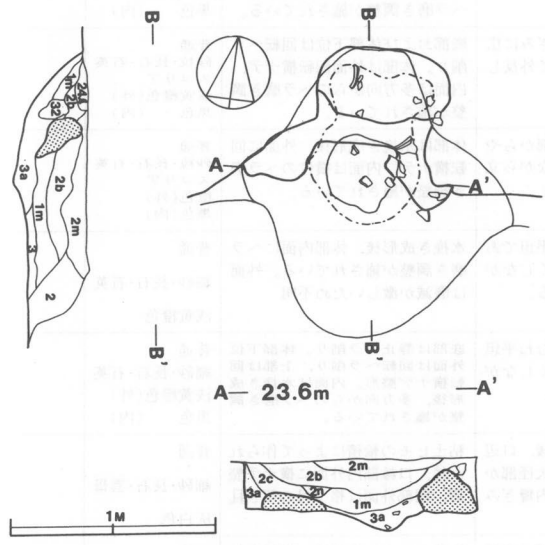
本跡はB2 f₃・B2 f₄を中心に確認され、第4号住居跡の北2.8m、第1号土壌の東5mに位置している。規模は長軸3.49m・短軸3.16mの隅丸方形を呈しているが、南壁にやや張り出しがみられる。主軸方向はN-3°-Wである。壁高は約32cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は全体に起伏がはげしく、中央部周辺は硬く踏み固められているが、壁側は全体に柔らかい。ピットは確認することはできなかった。

覆土は全体にローム粒子を含む黒褐色を示し、レンズ状の自然堆積の状態を示している。

遺物は中央部から南東コーナー部にかけて土師器、須恵器を多量出土する。南部コーナー部か



第19図 第5号住居跡実測図



第20図 第5号住居跡竈実測図

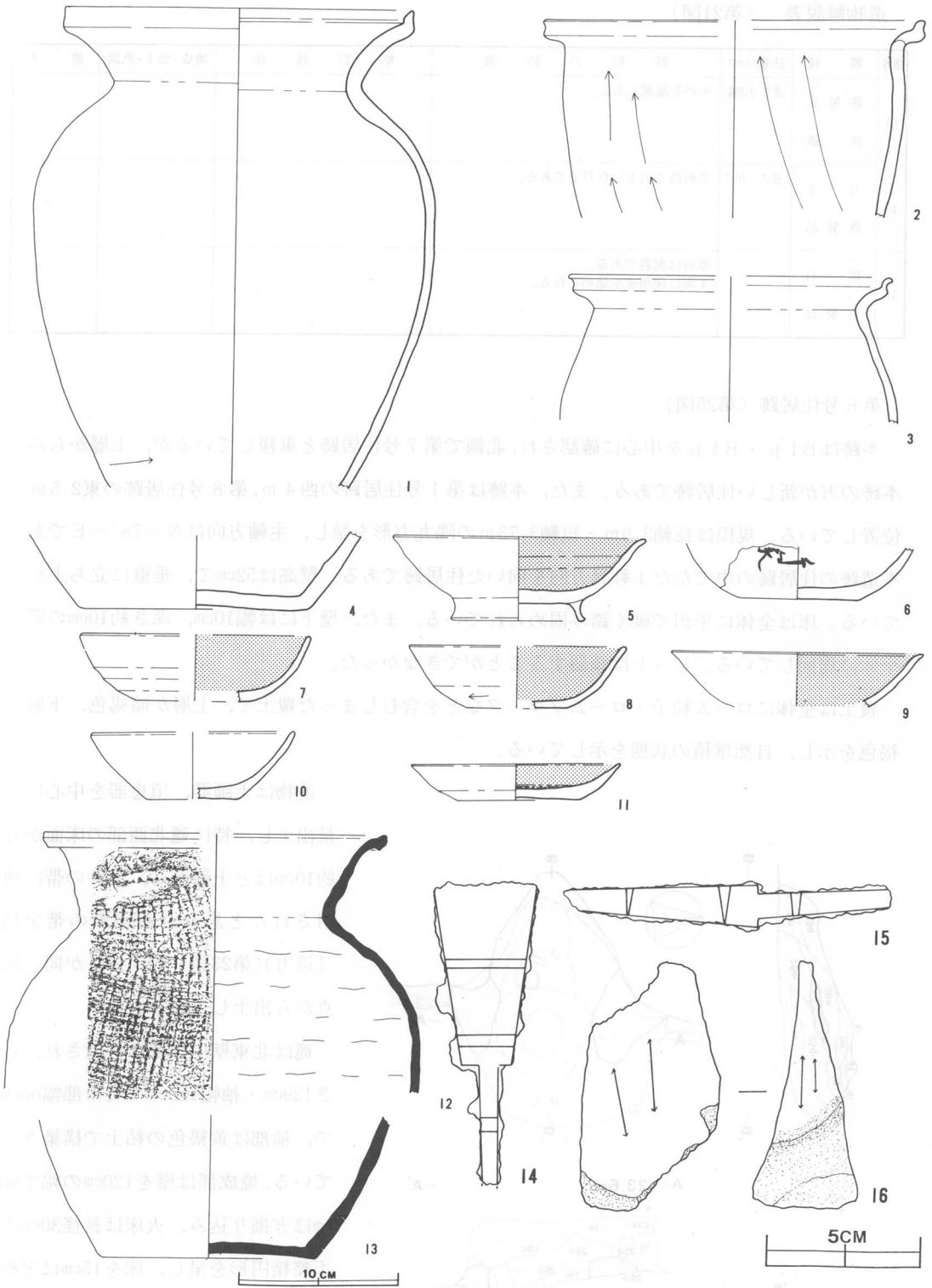
ら甕形土器（第21図-1）が横位につぶされた状態で、また同コーナー部から須恵器の底部を欠損する甕形土器（第21図-12）、覆土中から鉄鍬の先端部（第21図-14）、先端部を欠損する刀子（第21図-15）が出土している。また、中央部床面から体部側に「新家」と書かれたと思われる「斤家」の墨書が認められる环形土器（第21図-6）、南西部から高台付环形土器（第21図-5）の完形品が出土している。

竈は北壁中央からやや東側に寄った所に付設され、長さ88cm・袖幅104cm・焚口部幅57cmで、袖

部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を101cmの幅で68cmほど掘り込み、火床は直径40cmを測る不整形円形を呈し、床を約10cmほど掘り凹めている。遺物は焼成部から甕形土器（第21図-3）の口縁部片、泥岩の砥石（第21図-16）などが出土している。

出土遺物解説表（第21図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形図法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 21.5 B 29.6(夔)	底部を欠損する土器である。胴部は底部から直線的に外側へ広がって立ち上がり、胴部最大径に至った後、内側へ傾きながら頸部に至る。口縁部は頸部から外反して開き、口唇部は垂直に立ち上がる。	口縁部は内外面共に横ナデ。胴部外面は縦位のへら削り、内面は横位のへらナデ整形がなされている。	普通 砂・長石・石英 浅黄橙色	胴部外面に煤付着
2	甕 土師器	A 23.7(夔) B 12.4	口縁部の破片である。胴部は直線的に外側へやや広がりがながら最大径に至った後、やや内彎して頸部に至る。口縁部は頸部から大きく外反して開き、口唇部は垂直に立ち上がる。	口縁部は内外面共に横ナデ。胴部は縦位のへら削り、内面は斜位の指ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	
3	甕 土師期	A 20.0(夔) B 9.2(夔)	口縁部の破片である。胴部は胴部最大径部から直線的に内側へ傾きながら立ち上がり頸部から「く」字状に外反して開く。口辺部に稜を有し、再び短く外反して立ち上がる。	口縁部は内外面共に横ナデ。胴部外面は磨減が激しく不明、内面は指ナデ整形。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 橙色	
4	鉢 土師期	B 4.9(夔) C 14.0(夔)	底部は平坦であり、胴部は底部から直線的に外側へ広がりがながら立ち上がる。	底部外面は多方向のへら削り、内面は水挽き後、ナデ整形。胴部は外面へら削り、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア にふい橙色	
5	高台付坏 土師器	A 15.5 B 5.3 D 8.2	底部は平坦で、体部は器厚を薄くしながら大きく外側へ広がった後、口辺部で外反して開く。また底部には高さ1.1cmの高台が貼り付けられている。	底面はへら削り、体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面は丁寧なへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 橙色(外) 黒色(内)	
6	坏 (墨書土器) 土師器	B 3.4(夔) C 7.5(夔)	底部は平坦で、体部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりがながら立ち上がる。	底部外面はへら切り後、回転へら削り。 体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	体部外面に「斤家」の墨書
7	坏 土師器	A 14.1(夔) B 4.2 C 7.1(夔)	底部は平坦で、体部は底部から外側へ内彎ぎみに広がって立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。	底部および体部下位は回転へら削り。体部は水挽き成形後、外面は回転横ナデ、内面は横位のへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
8	坏 土師器	A 13.4(夔) B 3.9 C 6.3(夔)	底部は平坦で、体部は外側へ内彎ぎみに広がりがながら立ち上った後、口辺部で外反して開く。	底部および体部下位は回転へら削り。体部は外面回転横ナデ、内面は多方向からのへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
9	高台付坏 土師器	A 15.5(夔) B 3.4(夔)	体部だけの破片である。体部は底部からやや内彎ぎみに大きく外側へ広がりがながら立ち上った後、口辺部で外反して開く。	体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面は横位のへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 橙色(外) 黒色(内)	
10	坏 土師器	A 12.5(夔) B 4.2 C 5.6(夔)	底部は前記の坏よりやや小さく、平坦である。体部は底部からやや器厚を薄くしながら、外側へ広がりがながら立ち上がる。	水挽き成形後、体部内面にへら磨き調整が施されている。外面は磨減が激しいため不明	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色	
11	皿 土師器	A 12.9 B 2.3 C 7.6	底部は中央部がやや窪むが、おおむね平坦である。体部は底部から器厚を薄くしながら外側へ広がりがながら立ち上がる。	底部は静止へら削り。体部下位外面は回転へら削り、上部は回転横ナデ整形。内面は水挽き成形後、多方向からのへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
12	壺 須恵器	A 21.1 B. 16(夔)	頸部より直線的に外側へ広がった後、口辺部で外反して開く。胴部は胴部最大径部から直線的に立ち上がった後、やや内彎ぎみに内傾して立ち上がる。	粘土ヒモの輪積によって作られた後、口縁部内外面に横ナデ整形。胴部外面は格子目の叩き目。	普通 細砂・長石・雲母 灰白色	
13	甕 須恵器	B 8.9 C 13.3	底部はやや上げ底状を呈する。胴部は底部から内彎ぎみに外側へ広がりがながら立ち上がる。	輪積みによる成形後、胴部内外面共に回転横ナデ整形がなされている。底部はへら削り。	良好 細砂・石英 赤褐色	



第21図 第5号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第21図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
14	鉄製品 鉄 鎌	長さ 9.8割	矢の先端部である。			
15	刀 子 鉄製品	長さ 10.7	完形品で出土した刀子である。			
16	砥 石 石製品		原石は泥岩である。 4面に使用痕が認められる。			

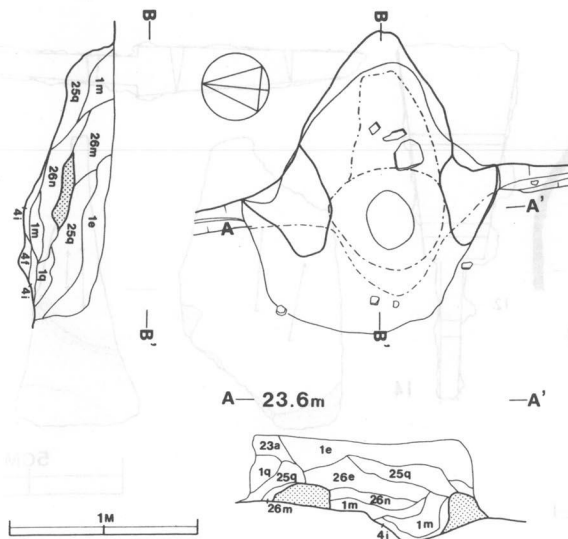
第6号住居跡 (第25図)

本跡はB1j₈・B1j₉を中心に確認され、北側で第7号住居跡と重複しているが、土層からみて本跡の方が新しい住居跡である。また、本跡は第1号住居跡の西4m、第8号住居跡の東2.5mに位置している。規模は長軸3.9m・短軸3.73mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-78°-Eであり、本遺跡の住居跡の中でただ1軒異方向を向いた住居跡である。壁高は52cmで、垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で硬く踏み固められている。また、壁下には幅10cm、深さ約10cmの溝が全体に周回している。ピットは確認することができなかった。

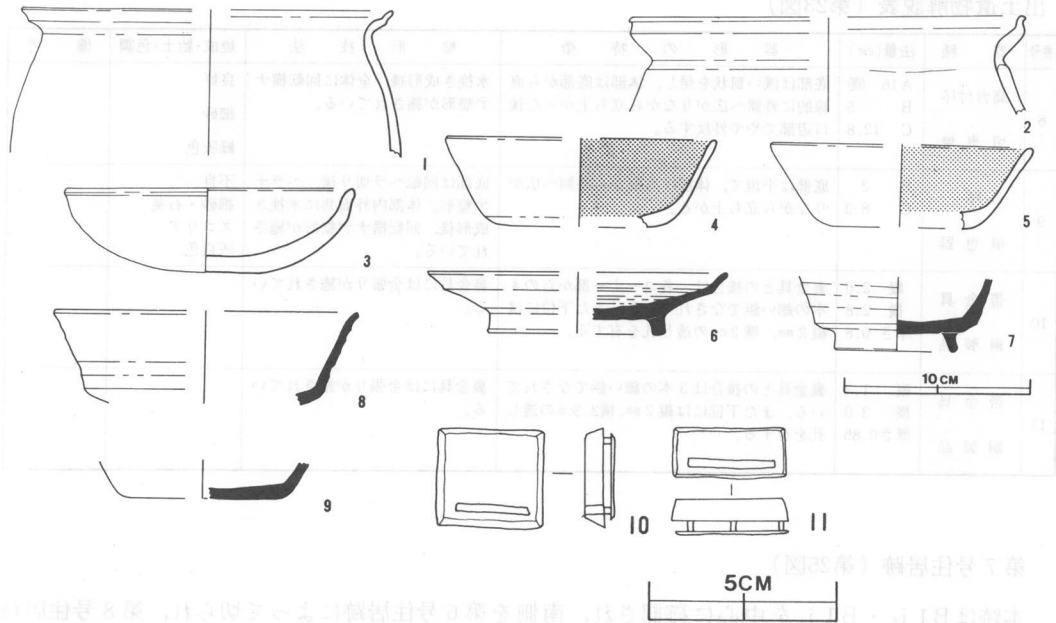
覆土は全体にローム粒子・ロームブロックなどを含むしまった覆土で、上層が暗褐色、下層が褐色を示し、自然堆積の状態を示している。

遺物は土師器、須恵器を中心に少量出土し、特に竈北西部の床面から約10cmほど上層から、同一の帯に使用されたとと思われる銅製の帯金具(巡方)(第23図-10・11)が同一地点から出土している。

竈は北東壁中央部に付設され、長さ139cm・袖幅110cm・焚口部幅66cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を120cmの幅で80cmほど掘り込み、火床は長径30cmの不整楕円形を呈し、床を15cmほど掘り凹めている。遺物は焼成部より土師器の甕形土器(第23図-1)の口



第22図 第6号住居跡竈実測図



第23図 第6号住居跡出土遺物実測図

縁部が出土している。

出土遺物解説表（第23図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 9.7(復) B 7.9(復)	胴部は、胴部最大径部からやや内彎ぎみに内側へ狭まって立ち上がり、頸部から口縁部は「く」字状に外反して開いた後、稜を有して再び短く立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部内面は横位のへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
2	甕 土師器	A 21.0(復) B 5.1(復)	口縁部の破片である。胴部から内側へ傾いて立ち上がった後、頸部から外反して開き、口辺部で稜を有して再び立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部上位は横位の横ナデ整形が施されている。内部に輪積痕が認められる。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア にぶい橙色	
3	坏 土師器	A 15.2 B 4.6 C 14.8	底部はやや深い皿状を呈し、体部と底部の境は明瞭ではないが、上部の一部に稜を有する部分より上位が体部と考えられる。体部はやや外反ぎみに立ち上がる。	体部は横ナデ整形。その他は磨減が激しいため不明。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
4	坏 土師器	A 14.4(復) B 4.8(復)	体部は底部から直線的に外側へ広がって立ち上がり、口唇部は丸味をもつ。	体部内面はへら磨き調整が施されているが、その他外面は磨減が激しいため不明。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア にぶい橙色(外) 黒色(内)	
5	坏 土師器	A 13.8(復) B 4.9 C 7.5(復)	底部は欠損のため不明。体部は底部から器厚をやや薄くしながら、直線的に外側へ広がりがりながら立ち上がる。口縁部は器厚がやや厚くなる。	体部外面下位は回転へら削り、上部は回転横ナデ整形、内面は横位のへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石 石英・スコリア 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
6	盤 須恵器	A 15.9(復) B 3.4 C 14.5 D 9.5	底部は浅い皿状を呈し、体部は短く外反して開く。また底部には0.8cmの高台が貼り付けられている。	水挽き成形後、底部外面および体部内外面は回転横ナデ整形。高台部も同様である。	良好 細砂・長石 石英・鉄分 緑灰色	
7	高台付坏 須恵器	B 4 C 8.6 D 6.4	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から器厚を厚くして、やや内彎ぎみに外側へ広がりがりながら立ち上がる。また底部には高さ1cmの高台が貼り付けられている。	底部は回転へら切り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形。高台部も回転横ナデ整形である。	良好 細砂・石英 暗オリーブ灰色	

出土遺物解説表（第23図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	高台付環 須恵焼	A 16 (匁) B 5 C 12.8	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がった後口辺部でやや外反する。	水挽き成形後、全体に回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂 緑灰色	
9	環 須恵器	B 2 C 8.3	底部は平坦で、体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後、ヘラナデ整形。体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	不良 細砂・石英 スコリア 灰白色	
10	帯金具 銅製品	縦 2.6 横 2.8 厚さ 0.8	裏金具との接合は、各コーナー部からの4本の細い鉄でなされている。また下位には縦2mm、横2cmの透し孔を有する。	裏金具には金張りが施されている。		
11	帯金具 銅製品	縦 1.3 横 3.0 厚さ 0.85	裏金具との接合は3本の細い鉄でなされている。また下位には縦2mm、横2.3cmの透し孔を有する。	裏金具には金張りが施されている。		

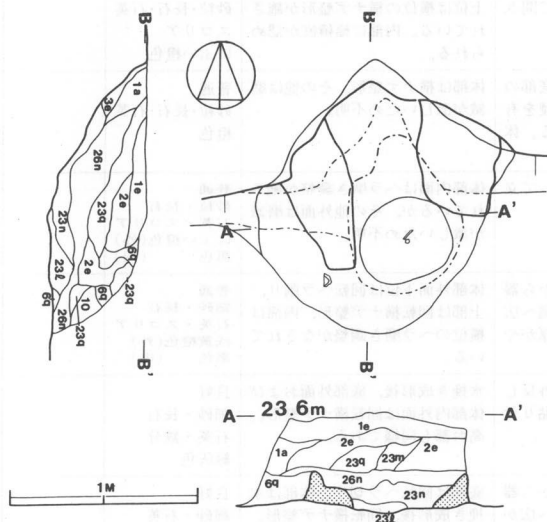
第7号住居跡（第25図）

本跡はB1_{i8}・B1_{j9}を中心に確認され、南側を第6号住居跡によって切られ、第8号住居跡の北東2m、第11号住居跡の南西1.5mに位置している。規模は長軸3.43m・短軸3.04mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-6°-Wである。壁高は48cmで、ほぼ垂直に立ち上がっており、第6号住居跡の床より約4cmほど浅い。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。また、東側の壁下に浅い溝を有している。ピットは確認することはできなかった。

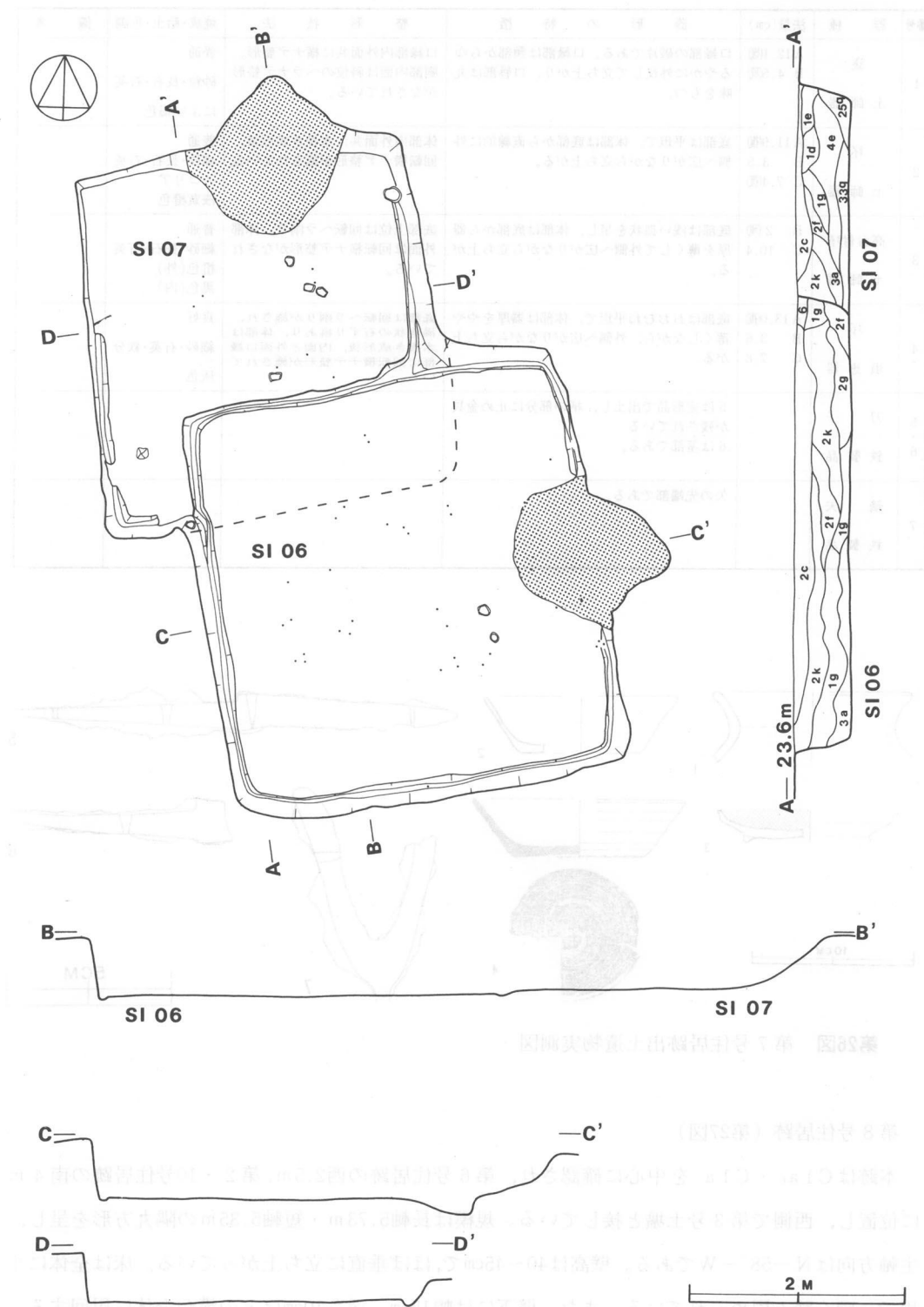
覆土は第6号住居跡によって切られているため、残された北側の土層から、自然流入の状態では堆積していたと思われる。

遺物は土師器、須恵器の破片を住居跡の中央部から少量出土する。とくに、本住居跡からの遺物は他の住居跡に比較して少なかった。

竈は北壁中央部に付設され、長さ116cm・袖幅105cm・焚口部幅38cmで、袖部はオリーブ褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を120cmの幅で45cmほど掘り込み、火床は直径45cmの円形状を呈し、床を6cmほど掘り凹めている。遺物は焼成部から土師器の環形土器・高台付環形土器（第26図-2・3）が出土している。




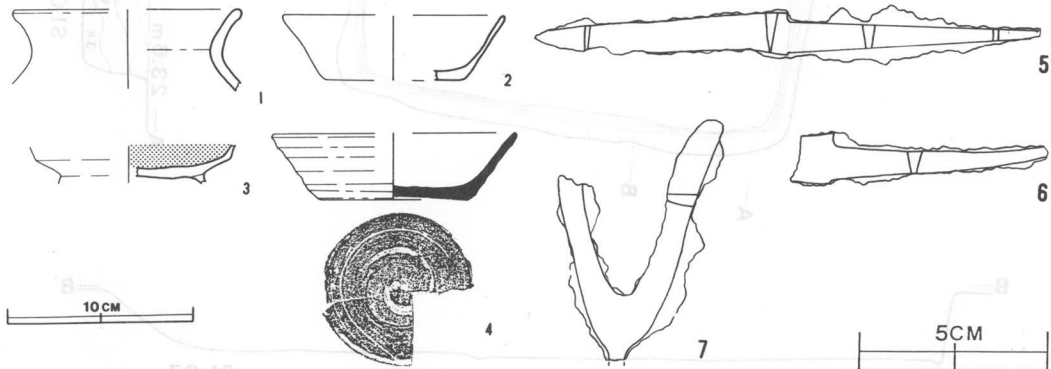
第24図 第7号住居跡竈実測図



第25図 第6・7号住居跡実測図

出土遺物解説表（第26図）

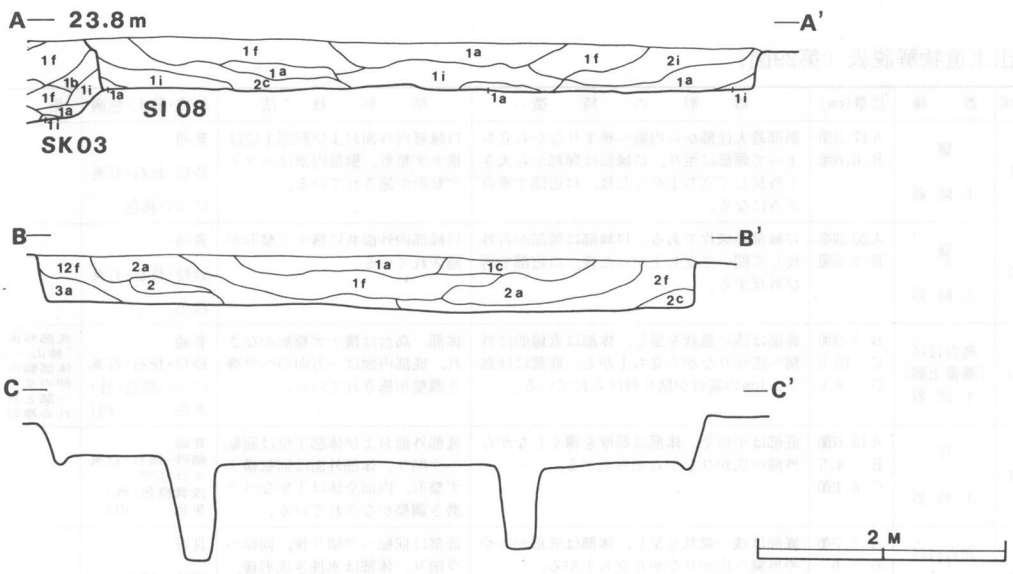
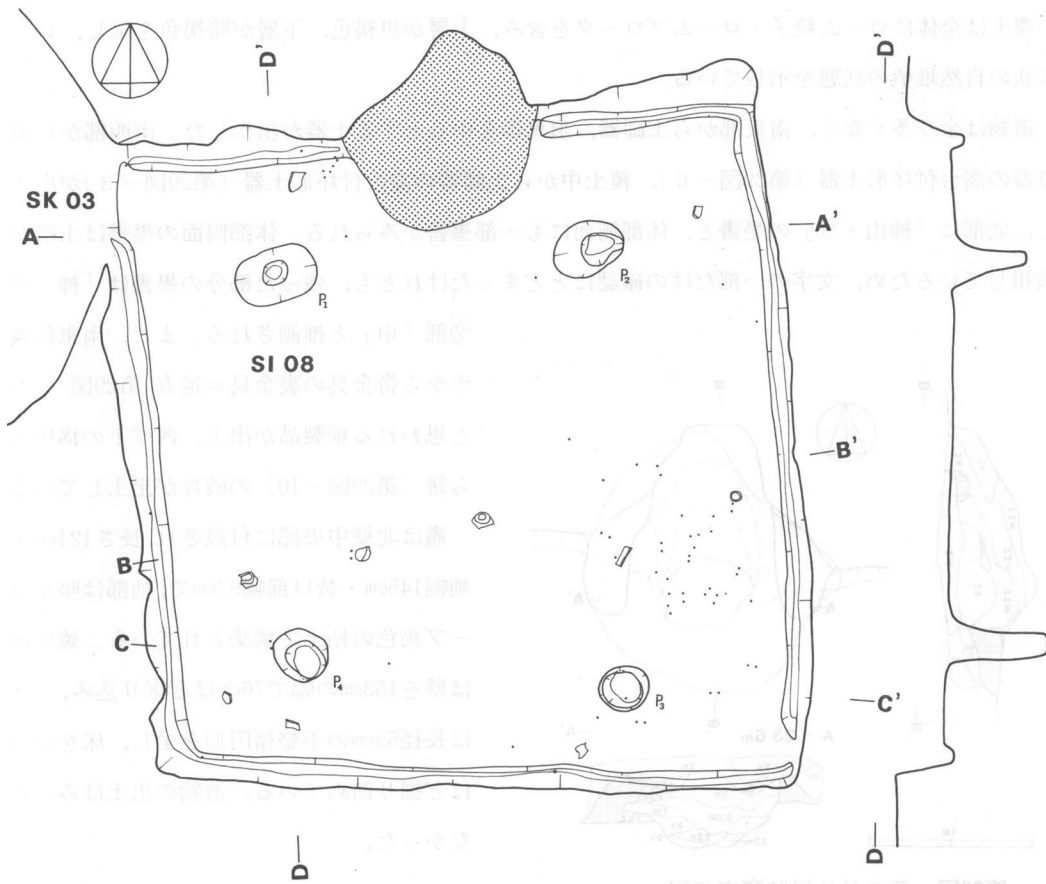
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 12.1(匳) B 4.5(匳)	口縁部の破片である。口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がり、口唇部は丸味をもつ。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部内面は斜位のヘラナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英にぶい褐色	
2	坏 土師器	A 11.9(匳) B 3.5 C 7.4(匳)	底部は平坦で、体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。	体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英スコリア 浅黄橙色	
3	高台付坏 土師器	B 2(匳) C 10.4	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から器厚を薄くして外側へ広がりながら立ち上がる。	底部上位は回転ヘラ削り。体部外面は回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 橙色(外) 黒色(内)	
4	坏 須恵器	A 13.0(匳) B 3.6 C 7.8	底部はおおむね平坦で、体部は器厚をやや薄くしながら、外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ削りが施され、渦巻状の石すり痕あり、体部は水挽き成形後、内面と外面口縁部に回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・石英・鉄分 灰色	
5・6	刀子 鉄製品		5は完形品で出土し、柄の部分に止め金具が残されている 6は基部である。			
7	鏃 鉄製品		矢の先端部である。			



第26図 第7号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡（第27図）

本跡はC1a₆・C1a₇を中心に確認され、第6号住居跡の西2.5m、第2・10号住居跡の南4mに位置し、西側で第3号土壇と接している。規模は長軸5.73m・短軸5.35mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-58°-Wである。壁高は40~45cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。また、壁下には幅15cm、深さ10cmほどの溝が全体に周回する。ピットは4個検出され、4個とも方形に掘られ、深さは58~84.5cmを測る深いピットであるため、



第27图 第8号住居跡实测图

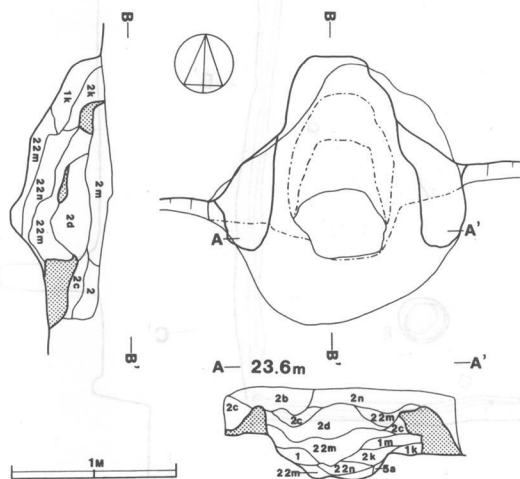
支柱穴と考えられる。

覆土は全体にローム粒子・ロームブロックを含み、上層が黒褐色、下層が暗褐色を呈し、レンズ状の自然堆積の状態を示している。

遺物は余り多くなく、南東部から土師器、須恵器を中心とする土器が出土した。南西部から須恵器の高台付坏形土器（第29図-6）、覆土中から土師器の高台付坏形土器（第29図-3）が出土し、底部に「神山・ヨ」の墨書と、体部側面にも一部墨書がみられる。体部側面の墨書は土器が破損しているため、文字の一部だけの確認にとどまったけれども、残った部分の墨書は「神」の

旁部「申」と推測される。また、南東部覆土から帯金具の裏金具=巡方（第29図-12）と思われる銅製品が出土。西壁下の溝中から鎌（第29図-10）の破片が出土している。

竈は北壁中央部に付設され、長さ124cm・袖幅145cm・焚口部幅92cmで、袖部は暗オリーブ褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を153cmの幅で76cmほど掘り込み、火床は長径59cmの不整楕円形を呈し、床を20cmほど掘り凹めている。遺物の出土はみられなかった。



第28図 第8号住居跡竈実測図

出土遺物解説表（第29図）

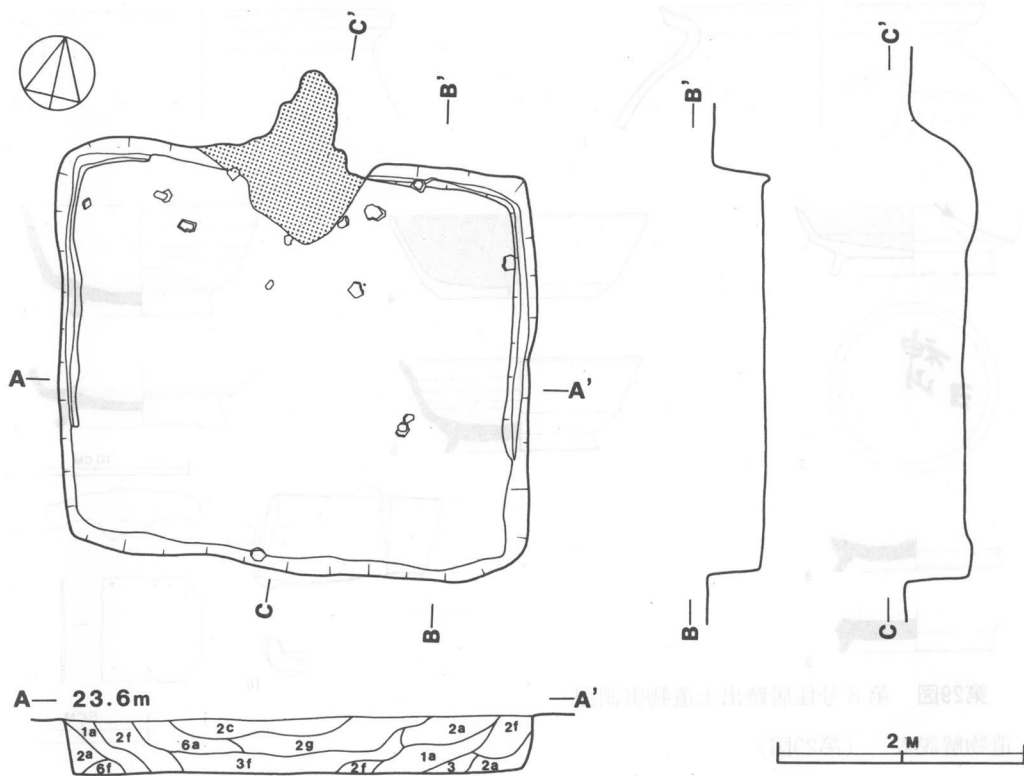
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 17.2(復) B 6.6(復)	胴部最大径部から内側へ狭まりながら立ち上って頸部に至り、口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がった後、口辺部で垂直さみになる。	口縁部内外面および胴部上位は横ナデ整形。胴部内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	
2	甕 土師器	A 20.3(復) B 5.8(復)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から外反して開いて立ち上がった後、口辺部で再び外反する。	口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
3	高台付坏 (墨書土器) 土師器	B 3.9(復) C 10.9 D 8.9	底部は浅い皿状を呈し、体部は直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。底部には高さ1.1cmの高台が貼り付けられている。	体部、高台は横ナデ整形がなされ、底部内面は一方向のヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色(外) 黒色(内)	底部外面に「神山・ヨ」体部側面に神の文字の一部と思われる墨書
4	坏 土師器	A 13.6(復) B 4.5 C 8.1(復)	底部は平坦で、体部は器厚を薄くしながら外側へ広がりながら立ち上がる。	底部外面および体部下位は回転ヘラ削り。体部外面は回転横ナデ整形、内面全体は丁寧なヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英 スコリア 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
5	高台付坏 須恵器	A 7.7(復) B 6 C 10.8 D 7.8	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部からやや外側へ広がりながら立ち上がる。底部には「ハ」字状の高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・鉄分 オリーブ灰色	



第29図 第8号住居跡出土遺物実測図

遺物解説表 (第29図)

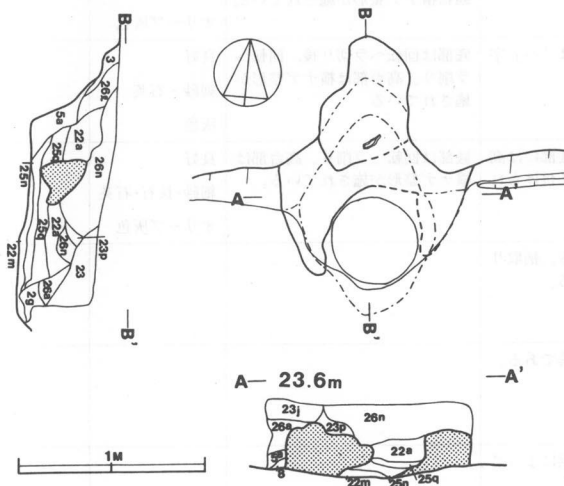
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	高台付坏 須恵器	A 12.8 B 5.0 C 10.5 D 8.2	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がった後、口縁部で外反する。底部には高台が貼り付けられている。	底部は回転へら削り。その他内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・鉄分 緑灰色	
7	高台付坏 須恵器	B 3.5(阙) C 11 D 9.2	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がる。底部には高台が貼り付けられている。	底部はへら削り。高台部は横ナデ整形。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石・石英 オリーブ灰色	
8	高台付坏 須恵器	B 1.9(阙) D 8.9	底部は浅い皿状を呈し、底部には「ハ」字状の高台が貼り付けられている。	底部は回転へら切り後、回転へら削り。高台部は横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・石英 灰色	
9	高台付坏 須恵器	B 1.7 D 8.2	底部は皿状を呈すると思われ、底部には高さ0.7cmの高台が「ハ」字状に貼り付けられている。	底部は回転へら削り。高台部は横ナデ整形が施されている。	良好 細砂・長石・石英 オリーブ灰色	
10	鎌 鉄製品	長さ 6.8	先の部分が欠損している鎌である。柄取り付け部はおり返しが行われている。			
11	金具 鉄製品	長さ 6.2	1個の孔を有する使途不明の金具である。			
12	帯金具 銅製品	縦 4.0 横 3.8 厚さ 0.1	帯金具の裏金具である。6本の釘によって止められていたと思われる。			



第30図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡（第30図）

本跡はC1a₃を中心に確認され、第8号住居跡の西5.5m、第3号土壌の西1.2mに位置している。規模は長軸3.78m・短軸3.25mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-14.5°-Wである。壁高は45~50cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められ、褐色を示している。また、東・西壁下には幅10cm、深さ7cmの溝が周回している。ピットは確認することができなかった。

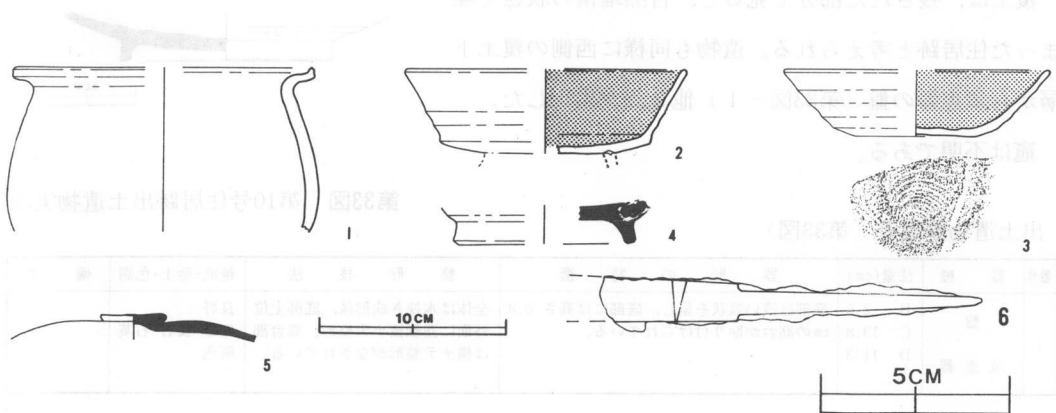


第31図 第9号住居跡電実測図

状の自然堆積を示している。

遺物の出土量は非常に少なく、覆土中から土師器の环形土器（第32図-3）、須恵器の高台付环形土器（第32図-4）などが出土している。

竈は北壁中央部に付設され、長さ135cm・袖幅95cm・焚口部幅（51）cmほどで、袖部は暗オリ一ブ褐色を示す粘土で構築されている。焼成部は壁を90cmの幅で70cmほど掘り込み、火床は直径47cmの円形状を呈し、床を5cmほど掘り凹めている。遺物は、焼成部から土師器の甕形土器（第32図-1）の口縁部、高台付环形土器（第32図-2）が出土している。



第32図 第9号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第32図）

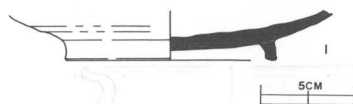
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 15.7(匳) B 8.8(匳)	胴部最大径部から内彎して立ち上がって頸部に至り、頸部から大きく外反して開く。	口縁部内外面に横ナデ。胴部内外面に共にヘラナデ整形がなされる。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
2	高台付環 土師器	A 14.8(匳) B 4.5 C 11.2	高台部欠損。底部は浅い皿状を呈し、体部は直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。	体部外面は水挽き成形後、回転横ナデ整形。内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・石英 スコリア 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
3	環 土師器	A 14.1(匳) B 3.6 C 6.5(匳)	底部は中央部がやや窪むが、おおむね平坦。体部は底部からゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は糸切り後、外側にヘラ削り。体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ整形。内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・スコリア 雲母 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
4	高台付環 須恵器	B 2.4 D 9.8	底部は浅い皿状を呈し、底部には高さ1.3cmの高台が貼り付けられている。	高台部は横ナデ整形。その他不明。	不良 細砂・長石 灰白色	
5	蓋 須恵器	B 1.4	低い宝珠状のつまみを有し、頂部から水平に開いた後、下へ広がりながら下がる。	つまみは横ナデ。水挽き成形後かた部に回転ヘラ削りがなされている。	不良 細砂・雲母 灰白色	
6	刀子 鉄製品	長さ10.1	先端部を欠損する刀子である。			

第10号住居跡（第9図）

本跡はB1i₆・B1i₇を中心に確認され、第8号住居跡の北3mに位置している。また、本跡の中に第2号住居跡が完全に重複していたため不明の点が多い。規模は長軸6.7m・短軸6.4mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-10°-Wである。壁高は北で40cm、西で50~52cmほどで、やや外傾して立ち上がっており、第2号住居跡との差は約10cmで本跡の方が浅いものである。床は90%以上が第2号住居跡によって切られているため不明の点が多いが、残された部分（西壁側）は褐色の柔らかい床である。ピットは3個（P2~P4）確認され、P2・P3は深さ32~40cmで支柱穴と考えられる。

覆土は、残された部分で見ると、自然堆積の状態で見られた住居跡と考えられる。遺物も同様に西側の覆土下層から須恵器の盤（第33図-1）他3点が出土した。

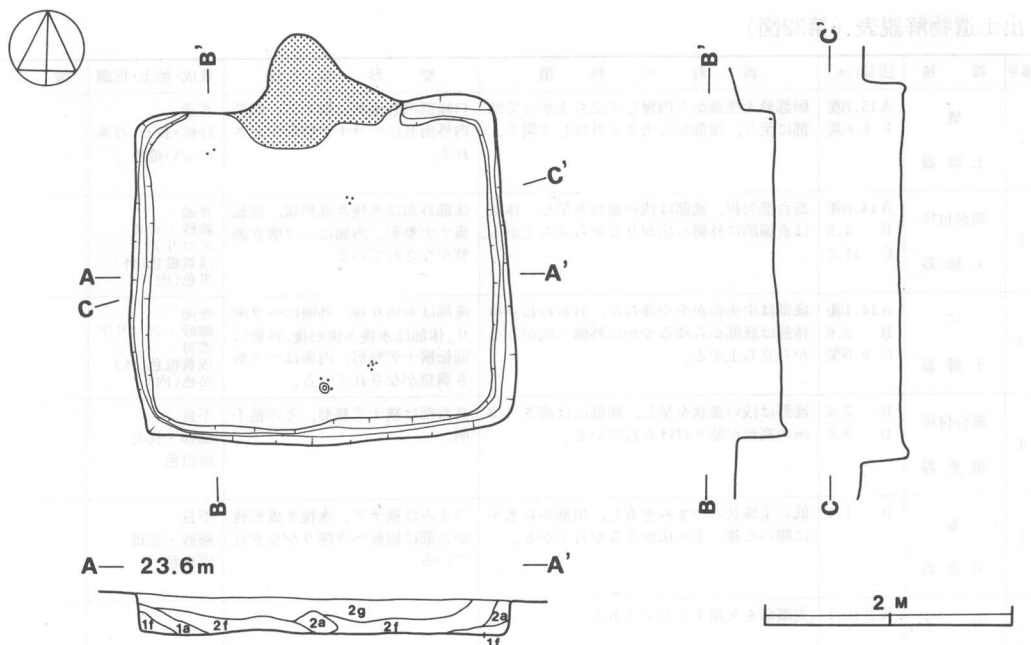
竈は不明である。



第33図 第10号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第33図）

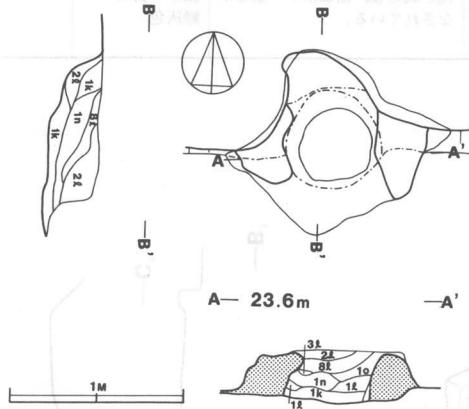
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	盤 須恵器	B 2.6 C 13.8 D 11.3	底部は浅い皿状を呈し、底部には高さ0.8cmの高台が貼り付けられている。	全体は水挽き成形後、底部上位外面に回転横ナデ整形。高台部は横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石・石英 灰色	



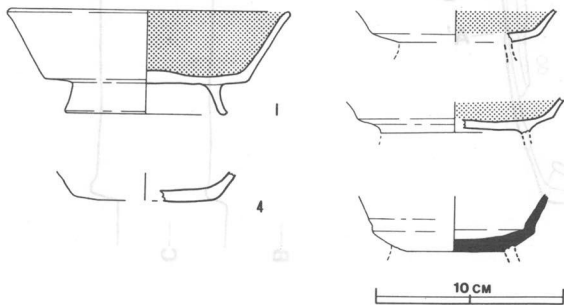
第34図 第11号住居跡実測図

第11号住居跡（第34図）

本跡はB1i₉から確認され、第7号住居跡の北東0.8m、第1号住居跡の北西0.7mに位置している。規模は本遺跡で確認された住居跡の中では最も小さな住居跡で、長軸2.92m・短軸2.71mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-45°-Wである。壁高は32~35cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は小型の住居跡ではあるが、硬く踏み固められ平坦である。また、壁下には幅12cm、深さ6cmの溝が全体に周回している。ピットは確認することはできなかった。



第35図 第11号住居跡竈実測図



第36図 第11号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第36図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	高台付坏 土師器	A 14.8(側) B 5.6 C 10.7 D 8.5	底部は平坦で、体部は底部から外側へ広がりがちながら立ち上がり、口辺部でやや外反する。底部には高さ1.6cmの高台が貼り付けられている。	底部は回転へら削り。体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面は丁寧なへら磨き調整がなされている。高台部は横ナデ整形である。	普通 細砂・長石・石英 黄橙色(外) 黒色(内)	
2	高台付坏 土師器	B 2.3 C 8.8	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から外側へ広がりがちながら立ち上がる。また底部には高台を貼り付けた痕が認められる。	全体是水挽き成形後、体部外面に回転横ナデ、内面はへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英 淡橙色(外) 黒色(内)	

覆土は全体にローム粒子などを含み柔らかく、全体に暗褐色を示し、レンズ状の自然流入の状態で堆積している。

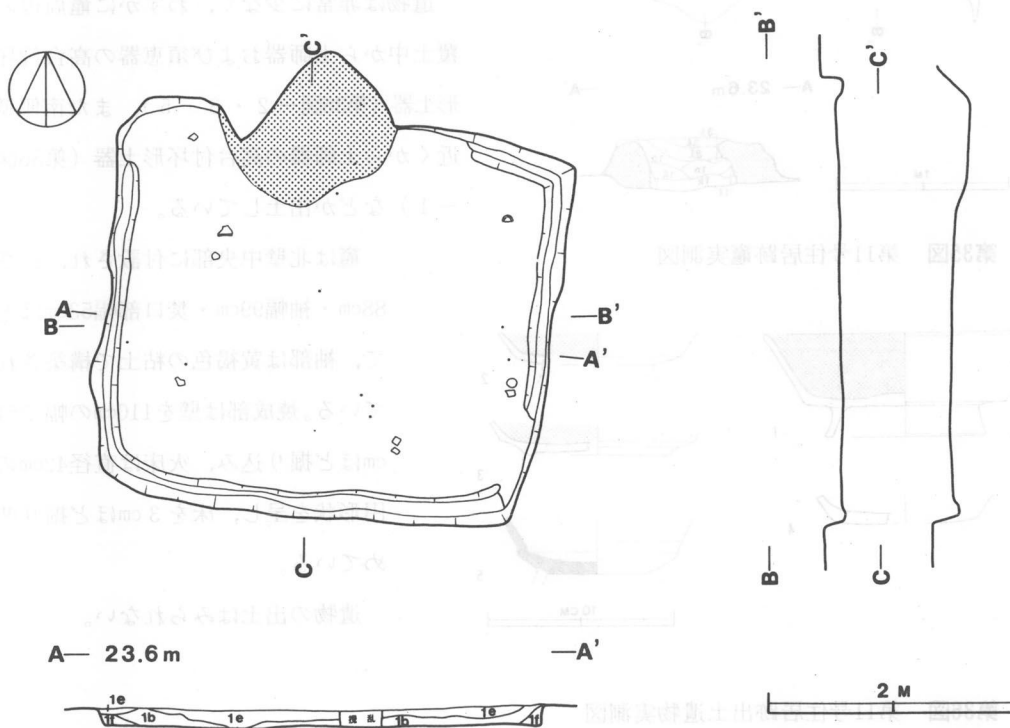
遺物は非常に少なく、わずかに竈周辺の覆土中から土師器および須恵器の高台付坏形土器（第36図-2・3・5）、また南側壁近くから土師器の高台付坏形土器（第36図-1）などが出土している。

竈は北壁中央部に付設され、長さ88cm・袖幅99cm・焚口部幅53cmほどで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を110cmの幅で51cmほど掘り込み、火床は直径42cmの円形状を呈し、床を3cmほど掘り凹めている。

遺物の出土はみられない。

出土遺物解説表（第36図）

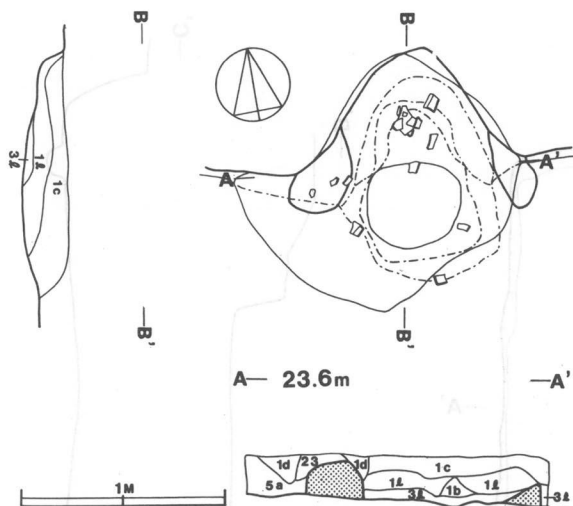
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	高台付坏 土師器	B 2.0 C 10.4	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から薄い器厚を有して外側へ広がりながら立ち上がる。	全体は水挽き成形後、体部外面に回転横ナデ、内面はへら磨き調整がなされている。底部は回転へら削り。	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
4	坏 土師器	B 1.5 C 7.4(微)	底部は平坦で、体部は底部から外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転へら削り。体部は水挽き成形後、横ナデ整形がなされている。	不良 細砂・長石・石英 スコリア 橙色	
5	高台付坏 須恵器	B 3.2 C 8.6	底部は皿状を呈し、体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。高台部貼り付け痕が認められる。	底部は回転へら削り。体部は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石 緑灰色	



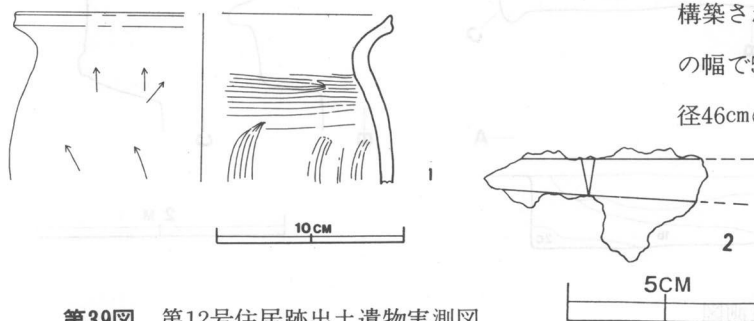
第37図 第12号住居跡実測図

第12号住居跡（第37図）

本跡はB2d₆を中心に確認され、第5号住居跡の北東10mに位置し、住居跡が集中している地区からやや北東に離れて構築されている。規模は長軸3.71m・短軸3.11mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-11.5°-Eである。壁高は約18cmと本遺跡の住居跡の中では最も浅く、壁は外側へ広がりながら立ち上がっている。また、床は全体に平坦で、中央部を中心に硬く踏み固められ、



第38図 第12号住居跡竈実測図



第39図 第12号住居跡出土遺物実測図

出土遺跡解説表 (第39図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形・技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 20.0 B 9.0(現)	胴部最大径より内彎して立ち上がり、頸部からゆるやかに外反して再び立ち上がる。口辺部はほぼ垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面は縦位のへら削り、内面は上位が横位、中位が縦位のへらナデ整形がなされている。	良好 砂粒・長石・石英 スコリア 橙色	
2	刀子 鉄製品	長さ 5.8(現)	刀子の先端部である。			

第13号住居跡 (第40図)

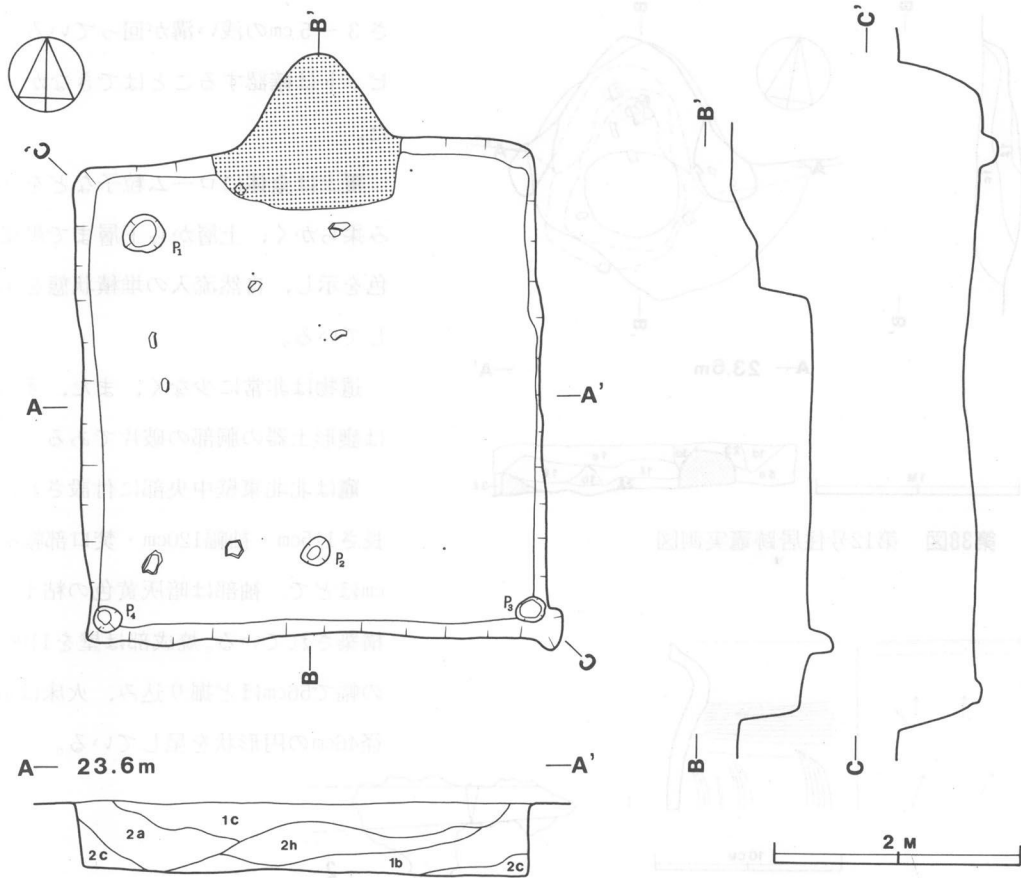
本跡はB1_{g5}を中心に確認され、第2・10号住居跡の北西2m、第14号住居跡の西5.2mに位置している。規模は長軸4m・短軸3.73mの方形を呈し、主軸方向はN-3°-Wである。壁高は南側で48cm、東・西側で60cmの深い住居跡で、壁は直線的に外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは4個確認され、P1・P2は20cmほどの浅

北壁を除く全体には幅10~15cm、深さ3~5cmの浅い溝が回っている。ピットは確認することはできなかった。

覆土は全体にローム粒子などを含み柔らかく、上層から下層まで黒褐色を示し、自然流入の堆積状態を示している。

遺物は非常に少なく、また、多くは甕形土器の胴部の破片である。

竈は北北東壁中央部に付設され、長さ115cm・袖幅120cm・焚口部幅80cmほどで、袖部は暗灰黄色の粘土で構築されている。焼成部は壁を110cmの幅で56cmほど掘り込み、火床は直径46cmの円形状を呈している。

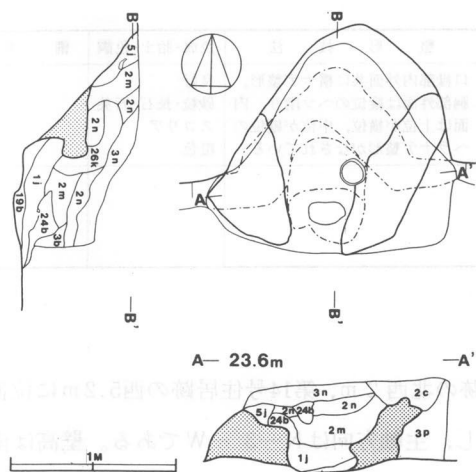


第40図 第13号住居跡実測図

いピットであるが、P1は位置的に支柱穴ではないかと考えられる。また、P2は入口的な施設に利用された柱穴と思われる。さらに、南側のコーナー一部には柱を立てた穴と思われるピットが2個確認され、他の住居跡では確認されなかった点で異なる。

覆土は全体にローム粒子・焼土粒子などを含み柔らかく、上層が黒褐色、中～下層にかけて暗褐色を示し、レンズ状の自然堆積である。

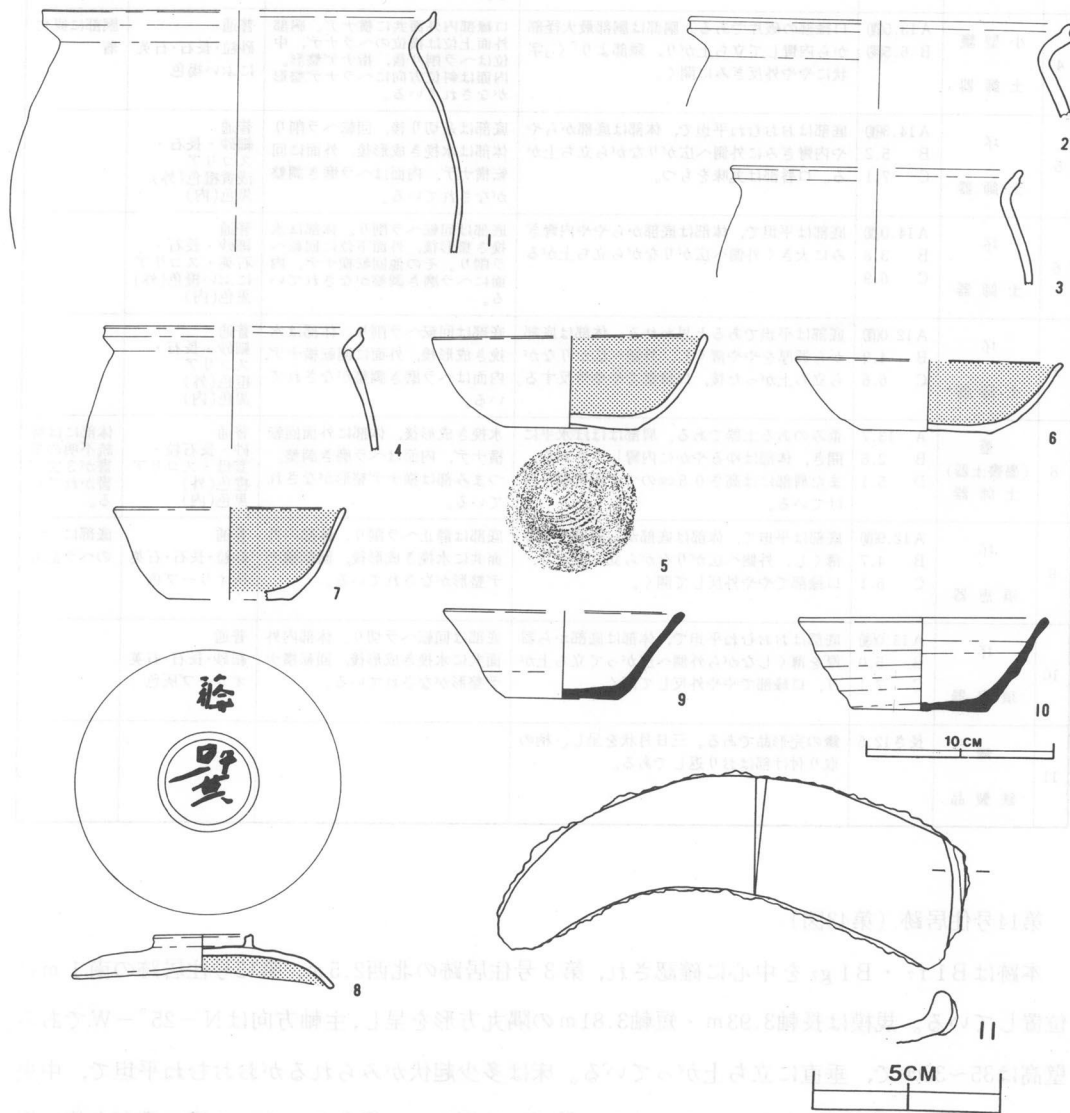
遺物は竈周辺を中心に土師器、須恵器の破片が出土し、竈南西部の覆土中から須恵



第41図 第13号住居跡竈実測図

器の坏形土器（第42図-10）、中央部から鉄製品の鎌（第42図-11）などが出土している。

竈は北壁中央部に付設され、長さ134cm・袖幅115cm・焚口部幅33cmほどで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を40cmの幅で83cmほど掘り込み、火床は長径23cmの楕円形状を呈し、床を7cmほど掘り凹めている。出土遺物は焼成部上層から土師器の蓋（第42図-8）が出土し、しかも体部側面と、底部に解読不明の墨書がみられる。



第42図 第13号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第42図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 20.2(匳) B 12.8(匳)	非常に器厚の薄い甕である。胴部は胴部最大径より内彎して頸部まで立ち上がった後、口縁部は頸部から外反して立ち上がりながら開き、口辺部は垂直に立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部内外面共にへラナデ後、指によるナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 雲母 橙色	

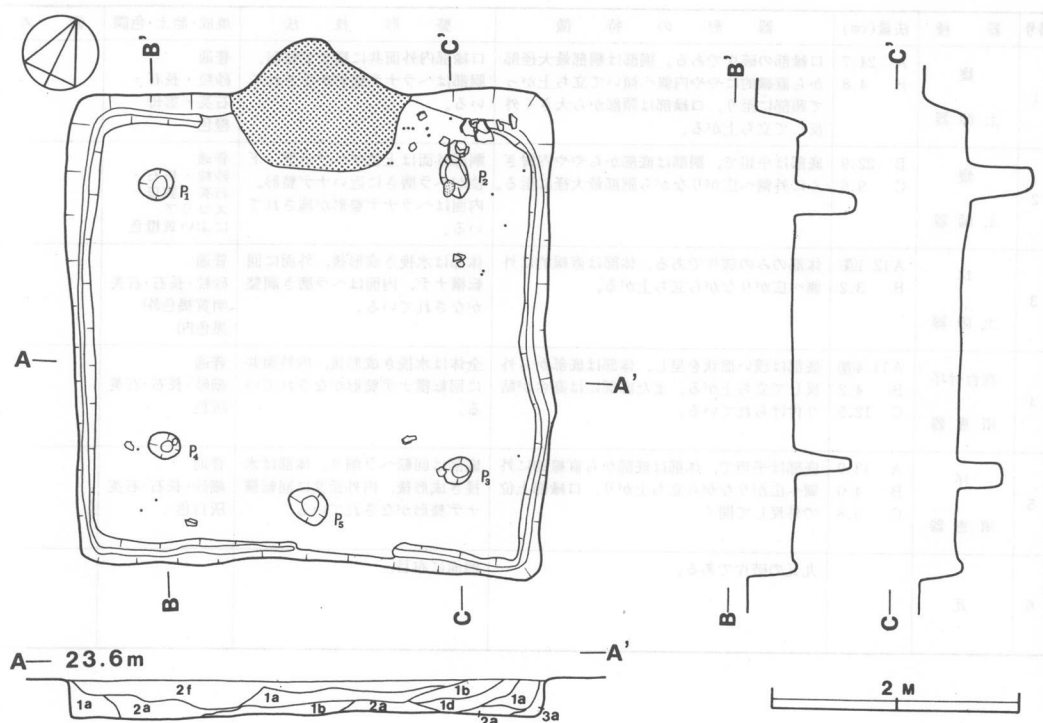
出土遺物解説表（第42図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	甕 土師器	A 20.2(匳) B 4.7(匳)	口縁部の破片である。胴部は胴部最大径部から内傾して立ち上がり、頸部に至り、頸部から外反して開きながら立ち上がった後、口辺部で稜を有して再び外反する。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	良好 砂粒・長石・石英・スコリア 橙色	
3	甕 土師器	A 15.3(匳) B 6.1(匳)	口縁部の破片である。胴部最大径部からやや内彎して立ち上がり、口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は縦位のヘラ削り、内面に横位の指ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	
4	小型甕 土師器	A 13.5(匳) B 6.5(匳)	口縁部の破片である。胴部は胴部最大径部から内彎して立ち上がり、頸部より「く」字状にやや外反ぎみに開く。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面上位は横位のヘラナデ、中位はヘラ削り後、指ナデ整形。内面は斜位方向にヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	胴部に媒付着
5	坏 土師器	A 14.3(匳) B 5.2 C 7.1	底部はおおむね平坦で、体部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。口唇部は丸味をもつ。	底部は糸切り後、回転ヘラ削り 体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・スコリア 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
6	坏 土師器	A 14.0(匳) B 3.8 C 6.9	底部は平坦で、体部は底部からやや内彎ぎみに大きく外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き整形後、外面下位に回転ヘラ削り。その他回転横ナデ、内面にヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英・スコリア にぶい褐色(外) 黒色(内)	
7	坏 土師器	A 12.0(匳) B 4.9 C 6.6	底部は平坦であると思われる。体部は底部から器厚をやや薄くし、外側へ広がりながら立ち上がった後、口縁部でやや外反する。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・スコリア 褐色(外) 黒色(内)	
8	蓋 (墨書土器) 土師器	A 13.7 B 2.6 D 5.1	歪みのある土器である。肩部はほぼ水平に開き、体部はゆるやかに内彎してさがる。また肩部には高さ0.5cmのつまみを貼り付けている。	水挽き成形後、体部に外面回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整。つまみ部は横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石粒・雲母・スコリア 褐色(外) 黒色(内)	体部には解説不明の墨書が3文字書かれている。
9	坏 須恵器	A 12.9(匳) B 4.7 C 6.1	底部は平坦で、体部は底部から器厚をやや薄くし、外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。	底部は静止ヘラ削り。体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 灰オリーブ色	底部に「十」のヘラ記号
10	坏 須恵器	A 13.0(匳) B 5.0 C 7.1	底部はおおむね平坦で、体部は底部から器厚を薄くしながら外側へ広がって立ち上がり、口縁部でやや外反して開く。	底部は回転ヘラ削り。体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 オリーブ灰色	
11	鎌 鉄製品	長さ12.5	鎌の完形品である。三日月状を呈し、柄の取り付け部はおり返しである。			

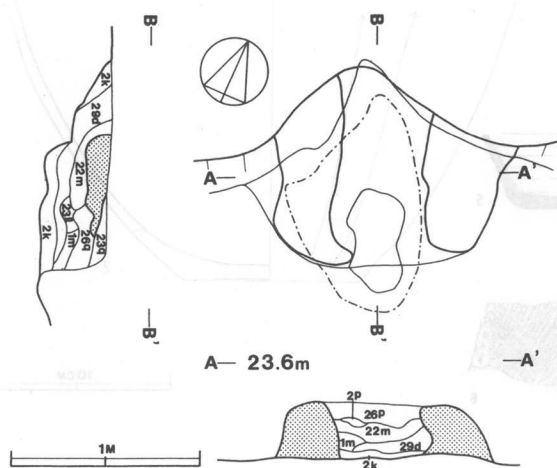
第14号住居跡（第43図）

本跡はB1 f₇・B1 g₇を中心に確認され、第3号住居跡の北西2.5m、第15号住居跡の南1mに位置している。規模は長軸3.93m・短軸3.81mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は35～38cmで、垂直に立ち上がっている。床は多少起伏がみられるがおおむね平坦で、中央部を中心に硬く踏み固められている。また、壁下には幅10cm、深さ7～8cmの浅い溝が全体に周回している。ピットを5個検出し、P1～P4は規則性と深さから主柱穴と考えられる。P5は南壁下中央部に位置し、入口的な施設に利用されたピットではないかと思われる。

覆土は全体にローム粒子・ロームブロックなどを含み、上層が暗褐色、中～下層にかけて黒褐色を呈し、自然流入の状態では堆積している。



第43図 第14号住居跡実測図



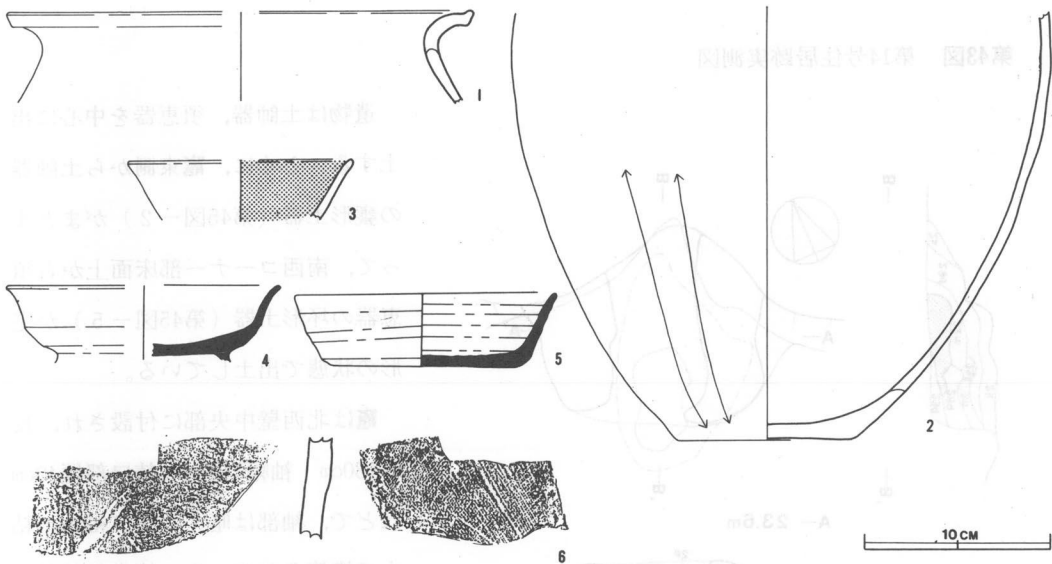
第44図 第14号住居跡竈実測図

遺物は土師器、須恵器を中心に出土する。とくに、竈東側から土師器の甕形土器（第45図-2）がまとまって、南西コーナー部床面上から須恵器の坏形土器（第45図-5）が完形の状態で出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ130cm・袖幅114cm・焚口部幅40cmほどで、袖部は暗オリーブ褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を140cmの幅で44cmほど掘り込み、火床は長径54cmの不整楕円形を呈し、床を2cmほど掘り凹めている。遺物の出土はみられなかった。

出土遺物解説表 (第45図)

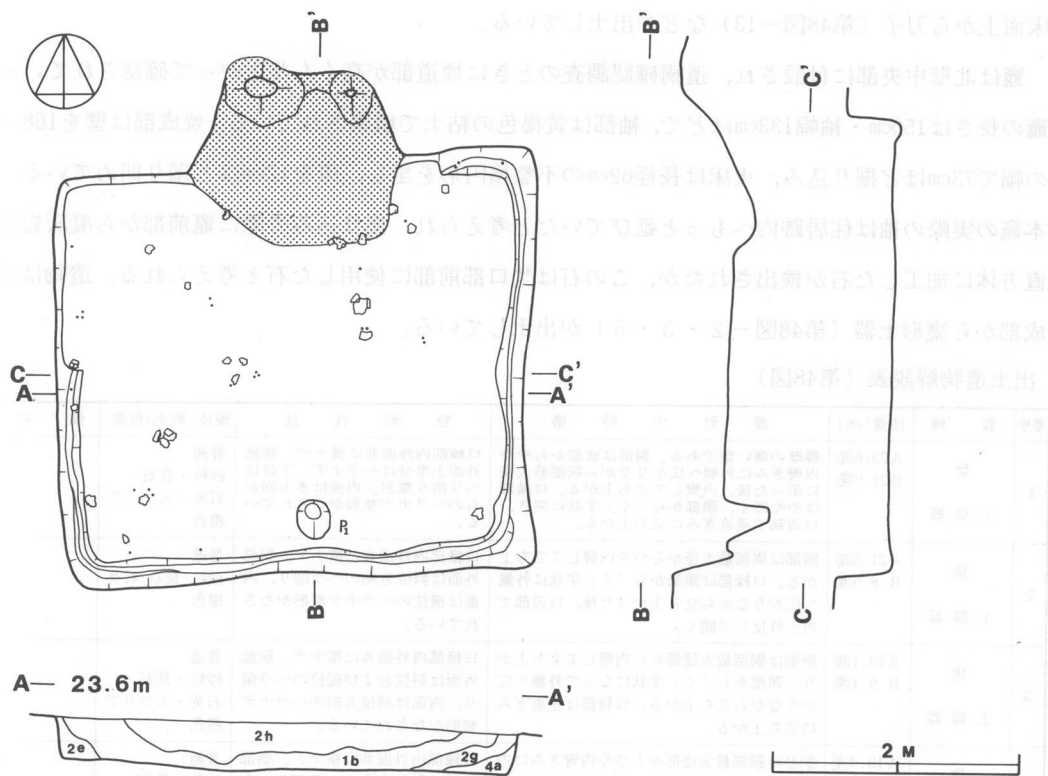
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 24.7 B 4.8	口縁部の破片である。胴部は胴部最大径部から直線的にやや内側へ傾いて立ち上がって頸部に至り、口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。 胴部はヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・雲母 橙色	
2	甕 土師器	B 22.9 C 9.6	底部は平坦で、胴部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりながら胴部最大径に至る。	胴部外面は上位がヘラナデ、下位がヘラ磨きに近いナデ整形。 内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・雲母・ スコリア にぶい黄橙色	
3	坏 土師器	A 12.1(匳) B 3.2	体部のみ破片である。体部は直線的に外側へ広がりながら立ち上がる。	体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英 明黄褐色(外 黒色内)	
4	高台付坏 須恵器	A 14.4(匳) B 4.2 C 12.5	底部は浅い皿状を呈し、体部は底部から外反して立ち上がる。また底部には高台が貼り付けられている。	全体是水挽き成形後、内外面共に回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 灰色	
5	坏 須恵器	A 13.9 B 4.0 C 9.8	底部は平坦で、体部は底部から直線的に外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部上位で外反して開く。	底部は回転ヘラ削り。体部是水挽き成形後、内外面共に回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 灰白色	
6	瓦		丸瓦の破片である。	凹面に布目。		



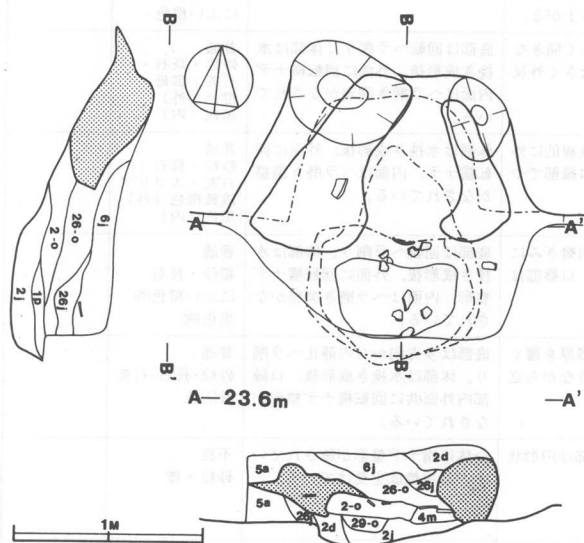
第45図 第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡 (第46図)

本跡はB1e₈・B1f₈を中心に確認され、第14号住居跡の北1mに位置している。規模は長軸3.9m・短軸3.42mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-0.2°-Wである。壁高は40~42cmほどで、



第46図 第15号住居跡実測図

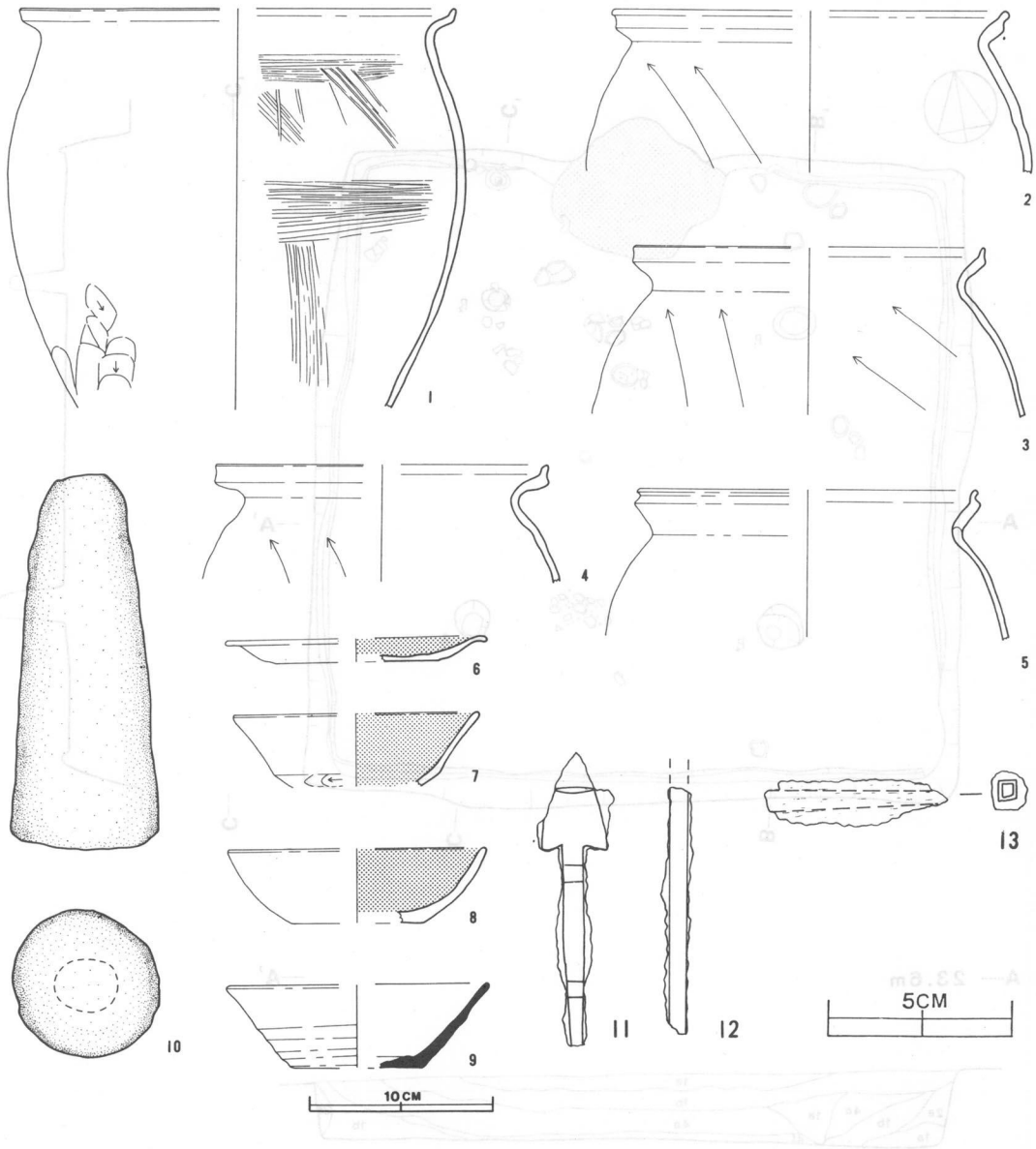


から土師器の甕形土器（第48図-1）、また鉄製品は西壁下の覆土上層から鉄鏃（第48図-11）、床面上から刀子（第48図-13）などが出土している。

竈は北壁中央部に付設され、遺構確認調査のときに煙道部が高くもり上がって確認されている。竈の長さは150cm・袖幅133cmほどで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を168cmの幅で73cmほど掘り込み、火床は長径62cmの不整楕円形を呈し、床を12cmほど掘り凹めている。本竈の実際の袖は住居跡内へもって延びていたと考えられ、掘り込みの際に竈前部から凝灰岩を直方体に加工した石が検出されたが、この石は焚口部前部に使用した石と考えられる。遺物は焼成部から甕形土器（第48図-2・3・5）が出土している。

出土遺物解説表（第48図）

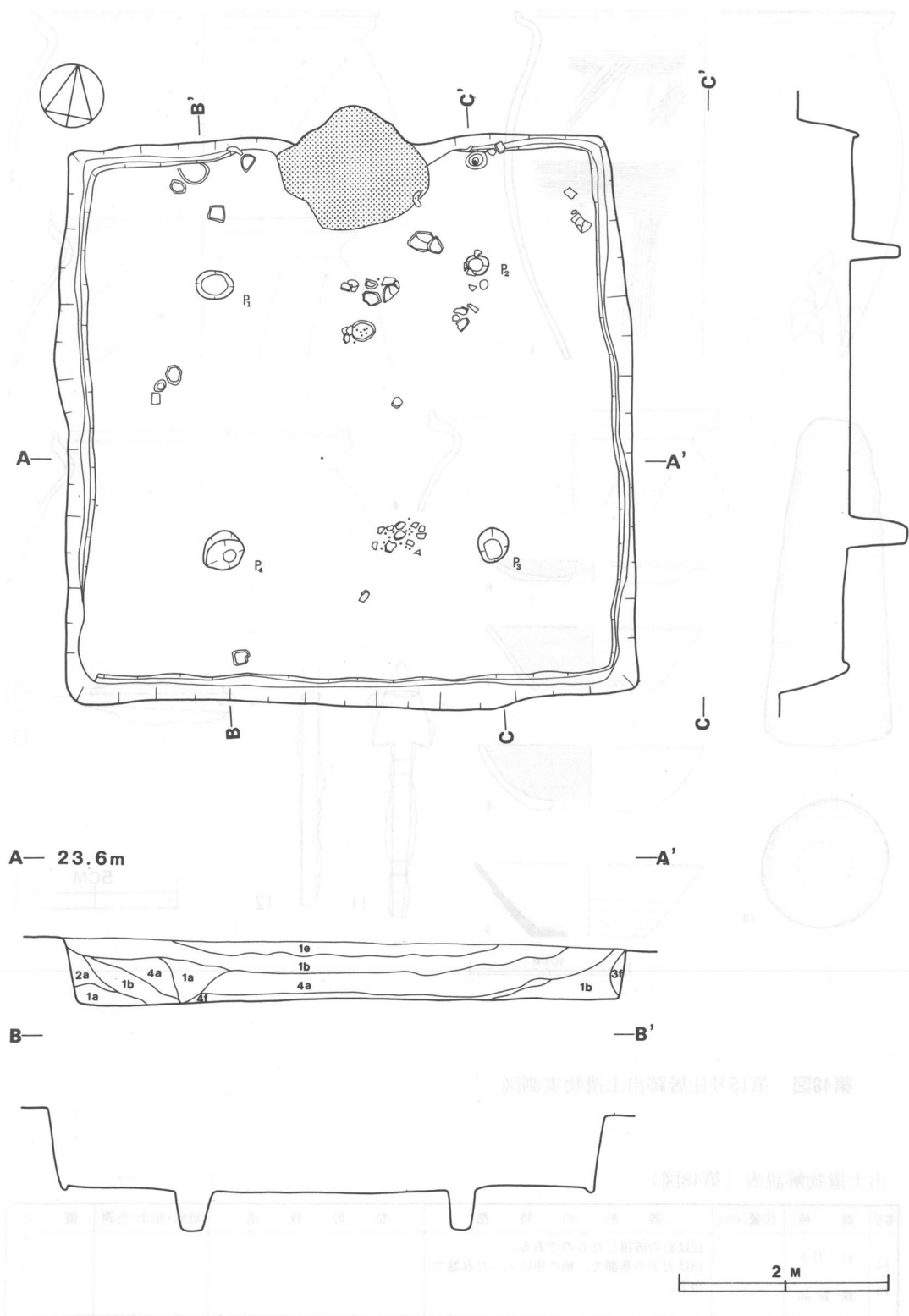
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 23.6(匁) B 21.9(匁)	器厚の薄い甕である。胴部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりながら胴部最大径に至った後、内彎して立ち上がる。口縁部はやや短く、頸部から「く」字状に開き、口辺部で垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面上半分はヘラナデ、下位はヘラ削り整形。内面は多方向からのヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 橙色	
2	甕 土師器	A 21.5(匁) B 8.9(匁)	胴部は胴部最大径からやや内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から「く」字状に外側へ広がりながら立ち上がった後、口辺部で短く外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は斜位方向のヘラ削り、内面は横位のヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
3	甕 土師器	A 19.1(匁) B 9.4(匁)	胴部は胴部最大径部から内彎して立ち上がり、頸部から「く」字状になって外側へ広がりながら立ち上がる。口唇部は垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は斜位および縦位のヘラ削り、内面は斜位方向のヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 橙色	
4	甕 土師器	A 18.0(匁) B 6.3(匁)	胴部は胴部最大径部からやや内彎ぎみに内側へ傾いて立ち上がり、頸部から外反して立ち上がった後、口辺部で垂直に立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は斜位方向のヘラ削り、内面は指ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 橙色	
5	甕 土師器	A 18.5(匁) B 8.1(匁)	胴部は胴部最大径部からやや内彎ぎみに内側へ傾いて立ち上がり、頸部から器厚を厚くして外反ぎみに立ち上がった後、再び口辺部で外反して垂直ぎみに立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・雲母 にぶい橙色	
6	皿 土師器	A 14.2(匁) B 1.3 C 8.8(匁)	底面は平坦で、体部は外側へ大きく開きながら立ち上がった後、口縁部で大きく外反して水平になる。	底面は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・雲母 橙色(外) 黒色(内)	
7	坏 土師器	A 13.3(匁) B 4	底部を欠損する土器片。体部は直線的に外側へ広がって立ち上がった後、口縁部でやや外反する。	体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ、内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 浅黄橙色(外) 黒色(内)	
8	坏 土師器	A 13.9(匁) B 4.1 C 7.1(匁)	底部は平坦で、体部は底部から内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がり、口唇部は丸味をもつ。	底部は回転ヘラ削り。体部は水挽き成形後、外面に回転横ナデ整形、内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石 にぶい橙色(外) 黒色(内)	
9	坏 須恵器	A 14.1 B 4.6 C 7.1(匁)	底部は平坦で、体部は底部から器厚を薄くしながら、直線的に外側へ広がりながら立ち上がって開く。	底部は多方向からの静止ヘラ削り。体部は水挽き成形後、口縁部内外面共に回転横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 緑灰色	
10	支脚 土師器	長さ20.4	幅の狭い円錐台状を呈し、両端部は円形状の平面形を有する。	全体は指ナデ整形が施されている。二次焼成を受けている。	不良 砂粒・礫	
11	鉄鏃 鉄製品	長さ8.0	鏃の先端部である。			



第48図 第15号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第48図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
12	釘・刀子		12は釘の破損したものである。			
13	鉄製品		13は刀子の基部で、柄の中に入った状態で出土。			

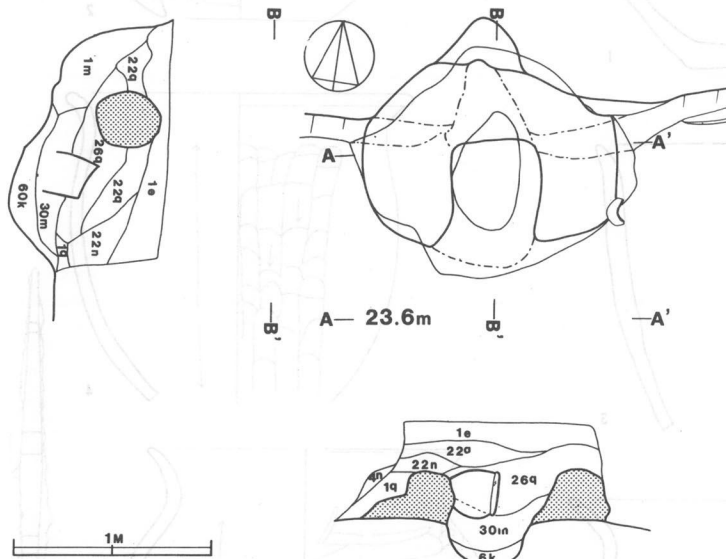


第49图 第16号住居跡実测图

第16号住居跡（第49図）

本跡は遺跡の東側 B4 f₄・B4 f₅ から単独で確認された住居跡で、集落は南東エリア外へのびている可能性が非常に強い。規模は長軸5.36m・短軸5.21mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-14.7°-Wである。壁高は60~67cmで、ほぼ直線的に外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。また、壁下には幅7cm、深さ5cmの細い溝が全体に周回している。ピットは4個検出され、柱間が2.5m・2.7mで、深さは49~57cmと深く、穴の底面は沈み防止のために粘土と砂粒を混ぜた土を入れて固められている。

覆土はローム粒子などを含むしまった覆土で、上層~下層まで黒褐色を示し、自然流入の堆積状態である。



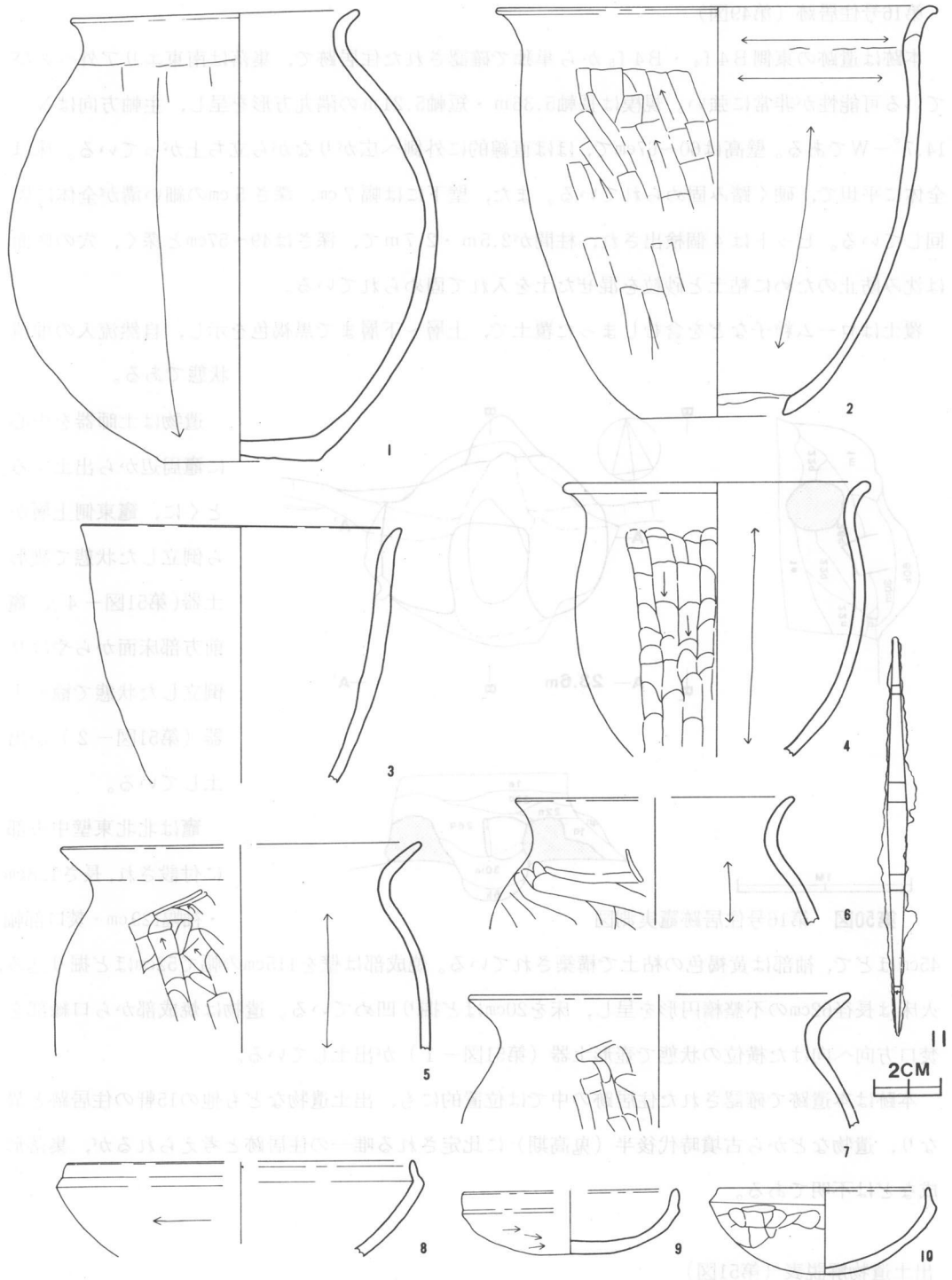
第50図 第16号住居跡竈実測図

竈は北北東壁中央部に付設され、長さ128cm・袖幅129cm・焚口部幅45cmほどで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を115cmの幅で52cmほど掘り込み、火床は長径62cmの不整楕円形を呈し、床を20cmほど掘り凹めている。遺物は焼成部から口縁部を焚口方向へ向けた横位の状態で壺形土器（第51図-1）が出土している。

本跡は本遺跡で確認された住居跡の中では位置的にも、出土遺物なども他の15軒の住居跡と異なり、遺物などから古墳時代後半（鬼高期）に比定される唯一の住居跡と考えられるが、集落形成などは不明である。

出土遺物解説表（第51図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土器	A 17.0 B 26.9 C 9.2	底部は中央部がやや窪むが、おおむね平坦である。胴部は球状を呈し、胴部最大径は中位よりやや上に有する。口縁部は頸部から垂直ぎみに立ち上がった後、外反しながら開く。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面はへら削り、内面はへらナデ整形。底部はへら削り整形。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	



第51図 第16号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第51図）

番号	器種	質量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	甑 土師器	A 26.0 B 24.6 C 8.5	胴部は底部より器厚を同じにして、やや内彎ぎみに外側へ、下位はやや大きく、中位から小さく立ち上がって頸部に至る。口縁部は短く、頸部から器厚を薄くしながら外反して立ち上る。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は雑な斜位方向のへら削り、内面はへらナデ整形がなされている。二次焼成を受けている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色	
3	甑 土師器	A 19.0 B 16.3(復)	胴部下位を欠損する土器である。胴部はやや内彎ぎみに外側へ小さく広がって立ち上がって頸部に至り、口縁部は短く、胴部から連続的にやや外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部は縦位のへら削り、内面はへらナデ整形後、指ナデ調整がなされている。	不良 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
4	甗 土師器	A 18.0 B 16.3	底部欠損の土器である。胴部は器厚を同じにして、内彎ぎみに外側へ広がって胴部最大径に至った後、内側へ小さく傾いて立ち上がる。口縁部は短く、外反しながら立ち上がって開く。	口縁部内外面は横ナデ整形。胴部は縦方向のへら削り、内面は縦位のへら削り後、指による横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・雲母 浅黄橙色	
5	甗 土師器	A 21.2(復) B 12.5(復)	胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は胴部最大径部から内彎ぎみに内側へ立ち上がった後、頸部から大きく外側へ広がって立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は斜位方向のへら削り、内面はへらナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石・石英 浅黄橙色	
6	甗 土師器	A 16.7 B 7.3(復)	口縁部の破片である。胴部は胴部最大径部から大きく内側へ内彎ぎみに立ち上がった後、頸部から大きく外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は多方向からのへら削り、内面は縦位のへらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
7	甗 土師器	A 22.5 B 7.7(復)	口縁部の破片である。胴部は胴部最大径部からやや大きく内側へ内彎して立ち上がって頸部に至り、頸部から外反してやや立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部外面は斜位方向の雑なへら削り、内面はへらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア にぶい橙色	
8	坏 土師器	A 20.6(復) B 5.7 C 21.7(復)	底部は深い皿状を呈し、体部は底部から短く内側へ立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ。底部外面はへら削り、内面はへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい橙色	
9	坏 土師器	A 12.7(復) B 3.8 C 12.9(復)	底部はやや深い皿状を呈し、体部は底部から稜を有して垂直ぎみに立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ。底部外面は多方向からのへら削り、内面はへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい黄橙色	
10	坏 土師器	A 12.6 B 5.2 C 13.6	底部は深い皿状を呈し、体部は底部から短く内側へ傾いて立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ整形。底部はへら削り後雑なへら磨き、内面は放射状のへら磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・ 石英・雲母 にぶい黄橙色	
11	錐 鉄製品	長さ12.8	錐と思われる鉄製品である。上位には木質部が残っている。			

2 土壙

本遺跡から確認された土壙は4基であり、いずれの土壙も竪穴住居跡が集中している遺跡の西側から検出されている。いずれの土壙も2～4基が重複する土壙で、形状は円形・不整楕円形・不定形を呈し、遺物は須恵器の小破片を少量出土している。

第1号土壙（第52図）

本土壙はB2f₁・B2g₁より確認され、第2号土壙によって南西部が切られ、第5号住居跡の西5mに位置している。規模は長径2.7m・短径2.6mの円形を呈し、長軸方向はN-88°-Wである。壁高は70cmで、壁面の一部は床面のやや上位で約5～10cmオーバーハングして立ち上がっている。底面はおおむね平坦である。

覆土は全体にローム粒子を含み、中層から下層部には凝灰岩・焼土粒子などを含み、上層が黒褐色、中層から下層が黒色のしまった土で、自然流入の状態に堆積している。遺物の出土量は非常に少なく、覆土中から土師器、および須恵器の坏形土器・高台付坏形土器（第54図-1・2）の破片などが出土している。

第2号土壙（第52図）

本土壙はB1g₀から確認され、第1号土壙の一部を切り、第3号住居跡の北東5mに位置している。規模は長軸（1.7）m・短軸0.7mの長方形を呈し、長軸方向はN-83°-Eである。壁高は60cmで、壁面は垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。覆土はローム粒子を含み、柔らかくサラサラしている。色調は黒褐色で、自然堆積の状態を示している。他の3基の土壙とは覆土の状態が異なり、作物等を貯蔵するために掘られた新しい時期の土壙と考えられる。なお、遺物の出土はみられない。

第3号土壙（第52図）

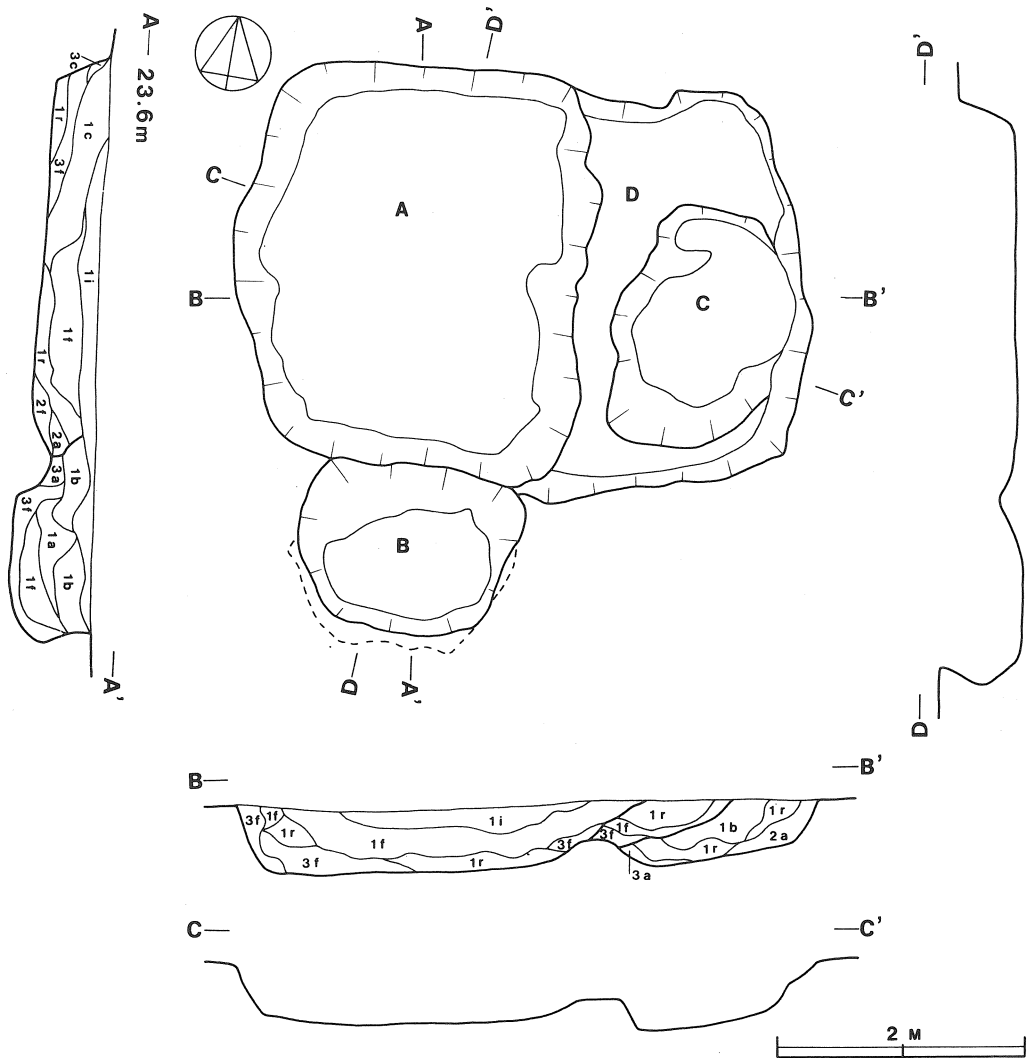
本土壙はC1a₅を中心に確認され、東側で第8号住居跡と接し、第9号住居跡の東1mに位置している。また、本土壙は底面の状態から2基の土壙が重複していると考えられるが、土層から新旧関係などを区別することができなかった。2基の土壙をA・Bに区別する。

AはBの西側に存し、規模は長径3.0m・短径2.7mの不整形を呈し、長軸方向はN-7°-Wである。壁高は1.1mで、東側は徐々に広がり、その他は直接的に外側へ広がりながら立ち上がっている。底面はおおむね平坦である。

Bの規模は長径3.5m・短径（1.6m）の不整楕円形を呈し、長軸方向はN-7.5°-Wである。

壁高は70cmで、壁面はゆるやかに外側へ立ち上がっている。底面は平坦である。

A・Bの覆土は全体にローム粒子・ロームブロックを含み、中層の一部には焼土粒子・炭化粒子などが含まれている。色調は暗褐色・黒褐色を呈し、全体にしまった覆土で、東側からの自然堆積である。遺物の出土量は非常に少なく、覆土中から甕形土器（第54図-3）の底部、覆土上から土師器、および須恵器の坏形土器（第54図-4・5）が出土している。



第53図 第4号土壌実測図

第4号土壌（第53図）

本土壌はC2 b₃・C2 b₄を中心に確認され、第1号住居跡の南東5mに位置している。また、本土壌は底面及び覆土土層から4基の土壌が重複する土壌群であることが調査により判明する。各土壌の新旧関係は土層からみて、C号土壌が最も古く、D号・A号・B号の順に掘られたものである。

Aの規模は長軸3.2m・短軸2.7mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-9°-Wである。壁高は約50cmで、ゆるやかに外側に広がりながら立ち上がっている。底面は浅い皿状を呈す。覆土は全体にロームブロックを含み、下層部には焼土粒子を含む黒褐色の土が自然流入の状態に堆積している。遺物は覆土中から土師器、および須恵器の坏形土器(第54図-6~10)の破片を少量出土する。

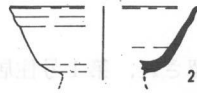
Bの規模は長径1.75m・短径1.45mの不整楕円形を呈し、長軸方向はN-8°-Wである。壁高は65cmの深さを有し、壁面の南側は中位で約20cmほどオーバーハングし、北側はゆるやかに立ち上がっている。底面は平坦であり、覆土はロームブロック・ローム粒子を含み、上層から中層で黒褐色、下層で褐色の土が自然流入の状態に堆積している。

Cの規模は長径1.95m・短径1.4mの不整楕円形を呈し、主軸方向はN-7°-Eである。壁高は約55cmで、壁面はゆるやかに外側へ立ち上がっている。底面は東側からゆるやかに傾斜し、また、覆土は一部D号土壌によって切られているが、残された土層からみて、東側からの自然流入の状態を示している。

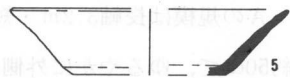
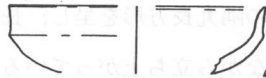
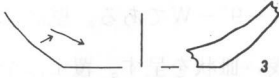
Dの規模は西側がA号土壌によって切られているため不明であるが、南北の長さは3.1mで、形状を呈していたものと思われる。主軸方向はN-13°-Wである。壁高は約20~25cmで、壁面はゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっている。底面はおおむね平坦である。覆土は残された一部の上層からみて、自然堆積と思われる。

出土遺物解説表（第54図）

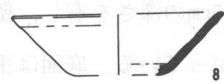
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 土師器	A 13.3(復) B 3.9(現) C 12.0(復)	底部から体部にかけての破片である。底部は皿状を呈すると思われ、体部は底部から短くして、やや外反ぎみに外側へ開く。	体部内外面および底部内面はヘラ磨き調整。底部外面は横位のヘラ削り整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい橙色	
2	高台付坏 須恵器	A 10.0(復) B 3.8(現) C 6.1 D 5.5(復)	体部の破片である。底部は平坦であったと思われる、体部は底部から器厚を薄くしながら外側へ開きながら立ち上がる。また底部には高台が貼り付けられている。	全体は水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石 灰色	
3	甕 土師器	B 2.9(現) C 8.5(復)	底部はほぼ平底であり、胴部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。	外面は横位のヘラ削り、内面はヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石 石英・雲母 にぶい黄橙色	
4	坏 土師器	A 13.65(復) B 4.6(現) C 13.6(復)	底部は浅い皿状の丸底部を呈し、体部は底部から短くしてほぼ垂直に立ち上がる。	外面は磨減が激しく不明。体部内外面及び底部内面はヘラ磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石 雲母・スコリア にぶい黄橙色	



SK 01



SK 03



SK 04

10 CM

第54図 第1・3・4号土壇出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第54図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	環 須恵器	A 14.7(復) B 3.6 C 8.2(復)	底部は平坦で、体部は底部から大きく外側へ広がりながら立ち上がる。	底部は回転へら削り。体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	不良 細砂・長石・石英 灰白色	
6	環 土師器	A 12.9(復) B 3.7 C 12.5(復)	底部は浅い皿状の丸底状を呈し、体部は底部から短く、やや外側へ開く。	底部は外面へら削り、内面はへら磨き調整がなされ、体部は横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄色	
7	環 土師器	A 9.5(復) B 4.2 C 9.4(復)	底部はやや深い皿状を呈し、体部は底部から垂直ぎみに立ち上がる。	底部外面は多方向からへら削り、内面及び体部内外面共にへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア にぶい橙色	
8	環 須恵器	A 11.2(復) B 3.3 C 4.9(復)	体部の破片である。底部は平坦で、体部は底部から器厚を同じにして外側へ広がりながら立ち上がる。	体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	良好 細砂・長石・石英 暗紫灰色	
9	環 須恵器	B 1.7(復) C 6.6	底部の破片である。底部は平坦で、体部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。	底部はへら削り。体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・ 石英・礫 オリーブ灰色	
10	環 須恵器	A 13.3(復) B 4.1(復)	体部の破片である。体部は直線的に外側へ広がりながら立ち上がり、上位でやや外反して開く。	体部内外面共に水挽き成形後、回転横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 浅黄色	

3 溝

本遺跡から確認された溝は2条である。溝は遺跡の中央やや東側から1条、東端から1条で、いずれも北西方向へ走る溝である。

第1号溝（第55図）

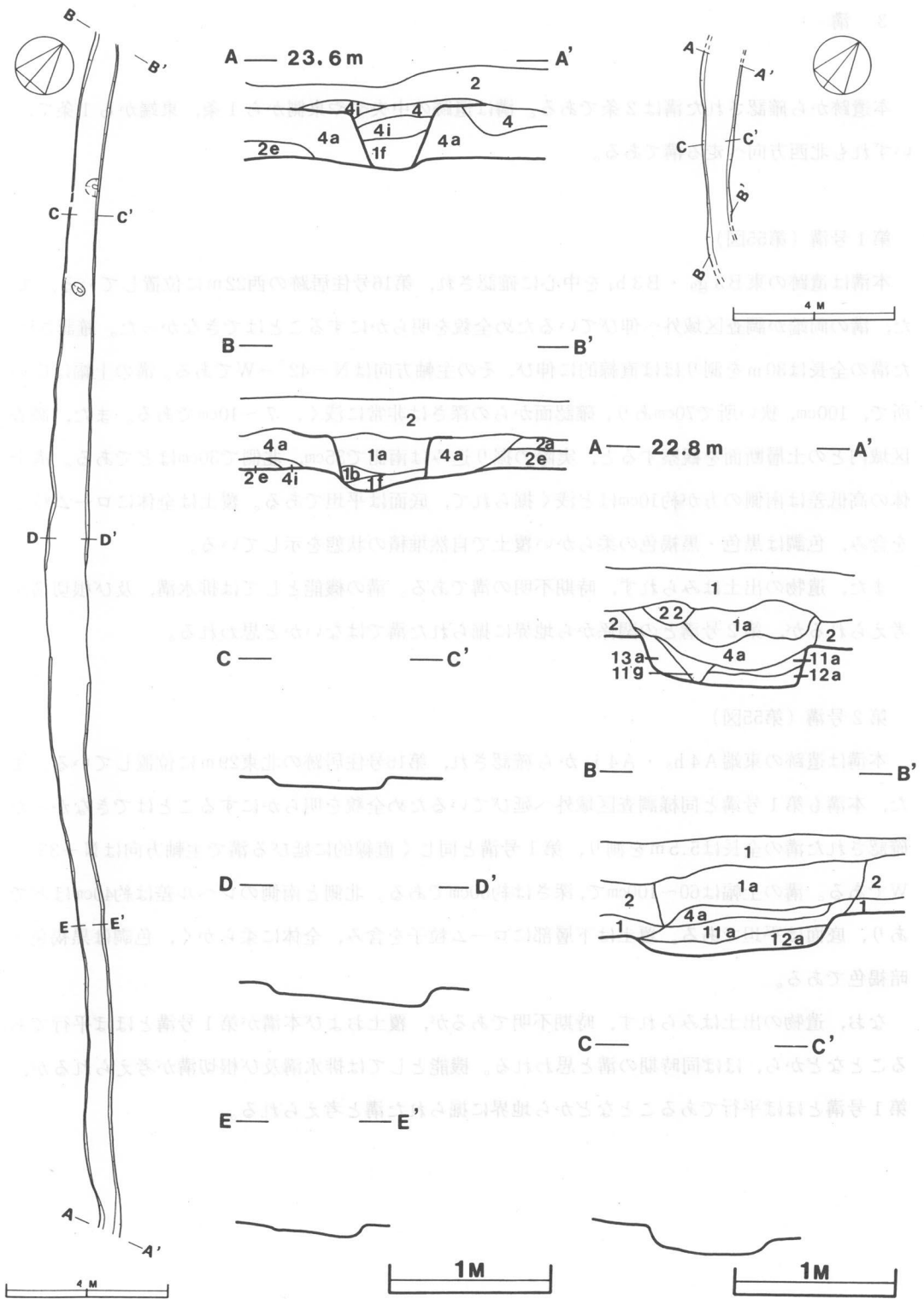
本溝は遺跡の東B3 g₉・B3 b₄を中心に確認され、第16号住居跡の西22mに位置している。また、溝の両端が調査区域外へ伸びているため全貌を明らかにすることはできなかった。確認された溝の全長は30mを測りほぼ直線的に伸び、その主軸方向はN-42°-Wである。溝の上幅は広い所で、100cm、狭い所で70cmあり、確認面からの深さは非常に浅く、7~10cmである。また、調査区域内との土層断面を観察すると、実際の掘り込みは南側で35cm、北側で30cmほどである。溝全体の高低差は南側の方が約10cmほど浅く掘られて、底面は平坦である。覆土は全体にローム粒子を含み、色調は黒色・黒褐色の柔らかい覆土で自然堆積の状態を示している。

また、遺物の出土はみられず、時期不明の溝である。溝の機能としては排水溝、及び根切溝が考えられるが、第2号溝との関係から地界に掘られた溝ではないかと思われる。

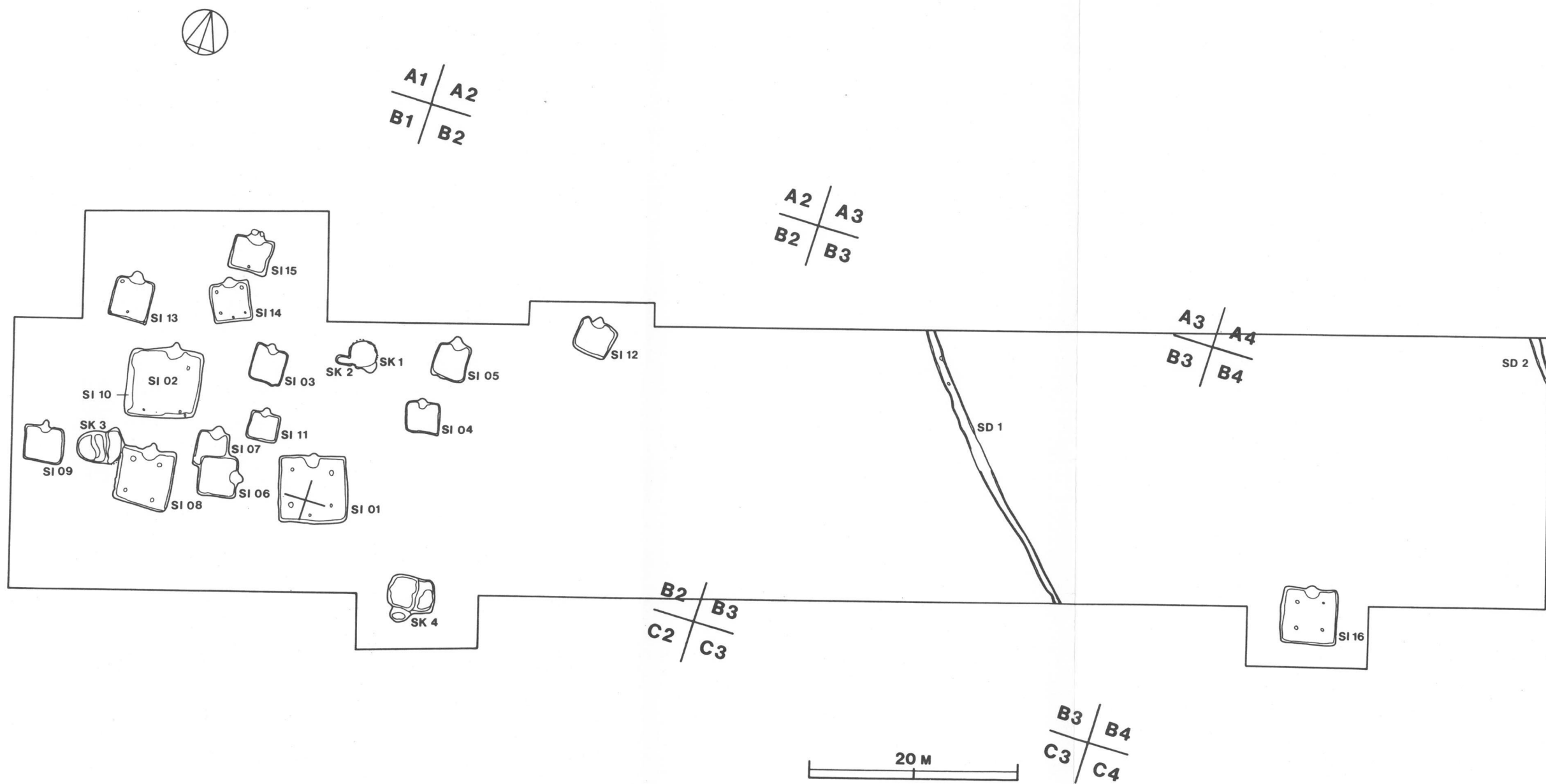
第2号溝（第55図）

本溝は遺跡の東端A4 h₈・A4 i₈から確認され、第16号住居跡の北東29mに位置している。また、本溝も第1号溝と同様調査区域外へ伸びているため全貌を明らかにすることはできなかった。確認された溝の全長は5.5mを測り、第1号溝と同じく直線的に延びる溝で主軸方向はN-35°-Wである。溝の上幅は60~100cmで、深さは約50cmである。北側と南側のレベル差は約40cmほどであり、底面は平坦である。覆土は下層部にローム粒子を含み、全体に柔らかく、色調は黒褐色・暗褐色である。

なお、遺物の出土はみられず、時期不明であるが、覆土および本溝が第1号溝とほぼ平行であることなどから、ほぼ同時期の溝と思われる。機能としては排水溝及び根切溝が考えられるが、第1号溝とほぼ平行であることなどから地界に掘られた溝と考えられる。



第55図 第1・2号溝実測図



第56図 石神外宿 A 遺跡遺構配置図

第3節 ま と め

今回、発掘調査を実施した石神外宿A遺跡は、国鉄東海駅から北西約2.5kmに位置している。当遺跡は久慈川からの細長い支谷によって那珂台地が北と南に二分された、標高24m前後のほぼ平坦な台地縁辺部に立地している。沖積低地との比高は10～12mで、現地は山林が70%、畑が30%である。

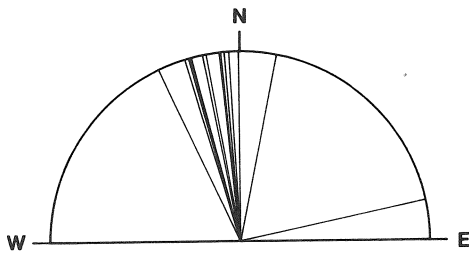
調査の結果、確認された遺構は、竪穴住居跡16軒、土塋4基、溝2条である。当時の人々の生活は、台地北側に入り込む幅の狭い沖積地と台地上の平坦地を生活基盤にして営まれたものと考えられる。遺跡西側には8世紀後半から9世紀にかけての住居跡が集中してみられ、台地東部の南に入り込む浅い支谷の谷頭周辺から古墳時代の住居跡が1軒だけ確認された。ここでは調査によって明らかになった事実と問題点について検討してみたい。

古墳時代の住居跡は前述した通り遺跡の端から第16号住居跡の1軒だけが単独で検出されたが、この期の集落構成を考えると、住居跡は調査区域外へ充分のびていると考えられる。

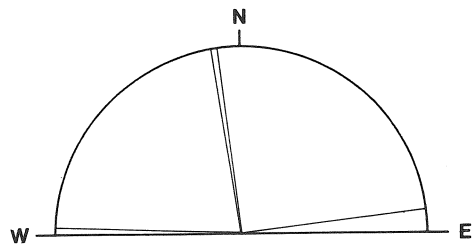
現に本遺跡の北東600mの同一台地上に位置する石神外宿B遺跡からは、ほぼ同時期の住居跡が多数検出されている。住居の構築方法などについても、石神外宿B遺跡のものと比較すると、規模については、多少の大小差はあるもののほぼ同規模である。また竈付設方向も谷に向かった北壁中央部にあること、袖前部には凝灰岩を使用していること、柱穴の底面に沈み防止の工夫がなされていることなど多くの類似点がみられる。

床面は非常によく踏み固められ、また竈内部の焼け具合などから考えると、当時の人々が長い時期この地に生活していたものと考えられる。なお、遺物の出土状態を見ると、竈焼成部から壺形土器、竈前方部から甑形土器が倒立した状態で出土していることなどを考えると、この住居で生活を営んでいた人々は、自然的な条件で移動したことは考えられず、何らかの社会的条件の変化によって移動したものである。なぜならば、近接の二本松古墳の築造時期が、住居構築時期とほぼ同じと考えられることから、支配者、非支配者の関係、すなわち身分的な差が生じ、地方統一が少しずつ進められていた時期と考えられるからである。

遺物は、竈焼成部および竈前方部から、壺形土器、甑形土器、坏形土器の完形品が、覆土中からは甕形土器、鉢形土器が出土している。壺形土器の胴部最大径は中位に有って球状をなし、口縁部はゆるやかに外反する土器と、ゆるやかに立ち上がった後、直線的に大きく開く土器とに分けられる。甕形土器の口縁部も後者の方である。また、器形および整形は坏形土器の様相を呈しているが、一般的に言われている坏形土器と比較して、口径が約2倍の大きさを有する土器（鉢形土器）が出土している。整形技法をみると、壺形土器、甕形土器、甑形土器はほぼ共通し、口縁部内は外面横ナデ、胴部外面は比較的丁寧な縦・横位のへら削り、内面はへらナデ整形、坏形



堅穴住居跡主軸方向



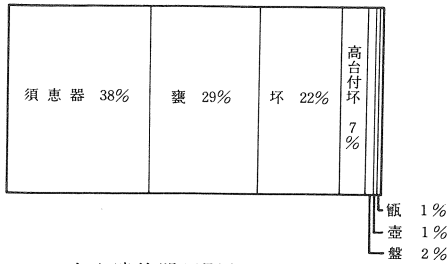
土壇長軸方向

第57図 遺構主軸および長軸方向図

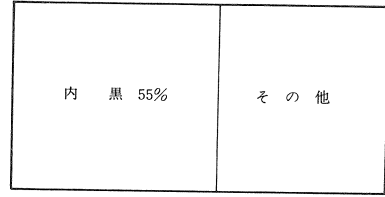
土器は体部外面から内部全体へラ磨き調整，底部外面は，雑なへラ磨きおよび多方向からのへラ削り整形が施されている。

古墳時代に位置づけられた1軒の住居跡は，遺物から鬼高期に編年される住居跡と考えられる。

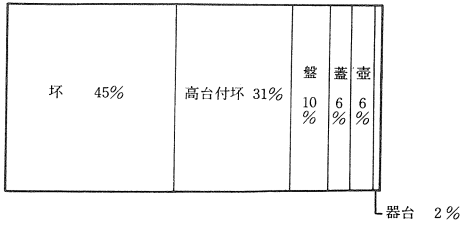
歴史時代の住居跡は15軒が西部地区の台地平坦部に集中して確認されている。調査区域内から確認された住居跡の分布状態を見ると，大きく一つのまとまりとしてとらえることができるが，地形から推測すると，調査区域外の北・南・西側へ住居跡がのびていると充分考えられるため，平面的住居跡構成の分類は差し控えたい。そこで重複関係からみると，歴史時代の住居跡は少なくとも2群に分けることができ，また遺物から検討した結果では，ほぼ3群に分類できる。1群は第1・7・14号住居跡，2群は第2～4・6・8・9・10・13号住居跡，3群は第5号住居跡である。また，第10号住居跡は，土層の切り合いから，2群に属する第2号住居跡よりも古い住居跡であることは明らかであるが，遺物を比較したとき1群には入らない住居跡である。第12号住居跡は判定遺物がないため不明である。1・2群に属する住居跡群内の特徴をみると，大型の住居跡を中心に構成されている。1群の中では第1号住居跡が最も大型で，6.42×6.35mの規模の隅丸方形を呈している。2群においては，第2号住居跡が最大規模で，6.46×6.1mの大きさを有し，さらに，第8号住居跡は5.73×5.35mの大きさを有している。その他の住居跡はいずれも小型で，3～4mの規模を有している。床面は全体によく踏み固められた状態を示すものも多く，壁も全体にしっかりしている。支柱穴は第1・8・14号住居跡は4本が明確に確認され，さらに，第1・14号住居跡からは入口の施設に使用されたと思われる柱穴が確認された。その他の住居跡からは，4～5本の支柱穴を明確に確認することはできなく，住居跡外部にその存在を求めなければならない。主軸方向は北西方向を示した住居跡が大部分である。なお第6号住居跡は他のすべての住居跡と異なり，N-78°-E方向を示している。



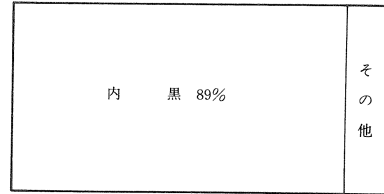
出土遺物器種別割合



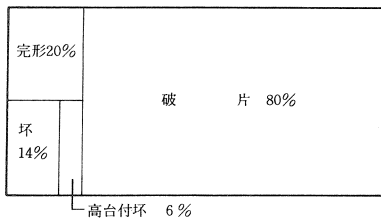
土師器坏形土器色調割合



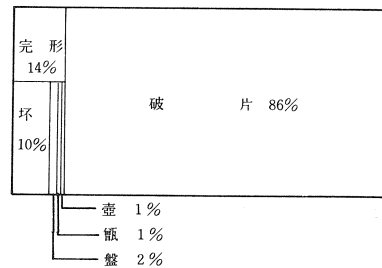
須恵器器種別割合



土師器高台付坏形土器色調割合



須恵器完形および破片の出土率



土師器完形および破片の出土率

第58図 出土土器統計表

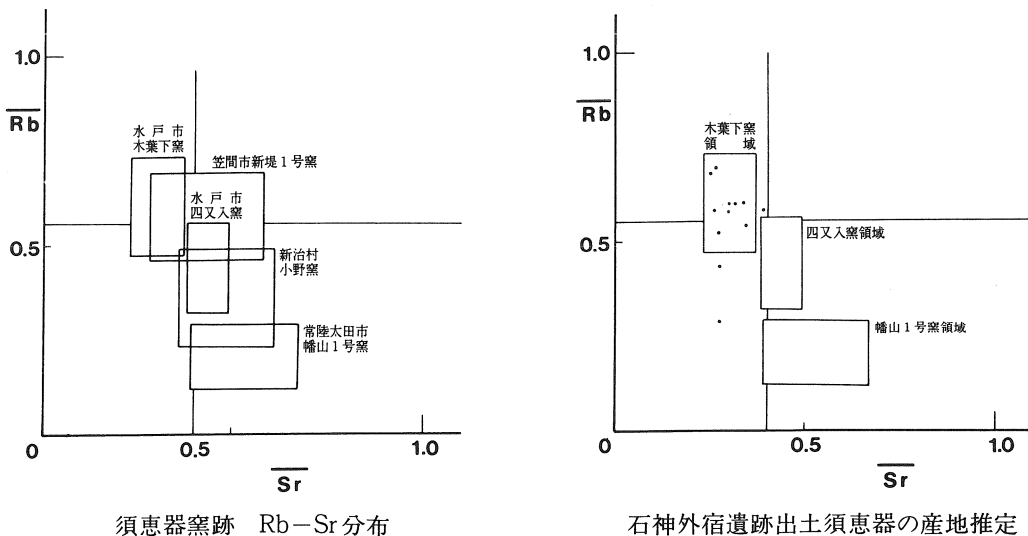
遺物は完形品およびそれに近い状態の出土は少なく、土師器と須恵器が共伴し、その他鉄製品・銅製品・石製品の出土がみられる。全体に住居跡内からの遺物の出土量は少なかったけれども、第2号住居跡からの遺物の出土状況は他の住居跡と異なり、覆土上層から須恵器・土師器の破片が多量に廃棄された状態で出土している。

また、各住居跡内から出土した土師器と須恵器の遺物を実測したものだけについて分類してみると、土師器が62%、須恵器が38%である。土師器の器種別分類は、甕形土器48%・坏形土器37%・高台付坏形土器11%・皿形土器3%・蓋形土器1%である。また須恵器の器種別分類は、坏形土器45%・高台付坏形土器31%・盤形土器10%・蓋形土器6%・壺形土器6%・器台形土器2

%である。以上、土師器と須恵器の器種別分類をした結果、土師器の場合は圧倒的に甕形土器が多いが、須恵器の場合は坏形土器・高台付坏形土器が全体の約8割を占めている。すなわち、土師器の場合は日常使用する器の全器種を占め、須恵器は食事などに使用する器に使われていたと考えられる。土師器の内部に黒色処理がなされているものは、坏形土器の場合は55%、高台付坏形土器は89%で、その他皿形土器・坏形土器などにも黒色処理がみられる。本書で後述する石神外宿B遺跡（鬼高期）から出土した坏形土器をみると、内・外面共に朱塗りを施しているものが多く、黒色処理がなされている土器は非常に少ない。以上のことから、朱塗り土器は、鬼高期まで続き、国分期に入ると、朱塗りはまったくみられず、黒色処理を施した土器が多くみられるようになった。土器の成形技法が鬼高期から国分期にかけて大きく変化した原因については、この地方の技術の発達によるものか、あるいは他の地域からの技術の流入によるものか、現在のところ明らかでない。

墨書土器は第2号住居跡から須恵器の坏形土器体部に「神山」と書かれた土器2点、その他第5・8・13号住居跡からは土師器の坏形土器・高台付坏形土器・蓋形土器の体部および底部に「神山・斤家」の文字が墨書された土器2点、解読不明のもの1点が出土している。また、「神山」という文字のいわれは、本遺跡が当時の久慈郡神前郷内に位置し、郷名の神前という文字が、同音文字である神崎と書かれ、山は崎という文字の略文字ではないかと考えられる。すなわち「神山」という文字は郷名と思われる。

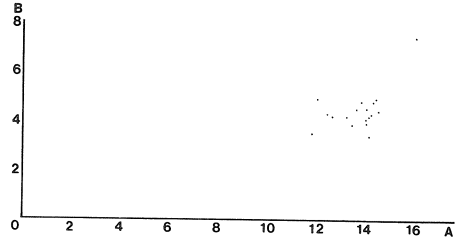
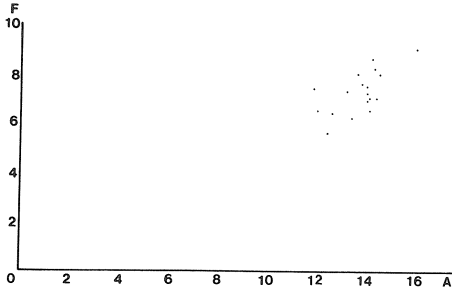
須恵器については、奈良教育大学の三辻利一氏に胎土分析を依頼し、その結果、Rb-Sr分布図（第59図）が示す通り、殆んど木葉下窯跡群（注1）領域に入り、木葉下窯跡群から須恵器が本遺跡へ単元供給されたことが明らかになる。さらに、木葉下遺跡と本遺跡から出土した坏形土



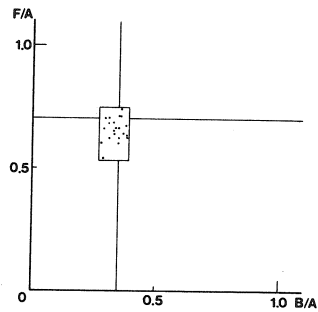
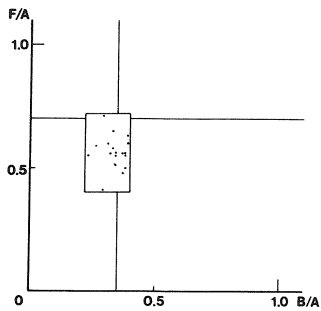
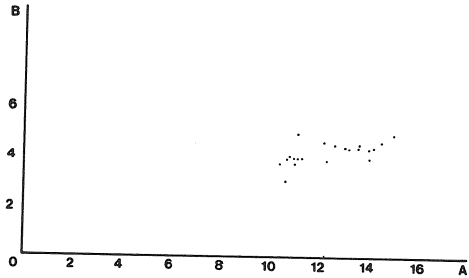
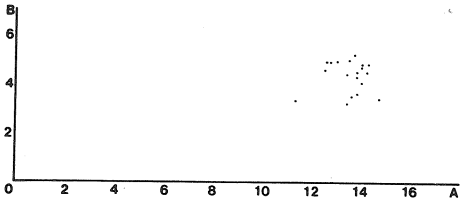
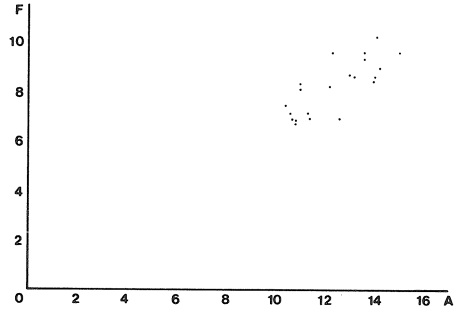
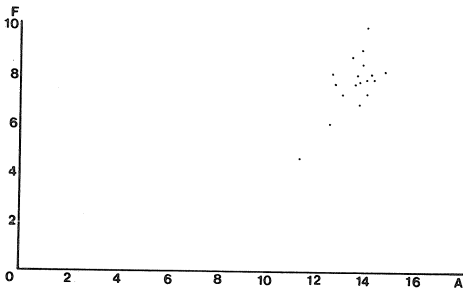
第59図 茨城県内の窯跡および遺跡出土須恵器の胎土分析

石神外宿 A

木葉下遺跡



第60図 土師器环形土器法量分布図 A—口径 B—器高 F—底径



第61図 石神外宿 A 遺跡・木葉下 (C 2 号窯跡) 遺跡須恵器环形土器法量比分布図

器の法量比分布図（第61図）を比較してみると、C2号窯跡からの土器とほぼ一致することが判明した。なお、本遺跡と同時代の遺跡ではないが、当時本遺跡と同一郡であった現在の常陸太田市幡山窯跡（注2）からの搬入は、胎土分析の結果からはみられず、また、約30kmも離れた他郡の木葉下窯跡から搬入されていることは、当時の物品等の交易が郡内にとどまらず、広範囲に広がっていたものと考えられる。

また、本遺跡からの出土遺物の中で、とくに注目しなければならないのは、銅製の帯金具（巡方）があげられる。これらの帯金具は、第8号住居跡から1個、さらに、他の住居跡群と主軸方向を異にする第6号住居跡から2個出土している。とくに第6号住居跡から出土した2個の帯金具は同一の帯に使用されたもので、しかもその裏金具の部分には金張りがなされている。また、第8号住居跡から出土した帯金具（裏金具＝巡方）の大きさは、1辺の長さが4cmの大型のものである。これらの帯金具については養老令の「衣服令」の中で王・親王および諸臣の一位から五位までが金銀装腰帯の使用が認められている。しかし、本遺跡から出土した帯金具は裏金具の部分にだけ金張りが施されており、前記の金銀装腰帯の範ちゅうに入るかどうか判断できない。したがってこの帯金具を身に付けていた役人の地位についても不明である。もう1個の帯金具は大きさからいえば、非常に大型のものであるが、「衣服令」に基づけば、六位以下の役人が身に付けていたものと考えられる。茨城県内における帯金具の出土遺跡は、石岡市茨城廃寺跡（注3）・同鹿の子C遺跡（注4）・鹿島町神野向遺跡（注5）・日立市吹上遺跡（注6）である。茨城廃寺跡・鹿の子C遺跡・神野向遺跡は古代常陸国の国府および郡衙の置かれた地域に位置するため、出土しても不思議ではない。しかし、当遺跡および吹上遺跡は、ともに当時久慈郡に所属し、郡衙は現在の久慈郡金砂郷村（旧久米村）大里付近に置かれたと伝えられる。また、この2遺跡は、それぞれ当時の神前郷・高市郷内に所在し、郡衙から15～20km離れていた。なぜ、郡衙から離れた地から帯金具が出土したのか、現時点においては疑問とせざるを得ない。

歴史時代に位置づけられた15軒の住居跡は、遺物からみて、8世紀後半から9世紀にかけての住居跡と考えられる。さらに細分するならば、遺物で分類した3つの群の住居跡は、時間的な差はあまりないものの、1群から2群・3群へと移行していくものである。

また、歴史時代のその他の遺構として第1・3・4号土壇の3基が確認されている。いずれの土壇も2～4基が重複する土壇で、明確に原形をとどめている土壇は第1号土壇である。第1号土壇の平面形は円形を呈し、壁面はややオーバーハングして立ち上がる。その他の土壇は重複がはげしいため、平面形は不明確であるが、不整円形状を呈している。覆土は全体に固くしまっており、下層部には凝灰岩のブロック・焼土粒子などを含んでいる。凝灰岩は住居跡の竈に使用されたものと同質である。遺物は土師器・須恵器の坏形土器の破片を少量出土している。また、用途についての決定的資料は得られず、一般的に考えられている貯蔵穴ではないかと考えられる。

構築期については、覆土下層に凝灰岩のブロックが含まれ、また、少量ではあるが須恵器が出土していることなどから、住居跡よりやや新しい土壌と考えられる。

以上、本遺跡から確認された住居跡および土壌について述べてきたが、若干の時間的な隔たりはあるものの、大きく鬼高期と国分期の2時期にわたって人々の生活が営まれた場所であることが判明した。

注1 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6」昭和58年3月

注2 常陸太田市教育委員会「幡山遺跡」昭和52年3月

注3 石岡市教育委員会「茨城廃寺跡Ⅲ」昭和57年3月

注4 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5」昭和58年3月

注5 鹿島町教育委員会「神野向遺跡」昭和56年3月

注6 日立市教育委員会「久慈 吹上」昭和56年3月

石神外宿 B 遺跡

第5章 石神外宿B遺跡

第1節 調査経過

石神外宿B遺跡の発掘調査は、昭和57年5月11日から9月31日まで実施し、調査対象面積は2,500㎡である。調査区設定基準杭を平面直角座標、第Ⅸ区系X軸（南北）65.3km・Y軸（東西）54kmの交点を起点(B4 a₁)として設定する。また調査区設定方法は石神外宿A遺跡と同様である。以下、調査経過を記していきたい。

昭和57年5月11日～5月13日

11日から石神外宿B遺跡の調査を開始する。発掘調査に必要な倉庫および発掘器材、テント設営などを行う。トレンチ法によって遺物包含層、遺構確認面までの深さなどを調査した結果、重機による表土排除作業を実施することに決定する。

昭和57年5月27日～6月7日

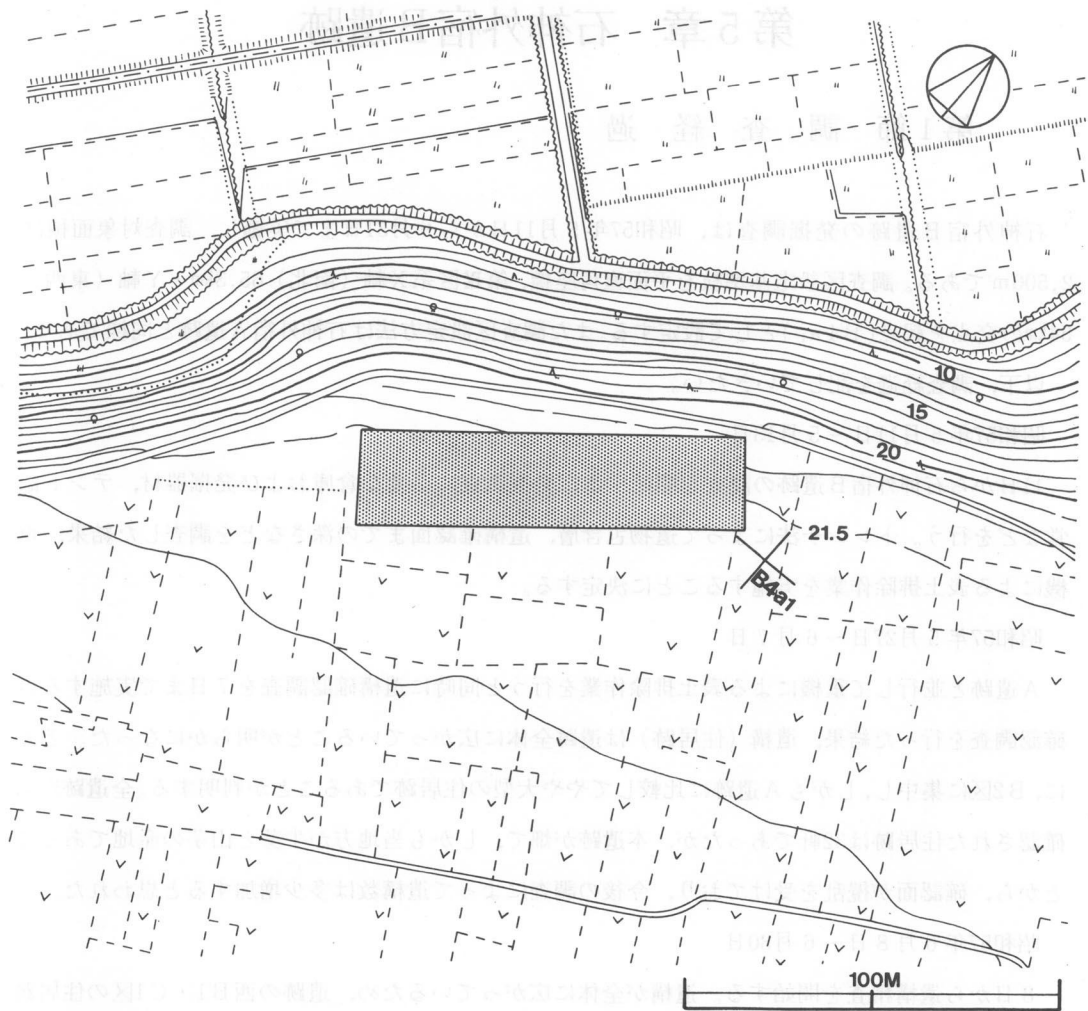
A遺跡と並行して重機による表土排除作業を行うと同時に遺構確認調査を7日まで実施する。確認調査を行った結果、遺構（住居跡）は遺跡全体に広がっていることが明らかになった。とくに、B2区に集中し、しかもA遺跡に比較してやや大型の住居跡であることが判明する。全遺跡から確認された住居跡は32軒であったが、本遺跡が畑で、しかも当地が牛蒡と山芋の産地であることから、確認面が攪乱を受けており、今後の調査によって遺構数は多少増加すると思われた。

昭和57年6月8日～6月30日

8日から遺構精査を開始する。遺構が全体に広がっているため、遺跡の西B1・C1区の住居跡1～12号までの精査を行う。その結果、住居跡の構築時期は古墳時代後半（鬼高期）のものであることや、住居跡の規模が一辺5～7mの隅丸方形を呈し、全体にA遺跡に比較してやや大型の住居跡であることが判明してきた。遺物は弥生土器、土師器の他に、滑石の石製模造品が6軒の住居跡から出土している。また、第8号住居跡からは、2本の柱が炭化した状態で検出され、数軒の住居跡が火災に遭遇していることが判明する。各住居跡とも精査と並行して、実測図作成および写真撮影などを実施する。

昭和57年7月1日～7月29日

1日から、前記した住居跡の補足調査を行うと同時に、B2・B3区から確認された住居跡第13～29号の精査を実施する。本地区は重複している住居跡が多く、攪乱がはげしいため新旧関係の把握は困難をきわめたが、第26号住居跡は弥生時代のものであり、他の住居跡はすべて古墳時代のものであると判断した。遺物は弥生土器、土師器が主で、須恵器の出土は非常に少なかったが、第17号住居跡の南壁下から提瓶（完形）が出土している。規模・深さは前月精査した遺構とほぼ



第1図 石神外宿B遺跡地形図

同じであり、第17号住居跡を除く全ての住居跡は北側に竈を付設している。また、住居跡の精査と並行して各住居跡の実測図作成および写真撮影などを実施する。

昭和57年8月2日～9月10日

発掘調査は前月に引き続き、A3・B3区の第30～35号住居跡および第1～8号土壇の調査を実施する。その結果、第31D号住居跡は弥生時代の住居跡であり、その他の住居跡は古墳時代後半の住居跡であることが判明した。住居跡の規模は西側の住居跡に比べて比較的大型のものが多く、とくに第34号住居跡は本遺跡の中では最大級の規模をもっていることが判明する。遺物は弥生土器・土師器を中心に出土している。また、第31D号住居跡の炉の北東部から壺形土器が埋設された状態で出土した。

竈の調査も住居跡の精査と並行して行う。竈の付設されている場所は、大部分が北壁中央部であるが、2軒だけが異方向に付設されている。本遺跡が攪乱を受けているにもかかわらず、保存

状態は良好であり、焼成部から遺物（完形）の出土量も多い。各遺構とも精査終了後、実測図作成および写真撮影を行い9月10日をもって遺構精査を終了する。

昭和57年9月11日～9月30日

11日に石神外宿A・B両遺跡の現地説明会を、多数の参加者を迎えて開催する。

13日から各遺構の補足調査を行うとともに図面整理、写真整理などを行う。28日から事務所移築のための諸準備および倉庫、発掘器材などの移転を実施する。

9月30日をもって本遺跡の発掘調査をすべて終了する。

第2節 遺構と遺物

本遺跡は久慈川へ流れる細長い支谷の南側、標高21.5mの平坦な台地縁辺部に立地する。遺跡から確認された遺構は竪穴住居跡38軒・土壇8基であり、そのうち竪穴住居跡2軒は弥生時代後半に比定され、その他の遺構はすべて古墳時代後半のものである。また、遺構は遺跡全体から検出され、とくに遺跡の中央部付近では重複がはげしい。

1 弥生時代

(1) 竪穴住居跡

第26号住居跡（第2図）

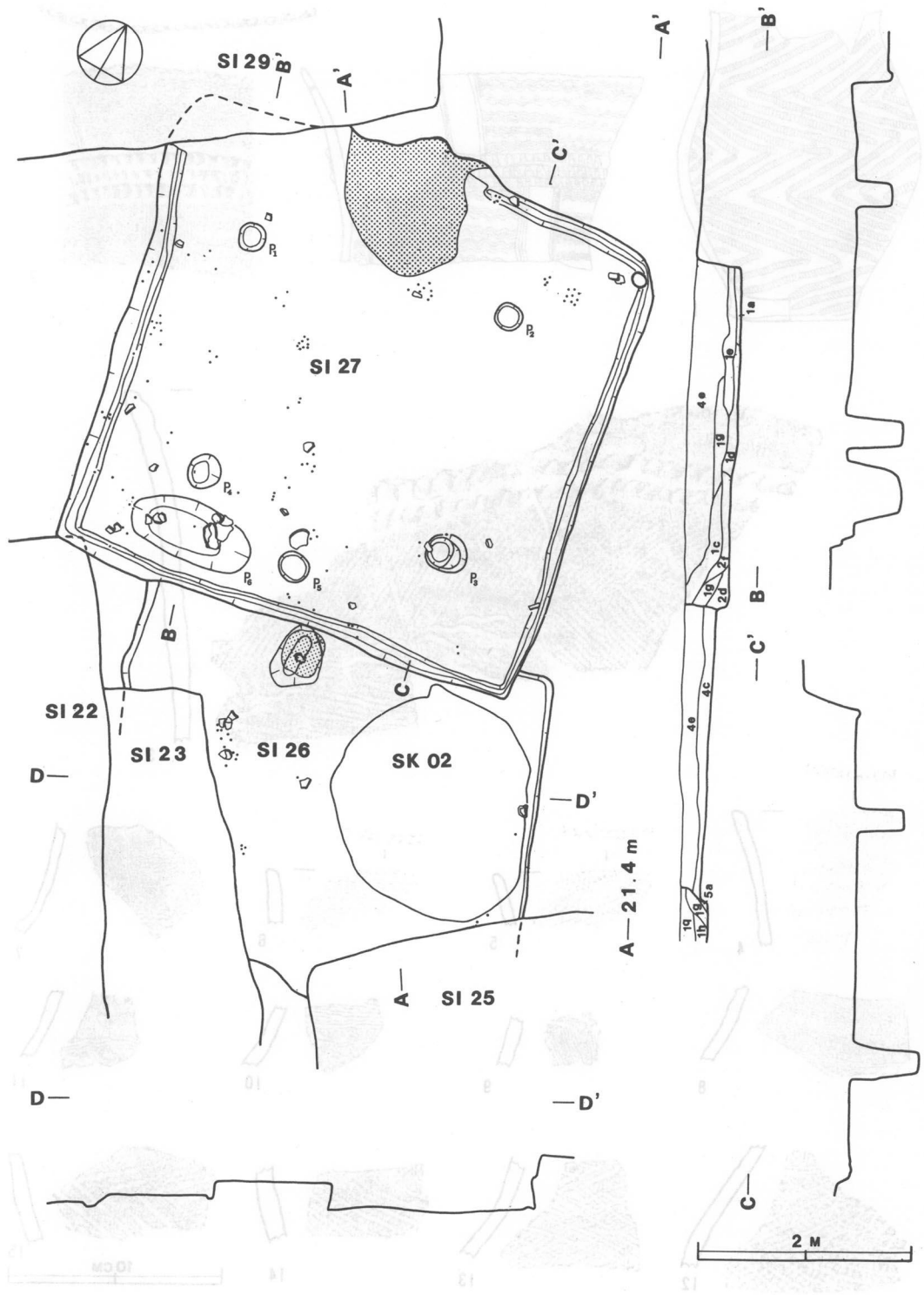
本跡は古墳時代の竪穴住居跡の密集する遺跡の中央部、B3d₁を中心に確認された。北側で第27号住居跡、西側で第23号住居跡、南側で第25号住居跡によって切られ、さらに住居跡の東側を第2号土壇によって切られている。規模は、前述のとおり四方が切られているため不明の点も多いが、東西の残された壁からみて、一辺が4mを測る隅丸方形を呈していたと思われる。主軸方向はN-15°-Wである。壁高は約25cmを測り、ゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっている。床面までの深さは、古墳時代のいずれの住居跡よりも浅く構築されている。また、床面は全体に平坦で、踏み固められている。炉跡は中央部からやや北側に検出され、床面を約5cmほど掘り凹めた地床炉で、長径60cm・短径50cmの楕円形を呈し、覆土中には暗赤褐色の土が堆積している。ピットは確認することができなかった。

住居跡の覆土は2層からなり、色調は全体に黒色を示し、ローム粒子・炭化物・焼土粒子を含み、自然堆積の状態で堆積している。

出土遺物は、弥生土器片を少量出土する。中央部床面上から、口縁部を欠損する壺形土器（第3図-1）が口縁部を北側へ向け、やや傾斜して出土している。

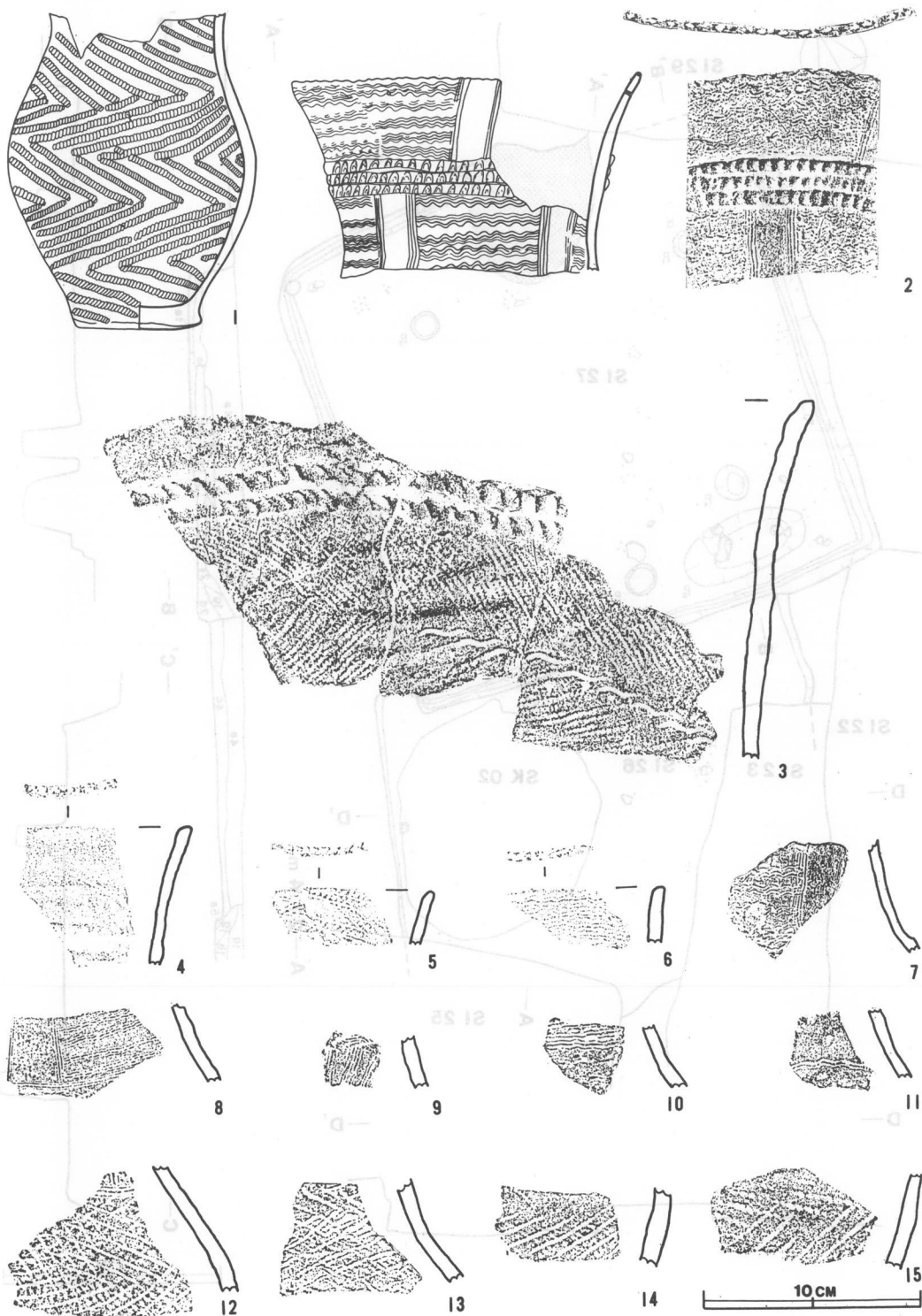
出土遺物（第3・4図）

第3図-1は口縁部を欠損する壺形土器である。現高14.4cm・底径5.7cm・胴部最大径11.3cmを測る。底部は平坦で、胴部は、底部から器厚をやや厚くしながら外側へ広がりを示して胴部最大径に至り、さらに器厚を同じくして内側へ傾きながら立ち上がる。口縁部は頸部からやや外反ぎみに立ち上がっている。文様は土器全体に附加条二種による羽状縄文が施文されている。2は壺形土器の口縁部の破片である。口径15.9cm・現高9cmを測る。口縁部上位に直径2mmの孔を有し、器形は頸部からゆるやかに外反して立ち上がっている。文様は口唇部に縄文原体による押圧がな



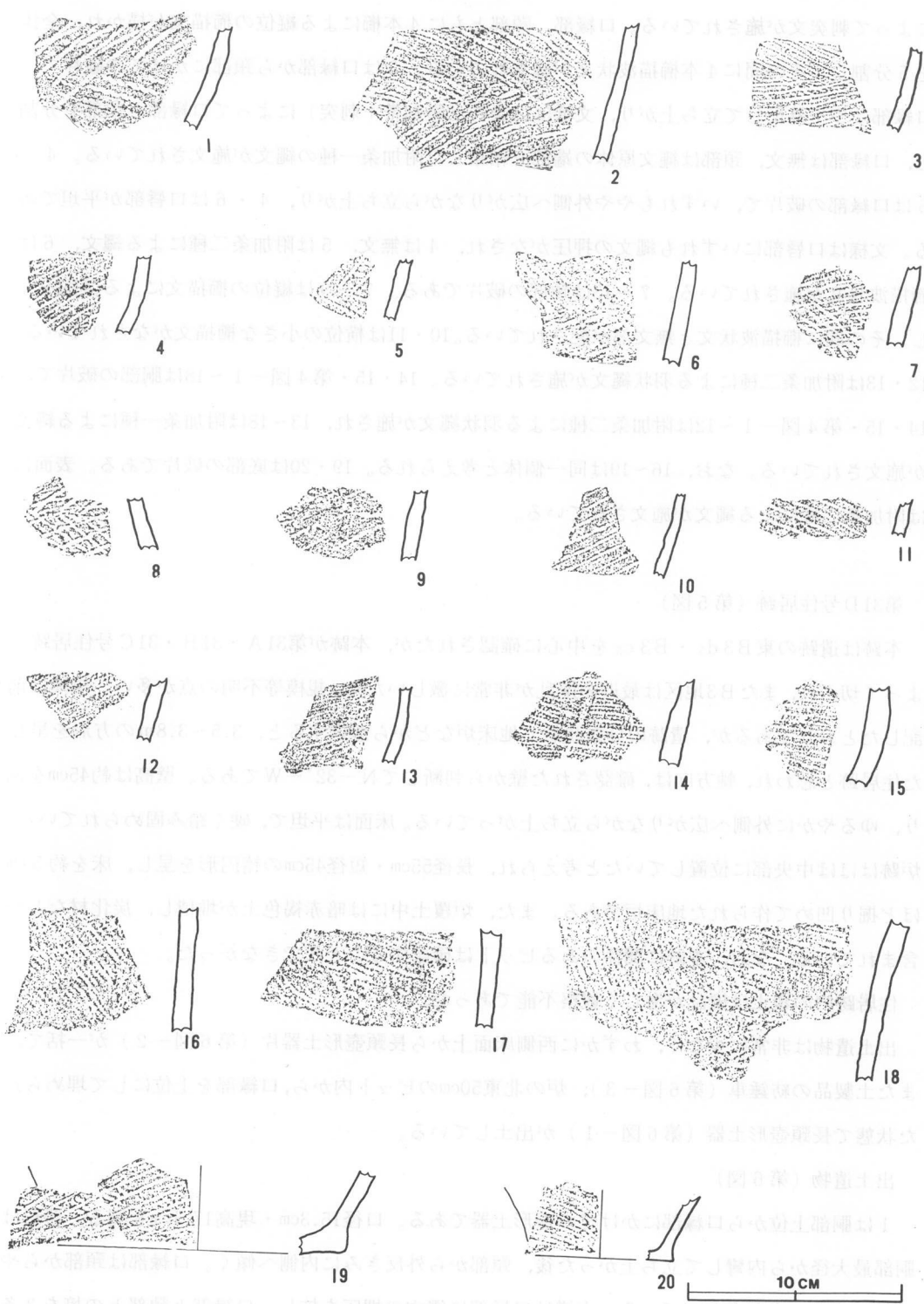
第2图 第26·27号住居跡実測图

第2图 第26·27号住居跡実測图



第3图 第26号住居跡出土遺物実測図(1)

図解実測器封付 2152 2153 2154 2155 2156 2157 2158 2159 図3 第



第4図 第26号住居跡出土遺物実測図(2)

され、表面文様は3条の隆起によって、口縁部と頸部を分割し、隆起帯には幅の狭いへら状工具によって刺突文が施されている。口縁部、頸部ともに4本櫛による縦位の櫛描文が描かれ、全体を5分割し、その間に4本櫛描波状文が施されている。3は口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部はやや外反して立ち上がり、文様は2条の（隆起帯+刺突）によって口縁部と頸部を分割し、口縁部は無文、頸部は縄文原体の端部を結束した附加条一種の縄文が施文されている。4～6は口縁部の破片で、いずれもやや外側へ広がりながら立ち上がり、4・6は口唇部が平坦である。文様は口唇部にいずれも縄文の押圧がなされ、4は無文、5は附加条二種による縄文、6は櫛描波状文が施されている。7～13は頸部の破片である。7～9は縦位の櫛描文による区画をなし、その間に櫛描波状文と無文部が配されている。10・11は横位の小さな櫛描文がなされている。12・13は附加条二種による羽状縄文が施されている。14・15・第4図-1～18は胴部の破片で、14・15・第4図-1～12は附加条二種による羽状縄文が施され、13～18は附加条一種による縄文が施文されている。なお、16～19は同一個体と考えられる。19・20は底部の破片である。表面には附加条二種による縄文が施文されている。

第31D号住居跡（第5図）

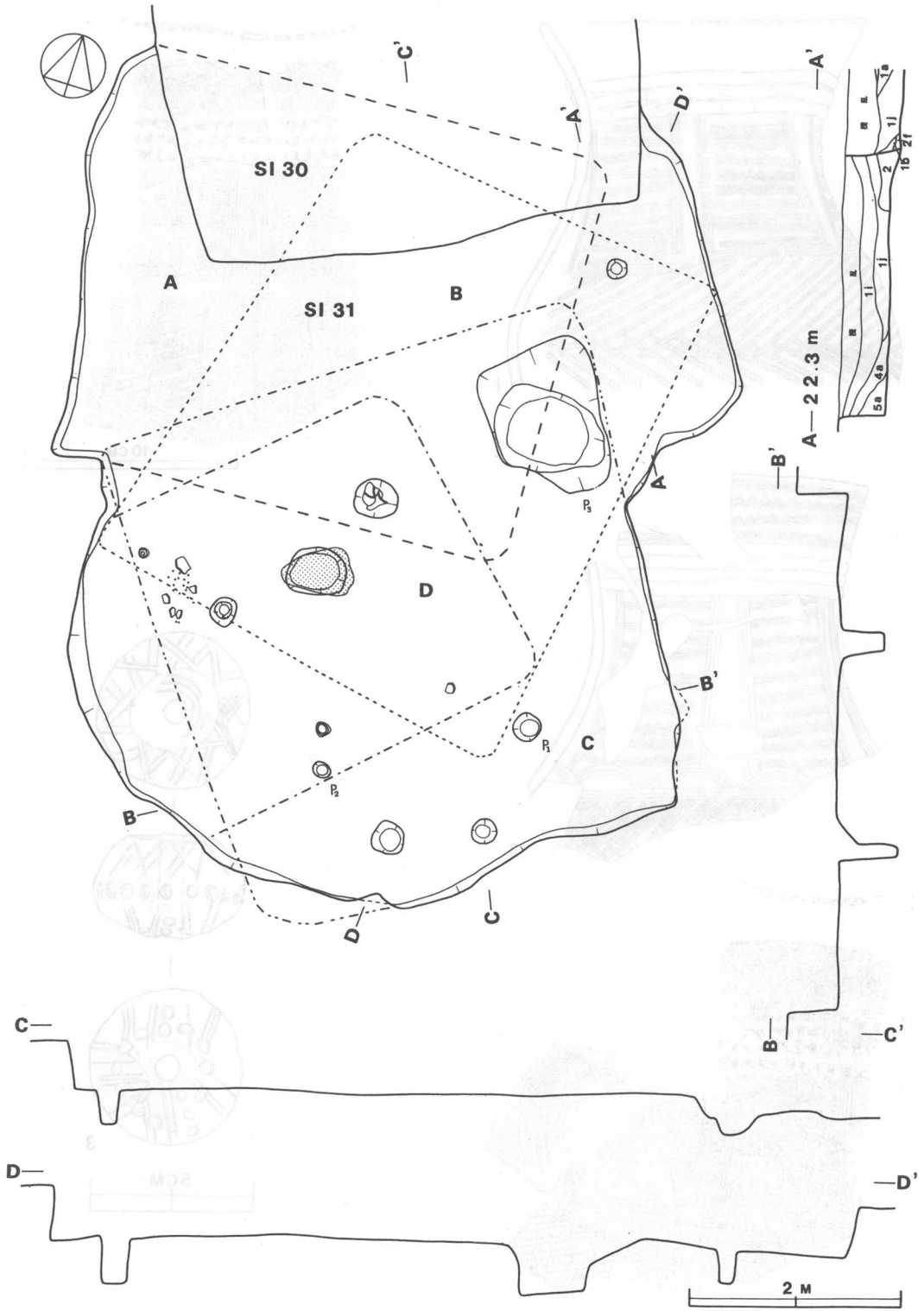
本跡は遺跡の東B3 d₅・B3 c₅を中心に確認されたが、本跡が第31A・31B・31C号住居跡によって切られ、またB3地区は最近の攪乱が非常に激しいため、規模等不明の点が多い。規模は前記したとおりであるが、遺跡の分布状態、地床炉などから想定すると、3.5～3.8mの方形を呈した住居跡と思われ、軸方向は、確認された壁から判断してN-32°-Wである。壁高は約45cmを測り、ゆるやかに外側へ広がりながら立ち上がっている。床面は平坦で、硬く踏み固められている。炉跡はほぼ中央部に位置していたと考えられ、長径55cm・短径45cmの楕円形を呈し、床を約5cmほど掘り凹めて作られた地床炉である。また、炉覆土中には暗赤褐色土が堆積し、炭化材などが含まれている。なお、本跡に関係のあるピットは確認することができなかった。

住居跡内の覆土は攪乱が激しく観察不能であった。

出土遺物は非常に少なく、わずかに西側床面上から長頸壺形土器片（第6図-2）が一括で、また土製品の紡錘車（第6図-3）、炉の北東50cmのピット内から、口縁部を上位にして埋められた状態で長頸壺形土器（第6図-1）が出土している。

出土遺物（第6図）

1は胴部上位から口縁部にかけての壺形土器である。口径15.3cm・現高17.1cmを測る。器形は胴部最大径から内彎して立ち上がった後、頸部から外反ぎみに内側へ傾く。口縁部は頸部からやや外反ぎみに立ち上がっている。文様は口唇部に縄文の押圧を施し、口縁部と頸部との境を3条の隆起帯によって区画し、口縁部は無文、頸部は4本櫛による縦位の櫛描文によって全体を5等



第5图 第31A·B·C·D号住居跡实测图



第6图 第31D号住居跡出土遺物実測図

分し、その間に同櫛による横位の櫛描波状文を施している。また、頸部と胴部の境は櫛描文によって区画し、胴部は附加条二種による羽状縄文が施されている。

2は頸部から上半の壺形土器である。現高18.1cmを測り、口唇部に縄文の押圧を施す。器形は胴部から内側へ傾きながら立ち上がって頸部に至り、口縁部は頸部からやや外反ぎみに立ち上がっている。文様は口縁部と頸部との境を4条の隆起帯によって区画し、口縁部4本櫛による櫛描波状文を配し、頸部には縦位の櫛描様文によって全体を5等分し、その間に横位の櫛描波状文を施している。さらに頸部下には4本櫛による横位の櫛描文が施され、その上に櫛による連弧文が配されている。胴部は附加条二種による羽状縄文が施されている。

3は土製品の紡錘車である。表裏両面に半截竹管による沈線、さらに裏面には半截竹管による刺突文、側面には一列の刺突文が施されている。重さは60gである。

2 古墳時代

(1) 竪穴住居跡

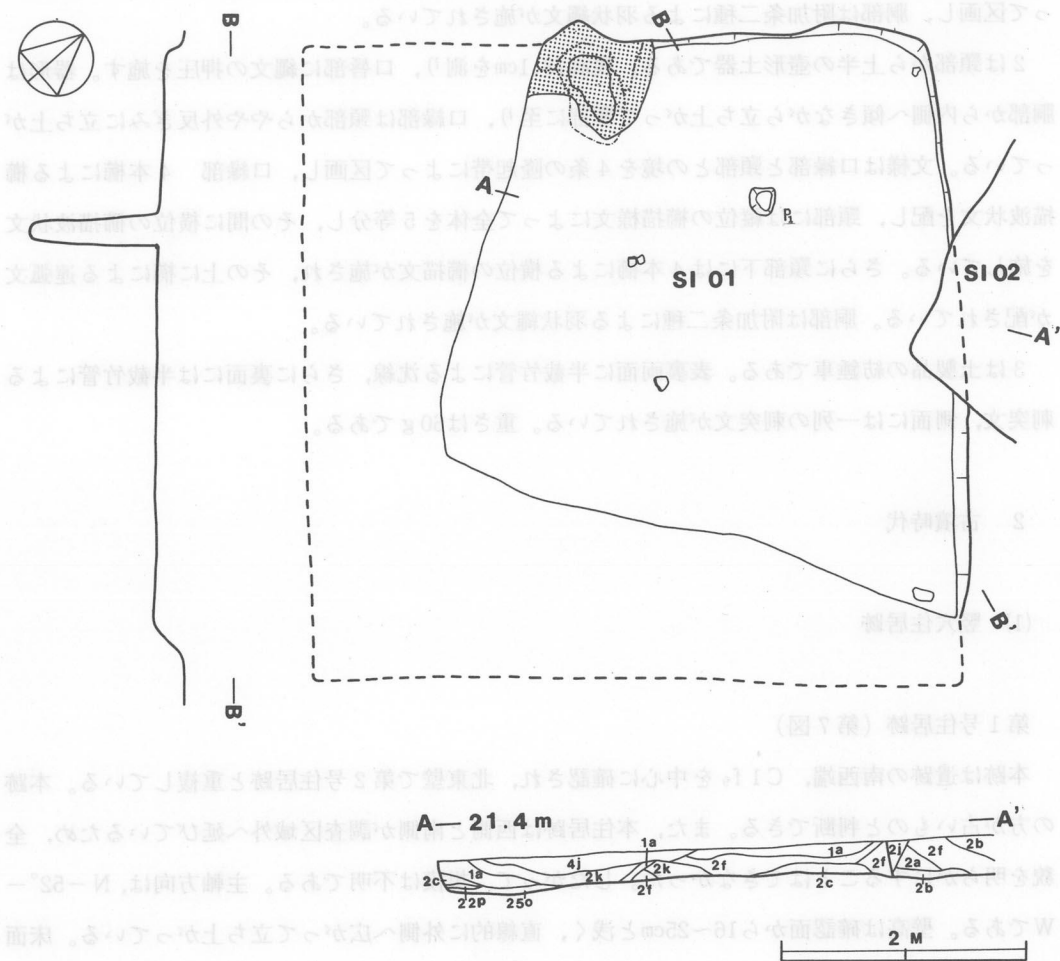
第1号住居跡（第7図）

本跡は遺跡の南西端、C1f₉を中心に確認され、北東壁で第2号住居跡と重複している。本跡の方が古いものと判断できる。また、本住居跡は西側と南側が調査区域外へ延びているため、全貌を明らかにすることはできなかった。したがって、規模は不明である。主軸方向は、N-52°-Wである。壁高は確認面から16~25cmと浅く、直線的に外側へ広がって立ち上がっている。床面はやや東側へ傾斜しているが、おおむね平坦で、硬く踏み固められている。床面上には、多量の焼土ブロック・萱の炭化材が検出された。このことから、本跡は火災に遭遇したと思われる。ピットは1個検出されたが、他の住居跡の例などから判断して、4本の柱によって構築されたものと思われる。確認したピットは、平面形が長径25cmの不整楕円形を呈し、深さは102cmと非常に深い柱穴である。

覆土は上層が黒色・黒褐色、中層から下層にかけては暗褐色で、下層覆土中には多量の焼土ブロック・炭化材が含まれ、自然流入の状態で堆積している。

出土遺物は非常に少なく、中央部覆土から土師器の坏形土器（第8図-1・2）が、また南側床面上から滑石製の白玉（第8図-4・5・6・7）を5個出土している。

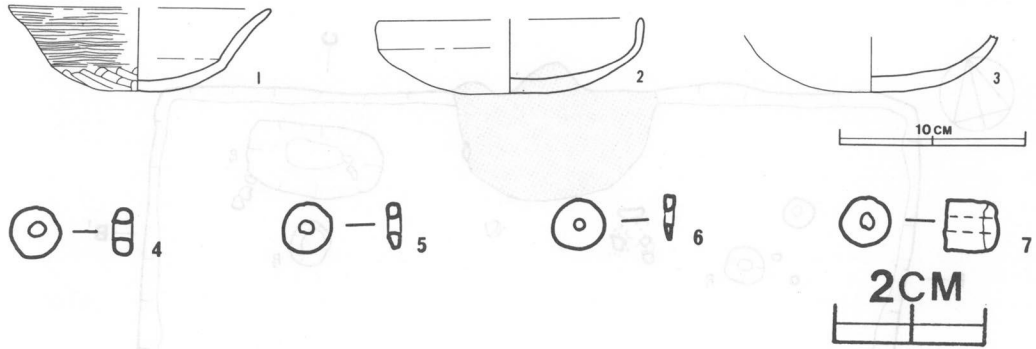
竈は北西壁に付設されていたが、攪乱がはげしく袖の一部を確認したにとどまる。



第7図 第1号住居跡実測図

出土遺物解説表(第8図)

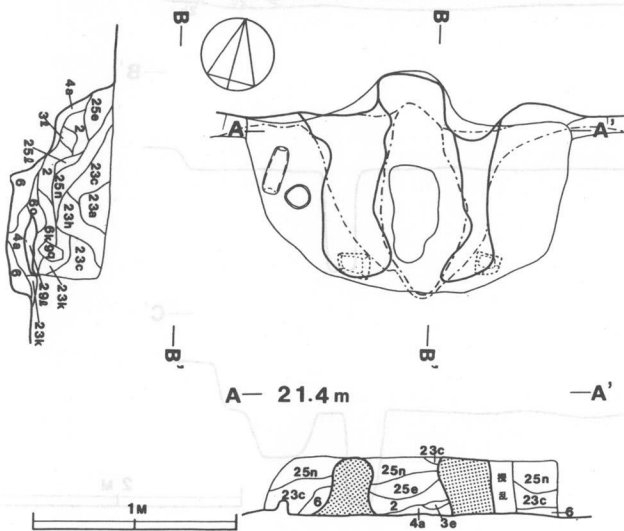
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	坏 土師器	A 13.8 B 4.4 C 9.2	底部は丸底で、浅い皿状を呈し、体部は底部から稜を有した後、外反ぎみに大きく開く。	底部外面は静止へら削り、体部はへらによる横ナデ整形がなされ、内面はへら磨き調整が施されている。内面二次焼成による剝離がみられる。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア 橙色	
2	坏 土師器	A 14.0(匳) B 4.0 C 13.9	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は垂直に立ち上がる。	底部外面は静止へら削り、体部は横ナデ整形がなされている。内面二次焼成による剝離がはげしい。	良好 砂粒・長石・石英 赤褐色	
3	坏 土師器	B 3.0(匳) C 13.4	口縁部を欠損する坏である。底部は丸底で浅い皿状を呈す。	底部外面はへら磨き調整、内面はへらナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 スコリア にぶい橙色	
4 5 7	石製品 白玉		滑石を原石として作られた白玉である。断面形は円形を呈す。	4は表裏共によく磨られ、4～7の側面は円形状に加工した後よく磨られている。5～7は割れている。		



第8図 第1号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡（第10図）

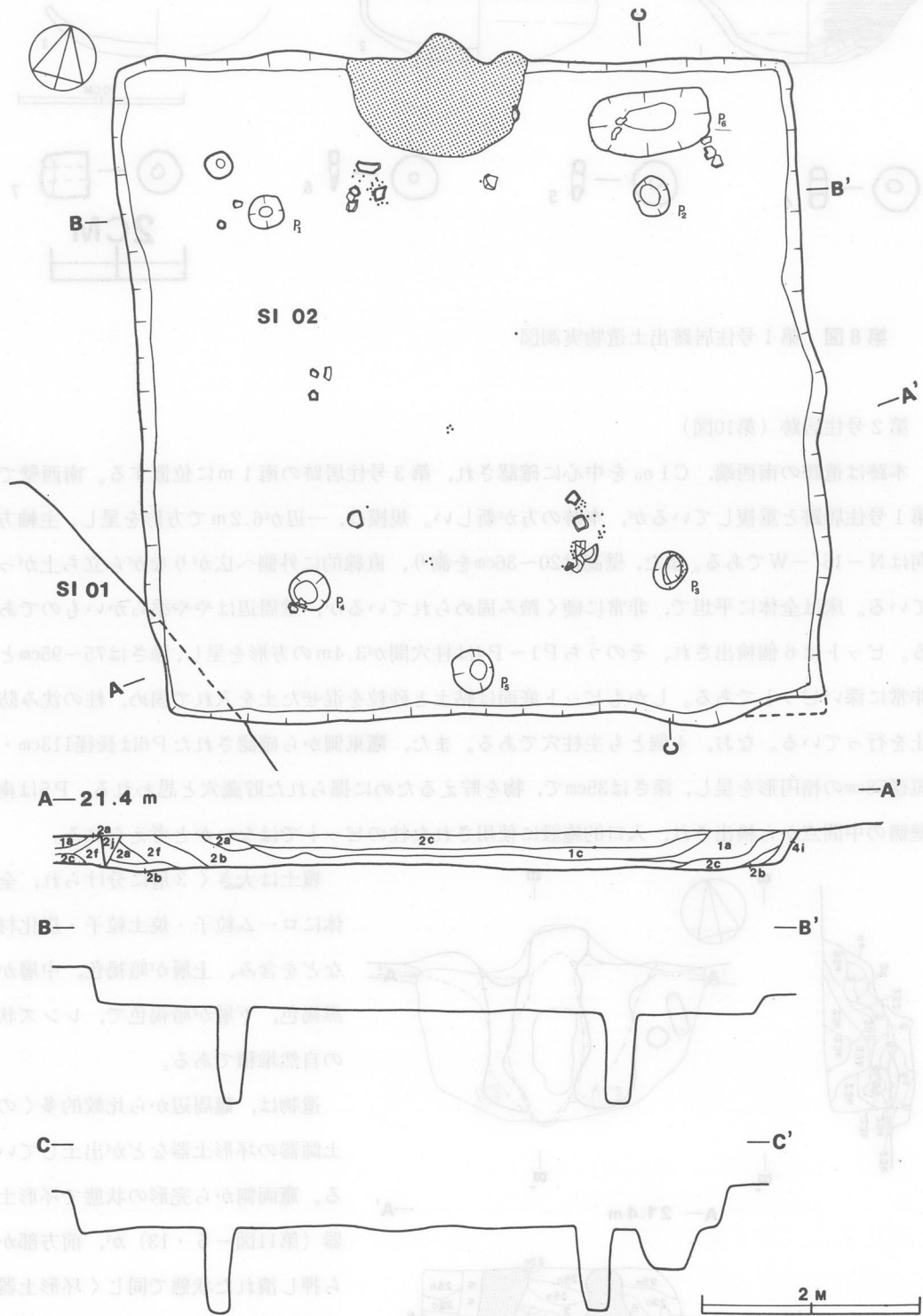
本跡は遺跡の南西端，C1e₀を中心に確認され，第3号住居跡の南1mに位置する。南西壁で第1号住居跡と重複しているが，本跡の方が新しい。規模は，一辺が6.2mで方形を呈し，主軸方向はN-16°-Wである。また，壁高は20~36cmを測り，直線的に外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で，非常に硬く踏み固められているが，壁周辺はやや柔らかいものである。ピットは6個検出され，そのうちP1~P4は柱穴間が3.4mの方形を呈し，深さは75~95cmと非常に深いピットである。しかもピット底面は粘土と砂粒を混ぜた土を入れて固め，柱の沈み防止を行っている。なお，4個とも主柱穴である。また，竈東側から確認されたP6は長径113cm・短径58cmの楕円形を呈し，深さは35cmで，物を貯えるために掘られた貯蔵穴と思われる。P5は南壁側の中間点から検出され，入口的施設に使用された柱のピットではないかと考えられる。



第9図 第2号住居跡竈実測図

覆土は大きく3層に分けられ，全体にローム粒子・焼土粒子・炭化材などを含み，上層が暗褐色，中層が黒褐色，下層が暗褐色で，レンズ状の自然堆積である。

遺物は，竈周辺から比較的多くの土師器の坏形土器などが出土している。竈両側から完形の状態で坏形土器（第11図-5・13）が，前方部から押し潰れた状態と同じく坏形土器（第11図-4）が，P1のやや北西部から甑形土器（第11図-3）が倒立



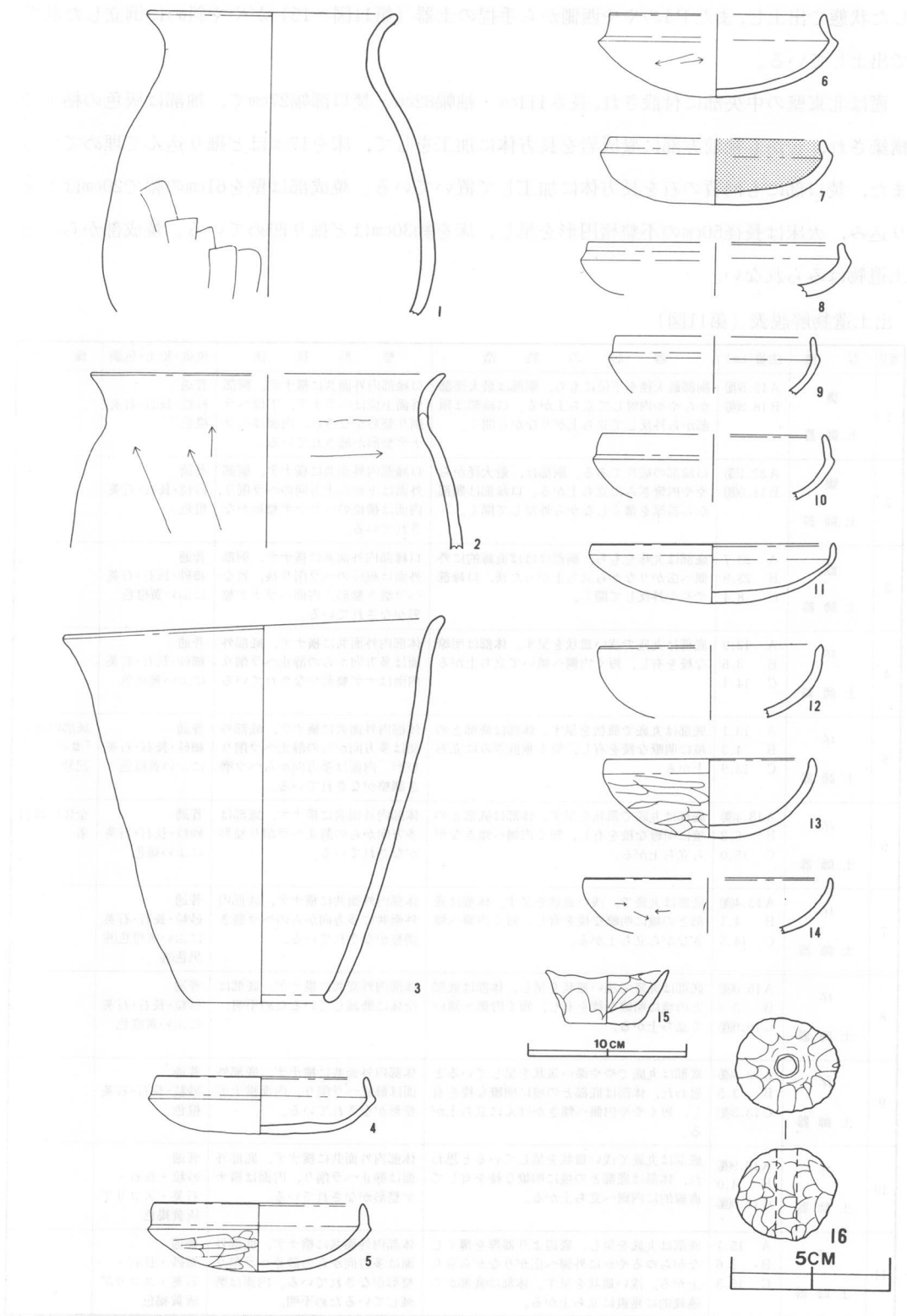
第10図 第2号住居跡実測図

した状態で出土し、またP1のやや西側から手捏の土器（第11図-15）がやや斜めに倒立した状態で出土している。

竈は北東壁の中央部に付設され、長さ111cm・袖幅82cm・焚口部幅27cmで、袖部は灰色の粘土で構築され、しかも袖前方部に凝灰岩を長方体に加工をして、床を17cmほど掘り込んで埋めている。また、焚口部にも同質の石を長方体に加工して置いている。焼成部は壁を61cmの幅で20cmほど掘り込み、火床は長径50cmの不整楕円形を呈し、床を約30cmほど掘り凹めている。焼成部からの出土遺物はみられない。

出土遺物解説表（第11図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 15.5(匳) B 18.8(匳)	胴部最大径を下位にもち、胴部は最大径部からやや内彎して立ち上がる。口縁部は頸部から外反して立ち上がりながら開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面上位はへらナデ、下位へら削り整形がなされ、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
2	甕 土師器	A 22.1(匳) B 11.0(匳)	口縁部の破片である。胴部は、最大径からやや内彎ぎみに立ち上がる。口縁部は頸部から器厚を薄くしながら外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は下から上方向のへら削り、内面は横位のへらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
3	甗 土師器	A 23.7 B 23.9 C 8.4	底部は丸味をもち、胴部はほぼ直線的に外側へ広がりがちながら立ち上がった後、口縁部でやや外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は縦位のへら削り後、雑なへら磨き整形。内面へらナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にふい黄橙色	
4	坏 土師器	A 12.9 B 3.6 C 14.1	底部は丸底で浅い皿状を呈す。体部は明瞭な稜を有し、短く内側へ傾いて立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は多方向からの静止へら削り、内面はナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にふい黄褐色	
5	坏 土師器	A 13.1 B 4.3 C 13.9	底部は丸底で皿状を呈す。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く垂直ぎみに立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は多方向からの静止へら削り整形。内面は多方向からへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にふい黄褐色	底部内面に「#」のへら記号
6	坏 土師器	A 13.4(匳) B 5.2 C 15.0	底部は丸底で皿状を呈す。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く内側へ傾きながら立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部は多方向からの静止へら削り整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい褐色	全体に媒附着
7	坏 土師器	A 13.4(匳) B 4.1 C 14.5	底部は丸底で、浅い皿状を呈す。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く内側へ傾きながら立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部内外面共に多方向からのへら磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄橙色(外) 黒色(内)	
8	坏 土師器	A 16.0(匳) B 3.3 C 16.9(匳)	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く内側へ傾いて立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部は全体に磨減しているため不明。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄褐色	
9	坏 土師器	A 12.4(匳) B 3.5 C 13.3(匳)	底部は丸底でやや深い皿状を呈していると思われる、体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短くやや内側へ傾きかげんに立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は静止へら削り。内面横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
10	坏 土師器	A 13.9(匳) B 4.0 C 15.0(匳)	底部は丸底で浅い皿状を呈していると思われる、体部は底部との境に明瞭な稜を有して直線的に内側へ立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は静止へら削り、内面は横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英・スコリア 灰黄褐色	
11	坏 土師器	A 15.1 B 3.6 C 15.3	底部は丸底を呈し、底辺より器厚を薄くしながらゆるやかに外側へ広がりがちながら立ち上がる。浅い皿状を呈す。体部は底部から連続的に垂直に立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は多方向からの静止へら削り整形がなされている。内面は磨減しているため不明。	普通 細砂・長石・石英・スコリア 灰黄褐色	



第11図 第2号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第11図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
12	坏 土師器	A 13.9(復) B 4.4 C 13.9(復)	底部は丸底で、やや深い皿状を呈し、体部は底部から連続的にやや外側へ広がりながら立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は静止へら削り整形。内面は多方向からのへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色	
13	坏 土師器	A 12.8 B 5.0 C 13.3	底部は丸底でやや深い皿状を呈す。体部は短く、底部から連続的に立ち上がり、口辺部で内側へ傾く。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は多方向からのへら削り整形。内面は多方向からのへら磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 褐灰色	
14	坏 土師器	A 15.4(復) B 3.4 C 15.7(復)	底部は丸底で浅い皿状を呈す。体部は底部から連続的にほぼ垂直に立ち上がる。	体部内外面共にへら磨き調整、底部外面は多方向からの静止へら削り整形。内面へら磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 ふい褐色	
15	小型鉢 土師器	A 7.8 B 3.4 C 4.5	底部は平坦で、胴部は底部から器厚を薄くしながら直線的に外側へ開きながら立ち上がる。	手捏ね土器。内面は底部に向けて手持ち指ナデ、口縁部内面は指による横ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色	底部と胴部下位に木葉痕、指頭痕。
16	球状土錘 土製品		直径3.1cmの球状をなし、ほぼ中央部に直径0.6cmの孔を有する。 重さ26g	へら削り整形後、指ナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色	

第3号住居跡（第13図）

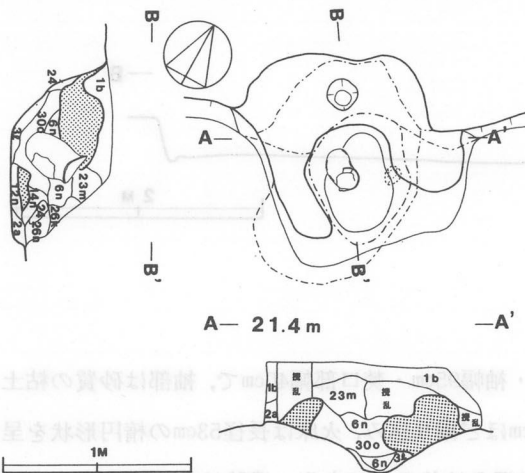
本跡はC1c₉・C1d₉を中心に確認され、第2号住居跡の北1m、第5号住居跡の南南東4mに位置している。規模は長軸4.12m・短軸4.05mの隅丸方形を呈するが、南コーナー部が一部張り出している。主軸方向はN-34°-Wである。壁高は30~38cmを測り、直線的に外側へ広がって立ち上がっている。床は全体に平坦で、竈前方部がやや硬いものの、壁周辺は全体に柔らかい床である。また、北西の壁を除く壁下には幅10cm、深さ8~10cmの溝が周回する。ピットは2個確認したもの支柱穴とは考えられない。また、P2は入口的施設に使用されたピットと考えられ、

直径30cm・深さ34cmを測る。

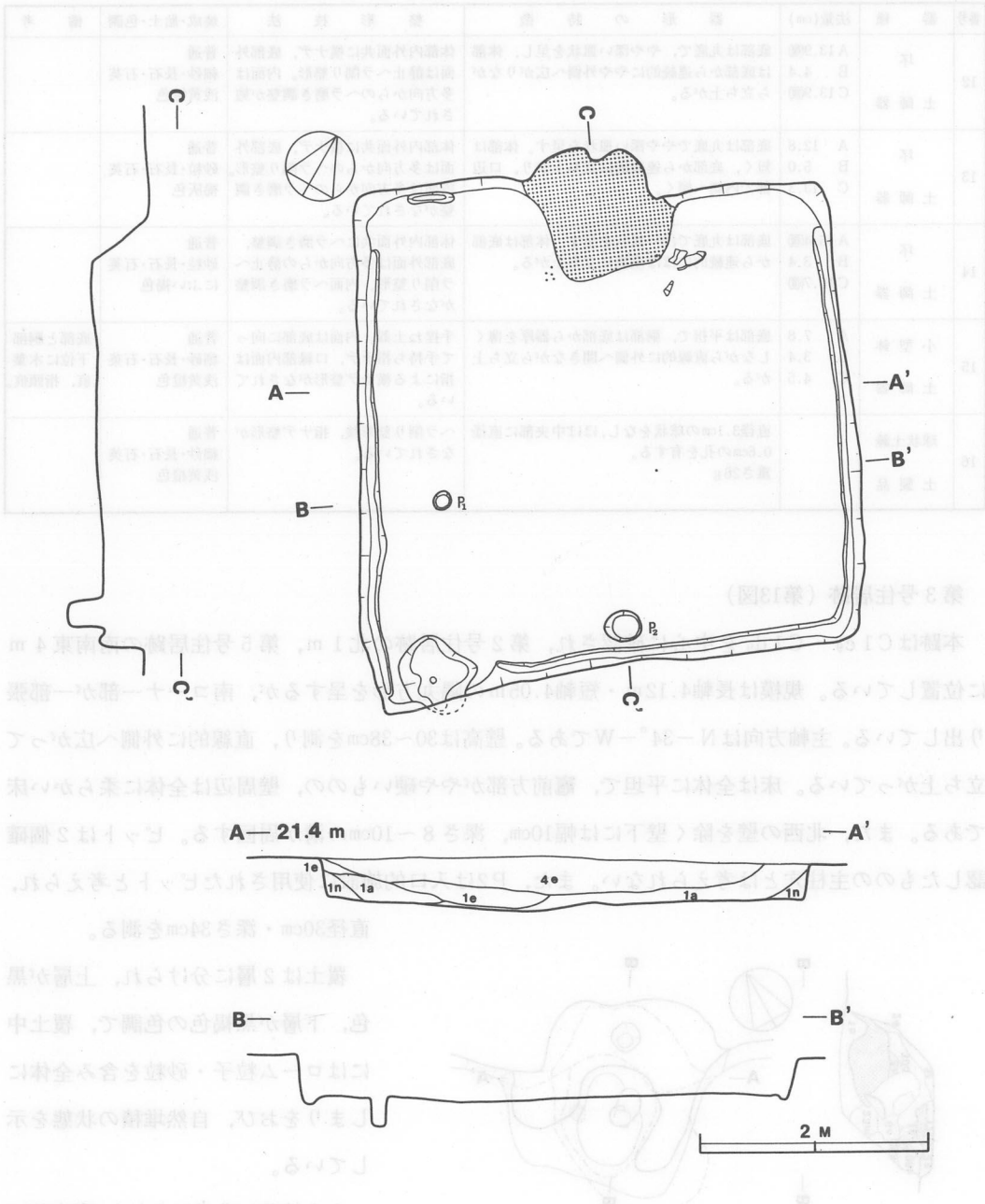
覆土は2層に分けられ、上層が黒色、下層が黒褐色の色調で、覆土中にはローム粒子・砂粒を含み全体にしまりをおび、自然堆積の状態を示している。

出土遺物は非常に少なく、竈東側の床面上から鉢形土器（第14図-6）、中央部床面上から滑石製の白玉（第14図-7）、竈焼成部から長襲形土器（第14図-1）がほぼ正位の状態

出土している。

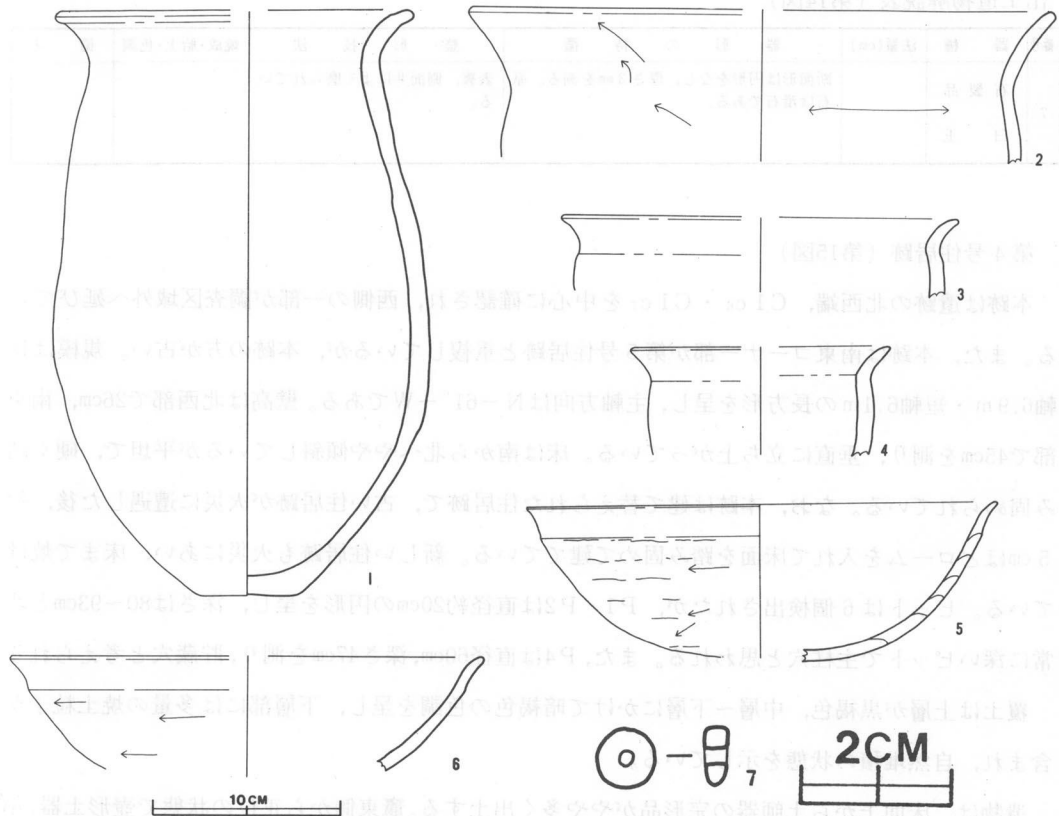


第12図 第3号住居跡竈実測図



第13図 第3号住居跡実測図

竈は北西壁中央部に付設され、長さ107cm・袖幅95cm・焚口部幅40cmで、袖部は砂質の粘土で構築されている。焼成部は壁を105cmの幅で32cmほど掘り込み、火床は長径53cmの楕円形状を呈し、床を約15cm掘り凹めているが、実際の火床の深さは約5cmである。遺物は焼成部内から、使用していた状態で長壺形土器（第14図-1）が出土している。



第14図 第3号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第14図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 18.7(復) B 31.1 C 5.3	底部は平坦である。胴部最大径を下位にもち、胴部は底部から外側へ開いて立ち上がった後、胴部最大径より器厚をやや厚くして内彎ぎみに立ち上がる。口縁部は頸部から大きく外反して開く。	口縁部内外面に横ナデ、胴部内外面に共にへら削り後、へらナデ整形。底部は多方向からのへら削り整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
2	甕 土師器	A 30.9(復) B 8.1(現)	口縁部の破片である。口縁部は頸部からやや外反ぎみに立ち上がりながら開き、胴部は頸部から内彎ぎみに外側へ広がる。	口縁部外面は横ナデ、内面はへら磨き、胴部外面はへら削り、内面へらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
3	甕 土師器	A 21.1(復) B 4.3	口縁部の破片である。口縁部は頸部から短く外反して開き、胴部は頸部からやや外側へ開く。	口縁部内外面に横ナデ、胴部内面はへらナデ整形が施されている。外面不明。	普通 砂粒・長石・ 石英・礫	
4	小型甕 土師器	A 13.9(復) B 5.9(現)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から短く外反して開く。胴部は頸部から内彎ぎみに真下にさがる。	口縁部内外面に横ナデ、胴部内外面に共にへらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
5	鉢 土師器	A 24.9(復) B 7.7(現) C 23.5(復)	底部は丸底で深い皿状を呈し、体部は底部から短くやや外反して開く。	体部内外面に横ナデ、底部は横位の静止へら削り整形。内面はへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア にぶい黄橙色	
6	鉢 土師器	A 24.9 B 6.0(現) C 23.1(復)	底部は丸底でやや深い皿状を呈し、体部は短く外反して開く。	体部内外面に横ナデ、底部は横位の静止へら削り整形。内面はへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア にぶい黄橙色	

出土遺物解説表（第14図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	石製品 白玉		断面形は円形をなし、厚さ3mmを測る。原石は滑石である。	表裏、側面共によく磨られている。		

第4号住居跡（第15図）

本跡は遺跡の北西端、C1c6・C1c7を中心に確認され、西側の一部が調査区域外へ延びている。また、本跡は南東コーナー部が第5号住居跡と重複しているが、本跡の方が古い。規模は長軸6.9m・短軸6.1mの長方形を呈し、主軸方向はN-61°-Wである。壁高は北西部で26cm、南東部で45cmを測り、垂直に立ち上がっている。床は南から北へやや傾斜しているが平坦で、硬く踏み固められている。なお、本跡は建て替えられた住居跡で、古い住居跡が火災に遭遇した後、約5cmほどロームを入れて床面を踏み固めて建てている。新しい住居跡も火災にあい、床まで焼けている。ピットは6個検出されたが、P1・P2は直径約20cmの円形を呈し、深さは80~93cmと非常に深いピットで支柱穴と思われる。また、P4は直径60cm、深さ47cmを測り、貯蔵穴と考えられる。

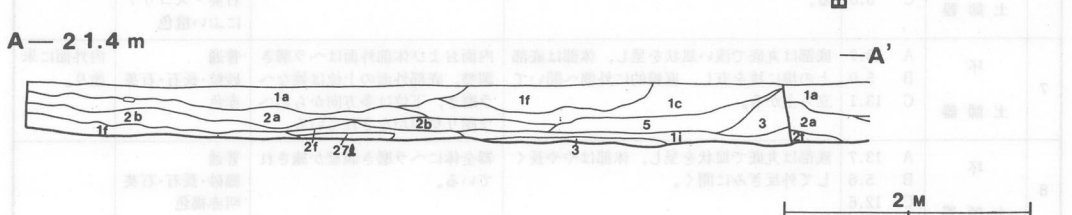
覆土は上層が黒褐色、中層~下層にかけて暗褐色の色調を呈し、下層部には多量の焼土粒子が含まれ、自然堆積の状態を示している。

遺物は、床面上から土師器の完形品がやや多く出土する。竈東側から正位の状態で壺形土器（第16図-3）、中央部やや東側から坏形土器（第16図-7・8・9・11）が正位または倒立の状態で、西側から埴形土器（第16図-4）、南側壁下から須恵器の坏形土器（第16図-12）が半完形品で、また覆土中から鉄製の釘（第16図-13）が出土している。

なお、竈は北西壁に付設されていたが、攪乱が激しく、袖部の痕跡を確認するにとどまる。

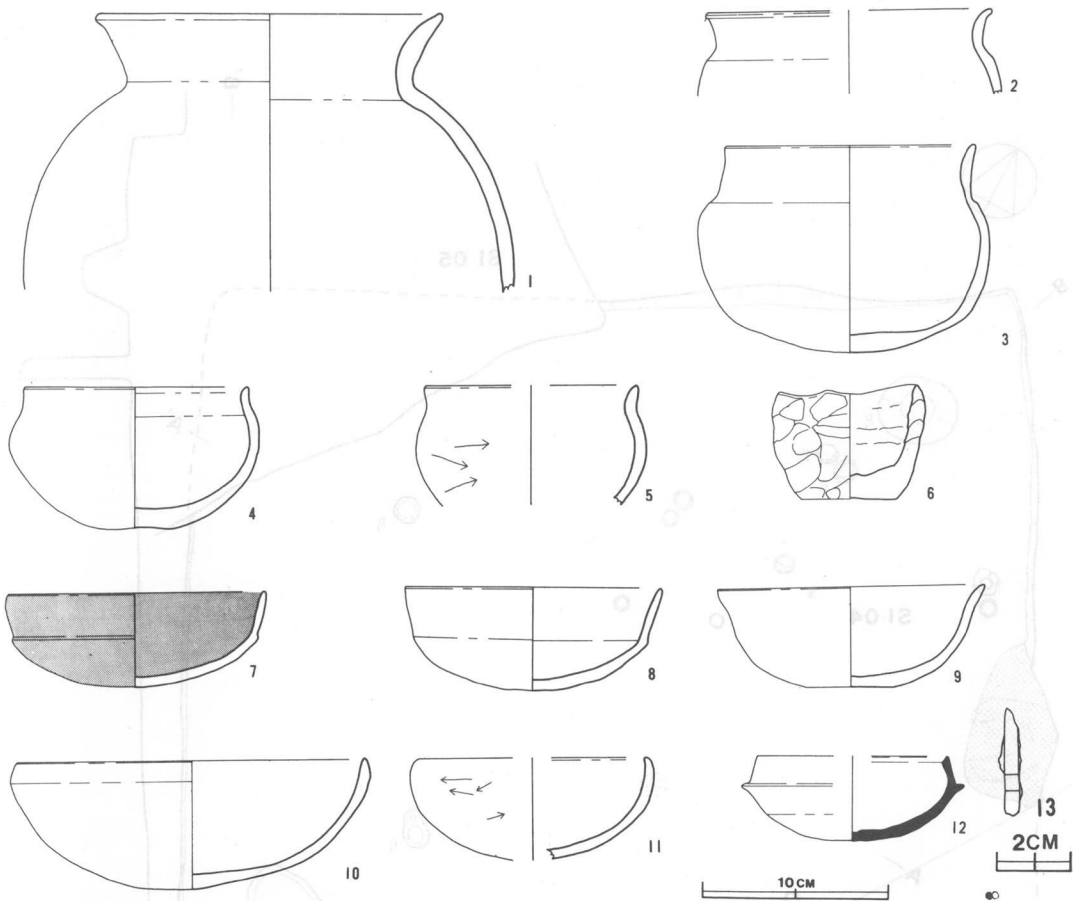
出土遺物解説表（第16図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土師器	A 18.3(匳) B 14.8(匳)	口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がりながら開く。胴部は頸部から球状に広がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にへらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	胴部外面の一部に煤付着
2	甕 土師器	A 15.2(匳) B 4.5(匳)	口縁部の破片である。口縁部は頸部からやや外反して開き、口唇部は水平である。	内面全体および口縁部外面横ナデ整形。胴部外面縦位のへら削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色	
3	壺 土師器	A 13.3 B 11.1	底部は丸底で浅い皿状を呈し、胴部は内彎して立ち上がり、頸部は器厚が薄くなる。口縁部は頸部より垂直ぎみに立ち上がった後、やや外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部から底部にかけて内外面共にへら磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 黒褐色	
4	埴 土師器	A 12.0 B 7.6 C 3.7	底部は中央部がやや窪み、胴部は器厚を薄くしながら内彎して立ち上がり、口縁部は頸部からは垂直に立ち上がる。	底部は多方向からのへら削り、その他器全体はへら磨き調整が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	



調査区	調査内容	調査結果	調査の意義	調査の時期
SI 04	調査区	調査結果	調査の意義	調査の時期
SI 05	調査区	調査結果	調査の意義	調査の時期

第15図 第4号住居跡実測図



第16図 第4号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第16図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	埴土師器	A 11.2(腹) B 6.4(碗)	口縁部から胴部にかけての破片である。胴部は大きく内彎して立ち上がり、口縁部は頸部から短くやや外反して開く。	口縁部内外面に共に横ナデ、胴部外面は静止へら削り、内面横位のへらナデ整形がなされている。二次焼成を受けている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 浅黄色	器全体に煤付着。
6	小型鉢土師器	A 7.4 B 6.2 C 5.0	底部は平坦で、胴部は底部からやや外側へ広がって立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	手捏ね土器。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア にぶい橙色	
7	坏土師器	A 13.7 B 5.0 C 13.1	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部との境に稜を有し、直線的に外側へ開いて立ち上がる。	内面および体部外面はへら磨き調整。底部外面の上位は雑なへら磨き、下位は多方向からのへら削り整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 赤色	内外面に朱塗り。
8	坏土師器	A 13.7 B 5.6 C 12.6	底部は丸底で皿状を呈し、体部はやや長くして外反きみに開く。	器全体にへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 明赤褐色	
9	坏土師器	A 14.2 B 5.4 C 4.8	底部は直径4.8cmの円形の平底で、体部は底部から内彎きみに外側へ広がりながら立ち上がり、口縁部で外反して開く。	口縁部内外面に共に横ナデ、体部外面はへら削り後へら磨き。内面はへら磨き調整が施されている。底面は手持ちへら削りである。	良好 砂粒・長石・石英 明赤褐色	

出土遺物解説表（第16図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
10	坏 土師器	A 18.6 B 6.9 C 18.4	底部は丸底で深い皿状を呈し、体部は底部との境に稜を有し、垂直に立ち上がる。口唇部は尖る。	体部内外面共に横ナデ、底部外面はへら削り整形、内面へらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
11	坏 土師器	A 12.2(復) B 5.5	底部は丸底で深い皿状を呈し、体部と底部との境は明瞭でなく、口縁部でやや内彎ぎみに立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、外面は多方向からの静止へら削り、内面は横位のへら磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	外面に煤付着
12	坏 須恵器	A 10.2(復) B 4.5 C 11.0(復)	底部は丸底状を呈し、体部は底部よりゆるやかなカーブを描いて立ち上がる。口縁部は内傾して外上方へ直線的にのび、受部は外方へ短くのび、端部はやや尖る。	器全体水挽き成形後、口縁部内外面共に回転へら削り整形がなされている。	普通 細砂・長石粒・ 石英粒 灰色	
13	釘 鉄製品		1辺が4mmの角柱状のものである。			

第5号住居跡（第18図）

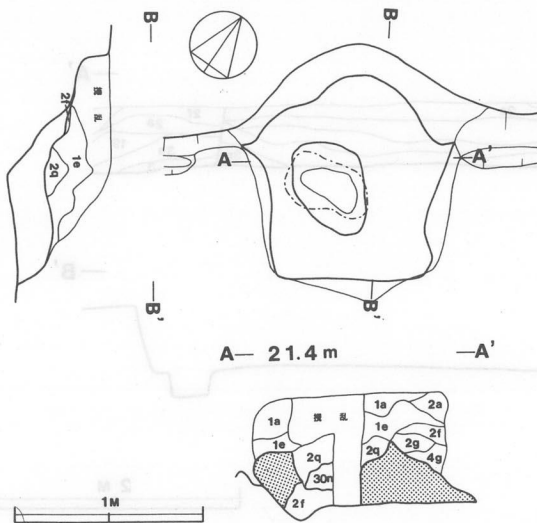
本跡は遺跡の西側，C1a7・C1b8を中心に確認され，西側で第4号住居跡，東側で第8号住居跡と重複している。新旧関係は，本住居跡の方が新しい。また，中央部のやや西側から第7号土壌を床下から確認する。規模は長軸（6.3）m・短軸5.95mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN-35°-Wである。壁高は56～58cmを測り，第4・8号住居跡から約8cmほど浅く構築され，壁面は直線的に外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で，硬く踏み固められ，南・西・北側には幅10cm，深さ10～13cmほどの溝が周回している。また，西壁下の溝中央部から，住居跡の中央に向かって幅15～25cm，深さ5～10cmの溝が走っており，間仕切りにしたものとも考えられる。ピットは5個検出され，位置などからP1が主柱穴と考えられ，直径20cmの円形状を呈し，深さは47cmである。また，南側壁下中央部には半径1.5m，ベルト幅30～40cmの半円状のベルトが作られ，内側には直径70cmの円形状の穴が掘られ，深さは73cmである。貯蔵穴として使用した穴

と考えられる。

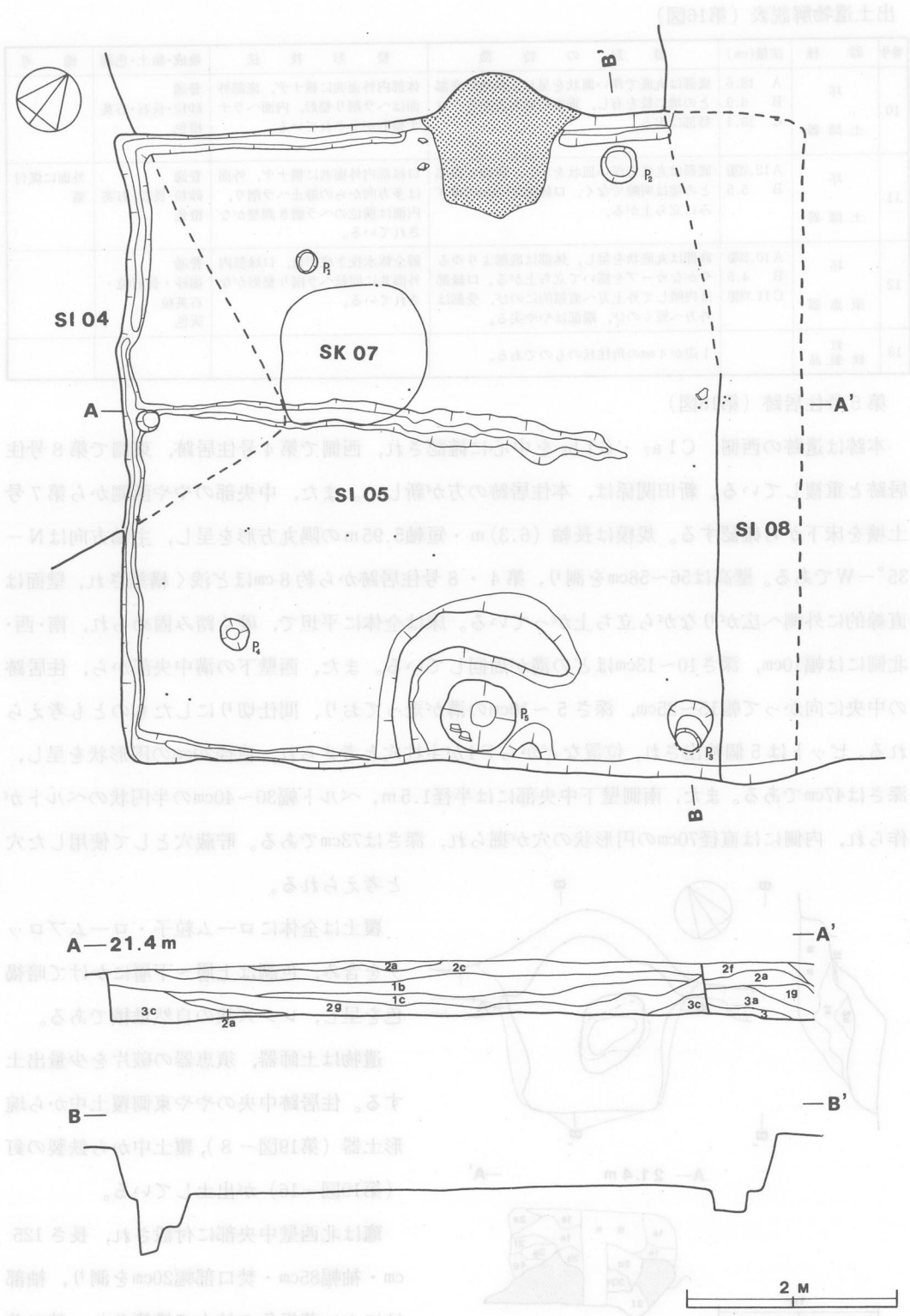
覆土は全体にローム粒子・ロームブロックを含み，色調は上層～下層にかけて暗褐色を呈し，レンズ状の自然堆積である。

遺物は土師器，須恵器の破片を少量出土する。住居跡中央のやや東側覆土中から壙形土器（第19図-8），覆土中から鉄製の釘（第19図-16）が出土している。

竈は北西壁中央部に付設され，長さ125cm・袖幅85cm・焚口部幅20cmを測り，袖部はにぶい黄褐色の粘土で構築され，焚口前部には凝灰岩を横にして潰れを防止してい



第17図 第5号住居跡竈実測図



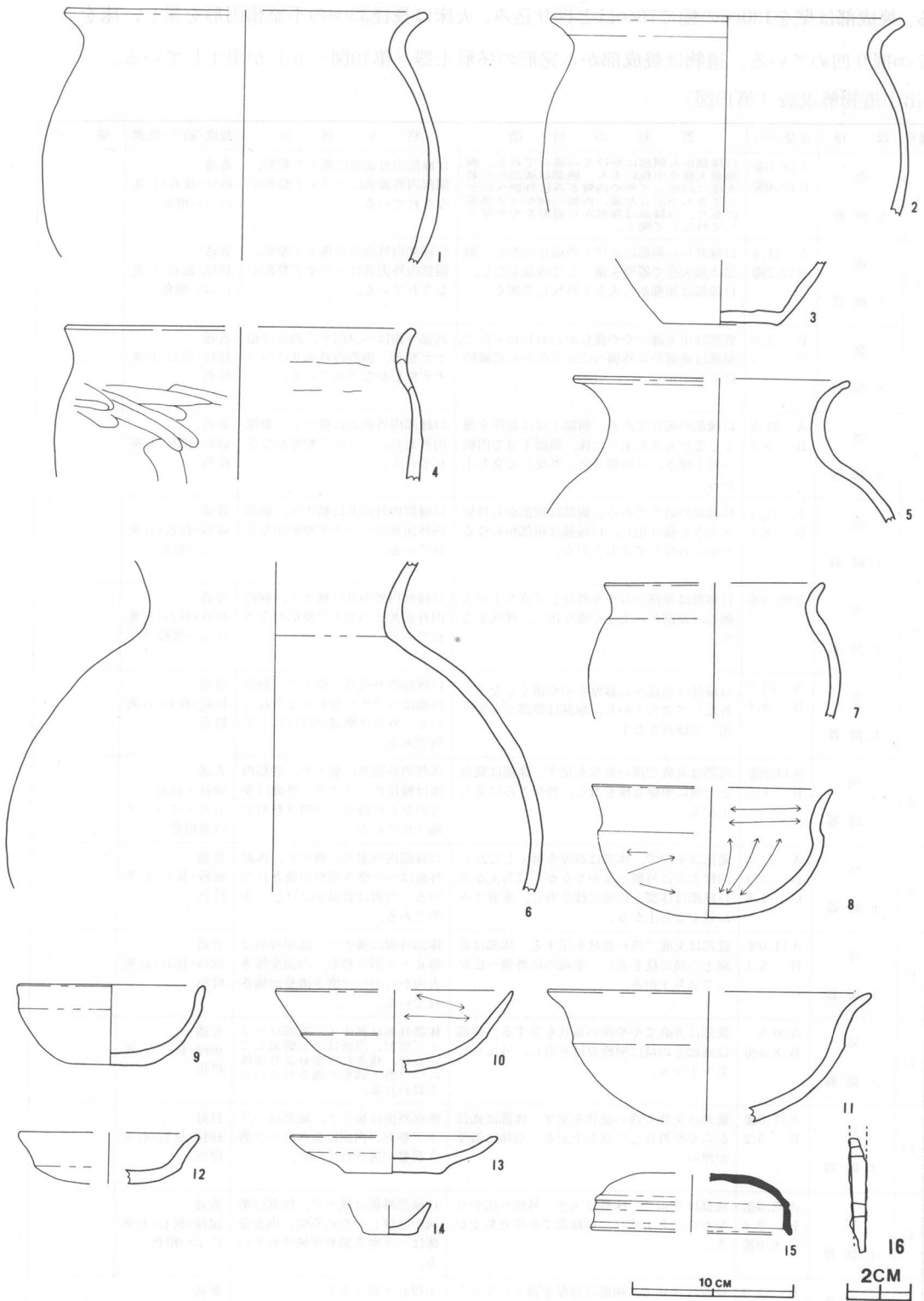
第18図 第5号住居跡実測図

第17図 第5号住居跡実測図

る。焼成部は壁を130cmの幅で76cmほど掘り込み、火床は長径33cmの不整楕円形を呈し、床を3～5cm掘り凹めている。遺物は焼成部から完形の坏形土器（第19図-9）が出土している。

出土遺物解説表（第19図）

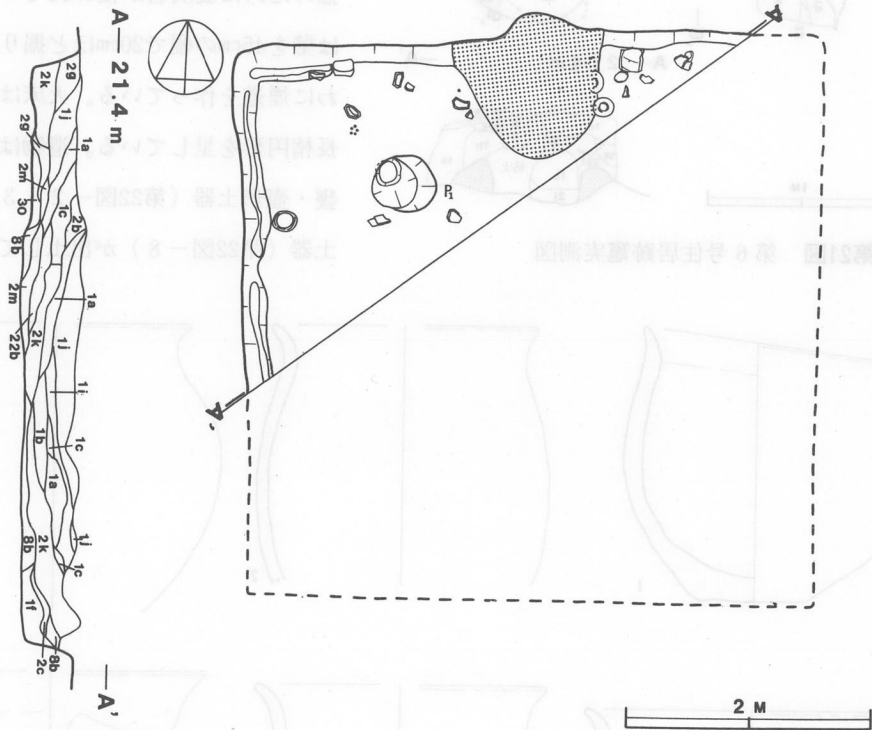
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土師器	A 22.1(匳) B 15.4(匳)	口縁部から胴部にかけての破片である。胴部最大径を中位にもち、胴部は底部から最大径に向かってやや内彎ぎみに外側へ広がって立ち上がった後、内側へ向かって頸部に至り、口縁部は頸部から器厚をやや厚くして外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ整形、胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
2	壺 土師器	A 21.6 B 12.2(匳)	口縁部から胴部にかけての破片である。胴部は最大径で器厚を薄くして球状をなし、口縁部は頸部から大きく外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ整形、胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
3	甗 土師器	B 4.0 C 7.1	底部は中央部がやや窪むがおおむね平坦で、胴部は底部から外側へ広がりながら直線的に立ち上がる。	底部外面はヘラ削り、内面は指ナデ整形、胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
4	甗 土師器	A 21.5 B 9.5	口縁部の破片である。胴部上位は器厚を薄くしながら立ち上がった後、頸部下位で内側へ短く傾き、口唇部で弱く外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
5	壺 土師器	A 18.1 B 8.5	口縁部の破片である。胴部は頸部から外側へ大きく張り出し、口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にふい橙色	
6	壺 土師器	B 20.3(匳)	口縁部は頸部からやや外反して立ち上がる。胴部は頸部から大きく張り出し、球状をなす。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 にふい黄橙色	
7	壺 土師器	A 13.5 B 8.4	口縁部は頸部から器厚をやや薄くしながら外反して立ち上がり、胴部は頸部から張り出して球状をなす。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内面はヘラナデ整形がなされている。外面は磨減がはげしく不明である。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
8	埴 土師器	A 14.8(匳) B 8.0	底部は丸底で深い皿状を呈す。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、外反ぎみに立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部内面は縦位のヘラナデ、外面は多方向からの静止ヘラ削り整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英・スコリア 浅黄橙色	
9	坏 土師器	A 11.4 B 5.0 C 4.8	底部は平坦で、体部は器厚を薄くしながら内彎ぎみに外側へ広がりがりながら立ち上がる。口縁部は体部との境に稜を有し、垂直ぎみに短く立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、体部外面はヘラ磨き調整が施されている。内面は磨減がはげしく不明である。	普通 細砂・長石・石英 橙色	
10	坏 土師器	A 14.6(匳) B 5.1	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、直線的に外側へ広がって立ち上がる。	体部外面は横ナデ、底部外面は静止ヘラ削り整形。内面全体多方向からのヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 橙色	
11	鉢 土師器	A 20.0 B 8.1(匳)	底部は丸底でやや深い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、外反して立ち上がる。	体部外面は横ナデ、底部はヘラナデ整形。内面は少し磨減しているが、残された部分より全体にヘラ磨き調整が施されていたと思われる。	普通 細砂・長石・石英 橙色	
12	坏 土師器	A 11.0(匳) B 3.2	底部は丸底で浅い皿状を呈す。体部は底部からやや外反して立ち上がる。全体に器厚が厚い。	体部外面は横ナデ、底部はヘラナデ整形。内面は全体にヘラ磨き調整が施されている。	良好 砂粒・長石・石英 橙色	
13	皿 土師器	A 12.5(匳) B 2.8 C 6.0(匳)	底部は平坦で、体部は大きく外側へ広がりがりながら立ち上がり、口縁部でやや立ち上がる。	口縁部外面は横ナデ、体部は磨減がはげしいため不明。内面全体はヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にふい橙色	
14	小型甗 土師器	B 1.9 C 3.3	底部は平坦で、胴部は器厚を薄くしながら外側へやや開いて立ち上がる。	手捏ね土器である。	普通 細砂・長石・石英・雲母 にふい黄橙色	



第19图 第5号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第19図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
15	蓋 須恵器	B 3.7 C 12.3	頂部は水平に開き、肩部からゆるやかに外下方へ広がる。口縁部は垂直に下がり、口唇部は短く広い。	水挽き成形後、頂部から肩部にかけて回転ヘラ削り整形、口縁部は横ナデ整形。	普通細砂・長石粒・石英灰色	
16	釘 鉄製品		釘の先端部と思われ、先に伸びるにしたがって細くなる。			



第20図 第6号住居跡実測図

第6号住居跡 (第20図)

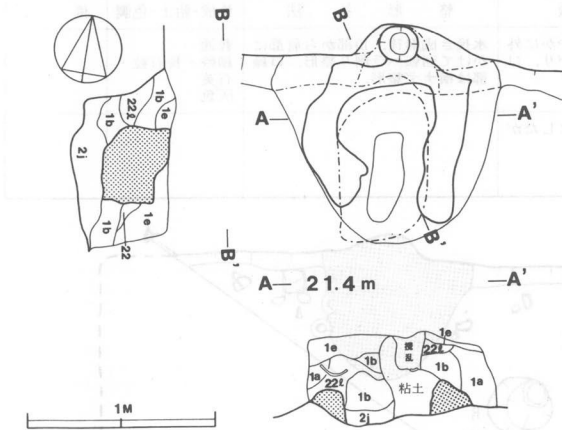
本跡は遺跡の南端、C2 c₃を中心に確認され、第7号住居跡の南2.3mに位置している。また、本住居跡の大部分が調査区域外へ延びているため不明の点が多い。規模は、竈の付設してある位置を中央部と考えると、一辺が4.75mの方形を呈し、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は約40cmを測り、やや外反ぎみに立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。また、ピットは北西部から1個確認し、直径50cmの円形を呈している。深さ60cmのもので、主柱穴と考えられる。また、他の柱穴は本住居跡が調査区域外へ延びているため不明である。

覆土は上層が黒褐色、下層が暗褐色を呈し、下層部の覆土には焼土ブロック・炭化物を含み、自然堆積の状態を示している。

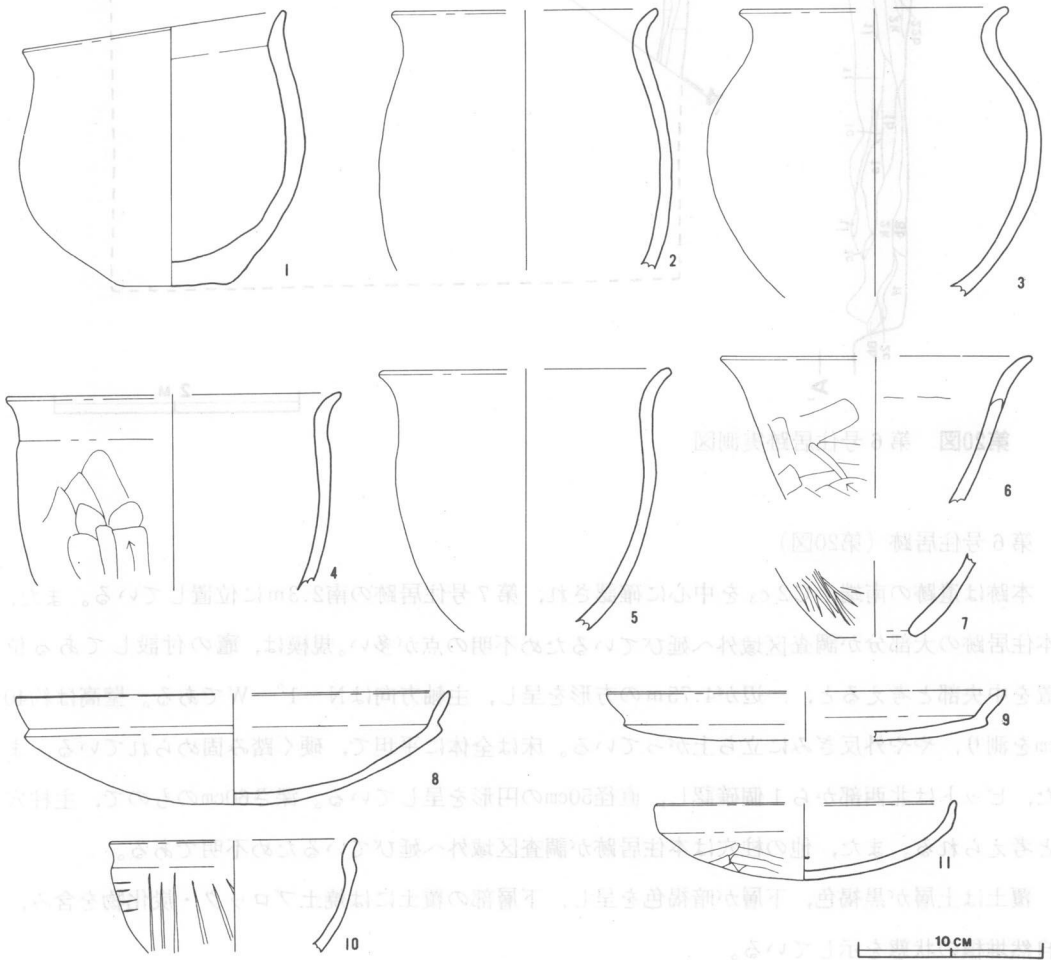
遺物は竈周辺、とくに東側から土師器を多く出土している。竈東側から甕形土器 (第22図-1)

が倒立した状態で、また西側壁下から環形土器（第22図-11）が出土している。

竈は北壁中央部に付設され、長さ120cm・袖幅84cm・焚口部幅30cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築され、また焚口部の袖には補強のために凝灰岩が使われている。焼成部は壁を45cmの幅で20cmほど掘り込み、壁ぎわに煙道を作っている。火床は長径47cmの長楕円形を呈している。遺物は焼成部から甕・壺形土器（第22図-2・3・4）、盤形土器（第22図-8）が出土している。



第21図 第6号住居跡竈実測図



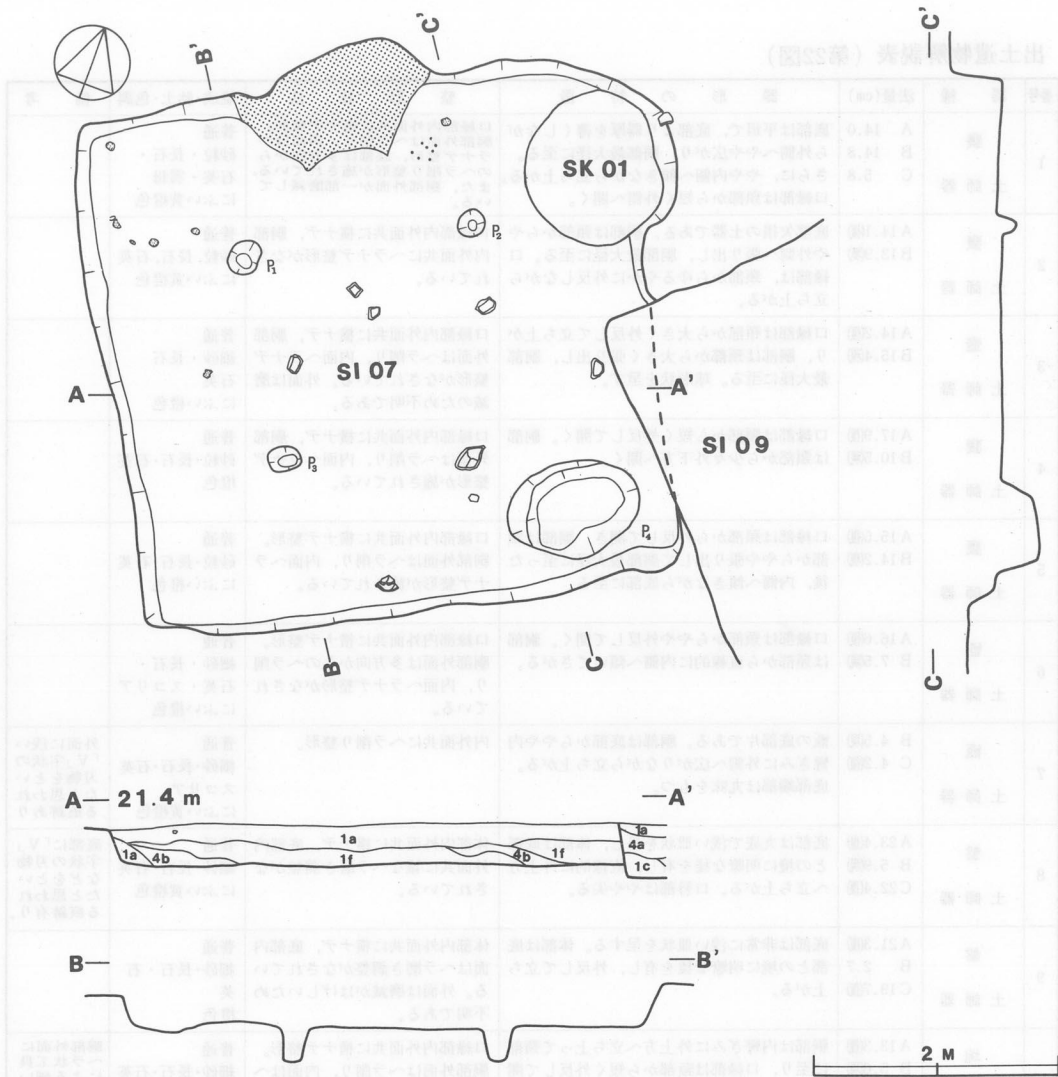
第22図 第6号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第22図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 14.0 B 14.8 C 5.8	底部は平坦で、底部より器厚を薄くしながら外側へやや広がり、胴部最大径に至る。さらに、やや内側へ傾きながら立ち上がる。口縁部は頸部から短く外側へ開く。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面はへら削り。内面はへらナデ整形。底部は多方向からのへら削り整形が施されている。また、胴部外面が一部磨減している。	普通 砂粒・長石・石英・雲母にふい黄橙色	
2	甕 土師器	A 14.1(復) B 13.9(復)	底部欠損の土器である。胴部は頸部からやや外側へ張り出し、胴部最大径に至る。口縁部は、頸部からゆるやかに外反しながら立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にへらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英にふい黄橙色	
3	壺 土師器	A 14.2(復) B 15.4(復)	口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がり、胴部は頸部から大きく張り出し、胴部最大径に至る。球形状を呈す。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り、内面へらナデ整形がなされている。外面は磨減のため不明である。	普通 細砂・長石・石英にふい橙色	
4	甕 土師器	A 17.9(復) B 10.5(復)	口縁部は頸部から短く外反して開く。胴部は頸部から少々外下方へ開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り、内面へらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
5	甕 土師器	A 15.5(復) B 14.2(復)	口縁部は頸部から外反して開き、胴部は頸部からやや張り出して胴部最大径に至った後、内側へ傾きながら底部に至る。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面はへら削り、内面へらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英にふい橙色	
6	甗 土師器	A 16.6(復) B 7.5(復)	口縁部は頸部からやや外反して開く。胴部は頸部から直線的に内側へ傾いてさがる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面は多方向からのへら削り、内面へらナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英・スコリアにふい橙色	
7	甗 土師器	B 4.5(復) C 4.2(復)	甗の底部片である。胴部は底部からやや内彎ぎみに外側へ広がりながら立ち上がる。底部端部は丸味をもつ。	内外面共にへら削り整形。	普通 細砂・長石・石英・スコリアにふい黄橙色	外面に浅い「V」字状の刃物をといたと思われる痕跡あり。
8	盤 土師器	A 23.4(復) B 5.9(復) C 22.4(復)	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的に外上方へ立ち上がる。口唇部はやや尖る。	体部内外面共に横ナデ、底部内外面共に雑なへら磨き調整がなされている。	普通 細砂・長石・石英にふい黄橙色	底部に「V」字状の刃物などをといたと思われる痕跡有り。
9	盤 土師器	A 21.3(復) B 2.7 C 19.7(復)	底部は非常に浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、外反して立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部内面はへら磨き調整がなされている。外面は磨減がはげしいため不明である。	普通 細砂・長石・石英 橙色	
10	埴 土師器	A 13.3(復) B 5.6(復)	胴部は内彎ぎみに外上方へ立ち上って頸部に至り、口縁部は頸部から短く外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面はへら削り、内面はへらナデ整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 橙色	胴部外面にへら状工具による細い3本の縦・横位の沈線の文様有り。
11	環 土師器	A 16.2(復) B 4.1 C 15.7(復)	底部は丸底で皿状を呈する。体部は短く、ほぼ垂直に短く立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部内面はへらナデ整形、外面は幅の狭いへら削り整形がなされている。	普通 細砂・長石・石英 橙色	

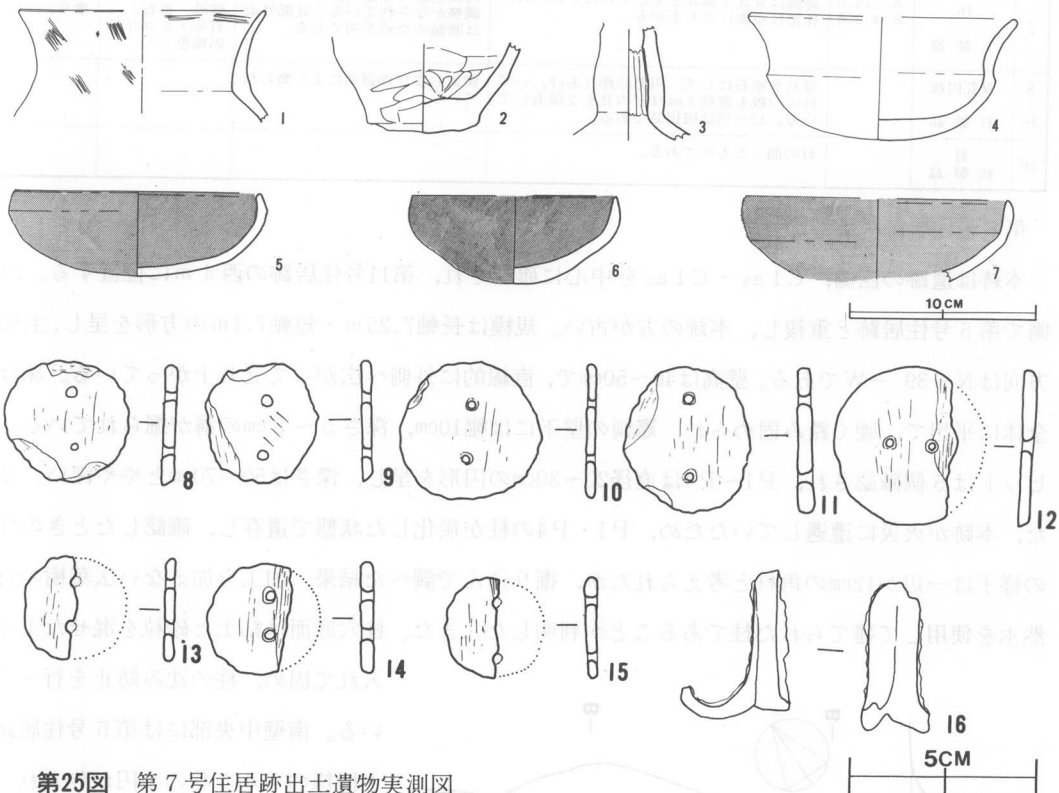
第7号住居跡（第23図）

本跡はC2 b₃を中心に確認され、第10号住居跡の南3mに位置している。また、本住居跡は南東コーナー部で第9号住居跡、北東コーナー部で第2号土壇と重複しているが、本跡の方が古い。規模は長軸4.4m・短軸4.25mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は南側25cm、北側40cmで、第9号住居跡との差は10cmほどである。壁面はゆるやかに外側へ広がって立ち上がっており、床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは4個確認され、P1~P3は直径30~32cmを測る円形を呈し、深さは25~32cmである。また、P4は長径110cm・短径80cmの



態で、また、北西コーナー覆土中から滑石の石製品（第25図-8～15）、鉄製の釘（第25図-16）が出土している。

竈は北西壁中央部に付設されていたが、西側の袖のみを確認したにとどまる。焼成部は壁を140cmの幅で35cmほど掘り込んでいる。覆土は黒褐色の色調を呈し、ローム粒子・焼土粒子・炭化物を含んでいる。



第25図 第7号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第25図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 13.0(匜) B 5.6(碗)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から器厚を薄くし、外反して立ち上がる。胴部は頸部から大きく外下方へ開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内部はへらナデ整形がなされている。外面は磨滅のため不明。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
2	甕 土師器	B 4.9 C 5.9	底部は丸底状を呈し、凸凹である。胴部は底部からやや内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	胴部外面はへら削り、内面全体指ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄橙色	
3	高坏 土師器	B 8.9	脚部は僅かな膨みをもつ柱部から外反ぎみに大きく開く。	外面全体はへら磨き調整、内面は横ナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
4	坏 土師器	A 14.1(匜) B 6.6 C 12.2	底部は丸底で、やや深い皿状を呈する。体部は頸部との境に稜を有し、外反して立ち上がる。体部は他の坏に比較してやや長い。	体部内外面共に横ナデ、底部内面はへら磨き調整がなされている。外面は磨滅のため不明である。	普通 砂粒・長石・石英 スコリア 橙色	

出土遺物解説表 (第25図)

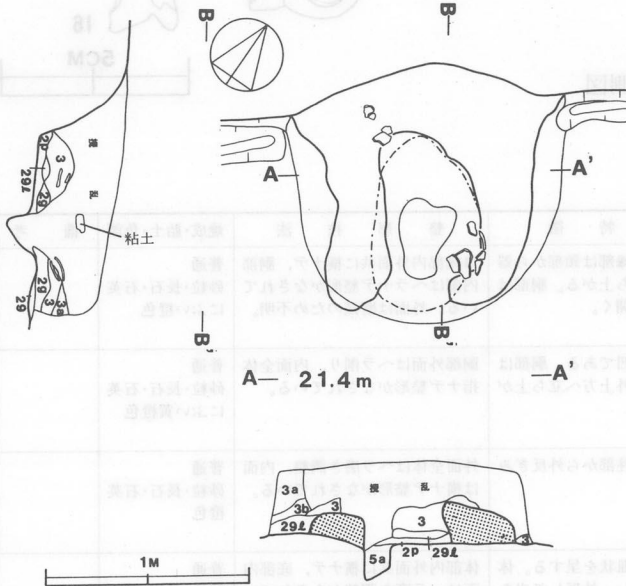
番号	器種	量法(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	坏 土師器	A 12.9 B 4.3 C 13.7	底部は丸底で、皿状を呈する。体部は底部から短く内傾して立ち上がる。	器全体が雑なへら磨き調整がなされている。底部下位は磨滅のため不明である。	普通 細砂・長石・石英 橙色	内外面に朱塗り。
6	坏 土師器	A 10.9 B 4.6 C 11.1	底部は丸底で深い皿状を呈する。体部は底部から器厚を薄くして立ち上がる。	内面全体および体部から底部上位の外面上にかけてへら磨き調整底部下位はへら削り整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 赤褐色	内外面に朱塗り。
7	坏 土師器	A 14.0 B 4.2(吻)	底部は丸底で皿状を呈していたと思われ、体部は垂直に立ち上がる。	内面全体と体部外面はへら磨き調整がなされている。底部外面は磨滅のため不明である。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア 赤褐色	内外面に朱塗り。
8 15	双孔円板 石製品		滑石を原石にして、円形に作りあげ、いずれの円板も直径2mmほどの孔を2個有している。13-15は破損品である。	側面および両面共によく磨られている。		
16	釘 鉄製品		釘の曲ったものである。			

第8号住居跡 (第27図)

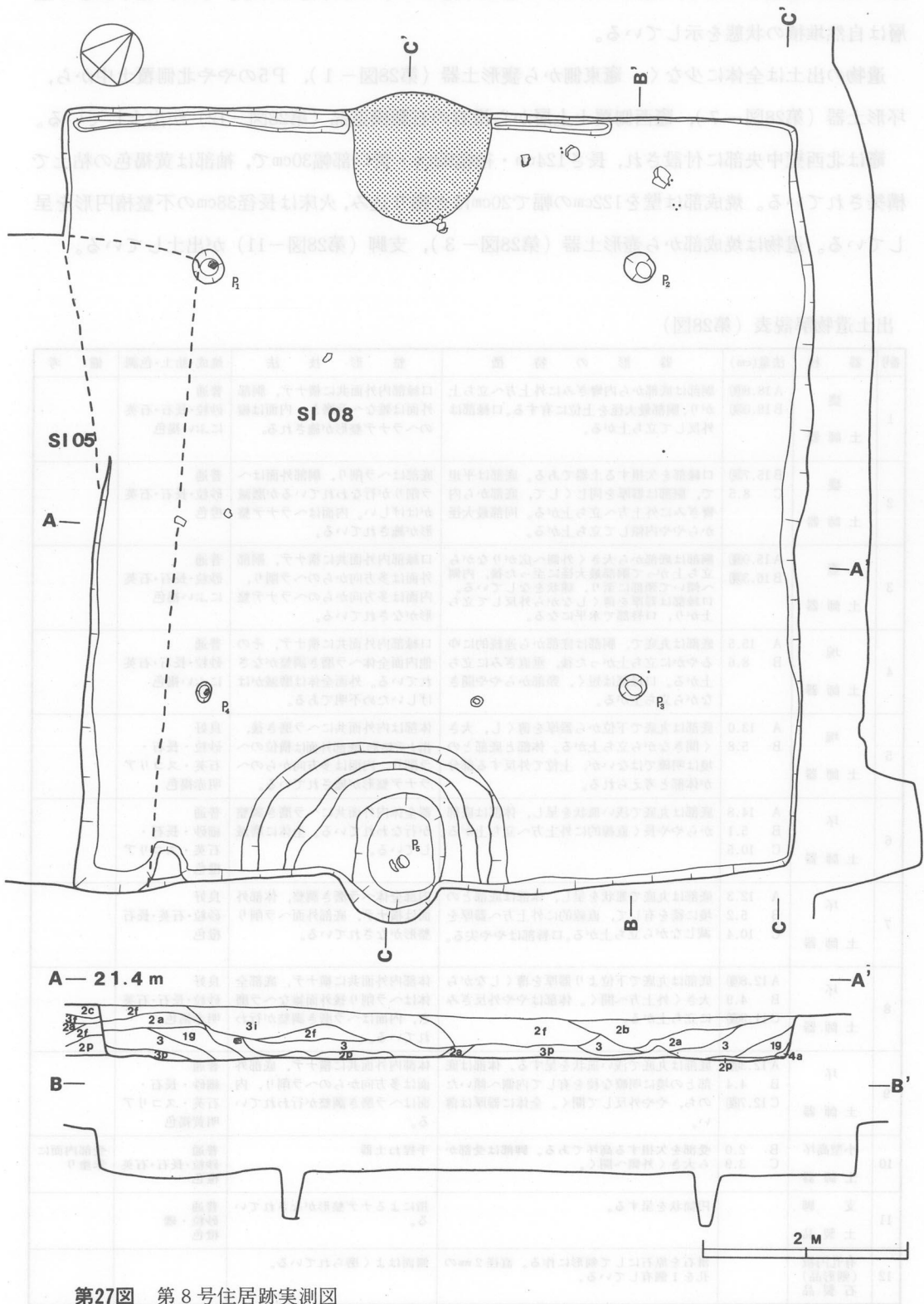
本跡は遺跡の西側、C1 a₉・C1 a₀を中心に確認され、第11号住居跡の西4mに位置する。西側で第5号住居跡と重複し、本跡の方が古い。規模は長軸7.25m・短軸7.1mの方形を呈し、主軸方向はN-39°-Wである。壁高は40~50cmで、直線的に外側へ広がって立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められ、竈側の壁下には幅10cm、深さ5~8cmの溝が掘られている。ピットは5個確認され、P1~P4は直径20~30cmの円形を呈し、深さは50~70cmとやや深い。また、本跡が火災に遭遇していたため、P1・P4の柱が炭化した状態で遺存し、確認したときの柱の様子は一辺が12cmの角材と考えられたが、掘り込んで調べた結果、加工を加えない広葉樹の自然木を使用して建てられた柱であることが判明した。また、柱穴底面は粘土と砂粒を混ぜた土を

入れて固め、柱の沈み防止を行っている。南壁中央部には第5号住居跡と同様のベルト状の半円が作られ、内部には長径110cm・短径88cmの楕円形のピットが掘られ、深さは55cmである。覆土は柔らかく、貯蔵穴として使用したものと思われる。なお、覆土中から坏・埴形土器(第28図-5・6)が完形の状態で出土している。

覆土は上層が暗褐色、下層が褐色を呈し、上層の覆土中にはロームブロック・ローム粒子を多量に含む。また、中層から下層にかけては多量の炭化材が含まれ、下層部は本住居



第26図 第8号住居跡竈実測図



第27図 第8号住居跡実測図

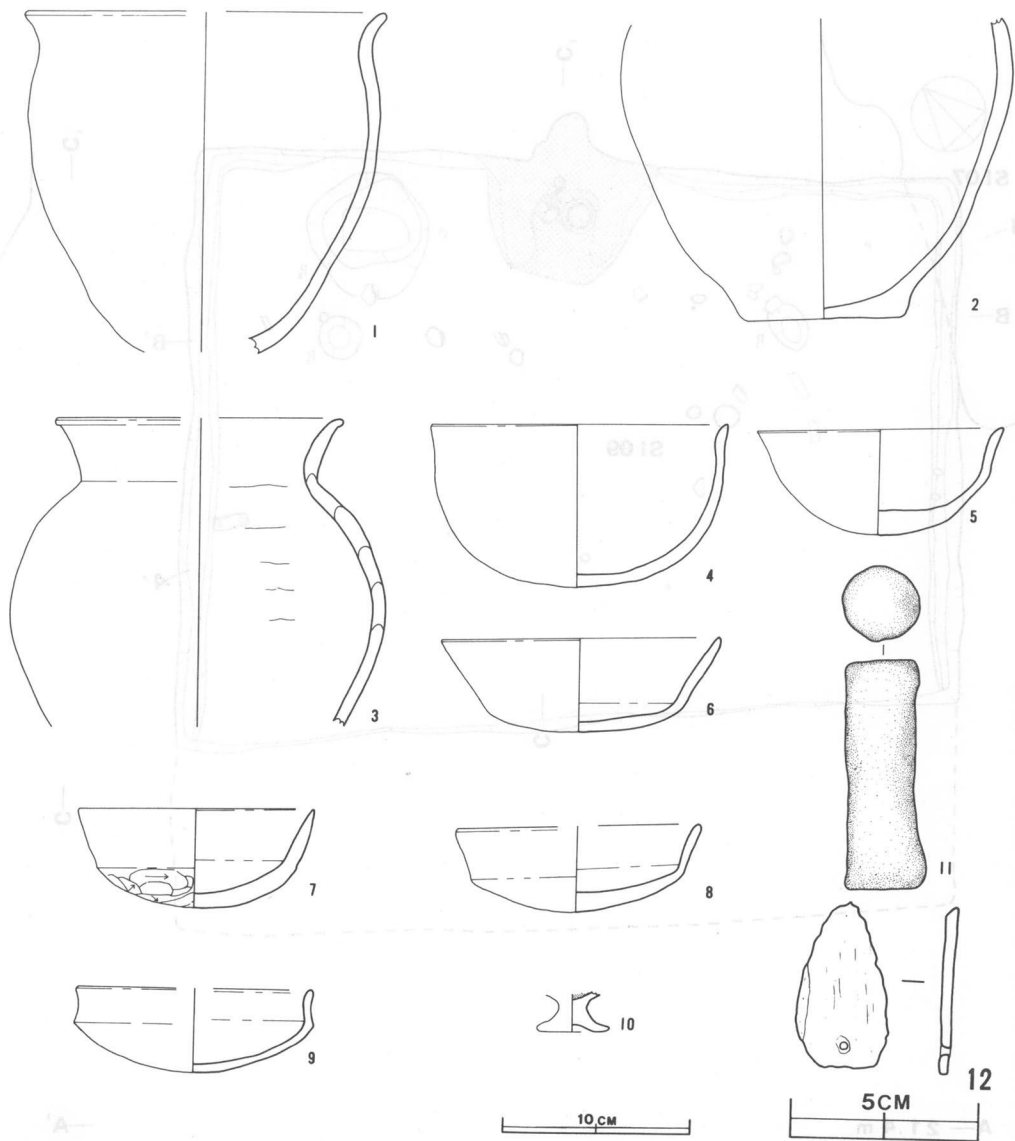
跡が火災に遭遇したとき、消火のために土を投げ込んだものと考えられる。なお、壁下および上層は自然堆積の状態を示している。

遺物の出土は全体に少なく、竈東側から甕形土器（第28図-1）、P5のやや北側覆土中から、環形土器（第28図-7）、竈西側覆土上層から滑石の石製模造品（第28図-12）が出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ124cm・袖幅92cm・焚口部幅30cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を122cmの幅で20cmほど掘り込み、火床は長径38cmの不整楕円形を呈している。遺物は焼成部から壺形土器（第28図-3）、支脚（第28図-11）が出土している。

出土遺物解説表（第28図）

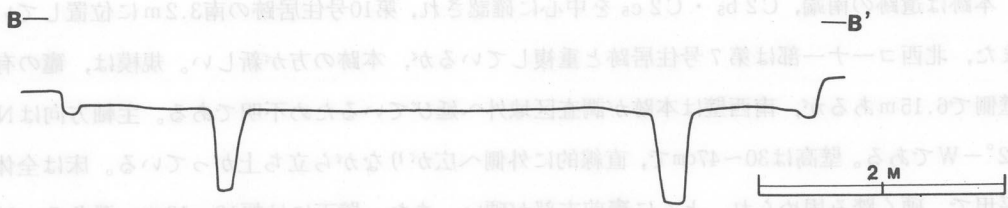
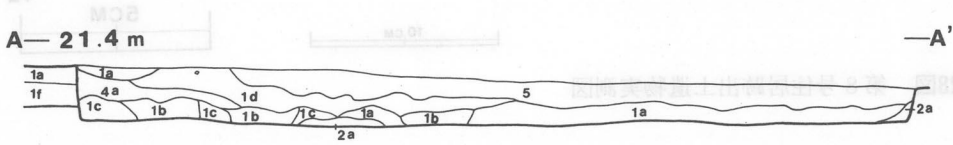
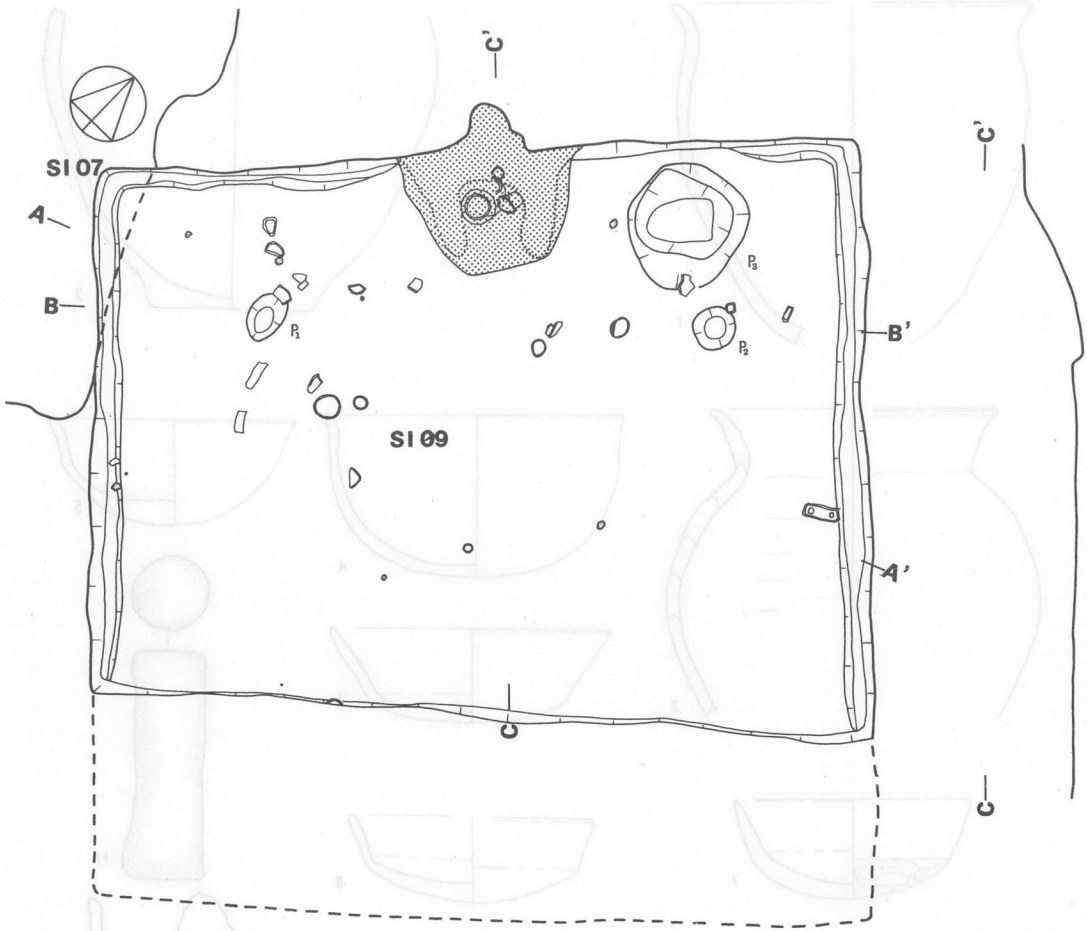
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 18.8(復) B 18.0(現)	胴部は底部から内彎ぎみに外上方へ立ち上がり、胴部最大径を上位に有する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は雑なへら磨き、内面は縦のへらナデ整形が施される。	普通 砂粒・長石・石英 にふい褐色	
2	甕 土師器	B 15.7(復) C 8.5	口縁部を欠損する土器である。底部は平坦で、胴部は器厚を同じくして、底部から内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。胴部最大径からやや内傾して立ち上がる。	底部はへら削り、胴部外面はへら削りが行なわれているが磨減がはげしい。内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
3	壺 土師器	A 15.0(復) B 16.3(現)	胴部は底部から大きく外側へ広がりながら立ち上がって胴部最大径に至った後、内側へ傾いて頸部に至り、球状をなしている。口縁部は器厚を薄くしながら外反して立ち上がり、口唇部で水平になる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は多方向からのへら削り、内面は多方向からのへらナデ整形がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい褐色	
4	埴 土師器	A 15.5 B 8.6	底部は丸底で、胴部は底部から連続的にゆるやかに立ち上がった後、垂直ぎみに立ち上がる。口縁部は短く、頸部からやや開きながら立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、その他内面全体へら磨き調整がなされている。外面全体は磨減がはげしいため不明である。	普通 砂粒・長石・石英 にふい褐色	
5	埴 土師器	A 13.0 B 5.8	底部は丸底で下位から器厚を薄くし、大きく開きながら立ち上がる。体部と底部との境は明確ではないが、上位で外反する部分が体部と考えられる。	体部は内外面共にへら磨き後、指ナデ整形、底部外面は横位のへら削り、内面は多方向からのへらナデ整形が施されている。	良好 砂粒・長石・ 石英・スコリア 明赤褐色	
6	環 土師器	A 14.8 B 5.1 C 10.5	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部からやや長く直線的に外上方へ立ち上がる。	器全体内外面共にへら磨き調整が行なわれている。全体に磨減している。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア 橙色	
7	環 土師器	A 12.3 B 5.2 C 10.4	底部は丸底で皿状を呈し、体部は底部との境に稜を有して、直線的に外上方へ器厚を減しながら立ち上がる。口唇部はやや尖る。	内部全体へら磨き調整、体部外面は横ナデ、底部外面へら削り整形がなされている。	良好 砂粒・石英・長石 橙色	
8	環 土師器	A 12.8(復) B 4.9 C 11.3(復)	底部は丸底で下位より器厚を薄くしながら大きく外上方へ開く。体部はやや外反ぎみに立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部全体はへら削り後外面雑なへら磨き、内面はへら磨き調整が行われている。	良好 砂粒・長石・石英 明赤褐色	
9	環 土師器	A 12.3(復) B 4.4 C 12.7(復)	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有して内側へ傾いたのち、やや外反して開く。全体に器厚は薄い。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は多方向からのへら削り、内面はへら磨き調整が行われている。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア 明黄褐色	
10	小型高環 土師器	B 2.0 C 3.9	受部を欠損する高環である。脚部は受部から大きく外側へ開く。	手捏ね土器	普通 砂粒・長石・石英 橙色	受部内面に 朱塗り
11	支脚 土製品		円筒状を呈する。	指によるナデ整形がなされている。	普通 砂粒・礫 橙色	
12	有孔円板 (剝形品) 石製品		滑石を原石にして剝形に作る。直径2mmの孔を1個有している。	側面はよく磨られている。		



第28図 第8号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡 (第29図)

本跡は遺跡の南端，C2 b₅・C2 c₅を中心に確認され，第10号住居跡の南3.2mに位置している。また，北西コーナー部は第7号住居跡と重複しているが，本跡の方が新しい。規模は，竈の有る壁側で6.15mあるが，南西壁は本跡が調査区域外へ延びているため不明である。主軸方向はN-42°-Wである。壁高は30~47cmで，直線的に外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で，硬く踏み固められ，とくに竈前方部が硬い。また，壁下には幅10~12cm，深さ7~10cmの小さな溝が全体に周回している。ピットは3個確認され，P1・P2は長径45cmの円形または楕



第29図 第9号住居跡実測図

円形を呈し、深さは68～76cmである。なお、竈東側から確認されたP3は長径105cm・短径100cmの楕円形を呈する深さ51cmのもので、貯蔵穴と思われる。

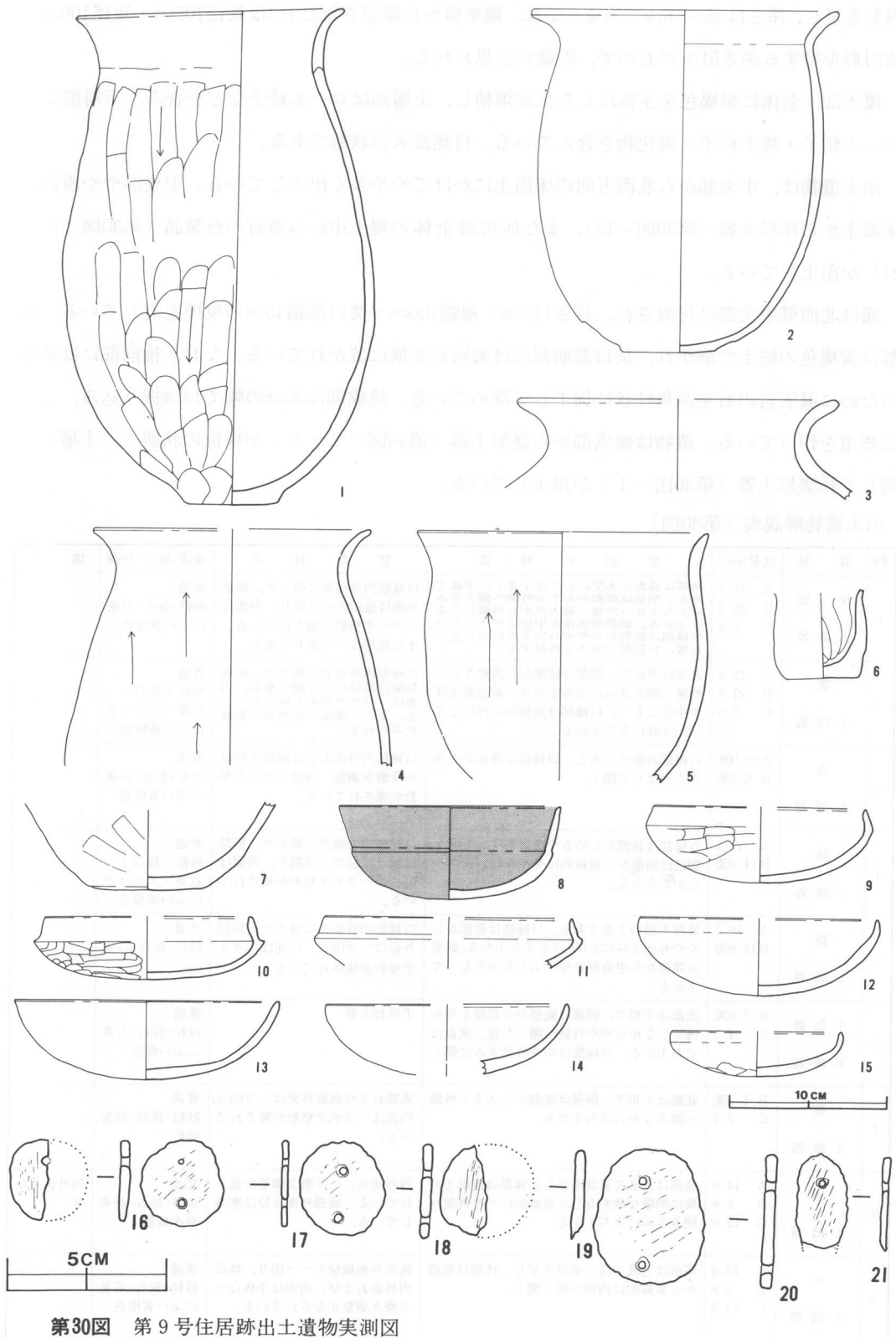
覆土は、全体に黒褐色を主体にした土が堆積し、上層部はローム粒子などを含み、下層部にはローム粒子・焼土粒子・炭化物を含んでいる。自然流入の状態である。

出土遺物は、中央部から北西方向の床面上にかけてやや多く出土している。中央部やや西側の床面上から環形土器（第30図-13）、また住居跡全体の覆土中から滑石の石製品（第30図-16～21）が出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ115cm・袖幅100cm・焚口部幅45cmの規模を有している。袖部は黄褐色の粘土で築かれ、焚口部前部には凝灰岩が横に置かれている。なお、袖前部には補強のために凝灰岩の石を四角柱状に加工して埋めている。焼成部は30cmの幅で18cm掘り込み、ここに煙道を作っている。遺物は焼成部から甕形土器（第30図-2・5）が横位の状態で、上層から同じく長甕形土器（第30図-1）が出土している。

出土遺物解説表（第30図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	長甕 土師器	A 16.7 B 31.3 C 5.8	底部は器形が大型にしては小さく、平底である。胴部は底部からやや外側へ開きぎみに立ち上がった後、最大径から内傾して立ち上がる。胴部最大径を中位より下にもつ。口縁部は頸部からやや外反ぎみに立ち上った後、口辺部で大きく外反する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は縦位のへら削り、内面はへらナデ整形が施されている。また底部はへら削りである。	普通 細砂・長石・石英 にぶい黄褐色	
2	甕 土師器	A 19.2 B 21.5 C 5.9	底部は平坦で、胴部は底部から内彎ぎみに外側へ開きぎみに立ち上がり、胴部最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から外反して「く」字状に立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は縦位のへら削り整形、内面はへらナデ整形が施されている。また、胴部下位外面に剝離がみられる。	普通 細砂・長石・ 石英・スコリア にぶい黄褐色	
3	甕 土師器	A 20.0(現) B 5.7(現)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から大きく外反して開く。	口縁部内外面および胴部上位はへら磨き調整。内面へらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色	
4	甕 土師器	A 17.1 B 14.9(現)	口縁部は頸部からゆるやかに外反して開く。胴部は頸部から直線的にやや外側へ広がりがながさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は縦位のへら削り、内面は縦位のへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア にぶい黄褐色	
5	甕 土師器	A 18.3 B 15.6(現)	底部欠損の土器である。口縁部は頸部からやや外反ぎみに3.5cmほど立ち上がる。胴部は頸部から中央部にややふくらみをもって下がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英	
6	小型鉢 土師器	B 5.6(現) C 4.5	底部は平坦で、胴部は底部から器厚をやや薄くしながらやや外側へ開いた後、垂直に立ち上がる。口縁部はやや外反ぎみに開く。	手捏ね土器	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
7	甕 土師器	B 5.3(現) C 7.4	底部は平坦で、胴部は底部から大きく外側へ開きながら立ち上がる。	底部および胴部外面はへら削り、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
8	環 土師器	A 14.9 B 5.6 C 12.6	底部は丸底で皿状を呈し、体部は底部との境に明瞭な稜を有して直線的にやや外側へ開きぎみに立ち上がる。	内外面共にへら磨き調整が施されている。底部外面下位は磨減している。	普通 細砂・長石・石英 明赤褐色	内外面塗塗り
9	環 土師器	A 13.3 B 4.8 C 14.3	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部から直線的に内側へ短く開く。	底部外面横位のへら削り、体部内外面および、内面は全体にへら磨き調整がなされている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色	



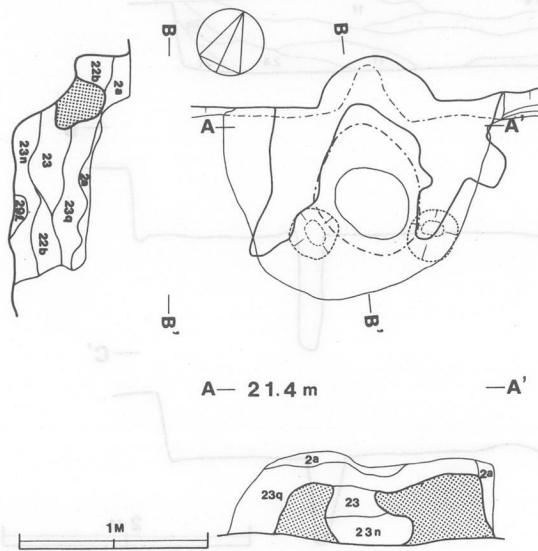
第30图 第9号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第30図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
10	土師器 環	A 12.9 B 4.0 C 14.4	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部との境に明瞭な稜を有して短く内側へ傾いて立ち上がる。	底部外面は多方向からのへら削り、体部外面は横位のへら磨き調整、内面全体はへら磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 灰褐色	
11	土師器 環	A 15.6(復) B 3.3(現)	底部は丸底で浅い皿状を呈するものと思われ、体部は底部との境に明瞭な稜を有して内側へ傾きながら短く立ち上がる。	器全体にへら磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 にぶい橙色	
12	土師器 環	A 15.0 B 4.9 C 15.1	底部は丸底でやや深い皿状を呈し、体部は底部から短く垂直に立ち上がる。	器全体にへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	
13	土師器 環	A 16.5 B 5.1	体部と底部の境は明瞭でない。底部は丸底で皿状を呈する。	器外面は横位のへら磨き、内面は放射状のへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい黄褐色	
14	土師器 環	A 15.2(復) B 14.4(現)	底部は丸底で皿状を呈し、体部は短く底部から垂直に立ち上がる。	器外面は雑なへら磨き、内面はへら磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 にぶい褐色	
15	土師器 環	A 10.6 B 2.9 C 10.7	やや小型の環である。底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部から短く垂直に立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面はへら削り、内面はへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英・雲母 にぶい橙色	
16 20	双孔円板 石製品		滑石を原石にし、円形状に作られている。16・19は破片であるが、その他は完成品である。17・18・20は2個の孔を有する。	剥離した後側面をよく磨りあげている。		
21	有孔円板 (剣形品) 石製品		滑石を原石にして剣形に作る。先端部を欠損し、孔を1個有する。	剥離した後側面を丁寧に磨りあげている。		

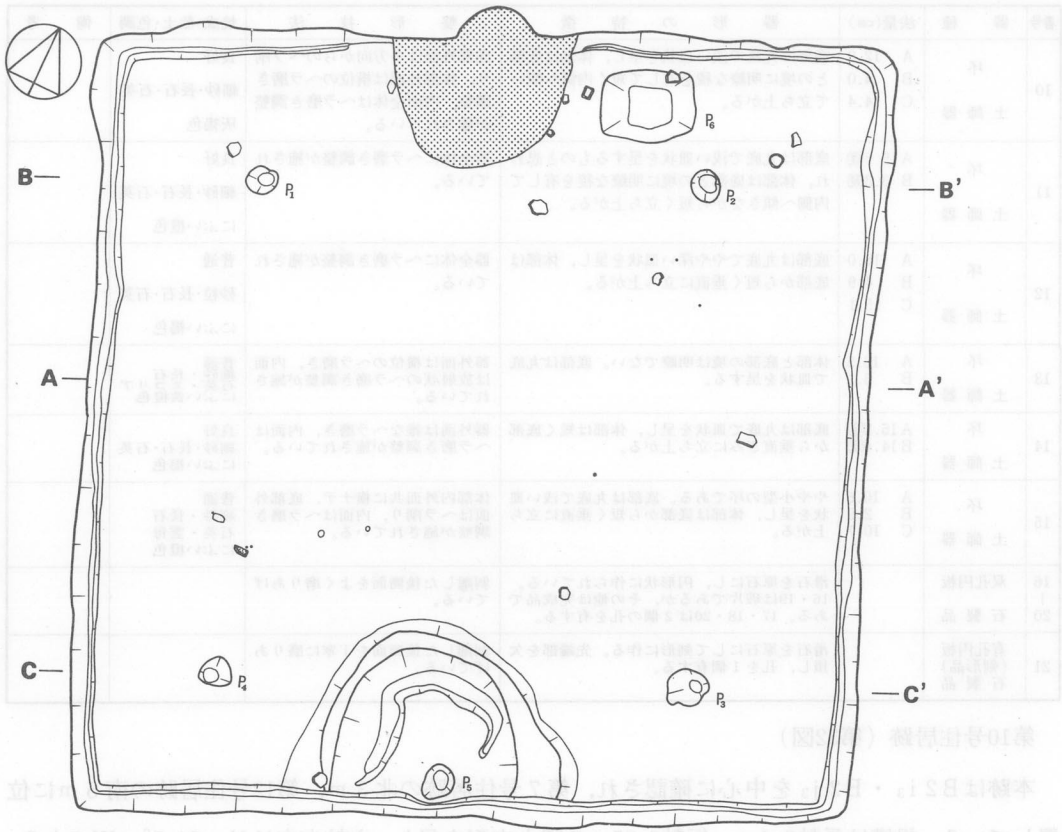
第10号住居跡（第32図）

本跡はB2 i₃・B2 j₃を中心に確認され、第7号住居跡の北3m、第12号住居跡の南5mに位置している。規模は長軸6.4m・短軸6.35mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-24.5°-Wである。壁高は東側が50cm、西側が70cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み

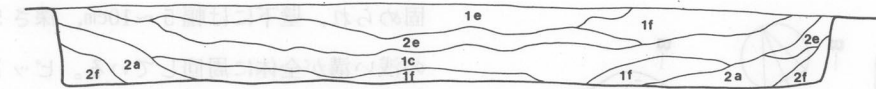


第31図 第10号住居跡竈実測図

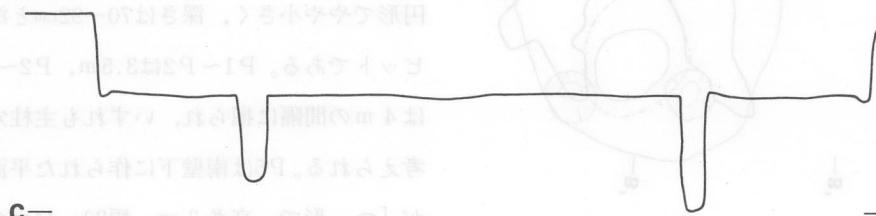
固められ、壁下には幅5~10cm、深さ5cmの浅い溝が全体に周回している。ピットは6個確認され、P1~P4は直径25~30cmの円形でやや小さく、深さは70~92cmと深いピットである。P1~P2は3.5m、P2~P3は4mの間隔に掘られ、いずれも支柱穴と考えられる。P5は南壁下に作られた平面形が「∩」形で、高さ3cm、幅30~44cmの土手状の高まりをめぐる施設内側に掘られた小さなピットで、覆土は柔らかく、入口的な施設に使用されたものか、あるいは貯蔵穴として使用したものかが考えられる。また、半円状に作られた土手状高まりは床



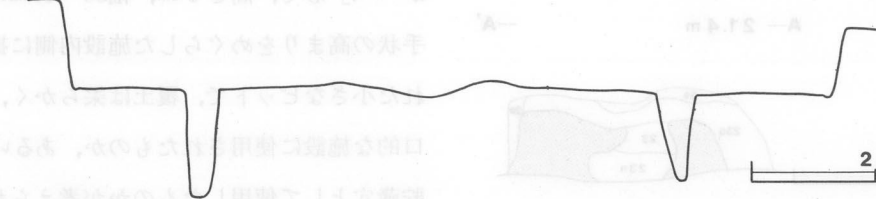
A—21.4 m



B—



C—



2 M

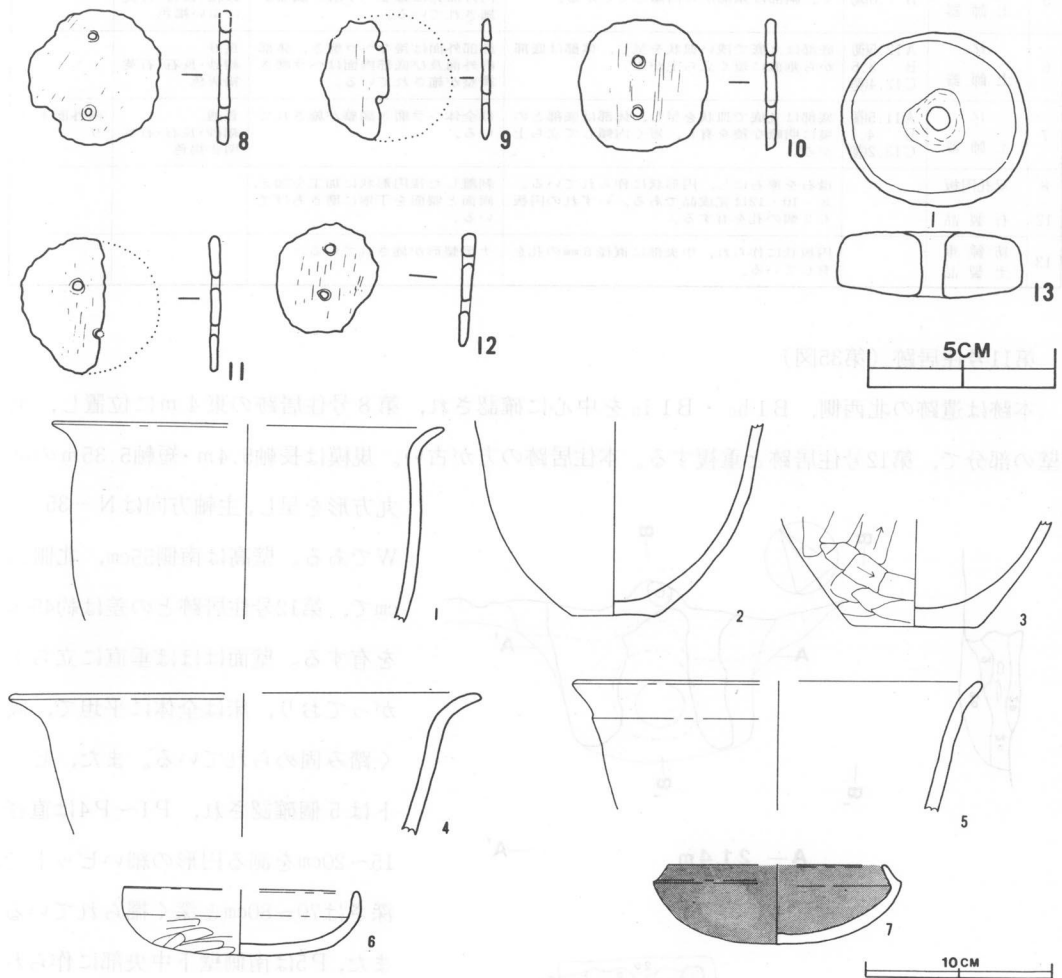
第32図 第10号住居跡実測図

面同様硬いもので、後で作ったものである。P6は竈東側から検出され、長軸75cm・短軸60cmの長方形を呈する深さ62cmの貯蔵穴である。

覆土は上層から下層にかけて黒褐色・暗褐色の土が交互に堆積し、ローム粒子・ロームブロックが多量に含まれている。レンズ状の自然堆積の状態を示している。

遺物は土師器、石製品が少量出土する。また、滑石の石製模造品（第33図－8・9・10・11・12）および土製品の紡錘車（第33図－13）が南側覆土中から出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ105cm・袖幅93cm・焚口部幅56cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築され、内側はよく焼けている。また、袖前部には凝灰岩を埋めて補強している。焼成部は壁を64cmの幅で22cm掘り込み、火床は長径42cmの楕円形を呈し、床を約8cm掘り凹めている。遺物の出土はみられない。



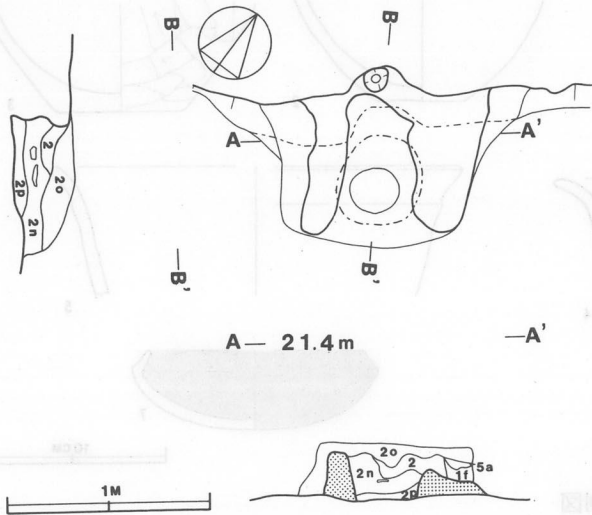
第33図 第10号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第33図)

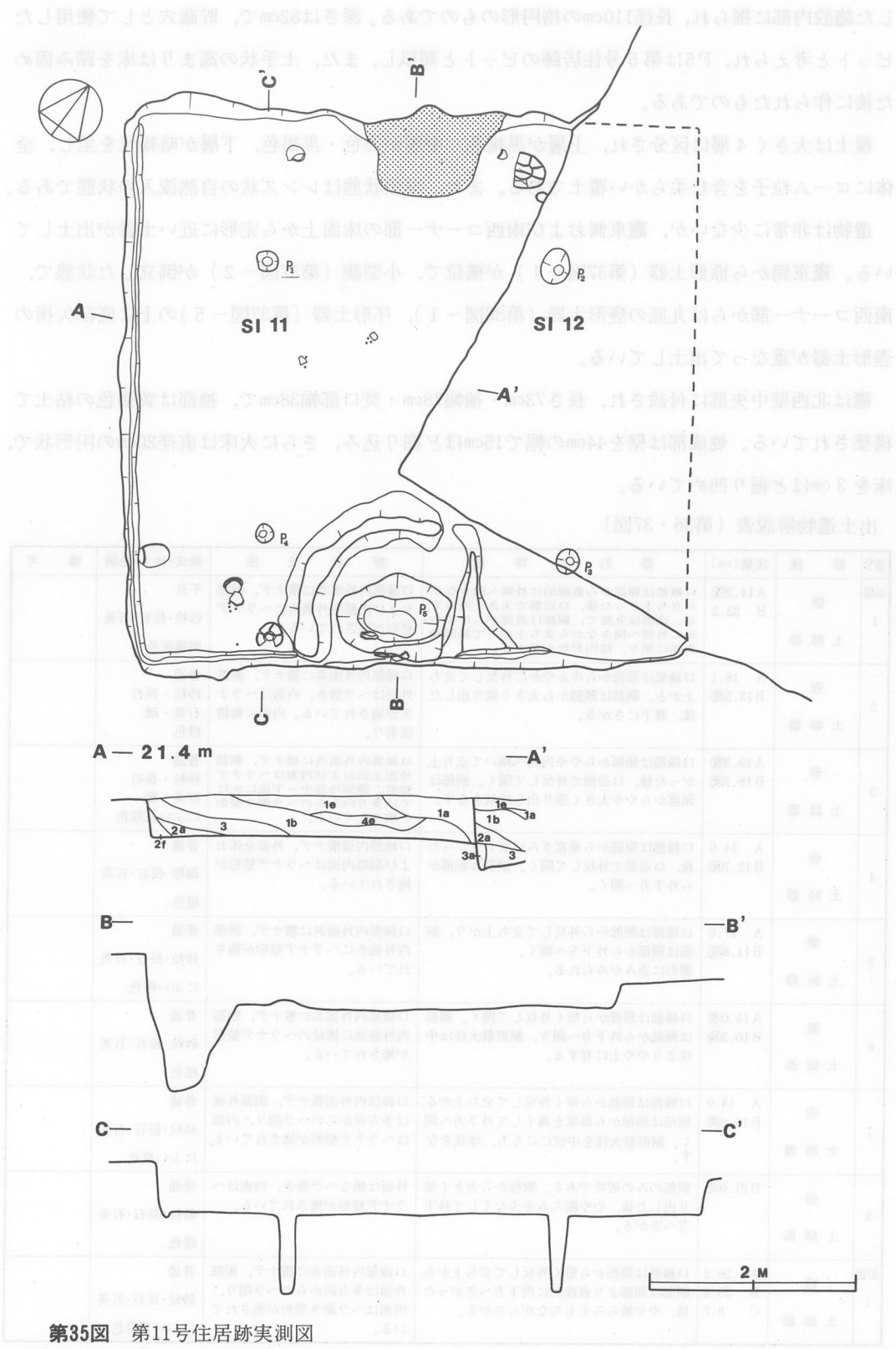
番号	器種	量法(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甗 土師器	A 20.6(復) B 10.6(復)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から大きく外反して開き、胴部は頸部からやや脹らませながらさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り、内面はへらナデ整形が施されている。また、胴部外面の一部が磨滅している。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
2	甗 土師器	B 10.3(復) C 4.3	底部は中央部がやや窪むが、おおむね平坦である。胴部は底部からやや外側へ開きながら立ち上がる。	器全体共にへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明褐色	底部に木葉痕有り
3	甗 土師器	B 5.7(復) C 6.5	底部は平底で、胴部は器厚を薄くしながら外上方へ立ち上がる。	底部はへら削り、胴部外面は多方向からのへら削り、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 にぶい赤褐色	
4	甗 土師器	A 24.7(復) B 7.5(復)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から大きく外反して開き、胴部は頸部より内傾してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は雑なへらナデ、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	
5	甗 土師器	A 21.7(復) B 7.0(復)	口縁部は頸部外面に稜を有し、外反して開く。胴部は頸部から内傾してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共に雑なへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	
6	坏 土師器	A 12.5(復) B 3.6 C 12.4(復)	底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部から垂直に短く立ち上がる。	底部外面は雑なへら磨き、体部内外面及び底部内面はへら磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 褐灰色	
7	坏 土師器	A 11.5(復) B 4.1 C 13.2(復)	底部は丸底で皿状を呈し、体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く内傾して立ち上がる。	器全体へら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 明赤褐色	内外面未塗り
8 12	双孔円板 石製品		滑石を原石にし、円形状に作られている。8・10・12は完成品である。いずれの円板も2個の孔を有する。	剝離した後円形状に加工を加え、両面と側面を丁寧に磨きあげている。		
13	紡錘車 土製品		円板状に作られ、中央部に直径6mmの孔を有している。	ナデ整形が施されている。		

第11号住居跡 (第35図)

本跡は遺跡の北西側、B1h0・B1i0を中心に確認され、第8号住居跡の東4mに位置し、東壁の部分で、第12号住居跡と重複する。本住居跡の方が古い。規模は長軸5.4m・短軸5.35mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-35°-Wである。壁高は南側55cm、北側24cmで、第12号住居跡との差は約45cmを有する。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。また、ピットは5個確認され、P1~P4は直径15~20cmを測る円形の細いピットで、深さは70~80cmと深く掘られている。また、P5は南側壁下中央部に作られた平面形が「∩」形の高さ5cm、幅35~45cmの土手状の高まりをめぐら



第34図 第11号住居跡竈実測図



第35図 第11号住居跡実測図

した施設内部に掘られ、長径110cmの楕円形のものである。深さは82cmで、貯蔵穴として使用したピットと考えられ、P5は第5号住居跡のピットと類似し、また、土手状の高まりは床を踏み固めた後に作られたものである。

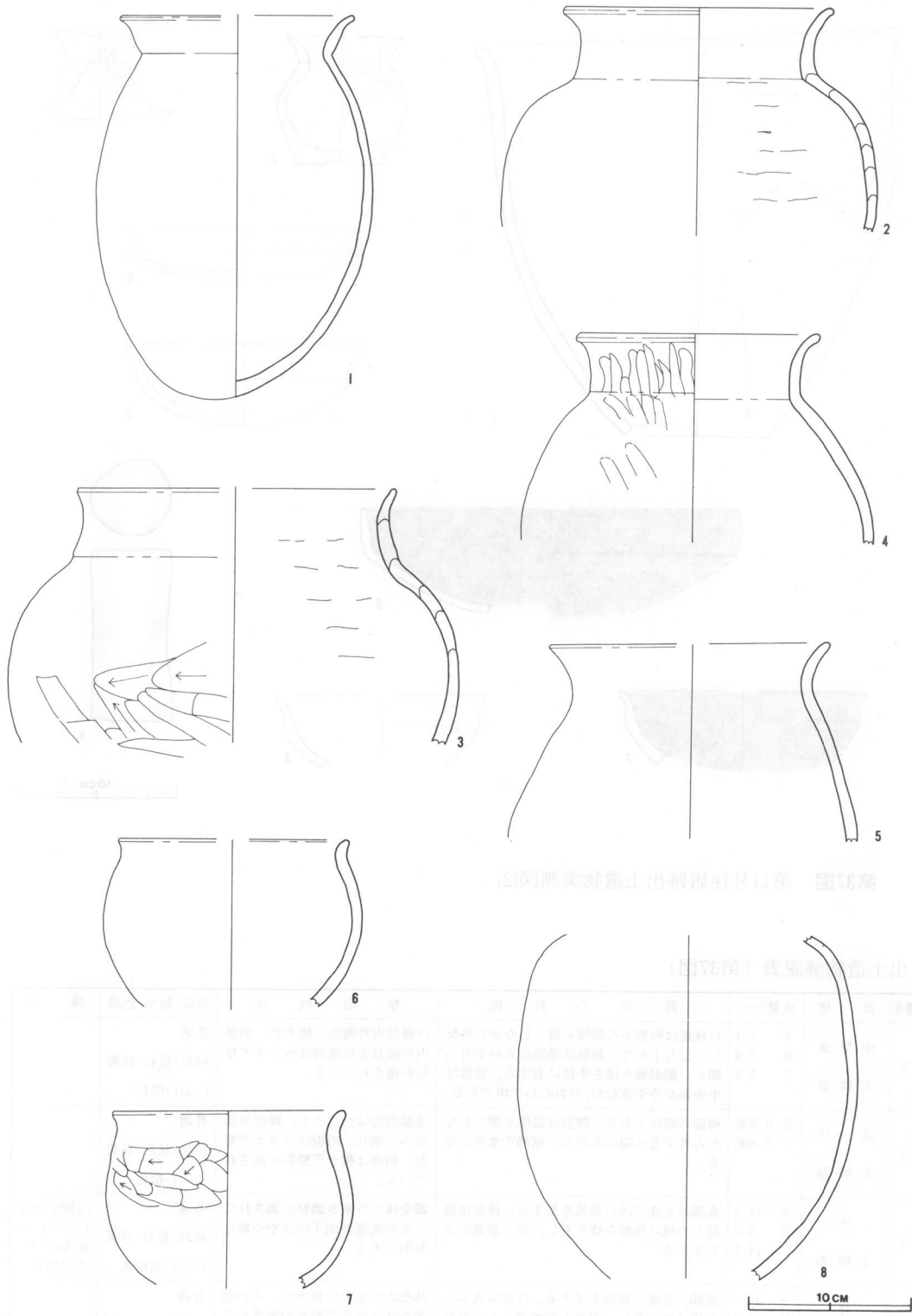
覆土は大きく4層に区分され、上層が黒褐色、中層が黒色・黒褐色、下層が暗褐色を呈し、全体にローム粒子を含む柔らかい覆土である。また、堆積状態はレンズ状の自然流入の状態である。

遺物は非常に少ないが、竈東側および南西コーナー部の床面上から完形に近い土器が出土している。竈東側から甑形土器（第37図-1）が横位で、小型甕（第37図-2）が倒立した状態で、南西コーナー部からは丸底の甕形土器（第36図-1）、坏形土器（第37図-5）の上に底部欠損の壺形土器が重なって出土している。

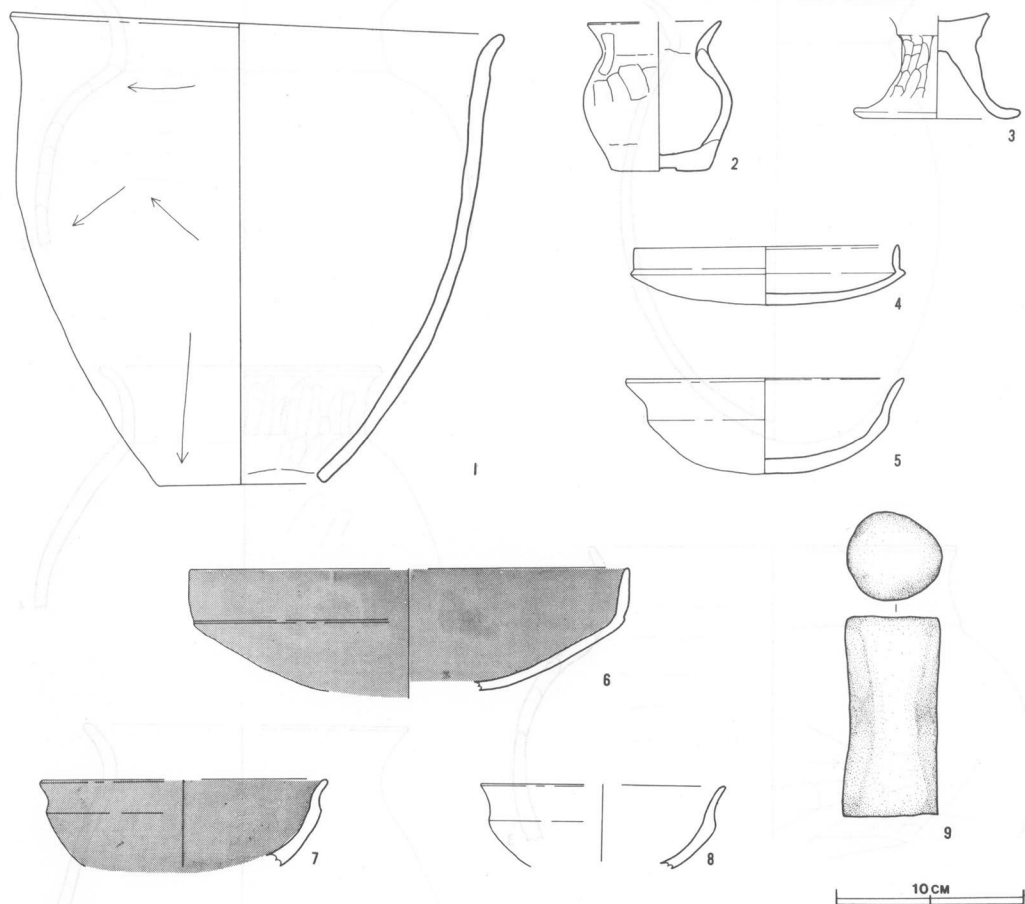
竈は北西壁中央部に付設され、長さ73cm・袖幅78cm・焚口部幅38cmで、袖部は黄褐色の粘土で構築されている。焼成部は壁を44cmの幅で15cmほど掘り込み、さらに火床は直径20cmの円形状で、床を3cmほど掘り凹めている。

出土遺物解説表（第36・37図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
36図 1	甕 土師器	A 14.2(匳) B 23.2	口縁部は頸部から直線的に外側へ開きながら立ち上がった後、口辺部で大きく外反する。底部は丸底で、胴部は底部からゆるやかに外側へ開きながら立ち上がって胴部最大径に至り、楕円形状を呈する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部および底部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	不良 砂粒・長石・石英 明褐色	
2	壺 土師器	A 16.1 B 13.5(匳)	口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がる。胴部は頸部から大きく張り出した後、真下にさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はヘラ磨き、内面はヘラナデが施されている。内面に輪積痕有り。	普通 砂粒・長石 石英・礫 橙色	
3	壺 土師器	A 19.3(匳) B 15.7(匳)	口縁部は頸部からやや内側へ傾いて立ち上がった後、口辺部で外反して開く。胴部は頸部からやや大きく張り出し球状をなす。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面上位および内面はヘラナデ整形。胴部外面中～下位にかけては多方向からのヘラ削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 にぶい黄橙色	
4	壺 土師器	A 14.6 B 12.7(匳)	口縁部は頸部から垂直ぎみに立ち上がった後、口辺部で外反して開く。胴部は頸部から外下方へ開く。	口縁部内面横ナデ、外面全体および胴部内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 橙色	
5	甕 土師器	A 17.0 B 11.8(匳)	口縁部は頸部から外反して立ち上がり、胴部は頸部から外下方へ開く。器形に歪みがみられる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
6	壺 土師器	A 14.0(匳) B 10.3(匳)	口縁部は頸部から短く外反して開く。胴部は頸部から外下方へ開き、胴部最大径は中位よりやや上に有する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共に横位のヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
7	壺 土師器	A 14.0 B 10.6(匳)	口縁部は頸部から短く外反して立ち上がる。胴部は頸部から器厚を薄くして外下方へ開く。胴部最大径を中位にもち、球状をなす。	口縁部内外面横ナデ、胴部外面は多方向からのヘラ削り、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
8	壺 土師器	B 21.0(匳)	胴部だけの破片である。胴部から大きく張り出した後、やや脹らみを少なくして外下方へさがる。	外面は雑なヘラ磨き、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
37図 1	甕 土師器	A 26.2 B 25.4 C 8.7	口縁部は頸部から短く外反して立ち上がる。胴部は頸部より直線的に内下方へさかった後、やや脹らみをもちながらさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は多方向からのヘラ削り、内面はヘラ磨き整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色	



第36图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第37図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表 (第37図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	小型甕 土師器	A 7.1 B 7.9 C 5.3	口縁部は頸部から器厚を薄くしながら外反して立ち上がり、胴部は頸部から外下方へ開く。胴部最大径を中位に有する。底部は中央部がやや窪むが、おおむね平坦である。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面および底部はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
3	高坏 土師器	B 5.3(現) C 7.8(復)	脚部の破片である。脚部は器厚を薄くしながら外下方へ開いたのち、裾部で水平になる。	受部内面はへらナデ、脚部外面はへら削り、内面はへらナデ整形。裾部は横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい橙色	
4	坏 土師器	A 14.1 B 3.2 C 14.7	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く垂直に立ち上がる。	器全体へら磨き調整が施されているが底部外面下位はやや雑な整形である。	普通 細砂・長石・石英 にふい黄橙色	内面中央部にへらによる浅い「米」の記号有り
5	坏 土師器	A 14.8 B 5.1 C 12.7	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、器厚をやや薄くして外反ぎみに立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、その他器全体へらナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 橙色	

出土遺物解説表（第37図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	盤 土師器	A 23.3(復) B 6.5(現) C 23.0(復)	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、垂直に立ち上がる。	器全体にヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 赤色	内外面朱塗り
7	杯 土師器	A 15.2(復) B 4.4(現) C 14.7(復)	底部は丸底でやや深い皿状を呈していたと思われ、体部は底部との境に稜を有し、短く外反して立ち上がる。	器全体にヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア 橙色	内外面朱塗り 内面は磨減している
8	杯 土師器	A 13.1(復) B 4.4(現) C 12.0(復)	底部は丸底で皿状を呈していたと思われ、体部は底部から器厚を薄くしながら外反して立ち上がる。	体部内外面共にヘラナデ整形、底部内外面共に雑なヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア 橙色	
9	支脚 土製品		円筒状を呈する。	側面は指によるナデ整形、上面と下面はヘラナデ整形が施されている。		

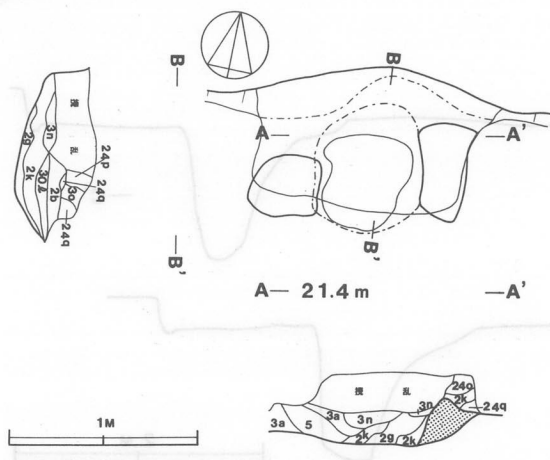
第12号住居跡（第39図）

本跡は遺跡の北西端、B2g₁・B2h₁を中心に確認され、第10号住居跡の北5mに位置し、南西部で第11号住居跡と重複している。本住居跡の方が新しい。規模は一辺が6.95mの方形で、本遺跡の住居跡の中では大型のものである。また、主軸方向はN-9°-Wである。壁高は南側60cm、北側30cmで、直線的に外側へ広がりながら立ち上がっている。床は西側に一部高い部分があるが、ほぼ全体に平坦であり、他の住居跡と比較するとやや柔らかい。また、壁下には幅10~12cm、深さ10cmの壁溝が全体に巡回する。ピットは4個確認され、いずれのピットも他の住居跡と違い、掘り方が大きく、また、深さも1mを越えるピットである。規模は長径80~135cmの不整楕円形、楕円形を呈し、深さは90~108cmである。

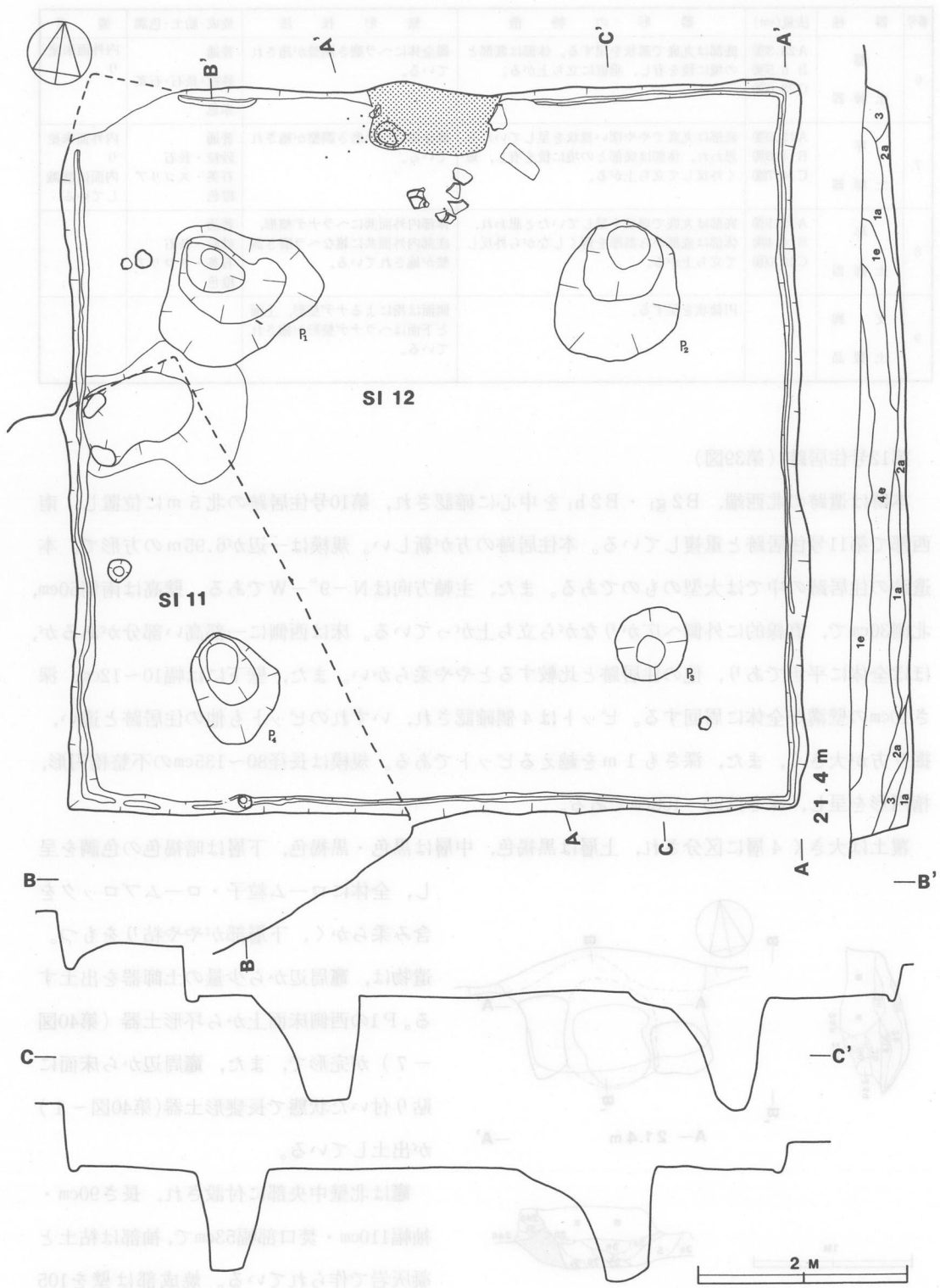
覆土は大きく4層に区分され、上層は黒褐色、中層は黒色・黒褐色、下層は暗褐色の色調を呈

し、全体にローム粒子・ロームブロックを含み柔らかく、下層部がやや粘りをもつ。遺物は、竈周辺から少量の土師器を出土する。P1の西側床面上から環形土器（第40図-7）が完形で、また、竈周辺から床面に貼り付いた状態で長壘形土器（第40図-1）が出土している。

竈は北壁中央部に付設され、長さ90cm・袖幅110cm・焚口部幅53cmで、袖部は粘土と凝灰岩で作られている。焼成部は壁を105cmの幅で15cmほど掘り込み、火床は長さ55



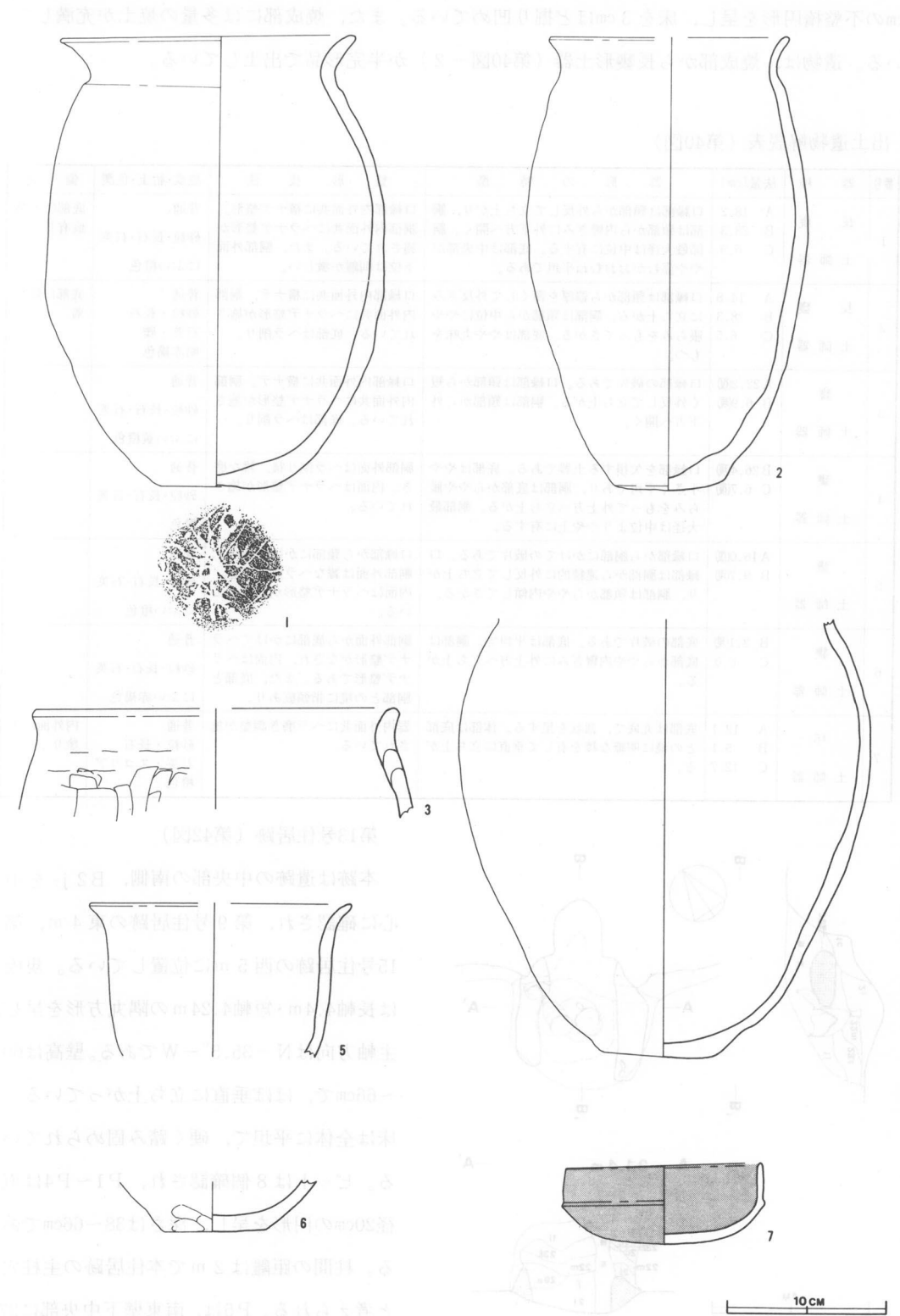
第38図 第12号住居跡竈実測図



第39図 第12号住居跡実測図

第39図 第12号住居跡実測図

第38図 第15号住居跡実測図



第40図 第12号住居跡出土遺物実測図

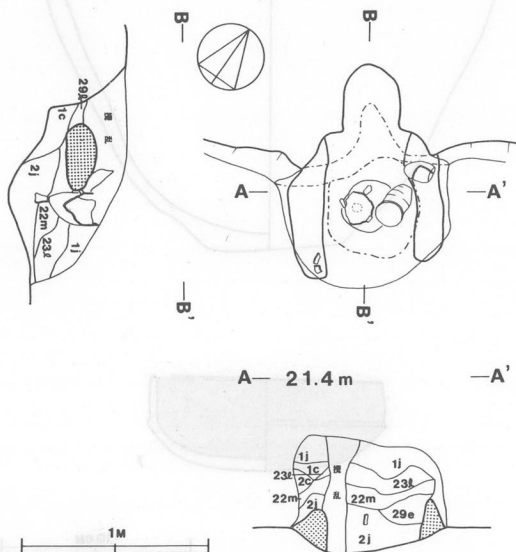
cmの不整楕円形を呈し、床を3cmほど掘り凹めている。また、焼成部には多量の焼土が充満している。遺物は、焼成部から長甕形土器（第40図-2）が半完形品で出土している。

出土遺物解説表（第40図）

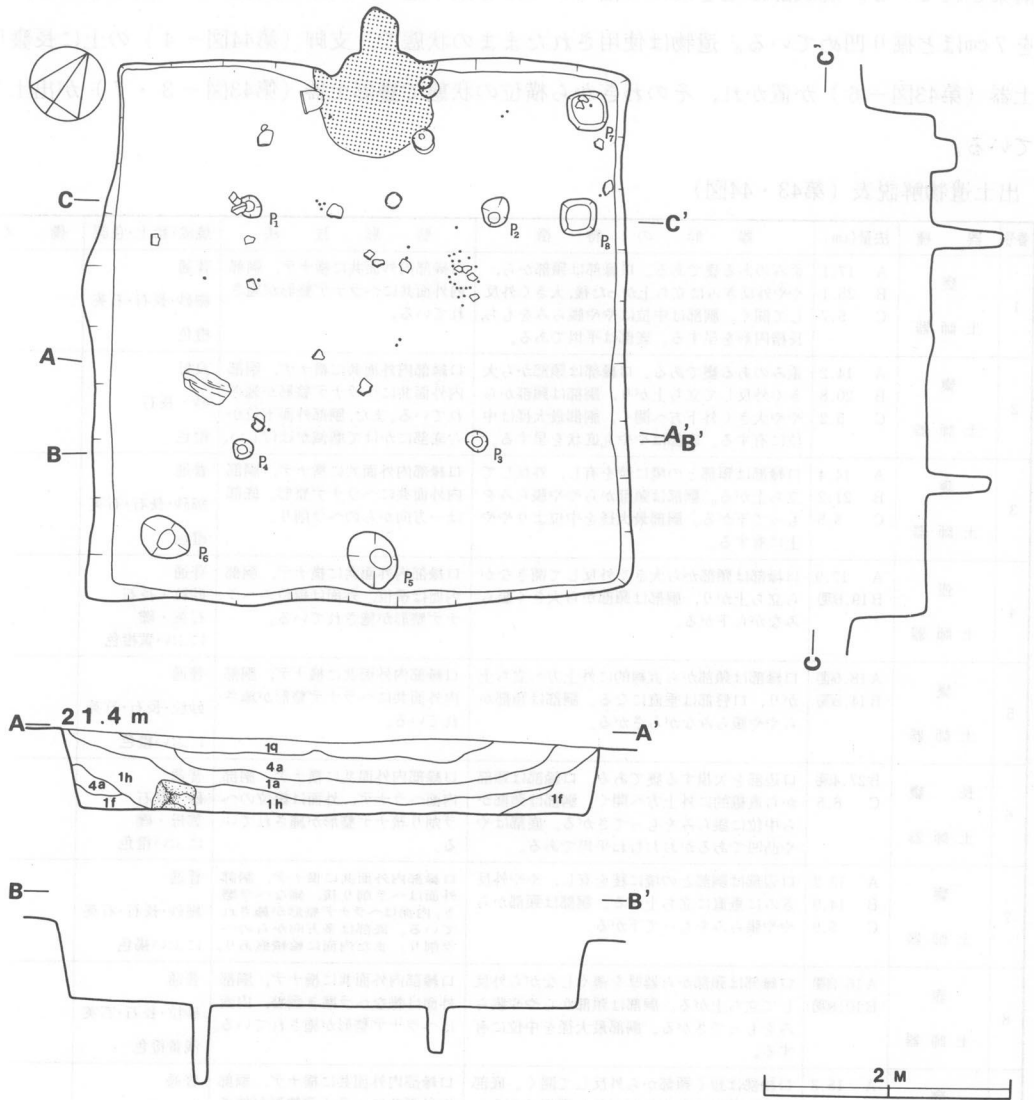
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	長甕 土師器	A 18.2 B 28.3 C 6.9	口縁部は頸部から外反して立ち上がり、胴部は頸部から内彎ぎみに外下方へ開く。胴部最大径は中位に有する。底部は中央部がやや窪むがおおむね平坦である。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。また、胴部外面下位は剝離が激しい。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	底部に木葉痕有り
2	長甕 土師器	A 14.8 B 28.3 C 6.5	口縁部は頸部から器厚を薄くして外反ぎみに立ち上がる。胴部は頸部から中位にやや脹らみをもってさがる。底部はやや丸味をもつ。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。底部はヘラ削り。	普通 砂粒・長石・石英・礫 明赤褐色	底部に煤付着
3	甕 土師器	A 22.2(復) B 6.9(復)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から短く外反して立ち上がる。胴部は頸部から外下方へ開く。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。底部はヘラ削り。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色	
4	甕 土師器	B 26.4(復) C 6.7(復)	口縁部は欠損する土器である。底部はやや小さく平坦であり、胴部は底部からやや脹らみをもって外上方へ立ち上がる。胴部最大径は中位よりやや上に有する。	胴部外面はヘラ削り後、雑な磨き。内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
5	甕 土師器	A 16.0(復) B 9.7(復)	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は胴部から連続的に外反して立ち上がり、胴部は頸部からやや内傾してさがる。	口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部外面は雑なヘラ磨き調整、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
6	甕 土師器	B 3.1(復) C 6.0	底部の破片である。底部は平坦で、胴部は底部からやや内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	胴部外面から底部にかけてヘラナデ整形がなされ、内面はヘラナデ整形である。また、底部と胴部との境に指頭痕あり。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色	
7	坏 土師器	A 12.1 B 5.1 C 12.7	底部は丸底で、皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有して垂直に立ち上がる。	器内外面共にヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア 橙色	内外面に朱塗り

第13号住居跡（第42図）

本跡は遺跡の中央部の南側、B2j7を中心に確認され、第9号住居跡の東4m、第15号住居跡の西5mに位置している。規模は長軸4.4m・短軸4.24mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-35.5°-Wである。壁高は60~66cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは8個確認され、P1~P4は直径20cmの円形を呈し、深さは38~66cmである。柱間の距離は2mで本住居跡の主柱穴と考えられる。P5は、南東壁下中央部に27cmの深さに掘られたピットで、P3とP4の



第41図 第13号住居跡竈実測図



第42図 第13号住居跡実測図

中間に位置することなどから入口的な施設に使用されたピットと思われる。P7・P8は北東コーナー部の壁下に並んで円形に掘られ、深さは17～22cmと浅い。

覆土は大きく4層に区分され、上層が黒褐色、中層が黒色・黒褐色、下層は黒褐色を呈し、下層にはロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含み、レンズ状の自然堆積である。

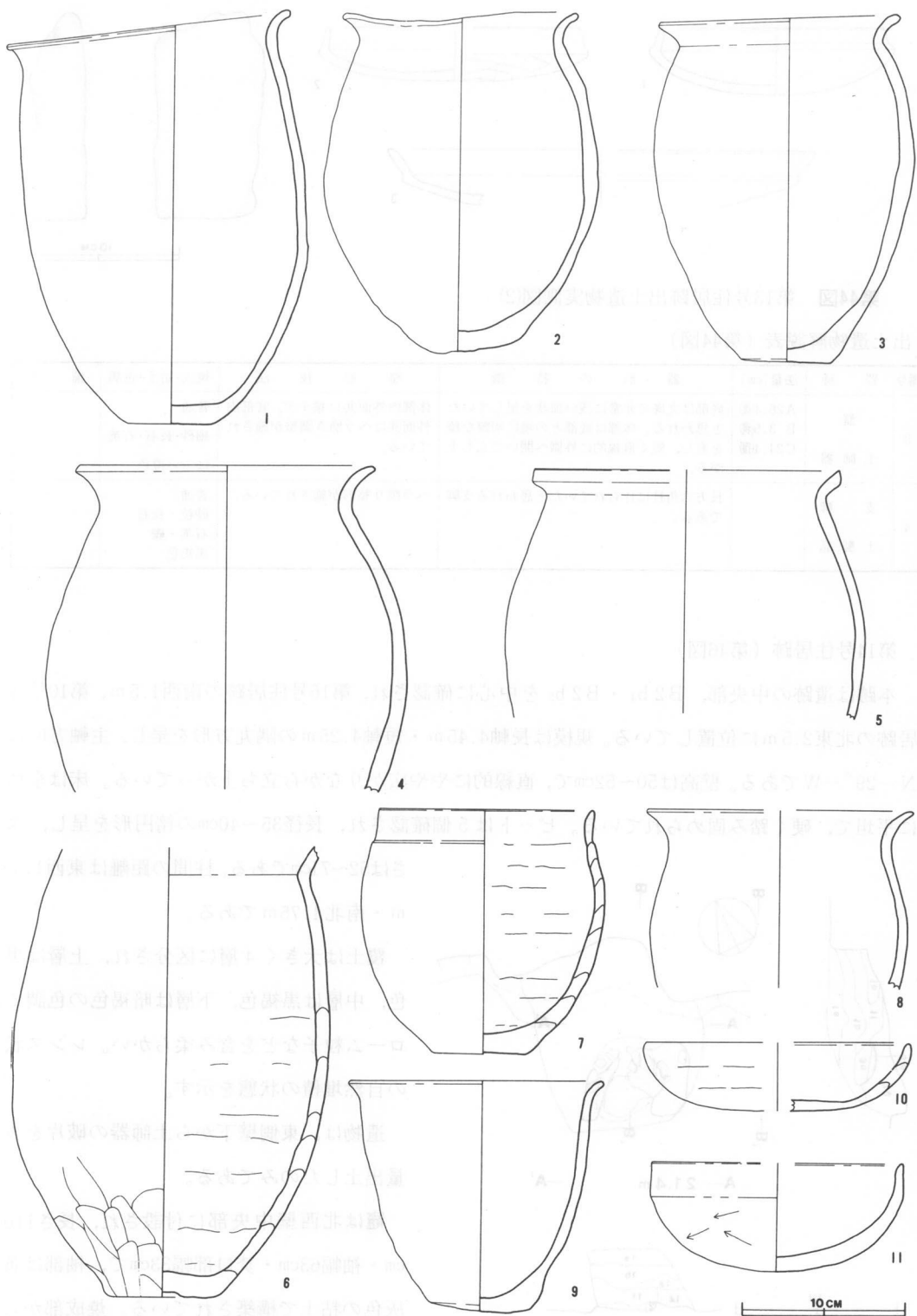
遺物は、竈周辺からやや多くの完形品を出土する。竈東側から甕形土器（第43図-1・2）が正位または倒立した状態、西側から甕形土器（第43図-9）が横位の状態、前方部から坏形土器（第44図-1）が正位状態で出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ110cm・袖幅80cm・焚口部幅50cmで、袖部は黄褐色の粘土で

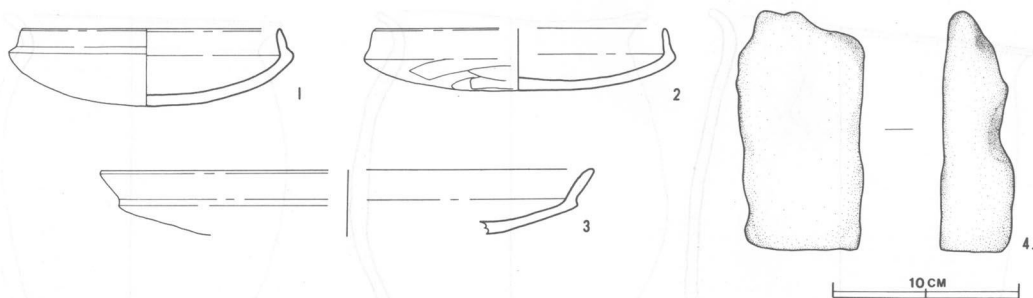
構築されている。焼成部は壁を70cmの幅で45cmほど掘り込み、火床は直径30cmの円形を呈し、床を7cmほど掘り凹めている。遺物は使用されたままの状態、支脚（第44図-4）の上に長甕形土器（第43図-6）が置かれ、そのわきから横位の状態で甕形土器（第43図-3・7）が出土している。

出土遺物解説表（第43・44図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 17.1 B 25.1 C 5.7	歪みのある甕である。口縁部は頸部から、やや外反ぎみに立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部は中位にやや脹らみを持ち、長楕円形を呈する。底部は平坦である。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 橙色	
2	甕 土師器	A 14.2 B 20.8 C 5.2	歪みのある甕である。口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がり、胴部は頸部からやや大きく外下方へ開く。胴部最大径は中位に有する。底部はやや丸底状を呈する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。また、胴部外面下位から底部にかけて磨減がはげしい。	良好 砂・長石 橙色	
3	甕 土師器	A 14.4 B 21.2 C 5.5	口縁部は頸部との境に稜を有し、外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや脹らみをもって下がる。胴部最大径を中位よりやや上に有する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形。底部は一方からのヘラ削り。	普通 細砂・長石・石英 橙色	
4	壺 土師器	A 17.9 B 19.6(側)	口縁部は頸部から大きく外反して開きながら立ち上がる。胴部は頸部から大きく脹らみながら下がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内面は横位、外面は縦位のヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 にぶい黄橙色	
5	甕 土師器	A 18.6(側) B 14.8(側)	口縁部は頸部から直線的に外上方へ立ち上がり、口唇部は垂直になる。胴部は頸部からやや脹らみながらさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
6	長甕 土師器	B 27.4(側) C 6.5	口辺部を欠損する甕である。口縁部は頸部から直線的に外上方へ開く。胴部は頸部から中位に脹らみをもってさがる。底部はやや凸凹であるがとおむね平坦である。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内面ヘラナデ、外面は縦位のヘラ削り後ナデ整形が施されている。	普通 砂・長石 雲母・礫 にぶい橙色	
7	甕 土師器	A 13.2 B 14.9 C 5.9	口辺部は胴部との境に稜を有し、やや外反ぎみに垂直に立ち上がる。胴部は頸部からやや脹らみをもって下がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はヘラ削り後、雑なヘラ磨き、内面はヘラナデ整形が施されている。底部は多方向からのヘラ削り、また内面に輪積痕あり。	普通 細砂・長石・石英 にぶい褐色	
8	壺 土師器	A 16.2(側) B 10.8(側)	口縁部は頸部から器厚を薄くしながら外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや脹らみをもってさがる。胴部最大径を中位に有する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面は雑なヘラ磨き調整、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	
9	甕 土師器	A 15.3 B 14.1 C 6.3	口縁部は短く頸部から外反して開く。底部はやや凸凹であるがとおむね平坦である。胴部は底部から内彎ぎみに外上方へ立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色	
10	坏 土師器	A 15.9(側) B 4.1	底部はやや丸底状を呈し、体部はゆるやかに内彎して外上方へ立ち上がった後、口縁部でやや内傾する。	器全体にはヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
11	埴 土師器	A 15.4(側) B 6.7 C 15.5(側)	体部は底部との境に稜を有して垂直ぎみに立ち上がった後、口辺部でやや外反して開く。底部は丸底で、器厚を薄くして内彎しながら外上方へ立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面はヘラ削り、内面はヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
44図 1	坏 土師器	A 13.7 B 4.1 C 15.1	底部は丸底でやや浅い皿状を呈す。体部は底部との境に稜を有し、短く内傾して立ち上がる。	器内面はヘラ磨き、外面は雑なヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア 橙色	
2	坏 土師器	A 15.7(側) B 3.3 C 16.5(側)	底部は丸底で非常に浅い皿状を呈す。体部は底部との境に稜を有し、やや内側へ傾いて立ち上がる。	底部外面はヘラ削り、体部内外面および底部内面には横位のヘラナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石 石英・礫 にぶい褐色	



第43図 第13号住居跡出土遺物実測図(1)



第44図 第13号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表 (第44図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	盤 土師器	A 26.4(匜) B 3.5(碗) C 24.4(匜)	底部は丸底で非常に浅い皿状を呈していたと思われる。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く直線的に外側へ開いて立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部内外面共にヘラ磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい橙色	
4	支脚 土製品		長方六角柱に作られていたと思われる支脚である。	ヘラ削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 黒褐色	

第14号住居跡 (第46図)

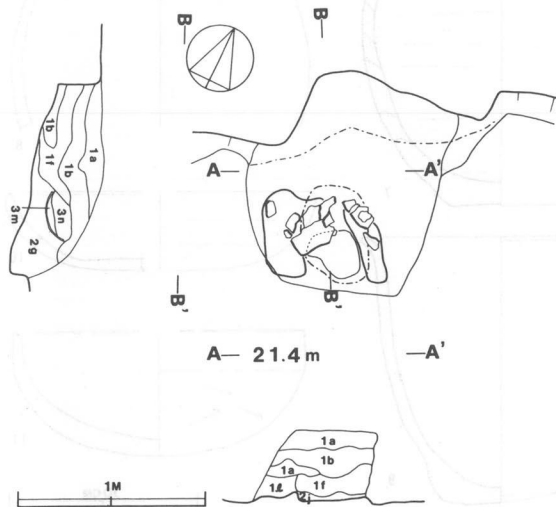
本跡は遺跡の中央部、B2 b₄・B2 b₅を中心に確認され、第16号住居跡の南西1.5m、第10号住居跡の北東2.5mに位置している。規模は長軸4.45m・短軸4.25mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は50~52cmで、直線的にやや広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。ピットは5個確認され、長径35~40cmの楕円形を呈し、深

さは52~71cmである。柱間の距離は東西1.65m・南北1.75mである。

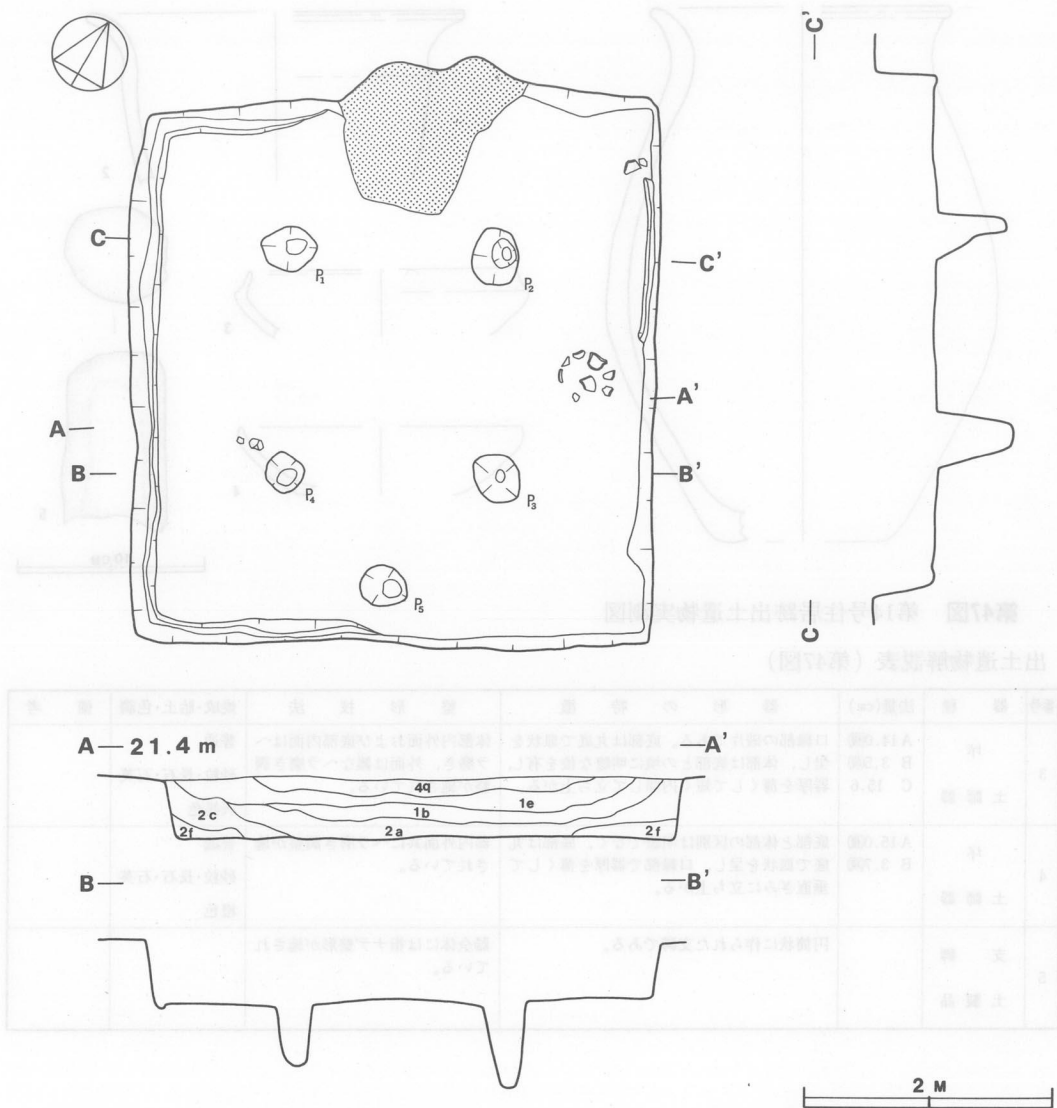
覆土は大きく4層に区分され、上層は黒色、中層は黒褐色、下層は暗褐色の色調で、ローム粒子などを含み柔らかい。レンズ状の自然堆積の状態を示す。

遺物は、東側壁下から土師器の破片を少量出土したのみである。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ110cm・袖幅63cm・焚口部幅33cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築されている。焼成部から横位の状態で甕形土器(第47図-1)が半



第45図 第14号住居跡竈実測図

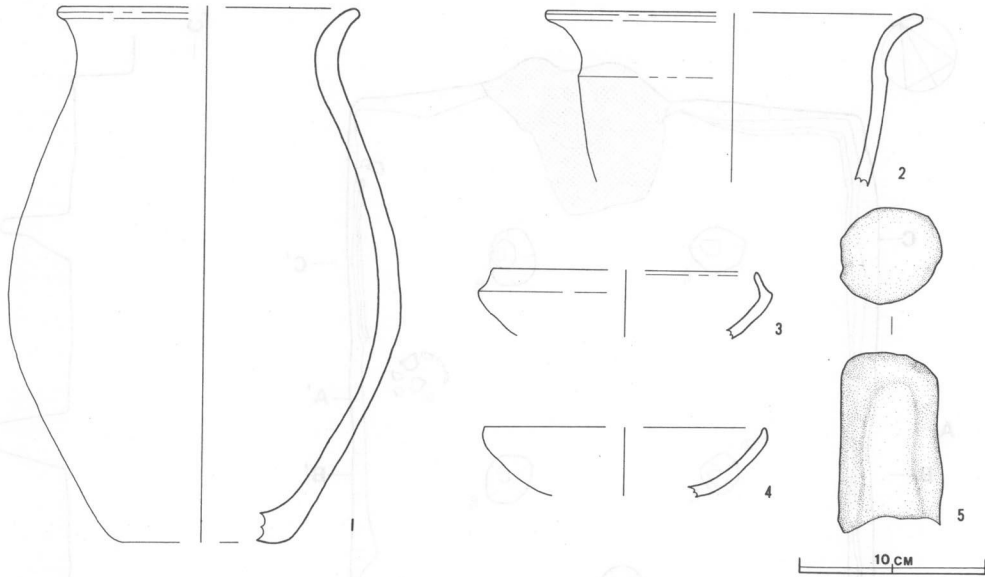


第46図 第14号住居跡実測図

完形品で出土する。なお、本竈は他の住居跡の竈と異なり、焼成部は住居跡の内側へ大きく入って作られていた。

出土遺物解説表（第47図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 15.7(復) B 28.3 C 9.1(復)	口縁部は頸部から器厚をやや薄くし、外反して開く。胴部は頸部からやや脹らみをもって胴部最大径に至る。胴部最大径は中位よりやや下に有する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 にふい黄橙色	
2	甕 土師器	A 20.0(復) B 9.0(現)	口縁部は頸部との境に稜を有し、ゆるやかに外反して立ち上がった後、口辺部で大きく開く。胴部は頸部からやや直線的に内下方へさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄橙色	



第47図 第14号住居跡出土遺物実測図

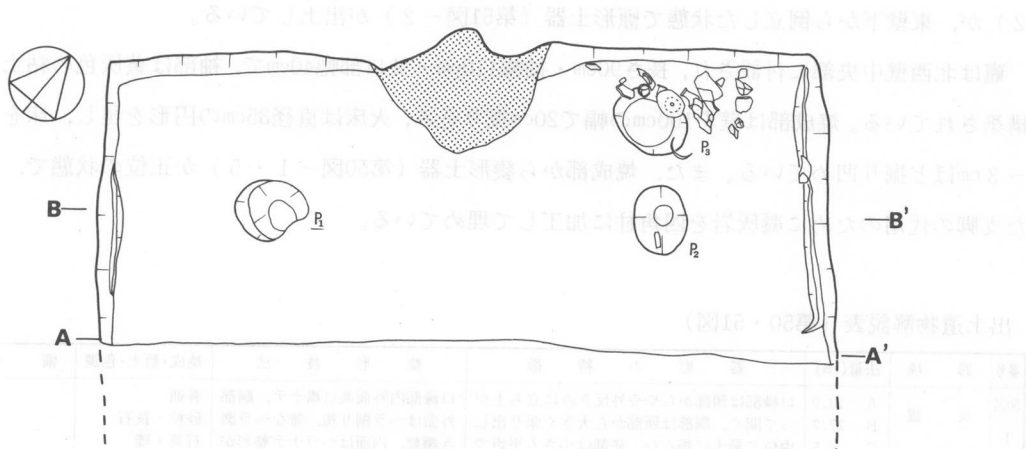
出土遺物解説表（第47図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	坏 土師器	A 14.0(復) B 3.5(現) C 15.6	口縁部の破片である。底部は丸底で皿状を呈し、体部は底部との境に明瞭な稜を有し、器厚を薄くして短く内傾して立ち上がる。	体部内外面および底部内面はへら磨き、外面は雑なへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	
4	坏 土師器	A 15.0(復) B 3.7(現)	底部と体部の区別は明瞭でなく、底部は丸底で皿状を呈し、口縁部で器厚を薄くして垂直ぎみに立ち上がる。	器内外面共にへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
5	支脚 土製品		円筒状に作られた支脚である。	器全体には指ナデ整形が施されている。		

第15号住居跡（第48図）

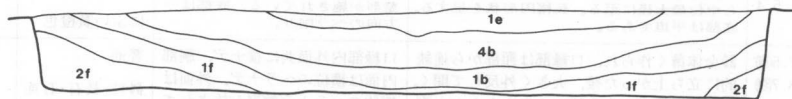
本跡は遺跡の中央部南端のC2 i₈・C2 i₉を中心に確認され、第13号住居跡の東4.5m、第17号住居跡の南4mに位置している。また、本住居跡は北側の一部を確認したのみで、約60%以上は南側調査区域外へ延びているため、不明の点が多い。規模は5.9×()mの方形を呈していたと思われる、主軸方向はN-38.5°-Wである。壁高は西側が64cm、東側が55cmで、直線的にやや広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められている。また、ピットは3個確認され、P1・P2は直径55cmの楕円形の平面形を呈し、深さは68cmほどで、柱間は3.1mである。P3は竈東側から確認され、長径65cm・短径50cmの楕円形を呈し、深さは39cmとやや深い。物を貯えたピットと考えられる。また、覆土中から甕形土器（第48図-6）が出土している。

覆土は大きく4層に区分され、上層が黒褐色、中～下層にかけて黒色・黒褐色の色調で、ロー



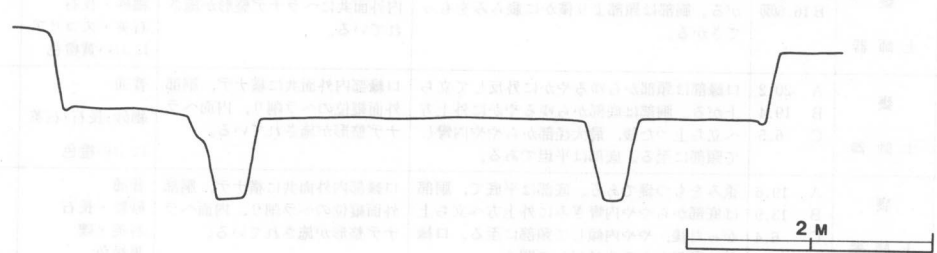
A—21.4 m

—A'



B—

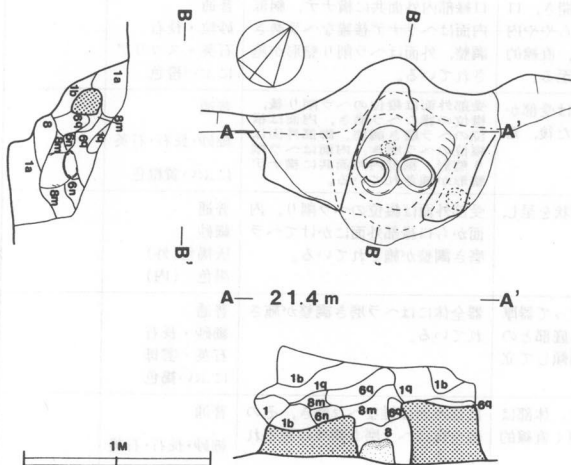
—B'



第48図 第15号住居跡実測図

ム粒子・ロームブロックを多量に含み、柔らかい。レンズ状の自然堆積の状態を示している。

遺物はP3の上部および東側から、多量の土師器が完形および破損した状態で出土している。P3の北側から坏形土器（第51図—8・12・13・15）・埴形土器（第51図—14）が重なった状態で、P3の東側から脚部の欠損した高坏形土器（第51図—3）の下に重ねられた状態で坏形土器（第51図—5）が、また、潰れた状態の長甕形土器（第50図—



A—21.4 m

—A'

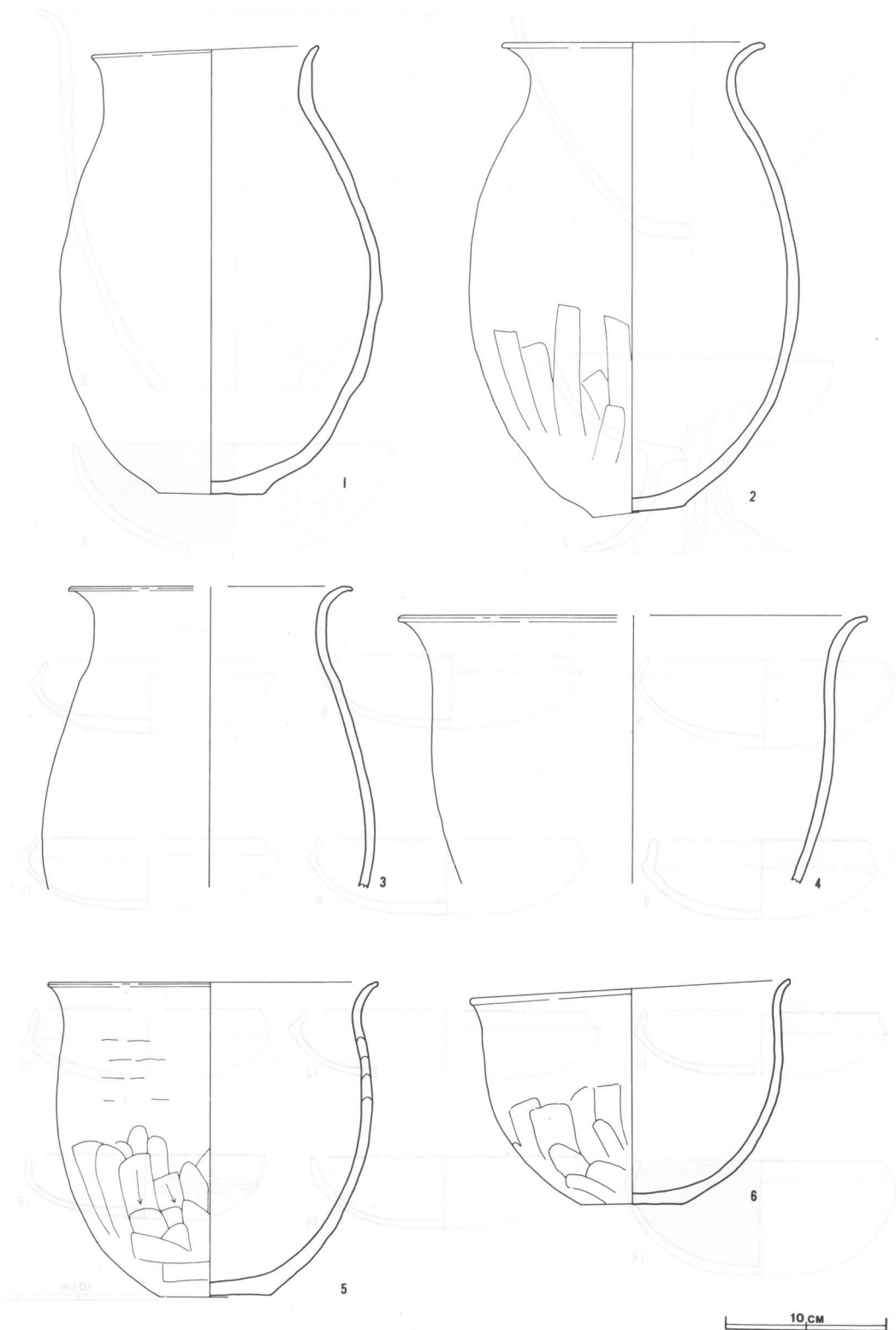
第49図 第15号住居跡竈実測図

2) が、東壁下から倒立した状態で甔形土器（第51図-2）が出土している。

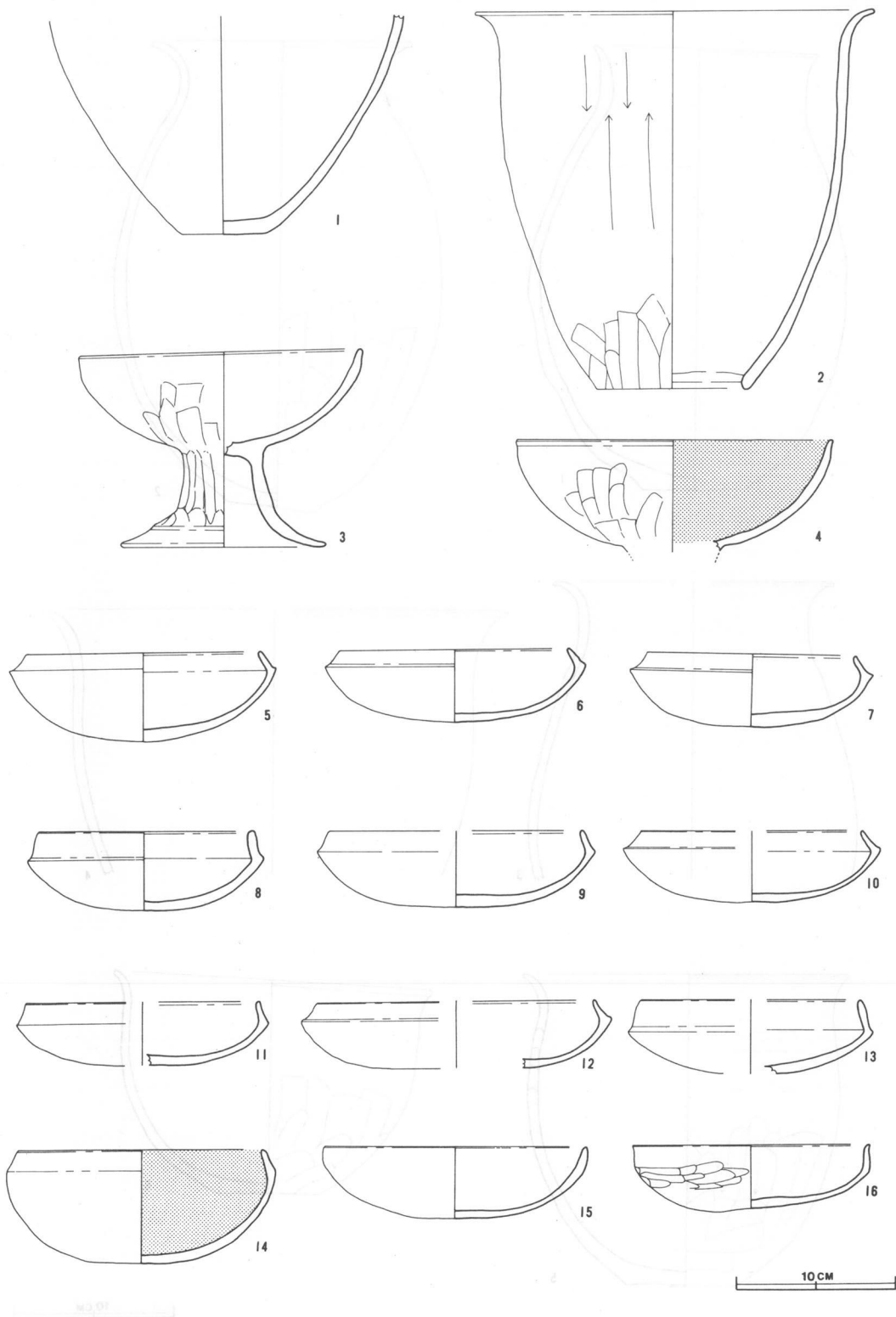
竈は北西壁中央部に付設され、長さ90cm・袖幅110cm・焚口部幅40cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築されている。焼成部は壁を100cmの幅で20cm掘り込み、火床は直径35cmの円形を呈し、床を2～3cmほど掘り凹めている。また、焼成部から甕形土器（第50図-1・5）が正位の状態で、また支脚の代用のために凝灰岩を四角柱に加工して埋めている。

出土遺物解説表（第50・51図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
50図 1	長 土師器	A 13.9 B 27.7 C 6.5	口縁部は頸部からやや外反ぎみに立ち上がって開く。胴部は頸部から大きく張り出し、中位で最大に脹らむ。底部は小さく平坦である。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り後、雑なへら磨き調整、内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 橙色	
2	長 土師器	A 15.8 B 29.3 C 5.4	器全体薄く作られ、歪みをもつ甕である。口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がり、胴部は頸部からゆるやかに脹らみながら中位で最大径に至る。長楕円形状を呈する。底部は平坦である。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り後、上位へらナデ整形。内面全体にはへらナデ整形が施されている。底部は一方のへら削り。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色	
3	甕 土師器	A 17.5(例) B 18.7(例)	器全体薄く作られ、口縁部は頸部から連続的に立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部は頸部よりやや脹らみをもちながら胴部最大径に至る。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内面は横位のへらナデ、外面は縦位のへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
4	甕 土師器	A 28.8(例) B 16.5(例)	口縁部は頸部から連続的に外反して立ち上がる。胴部は頸部より僅かに脹らみをもってさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にへらナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石 石英・スコリア にぶい黄橙色	
5	甕 土師器	A 20.2 B 19.4 C 6.5	口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がる。胴部は底部からゆるやかに外上方へ立ち上った後、最大径部からやや内彎して頸部に至る。底部は平坦である。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面縦位のへら削り、内面へらナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい橙色	
6	甕 土師器	A 19.6 B 13.9 C 6.4	歪みをもつ甕である。底部は平底で、胴部は底部からやや内彎ぎみに外上方へ立ち上がった後、やや内傾して頸部に至る。口縁部は頸部からやや外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面縦位のへら削り、内面へらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・礫 黒褐色	
51図 1	甕 土師器	B 13(例) C 5.3	底部は平底で、胴部は底部からやや内彎ぎみに大きく外上方へ立ち上がる。	胴部内外面共にへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい褐色	
2	甔 土師器	A 24.8 B 23.5 C 9.5	口縁部は頸部から大きく外反して開き、口唇部は水平になる。胴部は底部からやや内彎ぎみに中位まで立ち上がった後、直線的にやや外側へ広がりがながら頸部に至る。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内面はへらナデ後雑なへら磨き調整、外面はへら削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石 石英・スコリア にぶい橙色	
3	高 土師器	A 17.4(例) B 12.4 C 12.8(例)	受部はやや深い皿状を呈し、脚部は受部からやや開きぎみに4cmほどさがった後、器厚を薄くしながら大きく開く。	受部外面は縦位のへら削り後、横位の雑なへら磨き、内面は横位のへら磨き調整。脚部外面は縦位のへら磨き、内面はへら削り整形。裾部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい黄橙色	
4	高 土師器	A 19.5 B 6.9(例)	高環の受部である。受部は深い皿状を呈し、口辺部でやや外反して開く。	受部外面は縦位のへら削り、内面から口縁部外面にかけてへら磨き調整が施されている。	普通 細砂 灰褐色(外) 黒色(内)	
5	環 土師器	A 14.5 B 5.5 C 16.5	底部は丸底で立ち上がるにしたがって器厚を薄くし、皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	器全体にはへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石 石英・雲母 にぶい褐色	
6	環 土師器	A 14.3 B 4.6 C 16.3	底部は丸底でやや浅い皿状を呈す。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、短く直線的に内傾して立ち上がる。	底部外面は雑なへら磨き、その他全体はへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい褐色	



第50图 第15号住居跡出土遺物実測図(1)



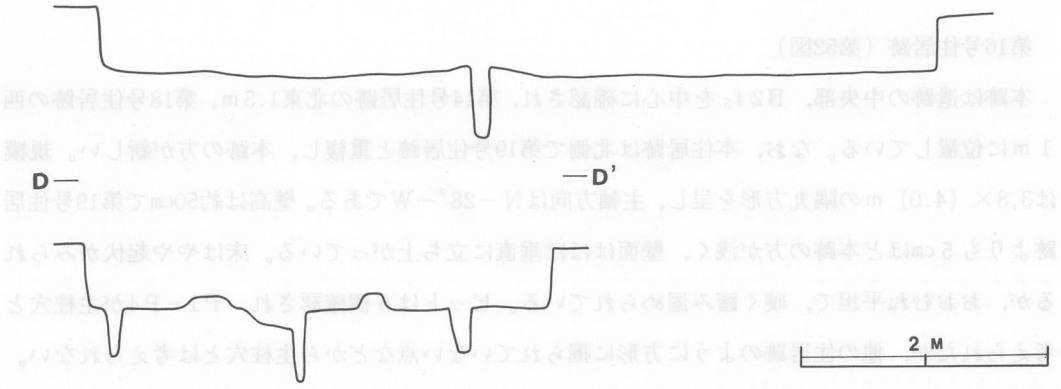
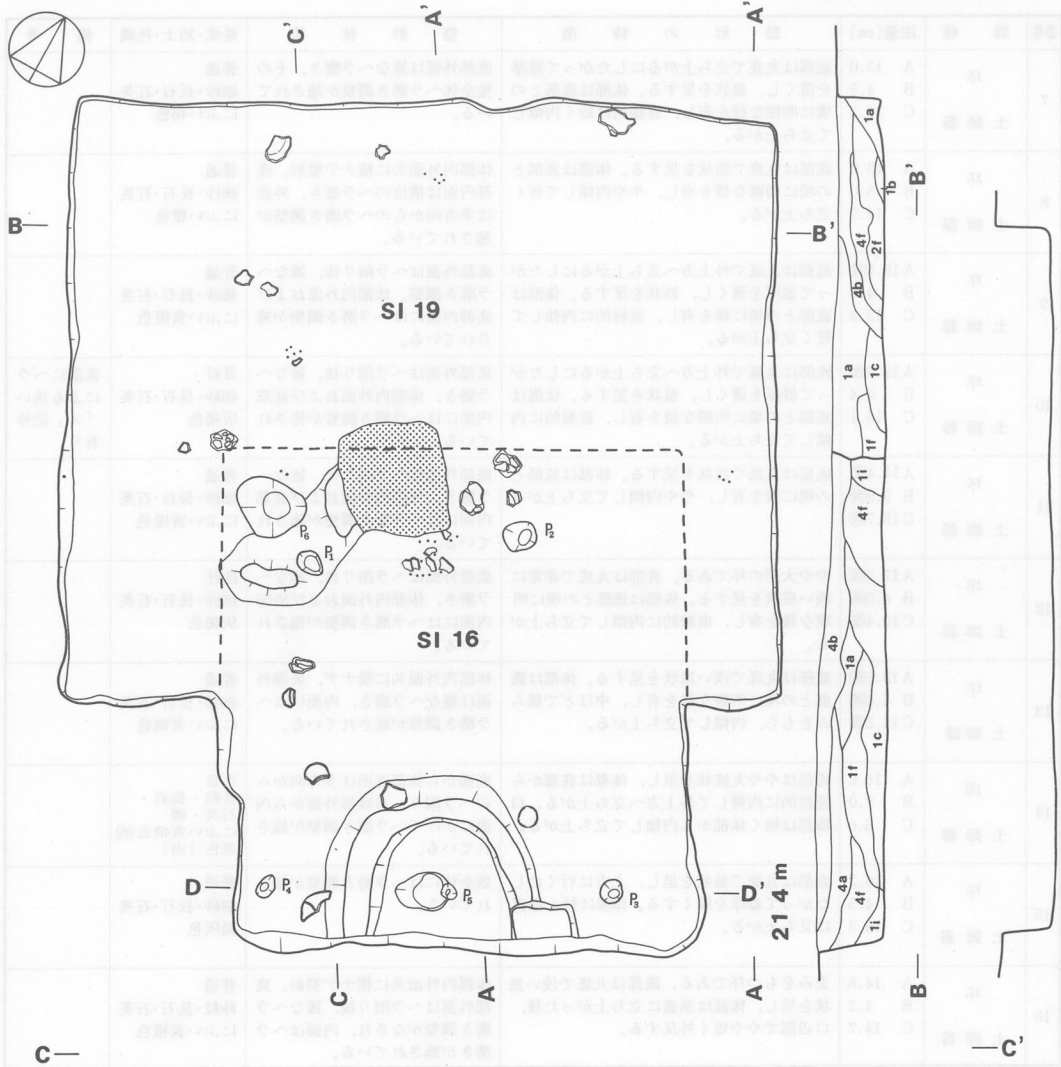
第51图 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表（第51図）

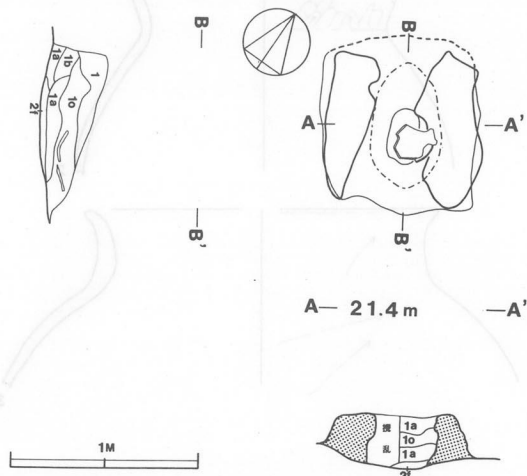
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	坏 土師器	A 13.0 B 4.5 C 15.2	底部は丸底で立ち上がるにしたがって器厚を薄くし、皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的に短く内傾して立ち上がる。	底部外面は雑なへら磨き、その他全体へら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい褐色	
8	坏 土師器	A 13.3 B 5.0 C 14.7	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、やや内傾して短く立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ整形。底部内面は横位のへら磨き、外面は多方向からのへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい橙色	
9	坏 土師器	A 15.7(覆) B 4.8 C 12.3	底部は丸底で外上方へ立ち上がるにしたがって器厚を薄くし、皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、直線的に内傾して短く立ち上がる。	底部外面はへら削り後、雑なへら磨き調整。体部内外面および底部内面にはへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい黄褐色	
10	坏 土師器	A 13.8(覆) B 4.4 C 16.1	底部は丸底で外上方へ立ち上がるにしたがって器厚を薄くし、皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	底部外面はへら削り後、雑なへら磨き、体部内外面および底部内面にはへら磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 灰褐色	底部にへらによる浅い「×」記号有り。
11	坏 土師器	A 14.4(覆) B 3.9(覆) C 15.7(覆)	底部は丸底で皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、やや内傾して立ち上がる。	底部外面はへら削り後、雑なへら磨き、体部内外面および底部内面にはへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい黄褐色	
12	坏 土師器	A 17.2(覆) B 4.3(覆) C 19.4(覆)	やや大型の坏である。底部は丸底で非常に浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的に内傾して立ち上がる。	底部外面はへら削り後、雑なへら磨き、体部内外面および底部内面にはへら磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 灰褐色	
13	坏 土師器	A 13.6(覆) B 4.6(覆) C 15.2(覆)	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、中ほどで腹らみもち、内傾して立ち上がる。	体部内外面共に横ナデ、底部外面は雑なへら磨き、内面にはへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい黄褐色	
14	埴 土師器	A 15.2 B 7.0 C 6.0	底部はやや丸底状を呈し、体部は底部から連続的に内彎して外上方へ立ち上がる。口縁部は短く体部から内傾して立ち上がる。	底部から体部外面は多方向からのへら削り。口縁部外面から内面にかけてへら磨き調整が施されている。	不良 砂粒・長石・石英・礫 にぶい黄橙色(外) 黒色(内)	
15	坏 土師器	A 16.2 B 4.5 C 16.3	底部は丸底で皿状を呈し、上方に行くにしたがって器厚を厚くする。体部は短く垂直に立ち上がる。	器全体にはへら磨き調整が施されている。	普通 細砂・長石・石英 褐灰色	
16	坏 土師器	A 14.8 B 4.2 C 14.7	歪みをもつ坏である。底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は垂直に立ち上がった後、口辺部でやや短く外反する。	体部内外面共に横ナデ整形。底部外面はへら削り後、雑なへら磨き調整がなされ、内面はへら磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄褐色	

第16号住居跡（第52図）

本跡は遺跡の中央部、B2 f₅を中心に確認され、第14号住居跡の北東1.5m、第18号住居跡の西1mに位置している。なお、本住居跡は北側で第19号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。規模は3.8×(4.0)mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は約50cmで第19号住居跡よりも5cmほど本跡の方が浅く、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。床はやや起伏がみられるが、おおむね平坦で、硬く踏み固められている。ピットは6個確認され、P1~P4が主柱穴と考えられたが、他の住居跡のように方形に掘られていない点などから主柱穴とは考えられない。竈西側から検出されたP6は長径60cm・短径45cmの楕円形を呈し、深さ34cmで位置的に貯蔵穴ではないかと思われる。また、南壁下中央部には、第10号住居跡に類似した、直径125cmの「∪」形の高



第52図 第16・19号住居跡実測図



第53図 第16号住居跡竈実測図

竈は北西壁中央からやや西側に付設され、長さは80cm・袖幅82cm・焚口部幅32cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築されている。火床は長径28cmの楕円形を呈し、床を3cmほど掘り凹めている。遺物は焼成部から横位の状態で甕形土器（第54図-1）が出土している。

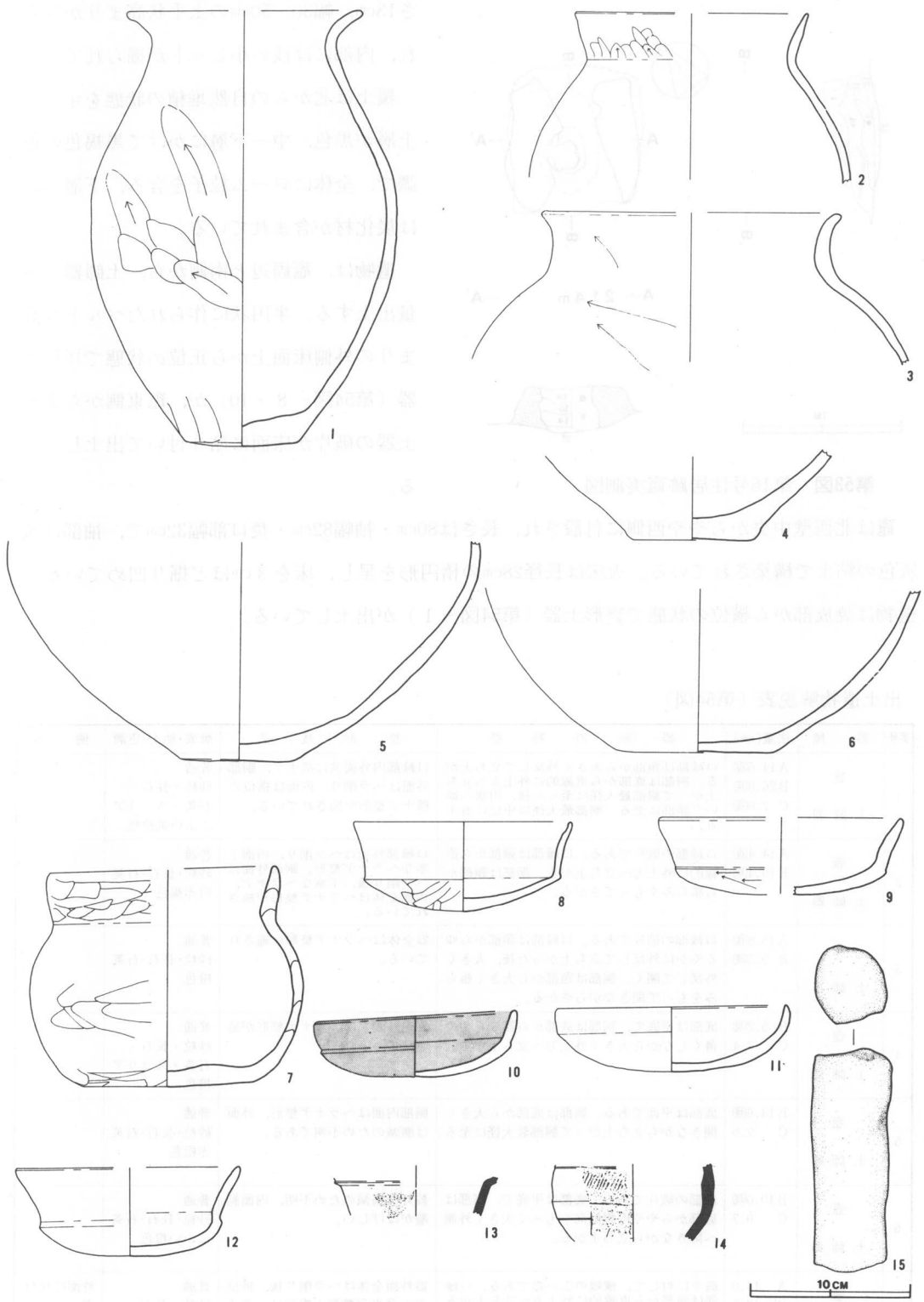
出土遺物解説表（第54図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 14.6(腹) B 26.8(腹) C 7.0(腹)	口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。胴部は底部から直線的に外上方へ立ち上がって胴部最大径に至った後、内側へ傾いて頸部に至る。胴部最大径は中位に有する。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面はへら削り、内面は横位の横ナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア にぶい黄橙色	
2	壺 土師器	A 14.4(腹) B 10.4(腹)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から直線的に外上方へ立ち上がる。胴部は頸部から脹らみをもってさがる。	口縁部外面はへら削り、内面丁寧なへらナデ整形。胴部外面はへら削り後、丁寧なへらナデ、内面全体はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色	
3	壺 土師器	A 18.8(腹) B 9.3(腹)	口縁部の破片である。口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部は頸部から大きく脹らみをもって開きながらさがる。	器全体はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
4	壺 土師器	B 5.2(腹) C 7.4	底部は平底で、胴部は底部から器厚をやや薄くしながら大きく外上方へ立ち上がる。	器内外面共にへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 橙色	
5	壺 土師器	B 13.6(腹) C 7.0	底部は平底である。胴部は底部から大きく開きながら立ち上がって胴部最大径に至る。	胴部内面はへらナデ整形、外面は磨滅のため不明である。	普通 砂粒・長石・石英 赤褐色	
6	壺 土師器	B 10.0(腹) C 9.7	底部の破片である。底部は平底で、胴部は底部からやや内彎傾向をもって大きく外側へ開きながら立ち上がる。	器外面磨滅のため不明、内面剥離がはげしい。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
7	壺 土師器	A 14.0 B 13.5 C 10.4	高さに対して、横幅の広い壺である。口縁部は頸部から直線的に外上方へ立ち上がる。底部は大きい平底であり、胴部は底部からやや内彎さみに外上方へ立ち上がった後、内彎する。胴部最大径は中位より下に有する。	器外面全体はへら削り後、横位のへらナデ整形。内面はへらナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 橙色	外面に煤付着

さ13cm、幅30~50cmの土手状高まりが作られ、内部には浅い小ピットが掘られている。

覆土は北からの自然堆積の状態を示し、上層が黒色、中~下層にかけて黒褐色の色調で、全体にローム粒子を含み、下層部には炭化材が含まれている。

遺物は、竈周辺と南側から、土師器が少量出土する。半円状に作られたベルト状高まりの外側床面上から正位の状態で坏形土器（第54図-8・10）が、竈東側から甕形土器の破片が床面に貼り付いて出土している。



第54図 第16号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第54図）

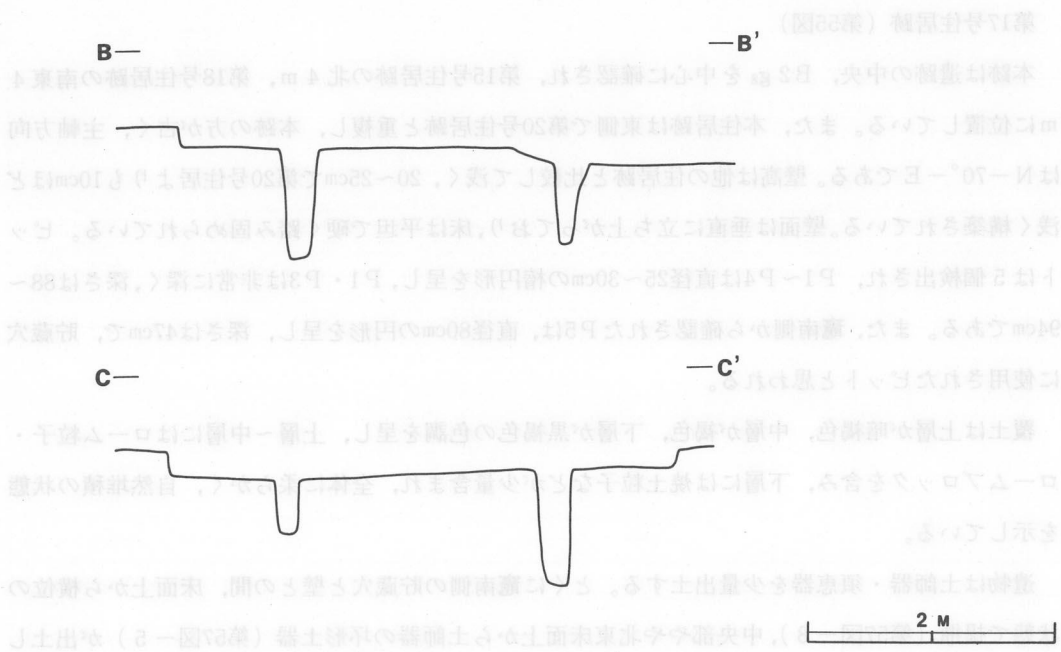
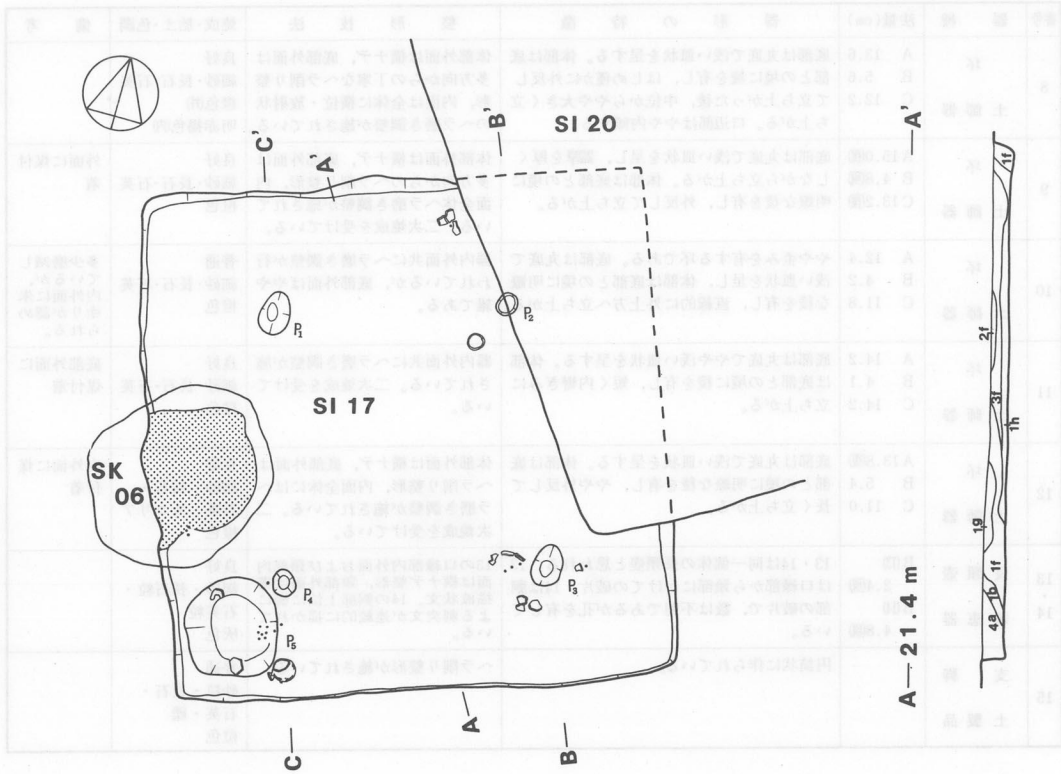
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	土師器 坏	A 13.6 B 5.6 C 12.2	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、はじめ僅かに外反して立ち上がった後、中位からやや大きく立ち上がる。口辺部はやや内傾する。	体部外面は横ナデ、底部外面は多方向からの丁寧なへら削り整形、内面は全体に横位・放射状のへら磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 橙色(外) 明赤褐色(内)	
9	土師器 坏	A 15.0(匳) B 4.8(匳) C 13.2(匳)	底部は丸底で浅い皿状を呈し、器厚を厚くしながら立ち上がる。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、外反して立ち上がる。	体部外面は横ナデ、底部外面は多方向からのへら削り整形、内面全体へら磨き調整が施されている。二次焼成を受けている。	良好 細砂・長石・石英 橙色	外面に煤付着
10	土師器 坏	A 12.4 B 4.2 C 11.8	やや歪みを有する坏である。底部は丸底で浅い皿状を呈し、体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的に外上方へ立ち上がる。	器内外面共にへら磨き調整が行われているが、底部外面はやや雑である。	普通 細砂・長石・石英 橙色	多少磨減しているが、内外面に朱塗りが認められる。
11	土師器 坏	A 14.2 B 4.1 C 14.2	底部は丸底でやや浅い皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、短く内彎ぎみに立ち上がる。	器内外面共にへら磨き調整が施されている。二次焼成を受けている。	良好 細砂・長石・石英 橙色	底部外面に煤付着
12	土師器 坏	A 13.8(匳) B 5.4 C 11.0	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、やや外反して長く立ち上がる。	体部外面は横ナデ、底部外面はへら削り整形、内面全体にはへら磨き調整が施されている。二次焼成を受けている。	良好 細砂・長石・ 石英・スコリア 橙色	内外面に煤付着
13・14	長頸壺 須恵器	B(13) 2.4(匳) B(14) 4.8(匳)	13・14は同一個体の長頸壺と思われる。13は口縁部から頸部にかけての破片。14は胴部の破片で、数は不明であるが孔を有している。	13の口縁部内外面および頸部内面は横ナデ整形、頸部外面は桶描波状文。14の胴部上位に桶による刺突文が連続的に描かれている。	良好 細砂・長石粒・ 石英粒 灰色	
15	支脚 土製品		円筒状に作られている。	へら削り整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・礫 橙色	

第17号住居跡（第55図）

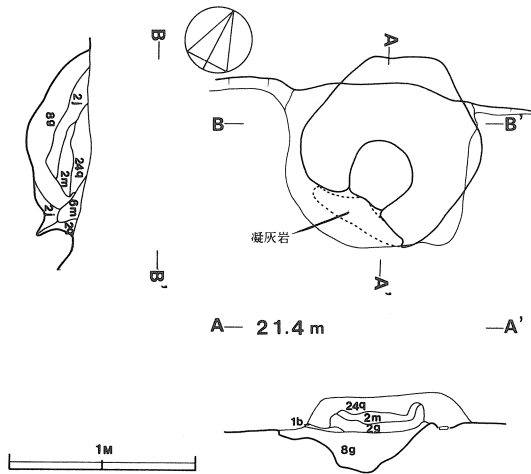
本跡は遺跡の中央、B2 g₈を中心に確認され、第15号住居跡の北4 m、第18号住居跡の南東4 mに位置している。また、本住居跡は東側で第20号住居跡と重複し、本跡の方が古く、主軸方向はN-70°-Eである。壁高は他の住居跡と比較して浅く、20~25cmで第20号住居よりも10cmほど浅く構築されている。壁面は垂直に立ち上がっており、床は平坦で硬く踏み固められている。ピットは5個検出され、P1~P4は直径25~30cmの楕円形を呈し、P1・P3は非常に深く、深さは88~94cmである。また、竈南側から確認されたP5は、直径80cmの円形を呈し、深さは47cmで、貯蔵穴に使用されたピットと思われる。

覆土は上層が暗褐色、中層が褐色、下層が黒褐色の色調を呈し、上層~中層にはローム粒子・ロームブロックを含み、下層には焼土粒子などが少量含まれ、全体に柔らかく、自然堆積の状態を示している。

遺物は土師器・須恵器を少量出土する。とくに竈南側の貯蔵穴と壁との間、床面上から横位の状態で提瓶（第57図-8）、中央部やや北東床面上から土師器の坏形土器（第57図-5）が出土している。



第55図 第17号住居跡実測図

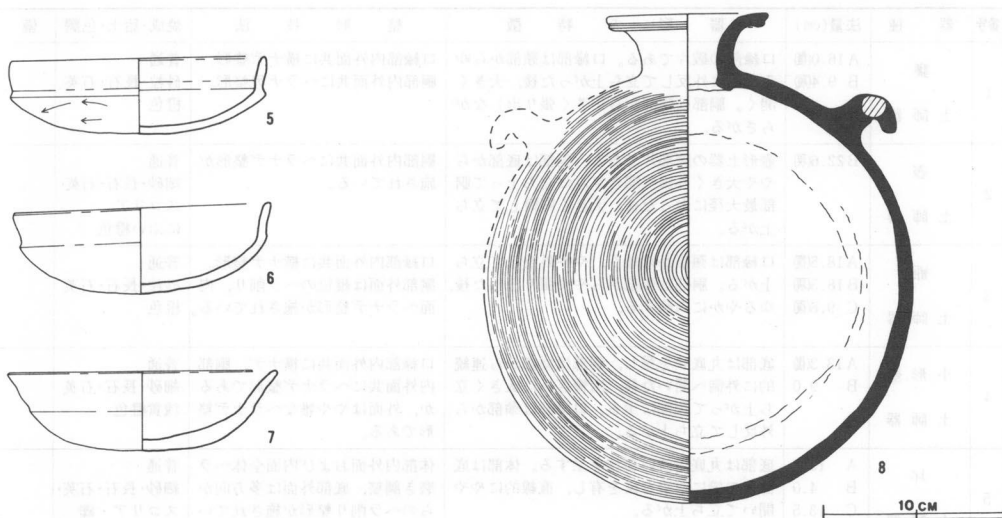
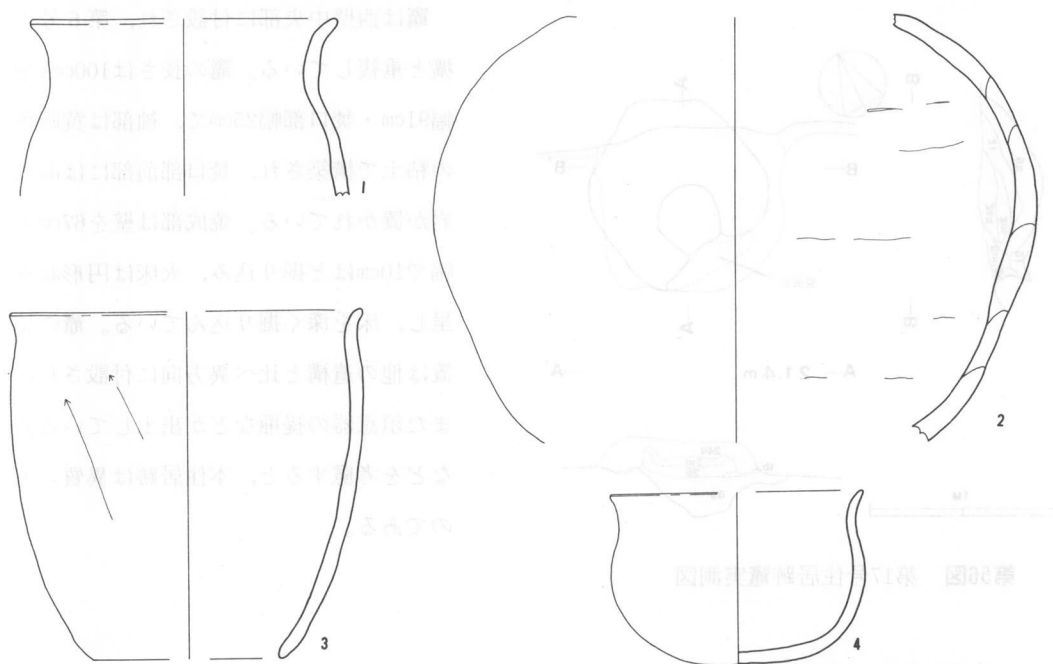


第56図 第17号住居跡竈実測図

竈は西壁中央部に付設され、第6号土壙と重複している。竈の長さは100cm・袖幅91cm・焚口部幅25cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築され、焚口部前部には凝灰岩が置かれている。焼成部は壁を67cmの幅で10cmほど掘り込み、火床は円形状を呈し、床を深く掘り込んでいる。竈の位置は他の遺構と比べ異方向に付設され、また須恵器の提瓶などが出土している点などを考慮すると、本住居跡は異質のものである。

出土遺物解説表 (第57図)

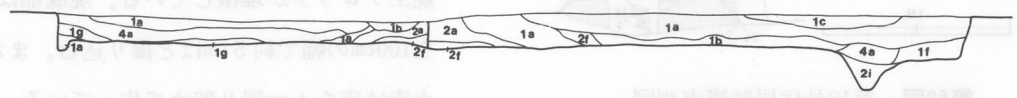
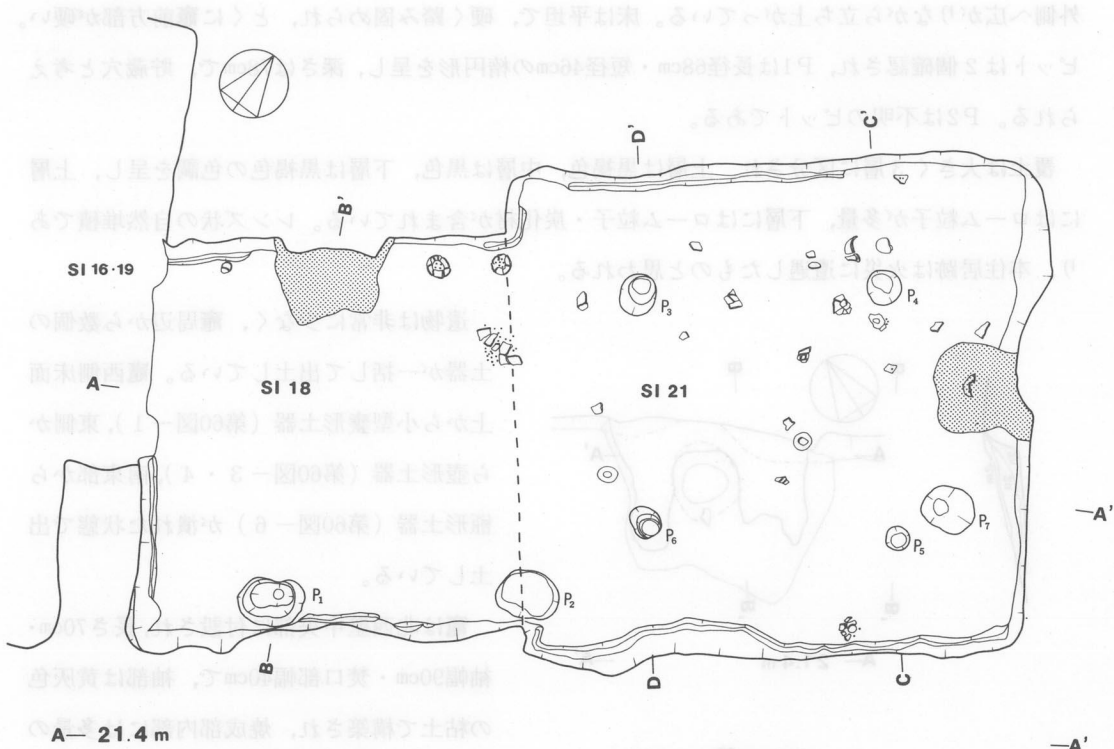
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	甕 土師器	A 16.0(復) B 9.4(現)	口縁部の破片である。口縁部は頸部からゆるやかに外反して立ち上がった後、大きく開く。胴部は頸部から小さく張り出しながらさがる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。 胴部内外面共にヘラナデ整形。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
2	壺 土師器	B 22.6(現)	壺形土器の胴部片である。胴部は底部からやや大きく外側へ開きぎみに立ち上って胴部最大径に至った後、大きく内彎して立ち上がる。	胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英・ スコリア にぶい橙色	
3	甌 土師器	A 18.5(復) B 18.3(現) C 9.8(復)	口縁部は頸部から短く、やや外反して立ち上がる。胴部は頸部からやや張り出した後、ゆるやかに内傾する。	口縁部内外面共に横ナデ整形。 胴部外面は縦位のヘラ削り、内面ヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
4	小形壺 土師器	A 13.3(復) B 9.0	底部は丸底状を呈し、胴部は底部から連続的に外側へ開いた後、内彎ぎみに大きく立ち上がって頸部に至る。口縁部は頸部から外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形であるが、外面はやや雑なヘラナデ整形である。	普通 細砂・長石・石英 浅黄橙色	
5	坏 土師器	A 13.3 B 4.0 C 13.5	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、直線的にやや開いて立ち上がる。	体部内外面および内面全体へラ磨き調整、底部外面は多方向からのヘラ削り整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英・ スコリア・礫 橙色	
6	坏 土師器	A 13.5 B 4.7 C 13.1	底部は丸底で皿状を呈し、体部は底部との境に稜を有し、やや外反して立ち上がる。	体部内外面および内面全体はヘラ磨き調整。底部外面はヘラ削り後、雑なヘラ磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 橙色	
7	坏 土師器	A 14.3 B 4.2 C 11.8	底部は丸底で浅い皿状を呈する。体部は底部との境に稜を有し、直線的に大きく開いて立ち上がる。	体部内外面および内面全体へラ磨き調整。底部外面は磨減がはげしく不明。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	内面にヘラ状工具による浅い「×」記号有り。
8	提瓶 須恵器	A 8.6 B 25.9	口縁部は短く外反し、端部に段をなす。体部前面は丸く脹らみを持つ。体部背面の脹らみは少ない。両肩に鉤状のつり手を持つが1つは欠損。	粘土紐作りで、体部内面に前・背面の接合痕を残す。口縁部内外面は横ナデ調整。つり手はナデ調整。体部背面はカキ目調整。前面は軽い回転ヘラ削り調整。	良好 細砂・長石粒・長石 灰色	



第57図 第17号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡 (第58図)

本跡は遺跡の中央部、B2e₆・B2e₇を中心に確認され、第16号住居跡の東0.5mに位置し、第19号住居跡と西側で、第21号住居跡と東側で重複している。本住居跡との新旧関係については、第19号住居跡より新しく、第21号住居跡より古い。規模は長軸4.2m・短軸(4.0)mの隅丸方形を呈していたと思われ、主軸方向はN-36.5°-Wである。壁高は25~30cmで、壁面はゆるやかに



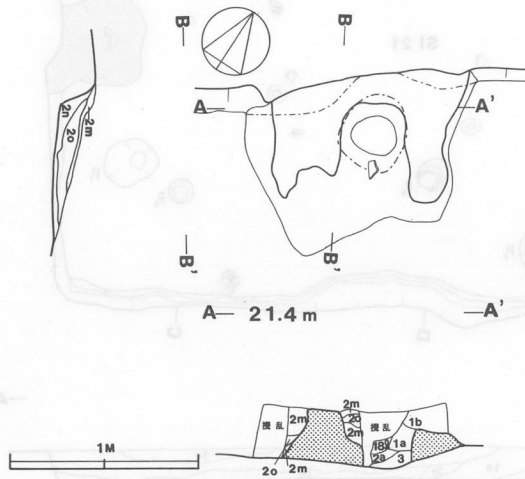
B-B' (Figure 58) Excavation of the site

Section	Feature	Depth (m)	Notes
A-A'	A	0.5	Ground surface
	B	1.0	Top of pit P1
	C	1.5	Top of pit P2
B-B'	A	0.5	Ground surface
	B	1.0	Top of pit P3
	C	1.5	Top of pit P4
D-D'	A	0.5	Ground surface
	B	1.0	Top of pit P5
	C	1.5	Top of pit P6

第58図 第18・21号住居跡実測図

外側へ広がりながら立ち上がっている。床は平坦で、硬く踏み固められ、とくに竈前方部が硬い。ピットは2個確認され、P1は長径68cm・短径46cmの楕円形を呈し、深さは78cmで、貯蔵穴と考えられる。P2は不明のピットである。

覆土は大きく3層に区分され、上層は黒褐色、中層は黒色、下層は黒褐色の色調を呈し、上層にはローム粒子が多量、下層にはローム粒子・炭化材が含まれている。レンズ状の自然堆積であり、本住居跡は火災に遭遇したものと思われる。



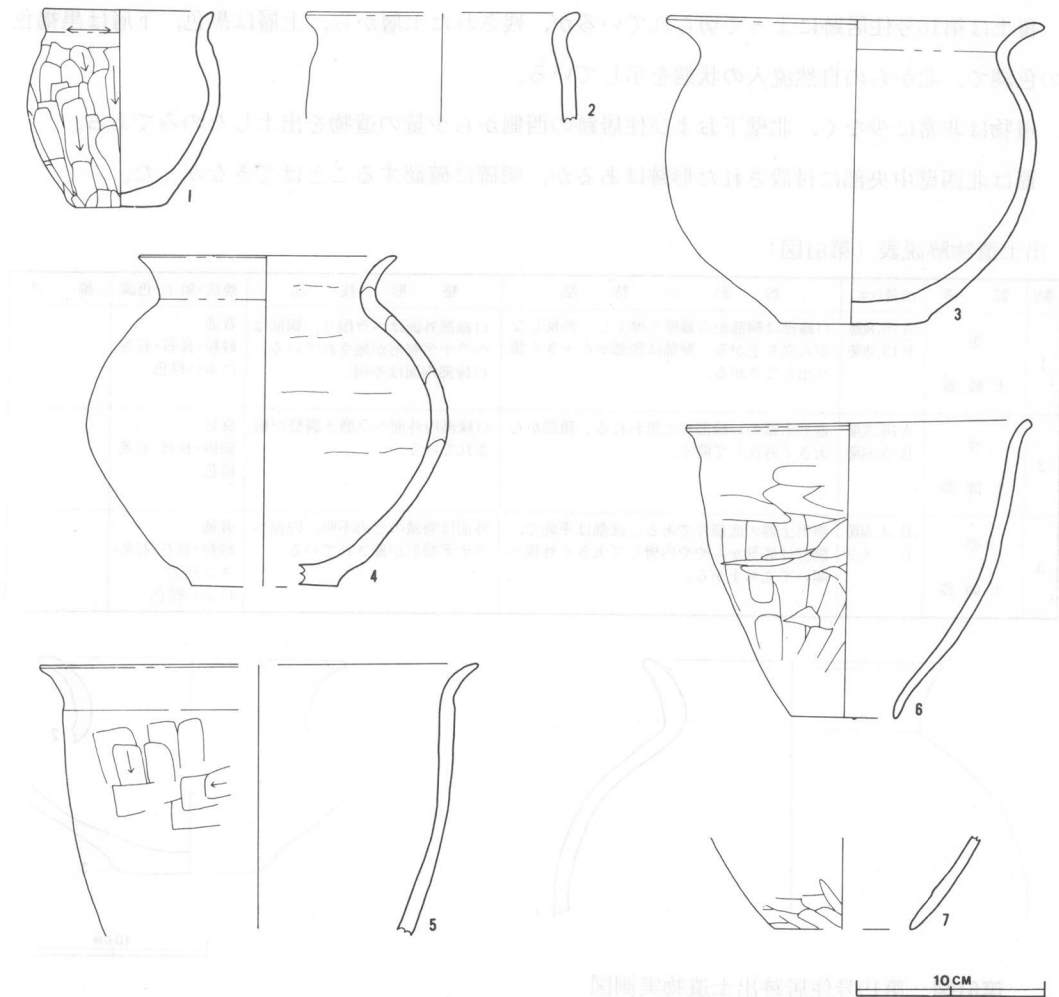
第59図 第18号住居跡竈実測図

出土遺物解説表 (第60図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	小型甕 土師器	A 8.8 B 10.4 C 4.8	底部は平底である。胴部は底部からやや外側へ開きながら立ち上がって胴部最大径に至った後、内傾して立ち上がる。口縁部は頸部から短く外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面は縦位のへら削り、内面はナデ整形が施されている。	普通 細砂 にぶい橙色	
2	甕 土師器	A 14.5(復) B 5.8(現)	口縁部の破片である。口縁部は頸部から短く外反して開く。胴部は頸部からやや張り出してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・ 石英・雲母・ スコリア にぶい黄橙色	
3	壺 土師器	A 19.8 B 15.8 C 7.6	底部は平底である。胴部は底部から器厚を薄くしながら内彎して大きく開きながら立ち上がる。胴部最大径を中位より上に有する。口縁部は頸部から大きく外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ。胴部内外面および底部へラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 明赤褐色(外) 暗赤灰色(内)	
4	壺 土師器	A 13.5 B 17.3 C 7.7(復)	底部は平底である。胴部は底部から大きく内彎して立ち上がり、中位で最大に脹らむ。口縁部は頸部から器厚を薄くしながら外反して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面および底部はへら削り整形、内面へラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・ 石英・スコリア 明赤褐色	
5	甌 土師器	A 23.2(復) B 15.7(現)	口縁部は頸部から外反して立ち上がる。胴部は頸部から中位にやや脹らみをもって内傾する。	口縁部外面は横ナデ整形、内面横ナデ整形後、へら磨き調整。胴部外面はへら削り、内面へラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色	
6	甌 土師器	A 18.3 B 15.9 C 5.6	口縁部は頸部からやや外反して立ち上がる。胴部は頸部から中位にやや脹らみをもって内傾する。	口縁部外面は横ナデ整形。胴部外面はへら削り後、雑なへらナデ整形、内面全体はへらナデ整形が施されている。	普通 細砂・長石・石英 にぶい橙色	

遺物は非常に少なく、竈周辺から数個の土器が一括して出土している。竈西側床面上から小型甕形土器(第60図-1)、東側から壺形土器(第60図-3・4)、南東部から甌形土器(第60図-6)が潰れた状態で出土している。

竈は北西壁中央部に付設され、長さ70cm・袖幅90cm・焚口部幅40cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築され、焼成部内部には多量の焼土ブロックが堆積している。焼成部は壁を109cmの幅で約5cmほど掘り込む。また、火床は床を4cm掘り凹めて作っている。



第60図 第18号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表（第60図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
7	甗 土師器	B 4.8(現) C 8.0	甗の底部片である。底部から直線的に外側へ開きながら立ち上がる。	胴部外面はへら削り、内面はへら削り後、上位へラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 灰黄褐色	

第19号住居跡（第52図）

本跡は遺跡の中央やや北側、B2 e₅・B2 f₅を中心に確認され、第14号住居跡の北東2mに位置し、南側で第16号住居跡、東側で第18号住居跡と重複している。新旧関係は第16号住居跡よりは古く、第18号住居跡より新しい。規模は長軸5.75m・短軸4.8mの長方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は45cmほどで、垂直に立ち上がっている。床は平坦で中央部付近は硬く踏み固められているが、壁近くはやや柔らかい。ピットは確認することはできなかった。

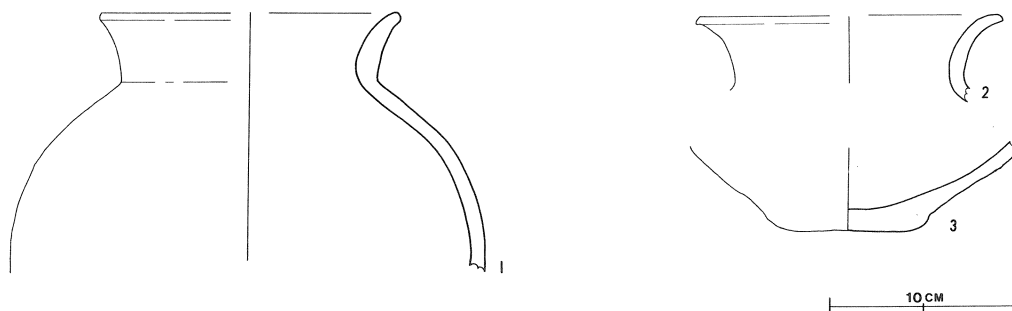
覆土は第16号住居跡によって切られているが、残された土層から、上層は黒色、下層は黒褐色の色調で、北からの自然流入の状態を示している。

遺物は非常に少なく、北壁下および住居跡の西側から少量の遺物を出土したのみである。

竈は北西壁中央部に付設された形跡はあるが、明確に確認することはできなかった。

出土遺物解説表（第61図）

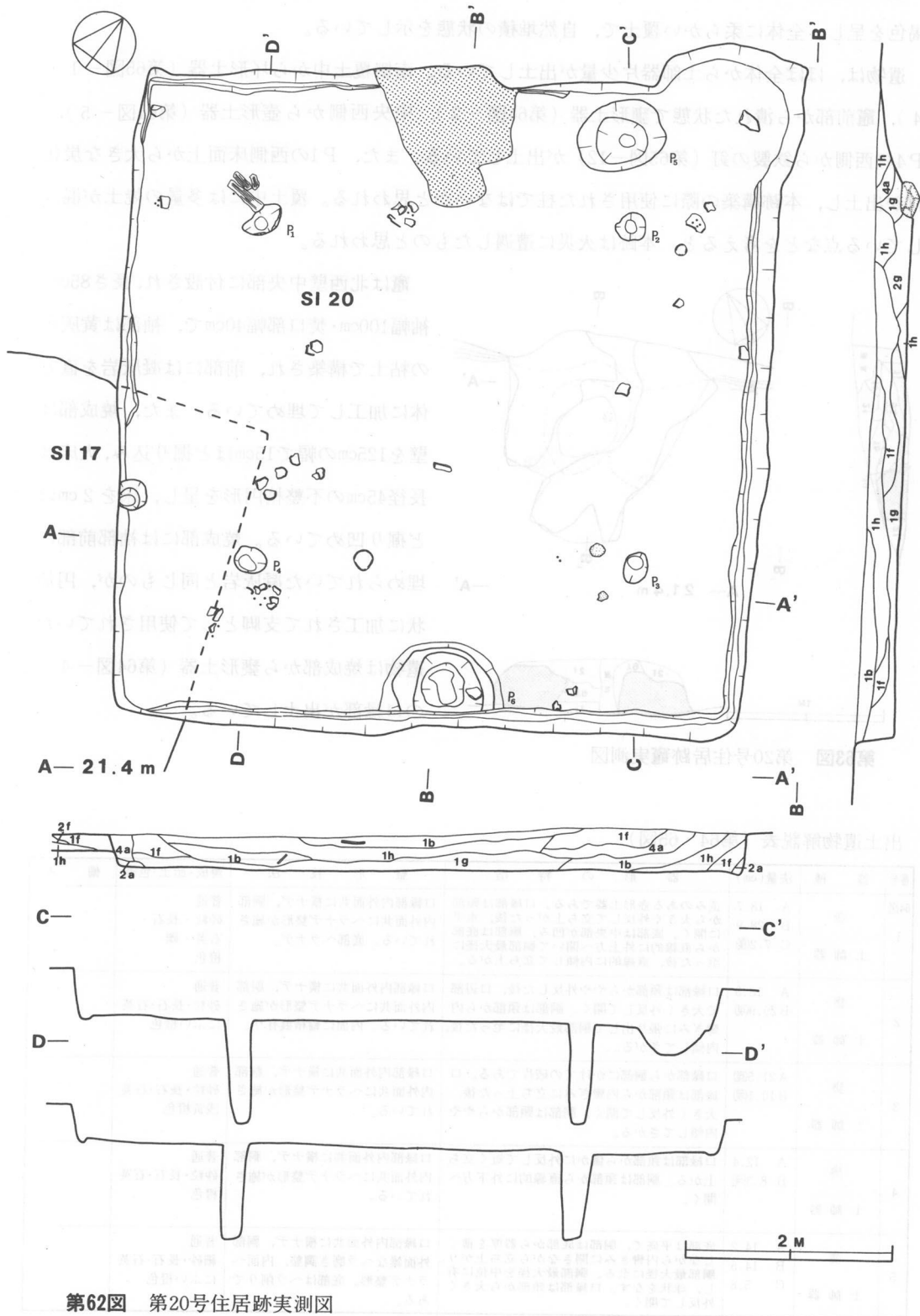
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	壺 土師器	A 15.8(腹) B 13.2(頸)	口縁部は胴部から器厚を厚くし、外反しながら立ち上がる。胴部は頸部から大きく張り出してさがる。	口縁部外面はヘラ削り、胴部はヘラナデ整形が施されている。口縁部内面は不明。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
2	壺 土師器	A 16.3(腹) B 3.6(頸)	壺形土器の口縁部片と思われる。頸部から大きく外反して開く。	口縁部内外面ヘラ磨き調整が施されている。	良好 細砂・長石・石英 橙色	
3	壺 土師器	B 4.5(腹) C 8.3	壺形土器の底部片である。底部は平底で、胴部は底部からやや内彎して大きく外側へ開いて立ち上がる。	外面は磨滅のため不明。内面ヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・ スコリア にぶい橙色	



第61図 第19号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡（第62図）

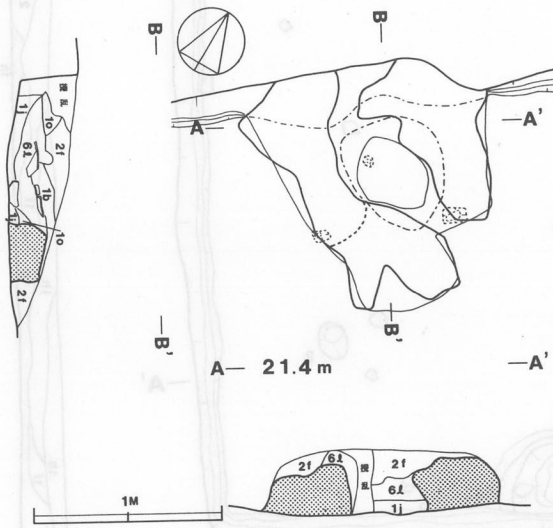
本跡は遺跡の中央部、B2 f₈・B2 f₉を中心に確認され、第21号住居跡の南1.2mに位置し、南西部で、第17号住居跡と重複している。本住居跡の方が新しい。規模は長軸6.25m・短軸6.05mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-34°-Wである。壁高は約40cmで、壁面は直線的にやや外側へ広がりながら立ち上がっている。床は全体に平坦で、硬く踏み固められ、壁下には幅7~10cm、深さ4~6cmの浅い溝が周回する。ピットは6個確認され、P1~P4は長径30~40cmの円形または楕円形で、深さは87~106cmと非常に深く掘られ、本住居跡の主柱穴と思われる。また、P5は東側から確認され、長径80cm・短径65cmの楕円形を呈し、深さは33cmで、貯蔵穴に使用されたものと思われる。P6は南側壁下中央部に作られた「へ」形の高さ5cm、幅20~35cmの土手状の高まりをめぐらした施設の内側に掘られ、平面形は直径40cmの不整形円形を呈し、深さは21cmである。入口的施設に利用されたピットと考えられる。



第62図 第20号住居跡実測図

覆土は全体にローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含み、色調は上層から下層にかけて黒褐色を呈し、全体に柔らかい覆土で、自然堆積の状態を示している。

遺物は、ほぼ全体から土師器片少量が出土している。南側覆土中から坏形土器（第65図-1・4）、竈前部から潰れた状態で甕形土器（第64図-2）、中央西側から壺形土器（第64図-5）、P4の西側から鉄製の釘（第65図-12）が出土している。また、P1の西側床面上から大きな炭化材が出土し、本跡構築の際に使用された柱ではないかと思われる。覆土中には多量の焼土が混入している点などを考えると、本跡は火災に遭遇したものと思われる。

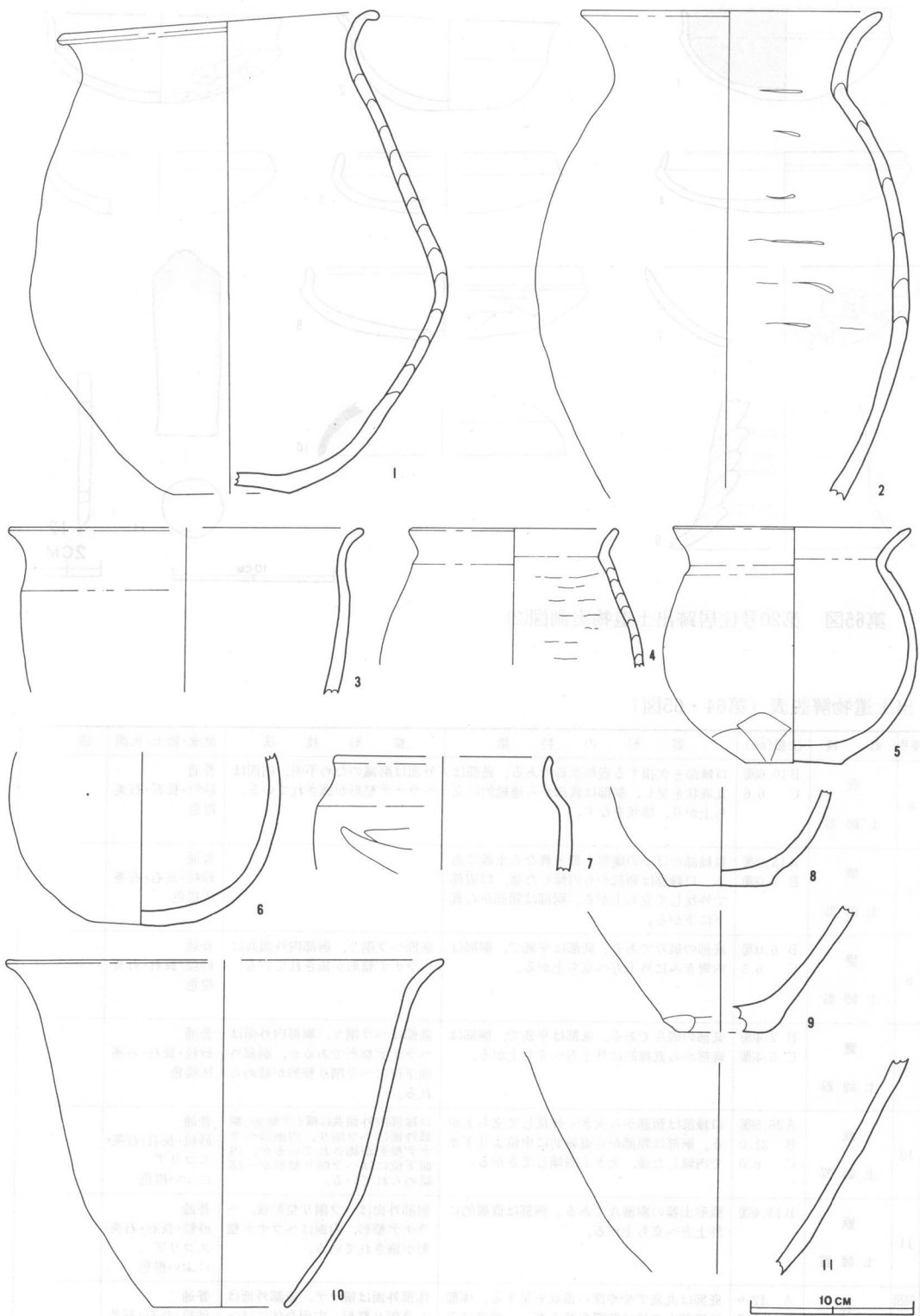


第63図 第20号住居跡竈実測図

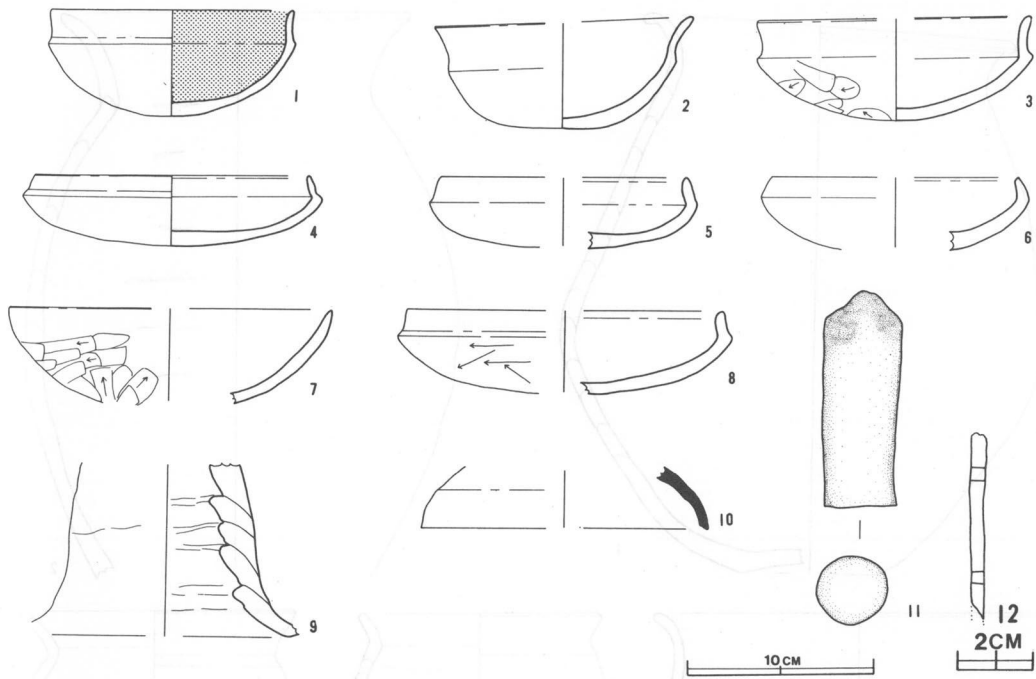
竈は北西壁中央部に付設され、長さ85cm・袖幅100cm・焚口部幅40cmで、袖部は黄灰色の粘土で構築され、前部には凝灰岩を直方体に加工して埋めている。また、焼成部は壁を125cmの幅で15cmほど掘り込み、火床は長径45cmの不整楕円形を呈し、床を2cmほど掘り凹めている。焼成部には袖部前部に埋められていた凝灰岩と同じものが、円筒状に加工されて支脚として使用されていた。遺物は焼成部から甕形土器（第64図-4）の口縁部が出土している。

出土遺物解説表（第64・65図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
64図 1	壺 土師器	A 18.7 B 28.9 C 7.2(復)	歪みのある壺形土器である。口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がった後、水平に開く。底部は中央部が凹み、胴部は底部から直線的に外上方へ開いて胴部最大径に至った後、直線的に内傾して立ち上がる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。底部ヘラナデ。	普通 砂粒・長石・ 石英・礫 橙色	
2	甕 土師器	A 18.3 B 29.9(復)	口縁部は頸部からやや外反した後、口辺部で大きく外反して開く。胴部は頸部から内彎ぎみに張り出して胴部最大径に至った後、内傾してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。内面に輪積痕有り。	普通 砂粒・長石・石英 にぶい橙色	
3	甕 土師器	A 21.5(復) B 10.1(復)	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は頸部から内彎ぎみに立ち上がった後、大きく外反して開く。胴部は頸部からやや内傾してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 浅黄橙色	
4	甕 土師器	A 12.4 B 8.3(復)	口縁部は頸部から僅かに外反して短く立ち上がる。胴部は頸部から直線的に外下方へ開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
5	壺 土師器	A 14.2 B 14.5 C 5.8	底部は平底で、胴部は底部から器厚を薄くしながら内彎ぎみに開きながら立ち上がり、胴部最大径に至る。胴部最大径を中位に有し、球状をなす。口縁部は頸部から大きく外反して開く。	口縁部内外面共に横ナデ、胴部外面雑なヘラ磨き調整、内面ヘラナデ整形。底部はヘラ削りである。	普通 細砂・長石・石英 にぶい橙色	



第64图 第20号住居跡出土遺物実測図(1)



第65図 第20号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表 (第64・65図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	壺 土師器	B 10.6(胴) C 6.6	口縁部を欠損する壺形土器である。底部は丸底状を呈し、胴部は底部から連続的に立ち上がり、球状をなす。	外面は磨滅のため不明。内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
7	甕 土師器	A 13.0(胴) B 7.0(胴)	口縁部がほかの甕形土器と異なる土器である。口縁部は頸部から内傾した後、口辺部で外反して立ち上がる。胴部は頸部から真下につながる。		普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	
8	甕 土師器	B 6.0(胴) C 6.5	底部の破片である。底部は平底で、胴部は内彎きみに外上方へ立ち上がる。	底部ヘラ削り、胴部内外面共にヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 橙色	
9	甕 土師器	B 7.4(胴) C 5.4(胴)	底部の破片である。底部は平底で、胴部は底部から直線的に外上方へ立ち上がる。	底部はヘラ削り、胴部内外面はヘラナデ整形であるが、胴部外面下位にヘラ削り整形が認められる。	普通 砂粒・長石・石英 灰褐色	
10	甕 土師器	A 26.5(胴) B 21.0 C 8.0	口縁部は頸部から大きく外反して立ち上がる。胴部は頸部から直線的に中位より下まで内傾した後、大きく内傾してさがる。	口縁部内外面共に横ナデ整形。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ整形が施されているが、内面下位にはヘラ削り整形が一部認められている。	普通 砂粒・長石・石英・ スコリア にふい橙色	
11	甕 土師器	B 13.4(胴)	甕形土器の胴部片である。胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部外面はヘラ削り整形後、ヘラナデ整形、内面はヘラナデ整形が施されている。	普通 砂粒・長石・石英・ スコリア にふい橙色	
65図 1	甕 土師器	A 12.9 B 5.7 C 12.6	底部は丸底でやや深い皿状を呈する。体部は底部との境に明瞭な稜を有し、垂直に立ち上がる。	体部外面は横ナデ、底部外面はヘラ削り整形、内面全体にはヘラ磨き調整が施されている。	普通 砂粒・長石・石英 にふい黄橙色(外) 黒色(内)	